

日本応用心理学会 第51回大会

発表論文集



会 期 1984年9月21・22日

富士短期大学

日本応用心理学会第51回大会 発表論文集

—応用心理学への期待—

1984・9・21～22

富士短期大学

目 次

大会日程

シンポジウム

自主シンポジウム

テーマ別研究発表

個別研究発表

大会日程

大会テーマ：応用心理学への期待

第1日 9月21日(金)

9:00		9:30		12:00		12:15 13:00		13:15 14:00		14:10		16:55		17:00		18:30	
→																	
受付開始	教 育Ⅰ(第1室) ●森 重敏			運 営 委 員 会 (高田記念図書館・二階会議室)				大 会 総 会 (第4室)			自主シンポジウム(第1室) 「応用心理学と社会問題の接点について」 ○永丘 智郎 ●恩田 彰 ●村田 晃 ●森 重敏 ●大脇三恵子			懇 親 会 (食堂)			
	人 格Ⅰ(第2室) ●高嶋 正士																
	人 格Ⅱ(第3室) ●高橋たまき										質 問 紙 法(第2室) ●浅井 邦二						
	臨 床・相 談Ⅰ(第4室) ●松村 康平										人間のアセスメント(第3室) ●大村 政男						
	産 業・職 業Ⅰ(第5室) ●太田垣瑞一郎										働 く 女 性(第5室) ●馬場 房子						
	産 業・職 業Ⅱ(第6室) ●平野 馨										運 転 適 性(第6室) ●山岡 淳						
	社 会・文 化 (第7室) ●田之内厚三										一 般 原 理(第7室) ●安倍 淳吉						

●：座長 ○：司会者

第2日 9月22日(土)

9:00	9:30	12:00	13:00	14:30	14:40	17:00
受付開始	教 育Ⅱ(第1室) ● 齊藤幸一郎		公 開 講 演 (第1室) 「地震予知 と人間行動」 ○浅井 邦二 ・力武 常次 ・安倍 北夫		シンポジウムⅠ (第1室) 「現代青年の 意識と行動」 ○駒崎 勉 ・青柳 肇 ・菊田 雅彦 ・大江 淳良	
	人 格Ⅲ(第2室) ● 宮本美沙子					
	検 査・測 定 (第3室) ● 恩田 彰					
	臨 床・相 談Ⅱ(第4室) ● 中村 昭之					
	産 業・職 業Ⅲ(第5室) ● 石毛 長雄					
	産 業・職 業Ⅳ(第6室) ● 宮本 昇					
	矯正・非行・犯罪(第7室) ● 奥沢 良雄				シンポジウムⅡ (第4室) 「産業心理学の 動向と展望」 ○馬場 昌雄 ・正田 亘 ・古川 久敬 ・大河内信司 ・関本 昌秀 ・山田 雄一	

シンポジウム

シンポジウム I 現代青年の意識と行動…………… 1

司会者 城 西 大 学 駒 崎 勉

1. 青年の“無気力症”に関する一試論…………… 2
—— 動機論の立場から ——
東京都立立川短期大学 青 柳 肇
2. アメリカ西海岸における大学生の意識と行動……………
カリフォルニア州立大学
ドミンガス校 菊 田 雅 彦
3. 就職段階における学生の意識…………… 3
日本リクルートセンター 大 江 淳 良

シンポジウム II 産業心理学の動向と展望…………… 4

司会者 日 本 大 学 馬 場 昌 雄

1. 戦後産業心理学研究の動向と将来の展望…………… 5
立 教 大 学 正 田 亘
2. 産業心理学・組織心理学・組織行動の位置づけ…………… 6
鉄道労働科学研究所 古 川 久 敬
3. 経営学研究からみた組織行動の動向…………… 7
富士短期大学 大河内 信 司
4. 組織行動研究の動向と今後の方向…………… 8
慶応義塾大学 関 本 昌 秀

コメンテーター 明 治 大 学 山 田 雄 一

応用心理学と社会問題の接点について
一特に心理技術者としてののかかわり方一 9

司 会 者 聖徳栄養短期大学 永 丘 智 郎

1. 創造性開発の問題から 東 洋 大 学 恩 田 彰

2. 幼児・児童教育の問題から 創 価 大 学 森 重 敏

3. 青少年非行の問題から 金 沢 少 年 鑑 別 所 村 田 晃

4. 身障者福祉の問題から 国 立 身 体 障 害 者
リハビリテーションセンター 大 脇 三 恵 子

テーマ別研究発表

質 問 紙 法

- | | | | |
|---|---|---------------------------------------|------|
| 1. 適性検査にもとづく職務適性判定の検討 | 日 本 大 学 | 若 林 明 雄 | ……11 |
| 2. EPI の標準化に関する研究 (1) | 近 畿 大 学 | 岸 本 陽 一 | ……12 |
| 3. State-Trait Anger Scale についての
Pilot Study | 国立伊東障害者センター
大 阪 刑 務 所
加 古 川 学 園 | ○石 渡 博 幸
上 垣 博 和
新 田 茂 | ……13 |
| 4. TCT 創造性検査における反応の変化
—その I：平凡例・非凡例を示した場合— | 都立立川短期大学
早 稲 田 大 学
〃
山形女子短期大学 | ○青 柳 肇
久 米 稔
高 野 隆 一
小 関 賢 | ……14 |
| 5. TCT 創造性検査における反応の変化
—その II：課題を変形した場合— | 山 口 女 子 大 学
早 稲 田 大 学
〃
東 邦 大 学 | ○三 島 正 英
久 米 稔
星 野 美智子
黒 岩 誠 | ……15 |
| 6. MSC におけるタイプの分類 | 日本医療福祉専門学院
早 稲 田 大 学
国立障害リハビリテーションセンター
文 化 女 子 大 学 | ○寺 沢 美 彦
久 米 稔
吉 光 清
伊 賀 憲 子 | ……16 |
| 7. 職業興味検査の予測的妥当性
—訓練成績と興味得点との関連性— | 職業訓練研究センター | 戸 田 勝 也 | ……17 |

人間のアセスメント

- | | | |
|--------------------------------------|--------------------------|-----------------------|
| 1. 集団式 TAT 作成の試み その15 | 国 学 院 大 学
栃 木 短 期 大 学 | 大久保 康 彦……18 |
| 2. 訓練適応性テストの開発に関する研究 | 職 業 訓 練 大 学 校 | 七 尾 和 之……19 |
| 3. クロステストからみた高齢者の起立の安定域 | 雇 用 職 業 総 合 研 究 所 | 西 村 純 一……20 |
| 4. 就業可能性チェックリストとその問題点 | 雇 用 職 業 総 合 研 究 所 | 松 為 信 雄……21 |
| 5. キャッセル式集団用要求水準検査の標準化に
関する研究 (3) | 立 教 大 学
〃 | ○正 田 亘……22
織 田 圭 子 |
| 6. 「血液型性格学」は信頼できるか | 日 本 大 学 | 大 村 政 男……23 |

働 く 女 性

1. 「女性が働くこと」についての態度・意見調査(Ⅳ) 亜細亜大学 小野 公一……24
2. 女子社員の業務態度・意識に関する研究(2) 日本経営協会 鎌形 みや子……25
—SAT (BW) テストを通して—
3. 女性管理者に関する基礎的研究 日本大学 馬場 昌雄……26
亜細亜大学 ○馬場 房子
4. 中年で挫折した職業婦人の Case Study 横浜市立大学病院 ○橋本 泰子……27
〃 吉沢 勇
5. 高度情報化社会と働く女性 成城墨岡クリニック ○墨岡 孝……28
成田 猛
6. OA化と働く女性 成城墨岡クリニック ○両角 智……29
〃 成田 猛
〃 墨岡 孝
7. 働く女性の消費者行動 亜細亜大学 矢内 文……30
—時間節約に関して—
8. 働く主婦の贈答行動に関する調査研究 国際商科大学 井下 理……31
—専業主婦との比較を中心として—

運 転 適 性

1.自動車走行時の速度感に関する研究	東北工業大学 東北福祉大学	○太田博雄 小松紘	……32
2.通勤途上の車運転のヒヤリ、ハット分析	東京安全衛生 教育センタ	谷村富男	……33
3.出合頭事故時の第1当事者と第2当事者の エラー行動とその誘因	科学警察研究所	松浦常夫	……34
4.居眠り運転事故の実態分析	科学警察研究所	大塚博保	……35
5.運転と攻撃性亢進：予備的考察	大阪教育大学 "	石坂和 ○大淵憲一	……36
6.ろうあ者も車運転適性がある	ろうあ児相談所	金田文	……37
7.職業運転者の安全意識について	自動車事故 対策センタ	伊藤典幸	……38
8.ウィーン決定装置による運転者適性の研究	大阪大学	林昭博	……39

個別研究発表

一般原理

1. 心理学の位相幾何学的方法の再検討 —環境心理とトポロジー的方法—	(株)トリケップス	片岡靖博……40
2. 錯視画の効用	東京都立大学	今井省吾……41
3. 教育評価の研究（その24） —生涯学習時代のあり方を求めて—		岸本英男……42
4. 定心と時間意識に関する心理学的研究（16）	駒沢大学	茅原正……43

検 査・測 定

- | | | |
|--|---|--|
| 1. 性格のなおしかた
—N式作業性格検査 62— | 適 性 研 究 所 | 板 倉 善 高……44 |
| 2. ヒトにおける強化スケジュールの研究 (Ⅻ)
—並立スケジュールにおける履歴効果 (1)— | 慶 応 義 塾 大 学
"
駒 沢 大 学
" | ○藤 田 勉……45
佐 藤 方 哉
伊 勢 民 人
小 野 浩 一 |
| 3. ヒトにおける強化スケジュールの研究 (Ⅻ)
—並立スケジュールにおける履歴効果 (2)— | 駒 沢 大 学
"
慶 応 義 塾 大 学
" | ○伊 勢 民 人……46
小 野 浩 一
藤 田 勉
佐 藤 方 哉 |
| 4. 乳幼児発達検査の基礎的研究
—3. S-P表による信頼性と妥当性の検討— | 日 本 大 学
"
豊 橋 短 期 大 学
国立療養所足利病院
明 星 大 学 | ○松 田 浩 平……47
佐 藤 誠
西 野 泰 広
中 村 博 志
管 美登子 |
| 5. 無意味図形の認知にみられるパーソナリティ
の投影性 (Ⅲ)
—Ambiguity Tolerance と黒色刺激との関係— | 関 西 学 院 大 学 | 藤 木 伸 顕……48 |
| 6. Ambiguity Tolerance と適応のダイナミクス (Ⅶ) | 小 曾 根 病 院 | 吉 川 茂……49 |
| 7. 飛行状況に伴う心理と「情意生活しらべ」
との関係について | 航 空 医 学 実 験 隊 | 岡 上 巳弥子……50 |

人 格

人 格 I

1. 女子中学生の価値観についての調査研究

	共立女子大学	高嶋正士……51
	"	石渡倫子
	城西大学	○藤田主一
	"	駒崎勉

2. I. 高校生の対人関係
—TATを用いて—

	岐阜精神病院	○門田寿秋……52
	岐阜大学	丸井澄子
	黒野病院	北瀬扶美代

3. II. 中学生と高校生の対人関係の比較
—TATを用いて—

	黒野病院	○北瀬扶美代……53
	岐阜大学	丸井澄子
	岐阜精神病院	門田寿秋

4. 青年期における Self-Esteem の性差に関する研究

	静岡県賀茂民生事務所	三田英二……54
--	------------	----------

5. 学生の自我意識と不安

	中京大学	武田徹……55
--	------	---------

6. 学生生活の充実感について (2)

	駒沢大学	○中村昭之……56
	白梅学園短期大学	林 潔

7. 学生生活の充実感について (3)

	駒沢大学	中村昭之……57
	白梅学園短期大学	○林 潔

人 格 II

8. 自我同一性の研究 (X)
—自己受容、疎外感との関係について—

	関西学院大学	田端純一郎……58
--	--------	-----------

9. 日本の児童の感情の研究 X VI—その1—
移行

	児玉教育研究所	児玉省……59
	東京家政大学	阿部明子
	東京成徳短期大学	中田カヨ子
	星美学園短期大学	○加古明子

10. 幼児・児童の感情の研究 X VI—その2—

	児玉教育研究所	児玉省……60
	東京家政大学	阿部明子
	星美学園短期大学	加古明子
	東京成徳短期大学	○中田カヨ子

11. 高齢者の高達成意欲と精神的健康度の研究 (I) 早稲田大学 本明 寛……61
" 織田正美
東邦大学 ○稲松信雄
" 黒岩 誠
愛国女子短期大学 谷口 幸一

12. 高齢者の高達成意欲と精神的健康度の研究 (II) 早稲田大学 本明 寛……62
" 織田正美
東邦大学 稲松信雄
" ○黒岩 誠
愛国女子短期大学 谷口 幸一

13. 問答法による人生観同定の試み (2) 慶応義塾大学 ○斉藤 幸一郎……63
" 千田 茂博

人 格 III

14. 人格に関する心理学的研究 (1) 駒沢大学 ○中丸 茂……64
" 牧野 晋
" 谷口 泰富

15. 幼児をもつ母親の養育態度について
—現実と理想におけるズレ— 日本大学 大塚 一郎……65

16. 食事時のコミュニケーションのパーソナリ
ティに与える影響についての一考察 国際学院埼玉短期大学 大野 敦子……66
日本大学 大村 政男
国際学院埼玉短期大学 ○手島 茂樹

17. 歯科患者用 SCT 作成のころみ (その1) 城西大学 ○駒崎 勉……67
城西歯科大学 西川 博文

18. 看護学生の特性に関する研究
—P-Fスタディによる調査III— 神奈川県立衛生短期大学 ○田中 千鶴子……68
" 相馬 朝江
" 山田 泰子
千葉県立衛生短期大学 宮崎 和子
千葉大学 内海 滉

19. 描画に示された看護婦・看護学生の特性 (3) 山口大学医療 ○川本 利恵子……69
技術短期大学部 内海 滉
千葉大学

教育 I

- 教育 II

- xiv —

11. 高令者における知能の変化 XVI —生活意識調査—	児玉教育研究所 〃 〃 〃	児玉 鈴木光子 高橋豊 ○柳田ふさ	省……80
12. 高令者における知能の変化 XVII —語い検査による—	児玉教育研究所 〃 〃 〃	児玉 飯島澄子 ○鈴木光子 高橋豊	省……81
13. 言語発達診断検査と知能検査の関係について	京 都 大 学	藤 岡 秀 樹	……82
14. 因果性の多次元的属性についての5ヵ国の 比較文化的研究 (2)	東京家政学院大学	永 沢 幸 七	……83

臨 床・相 談

臨床・相談 I

- | | | |
|--|--|--|
| 1. Focusingのインストラクションについての
一考察 | ちば心理相談ホーム
とげぬき生活館相談所
港区教育センター相談室 | ○白 岩 紘 子……84
川 村 玲 子
井 上 澄 子 |
| 2. Focusing による成長過程の一事例 | 港区教育センター相談室
とげぬき生活館相談所
ちば心理相談ホーム | ○井 上 澄 子……85
川 村 玲 子
白 岩 紘 子 |
| 3. 集団用新訂人格診断検査における反応の特徴
(その1)
一登校拒否児と非行児の比較一 | 千葉県市川児童相談所
"
"
"
" | ○小 田 智 子……86
前 田 茂 則
高 橋 宣 昭
柏 女 霊 峰
鈴 木 省 司 |
| 4. 小学生非行と微細脳機能障害 (MBD)
(その1) | 千葉県市川児童相談所
"
"
"
" | ○柏 女 霊 峰……87
前 田 茂 則
高 橋 宣 昭
鈴 木 省 司
小 田 智 子 |
| 5. 脳器質障害者における WAIS について | 駒 沢 大 学
川崎市心身障害センター
しいのき学園 | ○稲 富 正 治……88
岡 部 健 |
| 6. 環境音楽の内省的効果の基礎的研究
一各種音楽のイメージについて一 | 東京白十字病院
千葉大 学 | ○味 酒 理 恵……89
内 海 晃 |
| 7. 自律訓練時の精神生理学的分析 | 成城墨岡クリニック
"
"
白梅学園短期大学 | ○成 田 猛……90
墨 岡 孝
両 角 智
八 木 孝 彦 |

臨床・相談 II

- | | | |
|-------------------|--------------------|-----------------------|
| 8. 研修による死のイメージの変化 | 立 教 大 学
千 葉 大 学 | ○加 藤 基 子……91
内 海 晃 |
|-------------------|--------------------|-----------------------|

9. 自己受容性の研究 (2)	駒 沢 大 学	根 津 裕 己	……92
10. Gestalt Awareness Training (気づき訓練) の試み (2)	千葉県市川児童相談所	前 田 茂 則	……93
11. 体験学習：“気づきの自由な話し合い” —みえない世界のことが見える世界に現われ 出ることをめぐって—	大 阪 教 育 大 学	上 野 轟	……94
12. 劇的状況における集い —「秋祭り」の小集団活動—	お茶の水女子大学	黒 田 淑 子	……95
13. 自発性の構造に関する研究 —Ⅴ 自発性の諸機能—	関係学研究所 日本心理劇協会 〃	○松 村 康 平 土 屋 明 美	……96
14. 自発性の構造に関する研究 —Ⅵ 自発性による場面構成—	関係学研究所 日本心理劇協会 〃	松 村 康 平 ○土 屋 明 美	……97

矯正・非行・犯罪

1. わが国矯正施設における心理学の定着と展開 国 際 商 科 大 学 牧 野 勝……98
(1)

2. 家庭内暴力の一症例 や ど か り の 里 高 橋 泰 子……99

3. 登校拒否と家庭内暴力 精 神 医 学 研 究 所 中 里 弘……100

4. 家庭内暴力児童の保護者集団指導について 千葉県市川児童相談所 ○ 鈴 木 省 司……101
(その2) " 仁 科 義 数
一事例の過程分析を中心に― " 高 橋 宣 昭
" 藤 田 政 義
" 柏 女 靈 峰
" 小 田 智 子

5. 校内暴力児の治療 横浜市立大学病院 ○ 吉 沢 勇……102
" 橋 本 泰 子

6. 被収容者をめぐる社会関係(8) 金 沢 少 年 鑑 別 所 長谷川 孫一郎……103
―MAPS と TAT からみた人間関係―

7. 明治初期における犯行・矯正条件の変動に 国 際 商 科 大 学 安 倍 淳 吉……104
ついて

社 会・文 化

- | | | |
|---|-------------------------------|--------------------------|
| 1.服飾変遷の原理研究(2) | コ ル ボ ー 服 装
デ ザ イン 専 門 学 校 | 糸日谷 秀 幸……105 |
| 2.新聞マンガによる世相分析研究 | たばこ総合研究センター | 松 浦 い ね……106 |
| 3. Personal Space の心理学的研究(Ⅲ) | 駒 沢 大 学 | 高 橋 良 博……107 |
| 4.人間の空間行動に関する研究(12)
—相互交渉における最適空間配置について— | 立 教 大 学
〃 | ○小 西 啓 史……108
正 田 亘 |
| 5. バーバル・サンプリング法の研究(1) | 大 阪 大 学 | 家 本 修……109 |
| 6.目撃者証言の基礎的研究 II-1
—再認における付加情報の挿入時期の効果
について— | 関 西 学 院 大 学
兵 庫 県 警 察 本 部 | ○齊 藤 洋 典……110
三 宅 洋 一 |
| 7.目撃者証言の基礎的研究 II-2
—視覚情報・文章情報が再認率に及ぼす影
響について— | 兵 庫 県 警 察 本 部
関 西 学 院 大 学 | ○三 宅 洋 一……111
齊 藤 洋 典 |

産 業・職 業

産業・職業 I

- | | | |
|--|-----------------------|--------------|
| 1. 商船における乗組員組織の変化について | 海上労働科学研究所 | 大 橋 信 夫……112 |
| 2. 職業評価の方法に関する研究
—MICRO-TOWER ワークサンプルについて
(3)— | 国立職業リハビリ
テーションセンター | 吉 光 清……113 |
| 3. 速度見越反応検査の動揺度 | 東 北 学 院 大 学 | 吉 田 信 彌……114 |
| 4. 単調作業における覚醒水準の変動
—実験室およびフィールドにおける実験の
結果— | 新 潟 大 学 | 長 塚 康 弘……115 |
| 5. 限定波長域下作業と視覚系負担 | 近 畿 大 学 | 三 戸 秀 樹……116 |

産業・職業 II

- | | | |
|---|----------------------------------|--------------------------|
| 6. 情報システム化における人間関係
—情報化による人間への影響問題、そのプラ
ス及びマイナスイメージの考察— | 北 見 工 業 大 学 | 重 本 直 利……117 |
| 7. 中小製造業における中高年齢者・女子労働者
・高学歴者の採用実態に関する一考察 | 中 小 企 業 事 業 団 所
中 小 企 業 研 究 所 | 高 石 光 一……118 |
| 8. 高年齢求職者の職業経歴と職業観 | 雇用職業総合研究所 | 長 縄 久 生……119 |
| 9. 中高年者のモラル | 日 本 生 産 性 本 部
立 正 大 学 | ○今 井 保 次……120
内 藤 哲 雄 |
| 10. 新商品造出にかかわる要因の分析 | 相 愛 大 学 | 森 下 高 治……121 |
| 11. 産業心理学に関する二三の問題 | 国 際 商 科 大 学 | 清 宮 栄 一……122 |
| 12. W・A・ワイスコップの経済心理学 | 国 際 商 科 大 学 | 安 藤 瑞 夫……123 |

産業・職業 III

- | | | |
|---------------------------------------|-------------------------------------|-----------------------------------|
| 13. 日米管理職行動比較研究（その1） | 大東文化大学
日本生産性本部
日本大学
富士短期大学 | ○花岡正夫……124
原秀安
馬場昌雄
岡村一成 |
| 14. 日米管理職行動比較研究（その2） | 日本生産性本部
大東文化大学
日本大学
富士短期大学 | ○原秀安……125
花岡正夫
馬場昌雄
岡村一成 |
| 15. Q Cサークル活動の組織効率／モラルの改善に及ぼす影響 | 立教大学
" | メアリー・ル・ウ・オンラタコ……126
○松井賢夫 |
| 16. Q Cサークル活動が個人的欲求の充足に与える効果：補償モデルの提唱 | 立教大学 | メアリー・ル・ウ・オンラタコ……127 |
| 17. 目標設定に及ぼす Self-Efficacy の効果 | 国際商科大学
立教大学 | ○角山剛……128
松井賢夫 |
| 18. 経営内教育の問題点と課題
—特に行政体を中心にして— | 日本人事管理協会 | 三宅章介……129 |

産業・職業 IV

- | | | |
|----------------------------------|------------------------|----------------------------|
| 19. 価値態度と職業観に関する研究（その2） | 早稲田大学 | 浅井邦二……130 |
| 20. 職業興味に関する研究（1）
—興味の構造と学部差— | 早稲田大学
立正大学
早稲田大学 | 浅井邦二……131
○内藤哲雄
高野隆一 |
| 21. 職業興味に関する研究（2）
—性差について— | 早稲田大学
"
立正大学 | 浅井邦二……132
○高野隆一
内藤哲雄 |

22. 経歴データのDB化	雇用職業総合研究所	○松本純平……133
—1.経歴情報の分析要求とコーディング体系—	〃	松本真作
	〃	中島史明
	〃	堀田千秋
23. 経歴データのDB化	雇用職業総合研究所	○松本真作……134
—2.経歴情報解析のためのシステム—	〃	松本純平
	〃	中島史明
	〃	堀田千秋
24. ヒューマンアセスメントの演習評定結果の統合に関する一試案（その1）	マネジメント・サービス・センター 松下電器	○桑原衛……135 伊藤格夫
25. ヒューマンアセスメントの演習評定結果の統合に関する一試案（その2）	松下電器 マネジメント・サービス・センター	○伊藤格夫……136 桑原衛

シンポジウム

現代青年の意識と行動

司会者 城西大学 駒 崎 勉

1. 青年の“無気力症”に関する一試論 東京都立立川短期大学 青 柳 肇
—— 動機論の立場から ——

2. アメリカ西海岸における大学生の カリフォルニア州立大学 菊 田 雅 彦^{注)}
意識と行動 ドミンガス校

3. 就職段階における学生の意識 日本リクルートセンター 大 江 淳 良

現代青年の意識と行動というテーマは、まさにつかみどころがないテーマである。印象というものは個性的なもので、見る人によって千変万化する。それでは取り上げてもムダではないか……というと、そうでもない。自分のステレオタイプを修正するためにも、他者の脳裏にある映像を知る必要がある。スタンレー・ホールが『青年期』という本を著わしたのが20世紀の初頭であるが、そこに現われている「青年」はもうテキストブックのなかにも存在していない。日に、日にナウくなっているのである。

青年心理学は、もちろん、ノモセティックな学問であるが、学校の相談室で活動しているサイコロジストは、当然イデオグラフィックな立場をとらなければならない。さまざまな、ナウい人間像に翻弄されていることと思う。このシンポジウムにおいては、これら2つの立場を両立させてテーマに迫りたいと考えている。

第51回大会では「応用心理学への期待」という大会テーマを掲げている。応用心理学への期待を新たにする点からしても、現代青年の持つさまざまな姿を浮き彫りにすることは大きな意義があるう。

注) 菊田氏は在米中のため発言内容を掲載できませんでした。

青年の「無気力症」に関する一試論——動機論の立場から——

青 柳 肇
(東京都立短期大学)

現代の青年が「三無主義」「五無主義」あるいは「しらけている」といわれるようになって久しい。しかし、たとえば「無気力」「無関心」「無感動」といわれる三無主義の現象が20年前と比較して増加したという客観的な資料はない。たゞ、いわゆる「留年現象」が少なくとも男子大学生の間に増加しているのは確かである(細木1976)。

こうした現象を精神医学の立場から Walters (1968) や笠原 (1978) は、スチューデント・アパシーと呼び、一種の神経症と考えている。すなわち、本業以外では生き生きとしているのに、本業には退却してしまう「退却神経症」とする見方である。

一方精神分析の立場からは、「アイデンティティの振散」(小此木1974)ととらえられている。

こうした見解は、臨床的な立場からのものであろうが、「無気力症」を扱うには、動機論の立場からの提言があつてよいように思われる。しかし、今のところ動機論の立場から「無気力症」を扱った研究は、筆者の知る限り皆無に等しい。動機論はもともと実験室的研究を支えられて成立したものであり、臨床現場への適用までは行われていないのが現状であろう。ここで述べることは、ある意味で試み的なものであり、青年の無気力症を動機論からどのように説明できるのかという観点に立つたものである。

無気力症を動機論的に解釈すると、4つに分類することができよう。

オ1は、Seligman (1968) による「学習性無力感」の概念である。彼によれば、環境に対する Controlability の欠如が「学習性無力感」を生むという。

無気力症の青年の多くは、大学入学当初に始まるといわれる。また、いわゆるマスプロ大学で多発するともいわれる。高等学校までは40~50人程度のクラスで、学校生活をしていったのが一変するのである。青年は、入学すると「個」として自分の存在が無気力であることを知る。どんな正論をいっても、どんな立派なことを言っても、なまじいことでは、それらに対して適切なフィードバック(評価)が返ってこない。一方、青年は、自から大した努力をしなくても、車、ステレオ等物質的に満たされている。

こやうのことは、自分の行為が環境をコントロール

しているのだという感覚を生じさせるに働いていると考えられる。

スチューデント・アパシーの現象が、20年前から増加していることと環境に対する Controlability の欠如との関係に対しては、次のように考えることができる。日本では、1960年代の初期から高度経済成長時代が始まる。子ども達は、自分の欲求や行動に無関係に物が豊富に与えられるようになった。一方で一家族当たりの子ども数の減少に伴って、子どもの欲求や行動と無関係に子どもは親の強い管理下に置かれるようになった。おけいこごとを始めとする塾通いが、ごく幼少のうちから日常的なこととなつていったのである。こうした状況で幼少期を過ごした子どもが10年経過し、青年期に達する1970年代に「三無主義」や「五無主義」あるいは「しらけ」に陥つたと解釈することができる。

オ2に、失敗回避傾向があげられる。Atkinson によれば、意欲すなわち達成傾向は、成功志向傾向と失敗回避傾向の合成により成立する。その際、失敗回避傾向が成功志向傾向より高いと行動が生ぜず、外見上「無気力」に見える。笠原によれば、留年学生の多くは、非常に几帳面で、試験の前日まで勉強するのであるが、試験当日になると、準備が万全でないと考えて受験しないという。このことは、神経症的と解釈することもできるが、「失敗回避傾向」が強いと解釈することもできよう。大学入学まで、評価によって教達した青年が、成功するかどうかに大きな関心が向かい、失敗回避傾向が増したと考えられる。

オ3に、成功回避傾向があげられる。男子の成功回避傾向は、価値観に基づくものであり、成功することに価値を置かなくなっているため生ずるものである。総理府(1981)の調査によると、いわゆる「身出世型」より趣味などに生きがいを感じる「個人生活重視型」の青年が増加している。このことも学業に対する達成動機を弱めている要因であろう。

オ4に、内発的動機の欠如があげられる。青年の目標が、「大学に入つて〜を学ぶたい」というのではなく、「大学に入りた」というものが多く、大学への入学が外的報酬になつていからである。外的報酬はそれを得てしまうと行動が生じなくなるのである。

就職段階における学生の意識

大江 淳良

日本リクルートセンター 調査部次長

1. 大学の社会的役割の変化

- (1) 悲観的な見方
- (2) 楽観的な見方
- (3) 海外ジャーナリズムの論調

2. 大学生が育った背景

- (1) 高度成長期に誕生
- (2) 勤勉でなくても衣食に満足

3. 大学への進学理由

* 当日「図表」を配布

4. 大学生の就職意識

* 当日「図表」を配布

5. 産業界の期待と評価

産業心理学の動向と展望

司会者 日本大学 馬 場 昌 雄

1. 戦後産業心理学研究の動向と将来の展望 立教大学 正 田 亘

2. 産業心理学・組織心理学・組織行動の位置づけ 鉄道労働科学研究所 古 川 久 敬

3. 経営学研究からみた組織行動の動向 富士短期大学 大河内 信 司

4. 組織行動研究の動向と今後の方向 慶応義塾大学 関 本 昌 秀

コメンテーター 明治大学 山 田 雄 一

心理学の知見を、実生活の場に応用するという考え方から、1900年代に入って、産業心理学は誕生し、発展を続けてきた。

しかし、1960年代に入ると、新しい領域として、組織心理学が台頭し、今日ではさらに組織行動へと発展する動きが見られるようになってきている。

米国において、APAがDivision14として産業心理学を独立させたのは1945年であり、この名称は1970年に、産業・組織心理学（Industrial/Organizational Psychology）と改められた。1979年には、Annual Review of Psychologyに初めて、組織行動の章が現れたが、以後続けて、1982年、1984年版に組織行動のレビューが取り上げられている。このような流れは、それぞれの年代に刊行された学術雑誌あるいはテキストブックを始めとする専門図書のタイトル、内容からも知ることができる。

他方、我国の場合、産業心理学という言葉は、日本心理学会の第4部門また日本応用心理学会の大会発表分野の一つとして、今日まで続いてきている。

そこで、今回の大会のテーマが「応用心理学への期待」であることも考え、我国における「産業心理学」の今日の動向さらには将来への展望を試みたいと考えた。

戦後産業心理学研究の動向と将来の展望

正 田 亘
(立教大学 文学部)

産業心理学についてのシンポジウム、講演、ワークショップ

	日本心理学会	日本応用心理学会
1959	「産業モラルと生産性」23回、北大	「交通安全問題」26回、日本女子大
1960	「事故防止と安全の諸問題」24回、東大	「産業における人間関係と生産性」27回、金沢大
1961		①「産業界から心理学への期待」②「人間工学」
1962	「産業心理学研究の展望と動向」26回、関西学院大	28回、教育大
1963		「自動車操縦と人間工学」30回、信州大
1964		①「広告効果に関する諸問題」②「職業選択の心理的プロセス」③「歩行者における交通心理学的問題」④「技術革新と人間関係」31回、立教大
1966	①「宇宙医学心理学の問題点」(講演)②「経営と行動科学」(講演)30回、名大	「交通問題」(公聴会)34回、九大
1967		「歩行者を中心とした交通安全」36回、中京大
1968	「消費者の行動」32回、同志社大	
1969	①「交通安全と心理学」②「産業における組織」33回、東大	「快楽的環境の諸問題」38回、追分学院大
1970	「組織における意思決定過程」34回、東北大	「組織開発の動向を探る」41回、立教大
1971	「産業界と心理学」(講演)35回、早大	
1974	①「環境心理学の問題」②「職場の生きがいと職務満足」③「消費者行動の最近の動向」38回、立大	①「応用心理学と第3次産業」②「職場の自主管理体制」42回、広島工業大
1975	「最近の産業心理学の動向」39回、都立大	「現場調査の体験から」(講演)43回、お茶の水大
1976	①「人間工学」②「高齢者の就業と福祉」40回、横浜大	「事故防止心理学における技術の現状と今後の課題」44回、東北大
1977	「高年心理学の確立をいさぐ」「応用心理学(産業・交通)を中心とした研究の動向」(報告)41回、駒沢大	
1978	「産業疲労研究の今日の課題」42回、九大	「企業と高齢化の問題」46回、関西学院大
1979	「企業組織における組織と人事の問題」43回、慶大	「素小作業と人間」47回、慶大
1980	「組織とリーダーシップ」(ワークショップ)44回、北大	「交通文化の向上への提言」(公開シンポ)「システム構築とヒューマン・エラーの問題」(特別講演)48回、中京大
1981	①「環境心理学の現状と将来について」②「高齢者研究の諸相」(集団組織における報酬分配と之の効果性)(小講演)45回、日本女子大	「産業用ロボット導入をめぐって」49回、国際商科大
1982	「災害とパニック」46回、京都大	「応用心理学の回顧と展望」「リハビリテーション心理学のいくつかの課題」(自主シンポ)50回、金沢大
1983	「テクノロジー変化の中で人間をどう扱うか」というテーマのワークショップ：「消費者行動の分析」「高齢者のカウセリング」47回、早大	

「将来の展望」

「将来人口推計」によると、2015(昭和90)年には男75.07歳、女80.4歳の最大値になり、以降は変わらないうちである。若くは職を失った老人があらわれる。高齢者やハンディキャップをもつ人の職務(場合に応)の問題が緊急の課題となろう。一方、科学技術の進

歩により職場におけるME化、OA化は加速度的に展開するものと思われる。熟練労働者の解体、VDT作業などによる精神疲労、職業性疾患、精神衛生などの問題が起こるであろう。レーザー光やマイクロ波などによる障害や事故も増えるであろうし、新たな視覚からの人と職務との適合化が要求される。

産業心理学・組織心理学・組織行動の位置づけ

古 川 久 敬

(鉄道労働科学研究所)

心理学の組織場面への応用分野として、長い歴史を持つ「産業心理学」のほかに、1960年代には「組織心理学」が登場し、そして新しく「組織行動」が台頭してきた。本シンポジウムでの筆者の役割は、これら3つの学同分野の相互位置づけを行なうことであるが、これは決して容易な作業ではない。というのは、これらはいずれも、基本的には組織の中の個人や集団の心理と行動、そして個人と組織との相互作用を扱うなど研究内容のみならず、研究手法の点においても相違点よりむしろ類似点が多い。さらに、「組織心理学」にしても、「組織行動」にしても、単にひとつの狭い研究分野に固執していたのでは、爆発的に増大する研究成果を有効に活用できないため学際的アプローチをとっている点でも共通性が認められるからである。

もちろん、学同の意義と内容をいたずらに固定的に考えるのはナンセンスであるとしても、やはり各学同領域間の相違点について一定の整理が必要であることは言うまでもないことであろう。

学同というものは、それが応用的な性格を持てば持つほど、その時々 of 社会の要請に柔軟に対応しながら変容をとげていくものである。

1910年代にミュンスターバークを父として始まるとされる「産業心理学」が、労働の最高効率化と熟練労働力の育成を主たる課題として、適性検査、時間動作研究、職務分析などを中心とする個人心理学の応用という形で展開され、多大の成果を収めてきたのは周知のところである。

その後、1920年代の有名なホーソン実験が契機として、組織の中の個人が、職場集団で相互に影響を及ぼしあいながら行動していること。したがって、個人の生産能率、作業意欲、そして職務満足（モラル）などを詳細に分析するには、個人と集団との関係に焦点をあてなければならないこと（グループ・ダイナミクスに代表される社会心理学的研究の隆盛）。さらには、リーダーシップの問題、個人と組織との関係にも目を向ける必要のあることに人々は気付かされた。このような経緯のなかで、個人、集団、組織それぞれの特性、さらにはそれら相互のかかわり合いを議論する「組織心理学」が1960年代に登場してきた。研究分析の単位が、個人だけから集団へも広がり、社会学あるいは組織論における研究知見も取り入れられてきた。

研究対象が個人から集団や組織へと広がる一方で、1970年前後から、個人の行動や小集団の行動をミクロ・レベルで分析する「組織行動」が台頭してきた。この「組織行動」論は、組織における既存の人的資源の有効活用を中心とした従業員のマティベーション管理を考えるのが主たる研究課題であり、その意味で1960年代に登場した人間関係論（ヒューマン・リレーションズ）の流れをくむ諸請求理論に対する批判的継承の性格も持っていた。米国で多く出版されている「組織行動」のテキストを参照してみると、近年は、「組織心理学」で関心を示している組織構造や組織風土（文化）を議論しているものも少なくないが、やはり組織の構造や文化は基本的に個人および小集団行動の与件として扱われることが多い。

以上述べてきた点は、社会の要請に敏なる米国心理学会における部門の変遷とよく対応している。「産業心理学」の部門ができたのは1945年であるし、1970年には「産業／組織心理学」部門が設けられ、第一線の研究者や実務家44名の執筆になる Dunnette, M. D. (ed) Handbook of Industrial and Organizational Psychology が出版されたのは1976年のことである。

「産業心理学」の誕生、「組織心理学」の展開、そして「組織行動」の台頭を時系列でみてきたが、これは必ずしも先行する領域の衰退を意味するものではない。組織への個人のエンタリー過程、教育訓練、安全消費行動など産業心理学の得意とする分野は、今後もその重要性を失うものではなからうし、多元化する経営環境への組織の適応や管理者のリーダーシップ等々はひきつづき組織心理学が考究していく課題であろうし、そして組織内の人的資源の活性化を図る上で、組織行動の研究成果は多大の貢献をするであろう。

したがって、組織内の諸問題を解決するには、これら3つの研究領域の成果を総合的に応用することが望まれることとなる。ただし、これら「産業心理学」、「組織心理学」、そして「組織行動」の3つの名称は単なるラベルだけではないわけで、相互に重複する部分はおたがひ許容しながらも、各々の独自性の整理をして今後の発展を期するべきではなからうか。

経営学研究からみた組織行動の動向

大河内信司

(富士短期大学経営学科)

経営学の研究分野では、長年以來、組織の有効性に影響をおよぼす個人と集団に関心をもちてきた。1930年代のホーソン研究を契機として、隣接科学の研究者たちは組織における個人と集団の特質と力学を研究してきた。ゆえにゆえにとつて最も注目すべき点は、心理学と社会学の領域からの組織行動に対する貢献であるが、歴史学、経済学、政治学、人類学の貢献も見逃すことはできない。とりわけ、1970年代には、動機づけ・学習・人格の個別領域における基礎知識を組織における人間行動の理解に役立ててきた産業心理学と、社会学の個別領域における基礎知識を公式組織と非公式組織における個人の行動理解に応用してきた産業社会学のそれぞれの領域における研究成果は統合され、組織・集団・個人の行動成果の理解と予測に関連した組織行動論と呼ばれる1つの研究分野にまで発展した。組織の有効性に影響をおよぼす人間行動の理解にむけての多くの研究が経営学の研究分野の発展に大いに貢献してきたことはいうまでもない。

ところで、今日の企業組織をとりまくダイナミックな環境下において、環境との協和を達成するための効率的な戦略展開は、企業が生存するための必須条件である。ところが、企業の方角づけに関する著しい変革を公式の戦略計画を通じて導入しようと、あるいは非公式の過程を通じて導入しようと、組織の抵抗現象に遭遇するのは必定である。例えば、変革の必要性に関する認識の遅れ、意思決定過程における引き延ばしと動揺、実行の遅れと効率の悪さ、変革を妨害し逆転させようとする多くの試みがそれである。戦略的な新しい方角づけが計画作成過程に対してだけでなく、変革過程全体に対しても抵抗現象を引き起こすので、組織の抵抗に対してこれまで以上の関心を払わなければならないのである。

ここでは、H・I・アレンゾフの所論に基づいて、変革過程を通じて相互に作用する基本的な影響力を確認する。続いて、こうした影響力の根源を解明し、戦略的な変革過程の効率を向上するための方法を検討する。具体的には、まず、個人と集団の変化に対する反応と知覚から発生する抵抗の原因を探求する。次に、必要な知識、情報、技能、経営管理能力の欠落から生じる遅延と非効率を検討し、戦略的な変革の実現性を最適

化する方法として、行動上の抵抗とシステム構造上の抵抗の統合を試みる。さらに、戦略的な変革過程を管理する代替的な方法を提示し、その長所と短所を比較し、特定の状況に適切な方法を選択する場合の留意点を示唆する。最後に、主として学習行動に基づく方法を取り上げ、経営戦略の効果的な形成と効率的な展開について考察を加える。

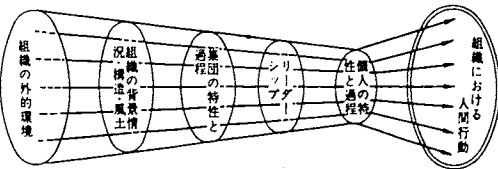
組織行動研究の動向と今後の方向

関本 昌秀
(慶應義塾大学 経営管理研究科)

組織行動の研究は、今日、米国を中心に隆盛の兆を呈している。それはいまや独立の学問分野 (discipline) としての地位を築きつつある。

1. 組織行動の研究領域: 組織行動の研究には大別して次の2種類がみられる。第一は、組織環境の中における人間行動を理解し、予測し、さらにそれを処理する (方向づけし、変更し、制御する) 技術を開発するための体系的研究である。これはまさに組織の構成要素の組織における行動の研究に焦点が当てられている。この意味での組織行動の分析は1回に示すような諸側面からアプローチされている。

1 図 組織における人間行動の分析モデル



第二は、それ自体生きたシステムとして生出し、発達する組織の行動の研究である。組織はそれ自体の生命をもった生きたシステムとして扱うことができる。組織は生れ、成長し、発達し、環境への適応と可能にするような構造や過程や価値システムを発達させていく、組織が創設されて以来時間を経過し、規模が大きくなり、構造が複雑化してくると、あらゆる組織は多くの面で同じような行動をとるようになる。このように、それ自体生命をもった組織の行動というものを研究していくとする組織行動の研究が存在する。

心理学の学徒にとっては、そのキャリアからみて、前者の研究領域が関心事と思われるので、今回の発表は前者の組織行動の研究に焦点を当て報告してみたいと思う。

2. 組織行動研究の動向: [A] 既存の研究領域の動向---紙幅の関係で記述を省略し発表時に報告する [B] 新しい研究領域---既に数多くの研究成果が積み重ねられている従来の研究領域 (例えば職務態度や職務満足、モチベーション、パーソナリティやロ人差、リーダーシップ、組織構造、職務設計、テクノロジーやマネジメント・コントロール・システム、欠勤や労働回転率等々といったものを扱った研究領域) に加えて、次に上げるような研究領域が新たに研究と注目を

めている。それらは、組織・職務ストレスの問題、個人、集団、組織の各レベルにおける創造性と革新の問題、職務満足と職務外生活の満足の関係、組織の有効性の次元と決定要因に関する実証研究と理論化、時間の流れを原因変数に組み入れた研究などである。

3. 組織行動研究の問題点と今後の展開: これまでの組織行動研究にはいくつかの問題点が見られる。従って、今後のこの分野の研究は、従来の流れに沿った研究に加えて、それらの問題点を改善していく方向での研究が進められていくだろう。その方向は、

(1) 組織行動は現象には1回に示すような各側面の要因の統合的影響の下で発生している。しかし、これまでの研究は、それぞれ側面に関する他の学問分野の概念や理論を借りてきて、何々の側面からアプローチがなされている。これからは、それぞれの側面を横断的に切った統合的なアプローチが必要であり、そのための方法論の開発と概念の整備が進められてくるだろう。

(2) これに関連して、これまで、組織心理学者の研究の焦点はむしろかというところがあった。とくに、組織の背景状況や組織の外的環境というようなマクロの要因と組織行動との相互関係が軽視されてきた。今後はそれらマクロの要因の組織行動に及ぼす影響にメスを入れることが必要であり、そのためには、組織社会学や経営学の分野において伝統的に用いられてきたフレームワークと組織心理学のフレームワークを組み合わせるような努力が必要となってくる。

(3) 組織行動に関する諸理論の中には、相対立する理論が存在する。これらを互にテストし合い、統合していく研究が必要となる。例えば、モチベーション理論におけるオペラント学習理論、要求理論、期待理論、公平理論、目標設定理論の組み合わせと統合を図る研究、あるいは、それぞれの理論が、いかなる条件下で他の理論よりも有効に働くかを明らかにする研究。

(4) 組織行動研究の分野では、あらゆる状況におけるあらゆる個人に適用する理論を樹立することはなかなか難しい。従って、どうしても contingency approach が必要であり、適切な moderator variables を導入した研究が進められていくだろう。

(5) その他: 発表時に報告する。

自主シンポジウム

応用心理学と社会問題の接点について

—特に心理技術者としてのかかわり方—

司会者 聖徳栄養短期大学 永 丘 智 郎

- | | |
|-----------------|----------------------------------|
| 1. 創造性開発の問題から | 東洋大学 恩 田 彰 |
| 2. 幼児・児童教育の問題から | 創価大学 森 重 敏 |
| 3. 青少年非行の問題から | 金沢少年鑑別所 村 田 晃 |
| 4. 身障者福祉の問題から | 国立身体障害者
リハビリテーションセンター 大 脇 三恵子 |

現在は教育心理学的諸問題が、すぐ社会問題化する。社会意識の変化であるともいえよう。応用心理技術の適用・行使をどうすれば良いのか？心理学者の立場と役割はどうあるべきか？今日の課題を討議する。

なお、このシンポジウムは、産業・教育・臨床場面における心理技術者の職業倫理と深い関係があり、心理学者のヒューマニズムに関する原点的考察を試みようとするものである。

研究発表

適性検査にもとづく職務適性判定の検討

若 林 明 雄

(日本大学 文理学部)

[問 題]

一般に「適性」とは、広義に解釈するとさまざまな意味を持つが、心理学的な意味での適性とは、Super, D. E. の唱える自己概念に対応するものであるとされている。これによれば適性とは自己概念の中核をなすと考えられている、個人の能力、性格、興味、意欲などによって構成されているといえよう。従って、適性を診断あるいは判定するには、能力、性格などいくつかの下位検査を持った多面的な検査が必要になってくると考えられる。

さて、本研究では、いわゆる「職務適性」の診断、判定を行うことを目的としているが、従来の方法では、職務適性の判定には能力の占める割合が比較的大きかった。確かに、職務の遂行において能力は基本的に必要なものである。しかし、現実場面等（特に採用、選抜時など）では、能力評価の比重が非常に大きくなっている。そこで、本研究では適性検査に能力を含めた場合と能力を除いた意欲、態度および気質、性格の検査結果だけの場合を比較し、その職務適性の判定の精度を比較検討する。

[方 法]

1. 被検者：複数の大学、学部 の 3 ～ 4 年生 351 名
2. 測定内容：①能力（言語、数理、論理、常識、英語）、②意欲・態度（達成、変化、顕示、秩序、従属）③気質類型（循環性－高揚型・執着型、分離性－敏感型・独自型、粘着性－緩慢型・率直型）④性格特性（向性、情緒的安定性、理智性、活動性、慎重性）
なお、各検査はすでに標準化されている。
3. 職務分類の設定：各種の職務に必要なとされる特性語を整理し、22にまとめ、それへの評定を因子分析した結果をもとにして12の分類にまとめた（社交性・対人親和性を必要とする職務、身体的活動性・行動力を必要とする職務等）。
4. 上述の12の職務分類に対して、自分に適していると思われるものを順番に3つまで選択させた（これを職務適性判定の基準とする）。
5. 実施期間：1983年11月～1984年 6月

[結 果]

多重判別分析による職務適応性の判定を以下のように行った。

1. 能力を含めた場合：①～④までのデータの多重判別分析によって5つの固有値をもとめ、そこから判別因子負荷量を尺

度ごとに算出した。この5つの因子得点によって位置づけられる各個人の位置と、12の職務分類の重心の位置との距離によって適性診断を行った。この場合の距離はcity block model (Attneave, 1950) を使用した。その結果は81.2%の人が自分の適していると考えている職務分類に3位までに近いと判定されており、その中で、自分が最も適していると考えている職務分類にもっとも近いと判定された人は60.7%となっている。

2. 能力を含まない場合：②～④までのデータの多重判別分析によって7つの固有値を求め、そこから判別因子負荷量を尺度ごとに算出した。この7つの因子得点によって1と同様に、city block modelによって距離を求めた結果83.5%の人が自分の適していると考えている職務分類に3位までに近いと判定されており、その中で、自分が最も適していると考えている職務分類に最も近いと判定された人は72.1%となっている。

[考 察]

職務適性を判定する場合には、検査の尺度に判別力の高いものを使用することが基本的に必要である。また、これに加えて柳井(1967)の研究によれば、テストバッテリーに含める尺度の数が多し程判定の精度が高くなることが推測されている。そこで本研究では、適性検査使用の実際上の観点を考慮し、能力を下位検査として含める場合と含めない場合とでは、適性判定がどの程度異なるとなされるかを比較検討した。その結果、能力を含まない場合のほうが、テストバッテリーに含まれている尺度が少ないにもかかわらず、判定の精度が高くなることが明らかになった。これは、職務適性の判定に占める能力の位置づけが、適性検査における単なる下位検査のひとつとしては扱えないことを示唆しているとも考えられる。この考え方に従えば、職務適性を判定する場合には、能力を一応切り離して考慮することも考えられるということになる。すなわち、従来採用場面で行われているように、まず個人を能力で分類し、次に性格などその他の側面から評価するといった方法にも一応の妥当性があることになる。しかし、本研究では、妥当性確認のための職務適性の評定が、各個人の自己評定にもとづいており、この評定はあくまでも主観的なものであるので、かなりその評定には歪みがある可能性がある。このような問題点を解決するためには、実際に各種の職務に従事している人を対象にした調査が行われなければならない。今後はこのようなアプローチによる研究の継続を行い、より正確な職務適性判定の可能性を検討することが必要であると考えている。

E P I の 標 準 化 に 関 す る 研 究 (1)

岸 本 陽 一
(近 畿 大 学 教 養 部)

Eysenck Personality Inventory (EPI) は、Maudsley Personality Inventory (MPI) をさらに発展させたものである。EPI では、2つの独立したパーソナリティ次元、外向性-内向性 (E) 次元と神経症的傾向 (N) 次元が測定される。これらの特性は、項目分析と因子分析に基づいて選ばれた、それぞれ24の質問項目に対する「はい」または「いいえ」の応答によって測定される。EPI には、E、N尺度以外にも、自分を良く見せようとする反応を検出するための虚構 (L) 尺度が含まれており、全体で57項目から成る。また、EPI は、2つの独立した平行検査、Form A と Form B があり、再検査が必要な事態で利用できる。EPI は、次のような点で優れている。

(1) EPI には、2つの平行検査があり、実験後に記憶の影響を受けることなく再検査が可能である。(2) 平易な表現が用いられており、被験者の知能や教育程度に関係なく実施できる。(3) E次元とN次元は、独立である。(4) 再検査信頼性が高い。(5) L尺度が含まれている。

本研究の目的は、このような長所をもつEPIの日本語版を試作し、その妥当性を検討することである。これまでに3回の改訂を重ねてきた。今回は、第4版について報告する。

[方法]

被験者：男女大学生にEPI第4版 (Form A, Form B) を実施した。記入もれ等を省き、Form A, Form B に関して分析の対象となった被験者はそれぞれ 799 名 (男子 387 名、女子 412 名)、787 名 (男子 395 名、女子 392 名) であった。

項目分析：日本語に翻訳されたE、N項目がそれぞれの尺度の測定にとって有効な項目であるかを上位下位分析 (good-poor analysis) で検討した。各項目の有効性は、MPI研究会が日本版MPIのE、N項目を決定した際に用いた基準に準じて、次の2条件を設定した。(1) E項目はE得点と、N項目はN得点と相関が高いこと。(2) E項目はN得点と、N項目はE得点と相関が低いこと、である。まず、E尺度とN尺度の各得点の中央値を男女別に求め、その中央値に基づきそれぞれ高得点群 (H) と低得点群 (L) に2分した。次に、各項目ごとに応答 (はい、いいえ) 分布を求め、四分割表を作成し、項目と得点の相関を調べた。相関の有効性は、カイ自乗値によって検討した。

[結果と考察]

Form AのE項目で条件(1)を満たしていたのは、24項目中22項目であった。34「注意を集中しなければならないような仕事が好きですか。」は、男女ともに、46「もし大勢の人とほとんど会えなくなったならば、つらいですか。」は、女子が条件(2)を満たしていなかった。条件(2)を満たしていなかったのは、6項目であり、その項目は、3, 13, 20, 25, 37, 49である。N項目は、24項目全てが条件(1)を満た

していた。また、男女ともに条件(2)を満たしたのは、24項目中21項目であった。

Form BのE項目で男女ともに条件(1)を満たしたのは、24項目中21項目であった。29「はっきりした理由があっても金のために物を売ったり人に金を借りるのは嫌ですか」、37「他人に相談するよりも自分一人で解決する方が物事をうまく処理できますか」は、女子が、46「物事は放っておいても最後には好都合になるものだ」とふつう感じていますか」は、男子が条件(1)を満たしていなかった。E項目で男女いずれかが条件(2)を満たしていなかったのは、17, 20, 41, 51の4項目であった。同様に、N項目において、男女共に条件(1)を満たしていなかったのは、28「悩んでいる時にはそのことについて親しく話せる人が必要ですか」であった。また、N項目において男女共に条件(2)を満たしたのは、17項目であり、男女いずれか、あるいは、男女共に条件(2)を満たしていなかったのは、14, 16, 19, 23, 28, 38, 55である。

表 1 各尺度項目でそれぞれの条件を満たした項目数

	条件	満たした項目数	
		[E 項目]	[N 項目]
Form A	(1)	22	24
	(2)	18	21
Form B	(1)	21	23
	(2)	20	17

表2は、E得点とN得点の相関を示している。比較的低い値であるけれど、負の相関が認められた。これは、Form A 及び Form B において認められた、条件(2)を満たしていない項目に基づくものであろう。

表 2 E得点とN得点との相関

Ea vs Na	-.174
Eb vs Nb	-.197

表 3 Form A と Form B との相関

Ea vs Eb	.753
Na vs Nb	.782

State-Trait Anger Scale についての Pilot study

○ 石 渡 博 幸

上 垣 博 和

新 田 茂

(国 立 伊 東 障 害 者 セ ン タ ー)

(大 阪 刑 務 所)

(加 古 川 学 園)

(目 的)

Spielberger, C.D. (1979, 1983) らの State - Trait Anger Scale (S T A S) の邦訳版を矯正教育施設 (中等 K 少年院, O 刑務所) に収容された男子少年・成人に実施して、S - Anger 得点と T - Anger 得点を調べる。

(方 法)

1. 対象：生活指導課程の少年院に収容された 120 名の男子少年。(主に 16 才～19 才)
刑務所に収容された 33 名の男子受刑者。
2. 実施：少年院～S.59.6.17 (日) 夜間学習時
刑務所～S.59.7 月上旬 分類審議室での
調査期間中
3. 採点：S T A I の採点法に拠る。/. 2, 3, 4 点
4. 検査：S T A S - 各 15 項目 新田, 上垣, 石渡の
三名で協議して決定した。

◎ S-Anger15-Item

1. 頭にきている。 2. 怒っている。 3. 腹が立っている。 4. カリカリしている。 5. うつぶしがたまっている。 6. しゃくにさわる。 7. かんしゃくが破裂しそうだ。 8. 机をドンとたたきたい。 9. 誰か怒鳴りつけたい。 10. ののしりたい。 11. 怒り狂っている。 12. 誰かなぐりたい。 13. なにかぶつこわしたい。 14. イライラしている。 15. 憤がいしている。(憤がい：ひどく腹を立てること)

◎ T-Anger15-Item

1. 興奮しやすい。 2. 短気だ。 3. 頭にきやすい。 4. 自分だけがつかく当たられるとイライラする。 5. 面子 (メンツ) をつぶされると怒り狂ってしまう。 6. 人の失敗で調子をくずされると腹が立つ。 7. 軽く見られたり、馬鹿にされるとくさってしまう。 8. カッとなりやすい。 9. 自分の働きを認められないとイライラする。 10. いつも自分が正しいと思っている人を見るとしゃくにさわる。 11. 腹が立つと毒づいてしまう。 12. カリカリしている。 13. 怒っている。 14. 思うようにいかないとか誰かなぐってやりたい気分になる。 15. 圧力がかかるとハラワタが蒸えくりかえる。

5. 条件：少年院収容者について

- △ 実験群～夜間日課の一部 (自由時間) に制限の加えられた日課・三日間 23 名
- △ 統制群～通常日課 97 名
- ：受刑者については、通常日課 33 名

(結 果)

＜ A ＞ 日課制限の有無による結果

Table 1. 日課制限有無群の S-Anger

制 限	N	$\bar{X}$	SD	t
有	23	31.57	11.56	2.908 ※
無	97	24.97	9.21	

Table 2. 日課制限有無群の T-Anger

制 限	N	$\bar{X}$	SD	t
有	23	36.43	10.83	1.513
無	97	33.29	8.34	

＜ B ＞ 収容少年と受刑者の結果 (参考)

Table 3. 収容施設別の S-Anger

施 設	N	$\bar{X}$	SD	t
少	97	24.97	9.21	2.029
刑	33	21.09	10.00	

Table 4. 収容施設別の T-Anger

施 設	N	$\bar{X}$	SD	t
少	97	33.29	8.34	4.770 ※※
刑	33	24.97	9.28	

(注) ※ $P < .01$ ※※ $P < .001$ 両側検定

Table 1, 2 は少年院収容者について、S T A S 実施条件により、各得点の代表値間に差が有るかを調べたものである。日課制限群の S - Anger 得点が、通常日課群よりも有意 (/ %) に高くなっている。これは両群の実施条件上、妥当な結果であると考えられる。

さらに、日課制限群の S-Anger 得点の S D 値が大 (11.56) なのは、個人差によるものと考えられる。

少年院収容者と受刑者との T-Anger 得点の代表値間に有意差が認められるが、これは被験者数と S T A S 邦訳版の適用範囲の問題より、むしろ被験者となった受刑者の構え・個人差等による影響によって生じた差であると考えられる。

S-Anger 得点と T-Anger 得点の関係については、本研究においても、Spielberger らの結果 ($\bar{X}$: 27.34, 31.66) と同様、両施設収容者とも T-Anger 得点が、S-Anger 得点より高くなっている。@

(参 考) @ Butcher, J.N. & Spielberger, C.D. (Eds) Advances in personality assessment Vol.2 LEA 1983

TCT創造性検査における反応の変化

そのI. 平凡例・非凡例を示した場合.

○青柳肇 久米稔 高野隆一 小関賢
(都立立川短大) (早稲田大学) (山形女子短大)

【目的】

TCT創造性検査に平凡例・非凡例を示した場合と標準的な方法で施行した場合での反応の相違を比較検討することを目的とした。

【方法】

① 被験者 12~15才の男女計 479名、うち実験(E)群 166名、統制群(C) 313名である。

② 手続き 原因推テストを除くTCT創造性検査の5テストについて、統制群には従来通りの方法で、実験群には以下のような反応例を示して実施した。

イ、用途テスト：※例のように性質をあげてからその使い方を書いて下さい。(例)中がからになってくる。→鉛筆入れ、はし立て、灰皿、水入れ、食器、貯金箱、ゴミ入れ。

ロ、標題づけテスト：(例)これは片手落ち、左手と右手が変だ。

ハ、四点描画テスト：(例)



ニ、想像力テスト：(例) リボン、針金

ホ、図案発見テスト：(例)



【結果と考察】

表1は、TCT5テストの実験群(E)、統制群(C)における平均・標準偏差、及び両群間の差をt検定した値を示したものである。

用途テストのF、X、Td及び四点描画テストのF、Tdの各下位尺度では統制群の方が、それ以外の下位尺度では、全て実験群の方が統制群より有意に高得点である。(但し、標題づけテストのHe尺度では有意傾向)。

用途テストの例は、平凡例(Td)であるが、容器としての反応はもともと多い。そのため、それ以外の性質を求めて、F尺度でもC群の方が高得点になり、たとえ考えらる。F尺度で、E群が低得点であること及び性質を示させたことがX尺度、Td尺度にも影響を与え、同じく低得点にさせたのであろう。また四点描画テストの例は、非凡例(Ho)であるが、これはむしろ下尺度やTd尺度のE群における得点と低めている。しかし、一方でTm、Ho、Heの各尺度のE群の得点を高めていることから、四点描画テストでは、非凡例を示すことにより、反応量は低下するが、反応の質は上昇するといえよう。その他のテストでは、例として平凡例を示させても(標題づけテスト)、非凡例を示させても(図案発見テスト)あるいは、平凡例と非凡例を同時に示させても(想像力テスト)、各下位尺度全てにわたってE群の方が有意に高得点になっている。すなわち、これらのテストでは、どんなものでも例示することによって、質量ともに反応の誘発を高めるといえる。特に、図案発見テストのH反応(Ho、He)では、その効果は、大といえる。同一テストに平凡例と非凡例を別々に提示し、こうした効果を更に検討してみた。

表1. TCT5テストの下位尺度における実験群(E)と統制群(C)のM、S.D.及びt値

テスト	群	F			X			Td			Tm			Ho			He		
		M	S.D.	t	M	S.D.	t	M	S.D.	t	M	S.D.	t	M	S.D.	t	M	S.D.	t
用途	E	2.92	1.82	***	2.08	1.11	***	1.62	1.52	***	1.02	1.10		0.28	0.68		0.01	0.08	
	C	4.37	1.54	-6.55	2.74	1.41	-5.25	3.03	2.17	-7.46	1.09	1.00	-0.76	0.22	0.52	1.19	0.02	0.16	-1.00
標題	E	8.30	3.09	***	3.77	1.43	***	7.08	3.02	***	1.02	1.26	***	0.13	0.49	**	0.07	0.47	+
	C	6.26	3.13	6.82	2.81	1.34	7.22	5.71	2.97	4.78	0.48	0.89	5.41	0.04	0.22	2.49	0.01	0.11	1.92
四点	E	6.49	3.59	***	3.67	1.59	***	1.80	3.34	***	1.87	2.04	***	2.56	1.90	***	0.17	0.39	***
	C	11.40	6.24	-9.35	1.74	1.39	13.74	9.97	7.12	-14.00	0.89	1.90	5.24	0.51	1.30	13.90	0.05	0.30	3.69
想像	E	7.96	3.82	***	5.38	2.03	***	5.87	2.95	***	0.99	1.20	***	0.86	1.26	***	0.23	0.57	**
	C	5.14	2.30	10.15	3.88	1.63	8.78	4.10	2.00	7.78	0.58	0.82	4.46	0.33	0.65	6.05	0.11	0.39	2.74
図案	E	11.01	4.52	***	5.01	1.58	***	7.37	3.32	**	0.27	0.61	*	3.04	3.08	***	0.33	0.90	***
	C	6.25	3.26	13.24	3.37	1.27	12.32	6.25	4.38	2.89	0.12	0.66	2.43	0.07	0.48	16.65	0.00	0.00	6.49

TCI創造性検査における反応の変化

そのⅡ、課題を変形した場合

○三島正英・久米 稔・星野美智子・黒岩 誠
(山口大学) (早稲田大学) (東邦大学学部)

目的 一問多答と許可創造性検査とは、その答への採点・評価方法、あるいは基準が常に問題となる。この問題に対し、筆者らのグループは、従来から用いられてきた流暢性(F)、柔軟性(X)の2尺度に加え、着想・発想の側面から反応をカテゴリ化し、課題依存(TD)、課題変形(TM)、同態再生(HM)、異態再生(HT)の4基本カテゴリを設定することで問題の解決と試みてきた。このことは、一面においては設定された課題に含まれる情報の利用の仕方から反応と評定する方法とすることができるところで、課題に設定された情報が異なれば、当然、それに応じ反応も異なってくるであろう。この場合、課題に含まれる情報へのとりわけの程度は、その情報に含まれない課題に対する反応と対照的に比較されることによりより良く理解され、そしてそれを通して我々の着想・発想に基づく評価方法の適切さの検討も深まらうと思われる。そこでここでは、TCI創造性検査より原因推定テストを選び、標準課題に対する反応と、標準課題を変形して情報量を減らした場合の反応とを比較し、課題に含まれる情報量の差により反応にどのような共通性、あるいは差異がみられるかを確かめることを目的とした。

方法 下記2群の被験者に、それぞれに対応する次の課題がTCIの所定の実施手順通りに従って実施された。【被験者】①標準課題群：Y県内、12～15歳の男女433名。②変形課題群：Y県内12～15歳の166名の男女。【課題】①標準課題(TCI創造性検査：原因推定テスト)：「ひとりの男が(腰掛けて雑誌と読んでいました。その人は突然、雑誌を閉じて立ち上がり、大急ぎで部屋を)出て行きました。さてどうしたのでしょうか。どうしたのかをできるだけたくさん書いてください。」(制限時間2分)②変形課題：上記標準課題より()部分を削除(下課題)。【反応評価】反応の量より流暢性得点(F)、反応カテゴリ数より柔軟性得点(X)が求められ、更に、意外と思える原因などの程度設定できるかという課題設定に基づき、場面はそのまゝ外部・内部刺激の導入による発想(TD)、情報の一部を原因とした発想(TM)、場面を新たに設定する形の発想(HT)の4尺度について評価を計

めた。尚、変形課題群の評価は標準課題群の反応に相当する反応をもつて各尺度得点とした。

結果と考察 両群の各尺度平均値、標準偏差及び群間の差の検定結果は表1のとうりであった。表に認められるように、F尺度については変形課題群が優り、課題の刺激があまりに多岐的なことか反応量を増大せたと推定できる。しかし、反応カテゴリ数(X)には有意差が認められなかったことは、逆に、変形課題群では情報の少なさが反応を固定的にした可能性を伺わせている。このことは、TD、TMの結果からも推測できる。即ち、変形課題群は、利用できる情報の少な故に、外部・内部刺激と導入する方向から課題解決を計った結果がTD得点に示された優位さとなっていると思われる。一方、標準課題群は、例えは、“雑誌”を中心とした付加された情報の故に、反応に制約を受けたと考えられると同時に、逆にその情報を活用する可能性も与えられ、そのことが、情報の一部を原因とした発想(TM)に変形課題群を上回る得点をもたらさせ、そして同時に、X尺度におけるこのような結果をもたらせたと考えることができよう。一方、HO、HTにおける差は、課題の多岐性が場面の新たな設定あるいは変換を促しやすいと、あるいは単に課題の情報が豊かな場合に与えられた可能性が高くなることとみることができると結果であった。但し、今回の場合の変形課題に含まれる情報はあまりに少なく、その意味で“意外性”が標準課題群よりも質的に高いかどうかは検討の余地がある。

表1、課題群別各尺度平均値(SD)、 Δ 、差の検定結果

尺度	標準課題群	変形課題群	Δ	P
F	5.02 (2.18)	7.80 (2.41)	-12.77	<.001
X	3.39 (1.19)	3.45 (1.30)	-.03	
TD	4.74 (2.31)	3.63 (2.53)	-12.61	<.001
TM	0.25 (0.56)	0.03 (0.17)	4.89	<.001
HO	0.02 (0.13)	0.07 (0.51)	-1.85	<.10
HT	0.02 (0.15)	0.07 (0.30)	-2.42	<.05

(df=422)

MSCにおけるタイプの分類

○寺沢美彦 久米 総 吉光 清 伊賀憲子
(日極意福祉専門学院)(早稲田大学)(国立リハビリテーションセンター)(文化女子大学)

〔目的〕

創造性は教育可能である、という見地より作成されたMSC (Mental Set for Creativity, 創造的構文) テストの結果は、従来、総得点によって評価されてきたが、抽出された、自己信頼感、客観性、細心さ、挑戦性、探究心、持久力の6因子を用いた分類によって評価することも可能である。本報告は、この新しい評価方法の紹介と、被験者への適用についてである。

〔方法〕

1. 被験者：山形県内中学生男女162名

2. 検査課題：MSCテスト

3. 手続き：被験者にMSCテストを実施し、各因子ごとの、個人の得点を求め、性格面について、動機づけ面について、それぞれ18のカテゴリーに分類、さらに最終的に、各個人を16のMSCカテゴリーに分類した。

〔結果と考察〕

1. Pタイプの分類：MSCの6因子のうち、自己信頼感、客観性、細心さの3因子を、情緒の安定性を示す性格面の因子と考え、各因子の得点を3段階に区分して18のカテゴリーに分類したものがPタイプの分類で、162名の被験者の分類結果は表1のとおりである。表中左端のPは、3因子とも高得点、あるいはどれか2因子が高得点で、ひとつが中程度であるカテゴリー。P'はどれかひとつの因子が高得点で、残りが中程度であるカテゴリー。Fは全因子とも中程度であるカテゴリー。Eは因子間で、高得点から低得点まで変動しているもので、12の組合せを9つにまとめたカテゴリーから成っている。Pはどれかひとつの因子が高得点で、残りが中程度であるカテゴリー。Pは3因子とも低得点、あるいはどれか2因子が低得点で、ひとつが中程度であるカテゴリーを示している。

2. Mタイプの分類：MSCの6因子のうち、残りの挑戦性、探究心、持久力の3因子を、思考の積極性を示す動機づけ面の因子と考え、Pタイプ同様18のカテゴリーに分類したものが、Mタイプの分類で、結果は表2のとおりである。表中左端のM、M'、S、D、m、m'はそれぞれPタイプのP、P'、F、E、P'、P'に相当するものである。Pタイプ、Mタイプとも低得点の方へ、分布のかたよりが見られる。

3. MSCカテゴリー：PタイプをPP', F, E, P'Pに、MタイプをMM', S, D, m'mにそれぞれまとめて、4×4の16カテゴリーにし、名称をつけたものが表3のMSCカテゴリーである。PタイプMタイプとも高得点である自己実現型から、ともに低得点である自信喪失型まで、内容と対応したカテゴリー名がつけられている。本研究の被験者には、自信喪失型が圧倒的に多く、162名中52名にのぼった。次いで準自信喪失動機づけ優位型が多く36名。自己実現型はわずか6名であった。

表1 Pタイプの分類

P	3P	2PF	13	
P'	PFF		2	
	FPF		9	
	FFP		1	25
F	3F		15	15
E	pPP		0	
	PpP		1	
	PPp		3	
	pFp	PpF	3	
	FpP	pPF	9	
	pFP	FpP	6	
	Ppp		0	
	pPp		2	
	ppP		4	28
P'	pFF		19	
	FpF		8	
	FFp		4	
P	2pF	3P	63	94

表2 Mタイプの分類

M	3M	2MS	9	
M'	MSs		3	
	SMS		4	
	SSM		1	17
S	3S		3	3
D	mMM		1	
	MmM		1	
	MMm		25	
	MSm	MmS	8	
	SMm	mMS	22	
	mSM	Smm	0	
	Mmm		2	
	mMm		17	
	mmM		0	76
m'	mSS		3	
	Sms		3	
	SSm		14	
m	2mS	3m	46	66

表3 MSCカテゴリーと分布 (N=162)

$\begin{array}{c} P \\ \diagdown \\ M \end{array}$	低得点 (PP')	変動 (E)	中間 (F)	高得点 ($P'P$)
高得点 (MM')	気負い型 (5)	準自己実現性格 変動型 (5)	準自己実現性格 優位型 (1)	自己実現型 (6)
中間 (S)	準気負い型 (1)	性格変動動機づけ 中間型 (1)	中間型 (0)	準自己実現性格 優位型 (1)
変動 (D)	準自信喪失動機づけ 優位型 (36)	変動型 (15)	性格中間動機づけ 変動型 (9)	準自己実現性格 変動型 (16)
低得点 ($m'm$)	自信喪失型 (52)	準自信喪失性格 優位型 (7)	準楽楽型 (5)	安楽型 (2)

職業興味検査の予測的妥当性

～ 訓練成績と興味得点との関連性 ～

戸田 勝也

(職業訓練研究センター)

1. はじめに

新規中卒者を対象とする公共職業訓練校では、非行防止、中退防止などいわゆる生活指導が重要な課題となっている。この生活指導実践にあたって、訓練初期に訓練生の個人的特性を把握するために教師の観察に加えて職業興味検査など心理検査が活用される場合もある。

ところが、職業興味検査の得点と中退や訓練成績との関連はかならずしも充分に検討されていない。興味得点と訓練成績との関連については藤原式職業興味テストを用いて図1のごとく、両者の関連はクラスによって相関が高い場合も低い場合もあるという報告があるのみである。(戸田、1981)

本報では、前報に引き続き、職業興味検査の得点が訓練生としての一定の訓練を実施後の成績とどの程度の相関関係をもつかを事例的に検討する。

方法は「教研式職業興味・志望診断検査」を用いて、H高専職業訓練校機械科(40名)、木工科(30名)の2クラスを事例とする。興味検査は昭和58年6月に実施し、訓練成績は各期の学科、実技ごとの総合得点を記録した。行動の集積としての訓練成績は興味のみで規定されるものではないが、両者の関連はクラス別にスピアマンの相関係数をもって表現した。

なお、現行訓練内容は工業的、生産技能を中心とするので用いる興味検査では興味領域では「生産・技術」、志望領域では「技能」に高い得点を示すことが期待される。

2. 結果

(1) 興味と訓練成績とのクラス別相関

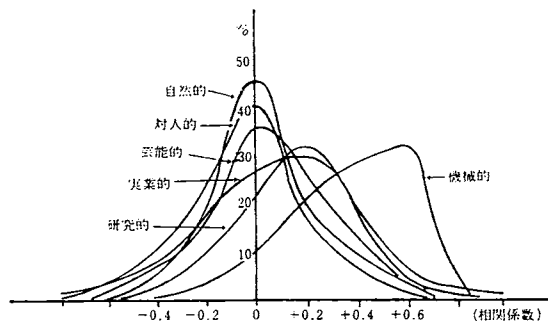


図1 藤原式職業興味6領域と1年度実技成績

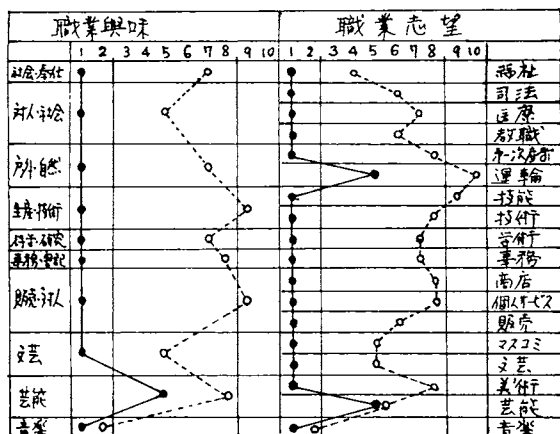


図2 職業興味・志望プロフィールの差異傾向

学期	科目	領域	
		生産・技術	芸術・美術
1	学科	0.413	0.344
	実技	0.365	0.274
2	学科	0.474	0.422
	実技	0.404	0.281
3	学科	0.489	0.394
	実技	0.255	0.415

表3 興味と訓練成績との相関

機械科についてみると第3表のように、「生産・技術」「芸術・美術」で両者の相関がその他の興味領域よりやや高くなっている。

木工科では「生産・技術」で相関係数が低く、「芸術・美術」でやや高くなっている。しかし、興味得点と訓練成績とがきわだって相関があるとはいえない。

(2) 興味低得点傾向者

多くの者はいずれかの興味領域で高い得点を示すがどの興味領域にも低い得点で図2のプロフィールのように低得点で平坦な線を描く者がみうけられる。この傾向の者は機械科で5名、木工科で3名である。

このようなプロフィールを示す者は一年後の訓練成績がいずれも下位であった。機械科33名中、26位、28位、30位、32位、33位の成績であった。木工科では23名中14位の成績者と2名が中退している。

3. まとめ

職業興味得点と訓練成績とは全般的には相関は高くないが、訓練成績が極度に劣ると予測される訓練生を選び出すのに教研式職業興味・志望診断検査が有効かもしれない。

集団式TAT作成の試み その15

大 久 保 康 彦
(国学院大学 栃木短期大学)

問題： 1974年、日本心理学会第39回大会における報告以来、われわれは本報告を重ねてきて、ようやくここに集団式TATの標準化を試みるにいたった。すなわちそれは、個人のパーソナリティの可能性の把握を意図して、そこに、より能動的、積極的な欲求や目標を見出し、それに従って問題解決をしようとする際いかなる適応様式を展開するかをとらえることを目的とした心理学的検査法であった。今回、この方法を「物語主題分析法 L.S. TAT (Large Scale of TAT)」と名づけ、世に問うことにしたわけである。

方法： このL.S. TATは、われわれが選定した10枚からなるオリジナルな刺激画を用いて、これに2種類ずつの物語を作成し、(1) 欲求、(2) 内的状態、(3) 適応のしかた、(4) 見通し「ほどの内容を選択肢によりとらえていくことにした。以下、これを順に紹介する。

内容： 1 刺激画 選ばれた10枚の図は、まず多くの写真の中より採りだしこれらをすべて専門家(画家)の手によって絵画化して、さらに2、3回の修正を加えてスライド化した。(無彩色)

2. テーマ L.S. TAT作成のために10枚の刺激画を大学生291名(男子150名、女子141名)にスライドにより呈し、いわゆる本来のTATの方法にしたがって物語を自由に作らせた。これを元に頻度の高いものから各図につき2つずつのストーリーを作成してみた。

3. 検査の方法 下の例のように、10枚の刺激画について選択肢が設けられている。

(例) 第1図		欲求 (圧力)	内的状態	適応のしかた	見通し
テーマ		(解決様式)		(結果)	
第1話 この娘は何 か考えている	1	欲求が	1	1	1
	2	阻止さ	2	2	2
	3	れる	3	3	3
第2話 この娘は身体 の具合が よくありません	1	欲求が	1	1	1
	2	阻止さ	2	2	2
	3	れる	3	3	3
選択肢数		3通り	2通り	3通り	2通り

註) □ はそれぞれ3通りまたは2通りの選択肢をあらわしている

4. 検査の構成 (選択肢の内容) (1) 欲求、社会的欲求次元として、2つずつの相反する7対の欲求つまり14種類の欲求により構成されている。

表1 欲求の種類

分類	社会的欲求の次元	2種類の相反する欲求	
I	1. 物質的獲得欲求 (何かを自分のものにしたい欲求)	獲得(2)	譲与(3)
	2. 承認欲求 (人から認められたい欲求)	承認(3)	謙謙(2)
II	3. 親和欲求 (人と仲良くしたい欲求)	親和(5)	孤高(5)
	4. 支配欲求 (人を自分の思うようにしたい欲求)	支配(5)	養護(5)
III	5. 発展・創造欲求 (新しいものを求める欲求)	発展(5) 創造(5)	保守(5) 伝統(5)
	6. 達成欲求 (物事に成功したい欲求)	達成(5)	達観(5)
IV	7. 自己充実欲求 (内的充実や自己確立したい欲求)	自己充実(5)	他者充実(5)

註) () の数字は選択肢にでてくる個数をあらわす

分類はI~IVに従ってより内的なしかも高次な精神的欲求となっている。また1~7はすべてポジティブな欲求として対置されていて各ストーリーの中に全体で60の欲求選択肢としてランダムにでてくる。

(2) 内的状態 欲求が阻止された状態で、安定または不安定な気分や感情が各物語中2つずつあり、安定20、不安定20計40の選択肢がある。

(3) 適応のしかた 分類では、大きく3通りの適応機制があり、6種類の適応のしかたが全部で() の数だけランダムにでてくる。

表2 適応のしかたの種類

分類	解決様式	適応のしかた
I	目標へ向かう解決法	1 ストレートな解決 (6)
		2 まわり道による解決 (6)
II	当面の目標や行動を変えて解決をはかる方法	3 目標変更による解決(代償) (11)
		4 手段変更による解決(変換解消) (11)
III	自分のあり方を変えて解決をはかる方法	5 欲求の抑制による解決(抑制) (13)
		6 欲求の保留による解決(保留) (13)

(4) 見通し 適応のしかたによって生じた解決行動がどんな結果になるか、成功、失敗、幸、不幸のいずれかで(+)方向20、(-)方向20の選択肢がある。以上L.S. TATの内容の構成である。これによりパーソナリティの積極的建設的な面を明らかにすることが可能となる。

訓練適応性テストの開発に関する研究

職業訓練大学校 七尾 和之

目的

急激な中高齢化社会への移行にともない、公共職業訓練では、その対策の一環として、中高齢者を対象として能力再開発訓練を実施している。ところが、訓練実施上、いくつかの問題が生じており、それを訓練プロセスから整理してみると、訓練の入口、中身、出口の3点となる。

ここでは、訓練入校時に焦点をあて、どのような改善をすれば、能力再開発訓練がより効果的に展開できるかという視点から、入校直後に、訓練適応性テストを実施し、訓練の初期段階で多様な中高年訓練生の技能特性をとらえようとした。

訓練適応性テストは、英国で開発されたテストで、従来の適性検査と異なるところは、抽象的な検査課題による検査ではなく、具体的職務を実際に試行させること、指導員が職務遂行に先立ち、受検者に対して、仕事の仕方を教えるというプロセスが設定されているという2点である。

このような考え方をもとにして、溶接系訓練適応性テストを開発し、訓練導入時に適用し、訓練実施上にどのような効用が生じ得るのか、どのような問題点が生じるのかを検討することを目的とする。

方法

対象と手続き：香雪技能開発センター溶接科、能力訓練・転換訓練課程、男子中高年齢訓練生15名(平均年齢39歳)を対象とし、図-1の手順で、溶接系訓練適応性検査を開発し、それを試行した結果について検討した。

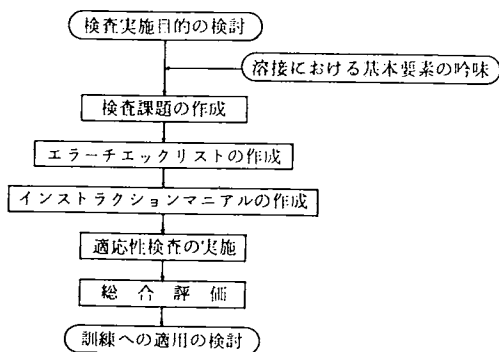
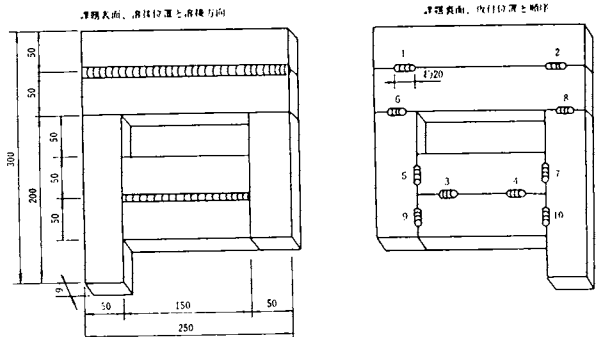


図-1 実施手続きのフローチャート

結果と考察

訓練適応性テストでは、その職務に熟練した指導員によって、検査課題の決定、エラーチェックリストの作成、課題の作成指導を通じて各訓練生の技能の把握、総合評価、訓練適応性の予見、今後の指導方法の検討がなされる。



課題図

上記の検査課題をもとにして、試行した結果、それに適した訓練生および担当指導員はその意義を積極的に認めている。それらとまとめて簡単に示す。

訓練生側：①紙筆検査とは異なり、実際の作業をやるので抵抗が少ない。②作業の指導を受けるため、親しみ易く、コミュニケーションがとりやすい。③従来のテストは、正誤の判定は自分ではわからないが、課題を製作することで自己評価しやすくなる。④情報提供の特性をもつ検査であるため、溶接の仕事をも具体的に理解する。⑤課題見本から技能の到達目標と示されることから、モチベーションが高まる。

指導員側：①訓練への取り組み方や技能についての再検討がはじまり、指導員の訓練への意識が変革してくる。②訓練導入時から個人特性が情報として入るため、初期段階から指導内容を吟味し、各訓練生用の指導案を考えるようになる。③チームとして統一した指導方針の検討が可能になり、技能診断における指導員の経験的レベル差をうめ、チーム全体の指導レベルが向上する。

このように、訓練生も指導員も訓練適応性テストを開発し適用することによって、信頼関係が深まり、訓練効果が向上すると思われる。今後は本テストの予見性評価の検討が重要となるであろう。

クロステストからみた高齢者の起立の安定域

西村純一
(雇用職業総合研究所)

<はじめに>

よく「老いは足から来る」と言われる。たしかに、筋力などの面では、そうした勾配が見られる。そこで、筆者は、そうした足に出来る老いを定量的に測定評価する方法の一つとして、片足立ち検査における平衡保持時間や重心動揺波のパワースペクトラム(西村、1975)、両足立ち検査における重心動揺距離や重心動揺面積(西村、1984)の有効性について検討してきた。

今回は、これに加えて、Cross Testにおける起立の安定域の有効性について検討してみた。

<方法>

1. 測定装置 重心点指示計付き設置足跡投影器G1822S(アニメ製)。X-YレコーダーWX411(渡辺測器製)。なお、圧検出台の高さは40cm、ステージの大きさは42cm×32cmである。
2. 測定手続 開眼状態のRomberg足位の直立姿勢を安定させてからCross Testを始める。5秒毎に、直立→前方傾斜→直立→後方傾斜→直立→左方傾斜→右方傾斜→直立、の順序で姿勢を変えていく。検査所要時間45秒。
3. 分析方法 重心図(EGG)を使って、前方、後方、左方、右方へ傾斜させたときに、直立時の重心位置からそれぞれどのくらいShiftしているかを測る。以下、便宜的に前方、後方、左方、右方へShiftした距離をそれぞれF、B、L、Rと呼ぶことにする。これらの距離の年齢差を検定した。
4. 対象者 20-39歳の男子56名、55-79歳の男子67

名。前者を若青年群、後者を高齢者群と呼ぶ。

<結果と考察>

F、B、L、Rとも高齢者群は若青年群に比して平均が小さい傾向が見られた。この差をも検定した結果Fのみ0.1%水準で有意であった。一方、両群の身長平均と標準偏差を見ると、若青年群は170±5cm、高齢者群は163±6cmで、t検定の結果0.1%水準で有意であった。従って、起立の安定限界域の縮小を反映しているというよりも、単なる体格の差を反映している可能性もある。そこで、両群をさらに身長別に見たのがtable1である。これにもとずいて分散分析を行い、年齢、身長、及び両方の交互作用を見たところ、Fの年齢の効果のみ0.1%水準で有意であった。それゆえ、Fにおける両群の差は一応年齢差と見られる。なお、高齢者群をさらに50代、60代、70代に分けてみると、70代は他の年代に比して安定限界域が縮小する傾向が明瞭であり、この差はいずれも5%水準で有意であった。

本研究は横断的研究であって縦断的研究ではないので一概に言えないが、両群の差は近似的には加齢による変化を反映していると考えられる。同様に、70代とそれ以前の顕著な差も、やはりその頃に老いが著しく進行することを反映していると思われる。

また、前方のみ有意であったのは、足の構造から見てその他の方向への傾斜はもともと限界があり、さほど差がつかないのに対して、前方傾斜は筋力しだいかなり傾斜させられるためと見られる。

Table 1 M & SD Shifting (mm) Length of the Center of Gravity While Inclining One's Body As Far As Possible in All Direction

Age(yrs) Height(cm) N	Young(20-39)		Elderly(55-79)	
	Short(158-167) 13	Tall(167-185) 43	Short(150-167) 46	Tall(167-181) 21
Direction				
Forward	90.53 ± 19.72	88.86 ± 19.10	73.02 ± 15.72	68.52 ± 18.09
Backward	59.15 ± 13.73	59.76 ± 14.59	54.95 ± 13.59	54.28 ± 16.29
to Left	57.07 ± 10.77	57.13 ± 10.12	55.02 ± 11.16	52.90 ± 16.41
to Right	57.30 ± 10.51	56.86 ± 11.98	57.39 ± 12.14	52.80 ± 15.24

就業可能性チェックリストとその問題点

松 為 信 雄
(雇用職業総合研究所)

目的 職業領域への道を明らかにし、それへの対応をどのように進めるかを指摘する就業評価は、心身障害者のリハビリテーション体系の中で重要な位置を占める。就業可能性チェックリストは、就業評価を進める場合に、特に個人の心身機能の諸側面において収集すべき情報の欠落を防ぎ、異なる諸側面が相互に同じ意味的枠組みの中で情報交換をすることができ、指導経過記録や資料の体系立った蓄積ができるように意図して作成された。ここでは、その内容を紹介すると共に、このチェックリストの問題点と今後の課題を明らかにする。

内容 このチェックリストは、心身障害者の就業評価・就業紹介・採用・職場適応・雇用管理等の現場で指摘される諸問題をもとに、表で示す9領域から成る合計43設問項目から構成した。各項目ごとに選択肢を示し、選択肢の順序尺度を構成できる場合にはA.でよい場合にはB.の回答方法を取ることをしている。また、必要に応じて、選択肢の回答結果を補足するための履歴情報記述欄を設けた。選択肢に回答した結果については、チェックリストの最終ページにある結果記録用紙に複写される様式とし、この用紙は切り離し

て、進路状況も記入した上で保管できるようにしてある。

作成経過 各種授産施設・労災リハビリ作業所・身障訓練校・心障センター・公共職業安定所等の利用者(非雇用群)1970名と事業所の障害者504名(雇用群)について実態調査を行い(「重度障害者の就業に関する実態調査」1982)、両群の判別分析をした結果(「心身障害者の就業阻害要因の分析、日心48回大会、1984)から試案を作成して、心障センター等で問題点評価を行い、また、就業評価員・医師・作業療法士・教員等の評価を経て項目の選択を行った。

現在、このチェックリストをもとに、データを集めている。

問題点と今後の課題 実務担当者の意見を総合すると、この種のチェックリストは、それ自体の持つ問題点と、それを活用する場合の問題点に二分できる。前者は、①項目によつては、選択肢の判断に迷いが生ずる場合があり、②障害状況によつては不要な項目が含まれたり、③逆に必要項目が欠けている場合も考えられ、④質的に異なる項目を総合化した尺度が必要となるかどうかの疑問をしばしば指摘されている。また、後者は、⑤実務の現場に応じた簡便な使用

法があり、⑥回答結果に基づいた就業リハビリテーション体系に則した対応の仕方が指摘されることと希望されることとが指摘された。

今後の課題として、④については、判断基準の目安となる条件を注釈として加え、②はデータ分析によつて障害状況に応じた必要項目の分類化を図り、⑤と併せて、実務における評価の流れ図に則した項目の配置を検討する必要がある。その過程において、④の尺度化の必要性を再検討する必要もある。③は、⑥と共に、実務経験に基づく対応の仕方を収集して活用を引きよ作成し、その中において、このチェックリストで捉えきれないものも含め、重要な条件を明らかにしておくことが望ましい。

領域	設問項目	回答方法	領域	設問項目	回答方法	
I. 就業への意欲	1. 採求の生活設計	A. 6.	V. 情報の受容と伝達	21. 視覚機能	A. 5.	
	2. 希望する進路	B. 7.		22. 文字の解読	A. 5.	
	3. 就業情報の獲得	A. 3.		23. 点字の解読	A. 5.	
	4. 経済生活の見通し	A. 5.		24. 聴覚機能	A. 4.	
II. 就業生活の維持	5. 勇退の自立	A. 3.	VI. 理解学習能力	25. 言語機能	A. 5.	
	6. 障害の進行	A. 4.		26. 書き機能	A. 5.	
	7. 医療措置	A. 3.		27. 言語理解力	A. 5.	
	8. 健康管理	A. 4.		28. 話す能力	A. 5.	
	9. 耐久力	A. 4.		29. 読解力	A. 5.	
	10. 勤務体制	A. 4.		30. 書く能力	A. 5.	
	11. 家族・友人の支援	A. 4.		31. 計算能力	A. 5.	
III. 手の機能	12. 手指・前腕の機能	B. 7.	VII. 職場と社会生活の遂行	32. 課題の遂行	B. 14.	
	13. 手指・前腕の運動速度	A. 6.		33. 社会生活の遂行	B. 14.	
	14. 腕の機能	B. 8.	VIII. 移動	34. 平地の移動	A. 7.	
	15. 手の運動速度	A. 4.		35. 階段昇降	A. 5.	
	16. 上肢筋力	A. 4.		36. 歩行技術	B. 9.	
IV. 姿勢と筋力	17. 姿勢	B. 7.		IX. 社会的属性	37. 外出	A. 4.
	18. 姿勢の変化	A. 4.	38. 交通機関の利用		A. 4.	
	19. 立位の保持	A. 3.	39. 現在の年齢		A. 4.	
	20. 持ち上げる・押す・引く力	B. 6.	40. 最終学歴		A. 7.	
・回答方法のA.は、多肢選択法による。B.は、否選択法による。Y/Nで回答する						
・数字は、選択肢数						
			41. 就業経験			A. 3.
			42. 資格免許			B. 2.
			43. 就業訓練			A. 1.

キャッセル式集団用要求水準検査の 標準化に関する研究(3)

○正田 亘 織田 圭子

(立教大学文学部)

第49回大会において(1)(2)を発表したが、今回はその続報である。「キャッセル式集団用要求水準検査」は、米国の心理学者R.N.Casselが1957年に発表した異色ある作業検査である。この検査の特徴の主なものをまとめると次のようになる。

- (1) 作業検査方式であり、受検者の作為的行動が現れにくい。
- (2) 目標設定から結果の処理まで受検者自身が行うこと、ゲーム的色彩が強いため検査自体に興味を湧かせることができる。
- (3) 毎回の作業量を受検者自身知ることができる。このような結果の知識(KR)をもつことは、作業行動への動機づけを高めることに役立つ。
- (4) 受検者自身気づかないような異常事態の設定が盛りこまれており、日頃発見できないような個人の特性を把握することができる。
- (5) 検査の教示の受けとめ方、作業遂行ぶりの分析所見から受検者の性格特徴を浮きぼりできる。

我々は原著者ならびに出版元の許可を得て、日本版を作成し、上梓した*。日本版は実施の手順や個別項目得点の出し方、診断法などを一部変更した。すなわち、(1) 第7回目の異常事態挿入において作業時間の短縮を3秒から2秒に減らしたこと。(2) 要求水準得点として、目標挑戦度(Goal Discrepancy, GD)、状況対応度(Attainment Discrepancy, AD)の二つの測度を設けたこと。(3) 評価段階を5段階法で処理したこと。(4) テスト用紙に感圧方式を用い、集計採点を容易にしたこと、などがそれである。なお、我々は本テストを「目標決定力診断テスト(PDC)」と呼称する。

【標準化の過程】

本テストの標準化には筆者が収集した約1万人のデータから、男子2,241名、女子250名、計2,491名を抽出し、これをもとに標準点を算出した。

本テストにおける六つのPDC項目の平均値、標準偏差、最小・最大値を示したものが表1である。ちなみに、各項目はいずれも正規分布を示している。表2はAD得点と非定型反応(失敗に直面したにもかかわらず、次の目標を上昇させたり、成功したにもかかわらず、次の目標を下降させるようなケース、及び目標と実績の差が5.0以上の三型をさす)により七つのタ

表1 PDC項目の得点平均と標準偏差

項目名	全体 n=2,491		
	Av	SD	Range
初期設定度(FG)	31.32	8.40	6~60
目標挑戦度(GD)	-0.22	1.56	-8.75~9.50
状況対応度(AD)	0.96	1.53	-6.0~9.50
達成効率度(HS)	34.20	6.21	9.5~58.5
反発度(PS)	0.69	2.10	-7.0~32.0
回復度(PH)	0.39	2.19	-12.5~27.5

表2 PDCタイプ別分布 (%)

	I	II	III	IV	V	VI	VII	計
男	570 (25.4)	739 (33.0)	553 (24.7)	208 (9.3)	35 (1.6)	105 (4.7)	31 (1.4)	2,241 (100)
女	42 (16.8)	94 (37.6)	67 (26.8)	20 (8.0)	3 (1.2)	18 (7.2)	6 (2.4)	250 (100)
計	612 (24.6)	833 (33.4)	620 (24.9)	228 (9.2)	38 (1.5)	123 (4.9)	37 (1.5)	2,491 (100)

イブに分類し、それぞれの型の割合を示している。Iは適切型、IIは準適切型、IIIは硬直型、IVは自己型、Vは非現実型、VIは防衛型、VIIは混乱型を意味している。それぞれのタイプ名称は前回報告時のそれを一部変更してある。

【信頼性・妥当性】

詳細な資料は当日発表するが、信頼性、妥当性ともに高い結果が得られている。すなわち、同一人物に2年間の間隔をおいて再検査した結果では、FG、Phyを除き、PDC項目のあいだに相関が認められたこと、複数の専門家による判断の一致度が認められた。そのほか、非行者・受刑者群と健常者の比較資料、事故者と優良者の比較検討資料などによる構成概念妥当性の存在などがそれである。基準関連妥当性についての資料は現在蒐集中であるので、他の機会に発表することとしたい。

【活用の分野】

作業検査法の種類が少ない現況にあっては、採用・昇進昇格、業務指導、安全管理対策など、その利用範囲は広いものと考えられる。

* 正田 亘『目標決定力診断テスト活用マニュアル』ダイヤモンド社、1984年。

「血液型性格学」は信頼できるか

大村 政 男
(日本大学文理学部)

A血液型(ABO式)と人間の性格(気質、あるいはパーソナリティ)との関連は、昭和2年に東京女高師の古川竹二によって最初に取り上げられた。昭和7年、東北帝大の田中秀雄もこの関連に触れている(心理学研究2-4, 7-1)。日本医事新報838号では「血液型気質相関説の検討」と題し、東京医学専門学校の浅田一、公衆衛生院の川上理一、東京慈恵会医科大学の古閑義之の論説を掲載している。浅田は「とにかく血液型と気質との関係は、はなはだ興味深い問題で、………せっかくわが国に生まれた世界に誇るべき(古川)学説をみだりに踏みにじられないようにしたい。」といっているが、川上は「過去十数年間学界を賑わしたのであるが、それは科学上なんらの貢献をしていない。」ときめつけている。古閑は「とてもこの複雑な気質・性格が簡単に各血液型によって抽出代表できるものではない。」とまとめている。京都大学の佐藤幸治は、その著『人格心理学』に「多くの心理学者の追試はその否定に傾いている。ただ最近、矢田部達郎氏(1950)は、………ゆずかではあるが、正の相関($\phi = .187$)が認められた。」と書いている。このような数値なら無相関と同じである。

B血液型と性格との関連は、専門的心理学者の手を離れ、ポピュラー・サイコロジストの手でまとめられている。そして、かれらの所説に対する大衆の信頼度は実に大である。京都のある幼稚園では、教諭と園児に各自の血液型に相当した制服を着せ、A型の園児群にはA型の教諭が接すると効果があるといっている。しかし、B型の教諭がA型の制服を着て、A型の園児群に接するというようなケースを持っていないのでどうにもならない。ある会社は血液型で職務を決めている。

C血液型性格学はどのくらい信じられているか？

高島澄江と大村の調査によると、占星、手相、人相、血液型、干支の5つのうち、最も信じられているのが血液型で54.0%、占星が45.1%、手相と人相が各31.3%、干支が13.5%になっている。学生(男女412人)が対象だったためか、占星・血液の組合わせが最も多く11.7%を占めている。占星・人相・血液の組合わせが次に多く6.3%になっている。

D“思い込み効果”ではないのか？

伊藤美香と大村は、十二星座のそれぞれについての

性格を書いたカードを、それぞれに適合した生年月日の人(各8人)に渡し、全体として当たっているかどうかを判定させた。次の表はその結果を示している。

星	牡羊	牡牛	双子	蟹	獅子	乙女	天秤	さり	射手	山羊	み	魚
適合度	54.0%	77.5	75.0	75.0	100.0	62.5	25.0	50.0	75.0	50.0	25.0	62.5

このような高い適合度は“思い込み効果”かもしれない。そこで次のような実験をおこなった。

中学生(男女37人)の血液型をあらかじめ調べ、これが君の血液型に適合している性格だ———と書いて封筒に入った性格特徴のリストを渡す。封筒には各自の氏名と血液型が記入されているが、なかのリストは、その血液型のものではない。A型とB型、AB型とO型は交換してある。性格特徴は市販の血液型と性格に関する本から抽出した。中学生のうちの33人(89.2%)は合っていると回答した。違うと回答したものはわずか4人(10.8%)にすぎなかった。“思い込み効果”は歴然としている。

E関連があるのか、ないのか？

上記の実験は本年2月21日、NHK総合TV「おはような場」の「どこまでホント“血液型”人間学」で放映されている。また7月15日、TBSの「諸君！スペシャルだ」で「ブームに異議あり！血液型信仰を切る」を放映したとき、訖摩武俊も否定的な結論を出している。前者では野島忠太郎の気質検査、後者ではYGテストやEPPSを用いている。

Fそれでは血液型と性格は関連がないのだろうか？

このことは出生順と性格との関連に類似している。世間では長子や末子の性格についてある見解を持っている。しかし、それは普通の性格検査では把握できない。パーソナリティ・ディフェンシヤルのような評定尺度を用いてたたき出さないと浮かんでこない。多くの人びとの人間観のなかにセットされたステレオタイプと評定尺度における個性のたたき出しが効果を現わすのである。

血液型と性格との関連は、世間的には存在しているが、普通の性格検査では把握できない。それでは評定尺度のような道具を使えば出てくるかということ、ステレオタイプが現われるだけで用をなさない。当分の間、思い込み効果の善用を考えることが得策と思われる。

「女性が働くこと」についての態度・意見調査(Ⅳ)

小 野 公 一

(亜細亜大学 経済学部)

1. 研究の目的

'78年, '83年の筆者らの調査によって, 働く女性の能力開発や昇進, そしてそれらの機会均等への要求がきわめて強いことがわかった。また, 仕事をどうして生甲斐, 成長, 自立を求めていることもわかった。

そこで本研究は, 能力開発・昇進・責任のある仕事に関する項目を整理し, それを中心に, 女性の労働にまつわる一般的マイナスイメージの項目をあわせて項目群(A)を構成し, それらへの反応をみるとともに, 仕事をしていく上での自律性・仕事と家庭のバランス・賃金の男女差別の是非認, さらに勤続年数, 職制上の地位等の属性と, A項目群への反応の関係をみることを目的とした。

2. 研究の方法

本研究は, 質問紙法を用いた。質問紙は, A項目群と自律性・仕事と家庭のバランス・賃金差別の是非をみるためのB項目群によって構成され, 各項目には5点尺度で反応するようにし, 属性項目を付した。

調査期間は, 1984年5月～6月である。

表1. 質問項目のカテゴリ

カテゴリの内容		項目番号(重複あり)
A項目群	1.能力開発に関するもの	4, 6, 9, 12, 19, 21, 22
	2.昇進に関するもの	9, 11, 15, 16, 18, 19, 21
	3.責任(意味)のある仕事	5, 7, 10, 11
	4.女性の負のイメージ	1, 2, 7, 13, 14, 17, 18, 20
	5.その他	3, 8
B項目群	1.仕事の自律性	1, 2, 3, 4, 5
	2.仕事と家庭のバランス	6, 7, 8, 9
	3.賃金の男女差別の是非	10, 11

3. 研究の対象

本研究の対象は, 正社員として働く女性である。うち未婚者168名, 既婚者121名である。

4. 結果の要約

A項目群の平均値の上位5位は, 項目4, 6, 8, 9, 21の順であり, 能力開発(訓練)に関する項目が多く, 次いで昇進に関するものであり, 能力開発に関する要

求と期待が根強いことがわかる。

平均値の低いものは, 項目2, 13, 14, 7の順となっており, 女性労働にまつわる否定的・消極的な項目がならんでいるが, 項目2以外は, どちらともいえない状況にあることを示している。

次に, A項目群とB項目群・属性の相関関係をみる。

A項目群との相関関係は, 自律性との間で1項目, 仕事と家庭のバランスとの間で2項目, 賃金差別の是非との間で2項目, 勤続年数・地位との間では0項目であり, いずれの相関係数も小さい。

自律性については5項目の合計で高・中・低の3グループに分け, グループごとにA項目群を再集計し, 平均値の有意差の有無をみた。有意差がみられたのは, 能力開発や昇進の機会の増大と均等, 責任のある仕事の要求・必要性であり, 高自律性群が中・低自律性群よりも高い値を示し, 大きな差をみせている。また, 高自律性群は, 項目13・20の女性労働のマイナス・イメージについては, 否定的に反応する傾向が強い。

仕事と家庭のバランスは, 合計値の高い方から仕事志向群, 中位群, 家庭志向群に分け, A項目群を再集計した。大きな差をみせる項目4, 9, 22は, いずれも能力開発に関するものであり, 仕事志向群が他の2群よりも高い値を示し, また, A項目全体の中でも, 高い値を示している。昇進に関して差がみられる項目11, 15でも仕事志向群の方が高い値を示している。

賃金の男女差別の是非は, 合計値の高い順に, 非認群・中位群・是認群に分け, A項目群を再集計した。多くの項目で有意差がみられ, 非認群が高い値, 是認群が低い値をとることが多い。有意差のみみられない項目は, 項目1, 14, 17, 20であり, 女性労働のマイナス・イメージに関するものである。

勤続年数は, 1-2年, 3-5年, 6-9年, 10-14年, 15年以上の5段階にわけ, A項目群を再集計した。多くの項目で, 勤続年数が高いほど平均値も有意に高くなる傾向がみられ, 1-2年とそれ以上の勤続の間に有意な差がみられることが多い。有意差がみられない項目は, 女性労働のマイナス・イメージに関するものが多く。

地位については職制上の地位の有無でみたが, 項目10以外では, 有意な差はみられない。

女子社員の業務態度・意識に関する研究（２）

— SAT（BW）テストを通して —

鎌 形 み や 子

社団法人 日本経営協会

【 目 的 】

女性の企業進出がめざましい昨今、企業の中に勤める女子社員全体の質的向上がより重要視されている。

最近、女性の職場に占める割合が高く勤務年数の増加や高学歴化もみられ、管理職・専門職への登用や職務の拡大が現実となりつつある。一方、企業も単なる「腰かけ」的な扱いから、「有力な戦力」へと期待する内容が変化してきている。これは一部の女性の専門性の強化というよりむしろ、各自の分担する職務の質的向上をはかることに目的をおいている。とはいいながら、女性に対する教育はまだ男性にくらべて機会が少なく新入社員教育のみという企業も多くみられる。そのような中で、今回は、前回とは、女子社員が日常どのような業務遂行態度をとっているか、どんな姿勢で取り組んでいるかを報告したが、今回は入社直後の男性と女性の姿勢を比較し、その違いを考察する。

【 方 法 】

◇質問項目について

今回は、SAT（BW）女子社員自己診断テストの83項目を用いたが、今回は、男性も対象とするため、男性の業務においても求められる業務態度・姿勢についての質問を30項目選びだした。

すなわち、Ⅰ. 仕事のすすめ方の領域6問 Ⅱ. 命令の受け方・報告のし方の領域7問 Ⅲ. 明るい職場づくりの領域3問（この領域は女性特有の職場問題が多いため項目はすくない）Ⅳ. 来客の対応の領域9問 Ⅴ. 電話の対応の領域5問である。回答者は質問に対して「そのようなことをしている」場合は「はい」と回答するものである。

◇実施について

実施方法、人数等は次のとおりである。

男 性 群	女 性 群
実施期間：昭和59年 5月	昭和57年 6月～ 8月
実施方法：企業内集合研修時	企業内集合研修時
実施対象：上場企業	上場企業5社の一般事務職
（某自動車メーカー）	

学 歴：大学卒 高卒50% 短大25%他
人 数：429名 187名

* SAT（BW）について 「1982. 財日本経営協会開発」
一般事務職の女性の業務のうち、どの企業にもみられる命令受諾や報告に関する基本的態度や業務の遂行、あるいは接遇対応等の部分を測定しており、上記の五領域に分かれている。これは、教育研修用に作成されているため、女子社員に求められる行動や考え方のうち、教育上、とくに重要な内容について質問したものであり、83項目からなっている。

【 結 果 】

SAT（BW）は女子社員の職場教育上正しいとされている基準によって正答をきめている。今回の30問について男性群と女性群とで誤答率10%以上の項目を次に示す。

新入社員 男性と女性の回答の比較			誤答率%		
No	質 問	正解はすべて（四）	新入男性	新入女性	一般女性
2	仕事が最初に設定した目標まで到達しなかった場合原因はその実施方法にあったといえる		29.6	50.0	41.9
4	自分が作成した書類や伝票は自分に一番はやりやすい方法で保管する		30.3	51.6	38.2
7	他部門の上司から出された命令は上司の許可をうけてから行うが、直属上司の上位者から直接命令された仕事は他の仕事より優先するので直属上司の許可を得る必要はない		5.6	24.2	20.1
8	命令を遂行することが困難に思われる時には理由を説明して次の指示をおくより、最善を尽くして努力すべきである		25.9	38.7	32.0
9	命じられた仕事はきちんと済ませることが重要であり、報告は仕事が終わったあとで上司の手のあいている時にする		36.4	46.8	52.9
11	仕事が仕舞い込みにすすんでいる時は上司に報告する事項が特にないので、たとえ長期間の仕事でも終了してから報告すればよい		1.9	12.9	19.1
12	仕事のミスは上司に知らせるべきだが、それは自分で解決困難と思われるものの場合だけである		26.6	51.6	56.6
13	仕事にミスをした場合、手順を間違えないように教えることが第一であり、どのような目的のために行うかは他の仕事とのつながりを理解した上で教えるほうがよい		8.6	32.3	33.8
16	お客の指名人が不在の場合は、あらかじめお越しいただくようお願いする		20.3	37.1	40.8
18	電話を受けた時相手の会社名をうかがうが、取引のない会社には「お世話になってます」とあいさつするのはおかしいので書かなくてよい		7.5	32.3	25.7
26	こちらから電話をかけたが相手不在のために伝言を頼んだ場合、伝言を取り次いでくれる人の名前を確認するのは返事をもらう必要がある時である		19.1	29.0	25.0
30			20.5	30.6	25.0

【 考 察 】

今回の男性群は入社時には、これらの内容についての教育は全く受けずに職場に配属され、1ヵ月後、研修のため集合した人々であり、職場経験が1ヵ月の人々である。女性群は入社時、接遇対応の基本は教育をうけ、入社後3ヵ月～5ヵ月経た人々である。

上記の結果をまとめると次の2点があげられる。

① Ⅱ 命令の受け方・報告のし方の領域は、男性群と女性群で誤答率差の大きい項目が多い。

② 男性群は女性群より誤答率の低い項目が多い。

①についてみるとⅡの領域の問題のうち、No 7, 12, 13は差が20%以上あることやNo 7, 11, 13のように男性の誤答率が10%未満である。これらの問題は、組織の中の命令系統の統一の問題や、報告の重要性（誰から命令・指示を受け、いつ報告するか、どのように報告するか）についてである。つまり男性は配属される前、すなわち入社以前から、組織の一員としての自覚、一員としての行動に対して、女性よりも訓練がなされているのではなかろうか。

②についてみると 全体的に、ここにかかげた問題に対して女性群より男性群のほうが誤答率が低く、組織の原則に対する理解度は高い。これらをまとめると、男性は、学校生活の中での経験や職業社会に対する洞察、社会訓練等に差がみられるのではなかろうか。

女性管理者に関する基礎的研究

馬場 昌雄
(日本大学経済学部)

馬場 房子
(亜細亜大学経営学部)

1. 研究の目的

昭和50年代に入つて、働く女性、なかでも女性雇用者は、年々増加してきて、昭和58年には、1,418万人にもなった。また、女性管理者も、わづかずつではあるが増加してきている。しかしながら、昭和55年で、従業員100人以上の企業における女性部長は、2,140人、女性課長は、7,020人で、それぞれ全部長、全課長のうち女性が占める割合は、0.95%、1.32%にしかすぎない。なおこのような状態なのであるから、その理由には、いろいろなことが考えられるであろうが、その一つは、人々の女性管理者に対する態度にあると思われる。そこで、本研究の目的は、男性および女性、女性管理者に対してどのような態度を持つていようかと知ることにあつた。

2. 方法

女性管理者に関する調査表を作成し、働く人々に反応してもらった。反応者は、男性247人、女性214人、合計461人であった。調査は、昭和59年6月に実施された。

3. 結果

第1に、女性管理者に関する意見に対する反応は、次表の如くである。5点尺度で、4.00以上のものは、男性の場合、項目1、21の2項目であり、女性の場合、項目1、3、6、21の4項目であった。男女共に、「女性が管理者になるには、男性以上の努力が必要である」、「男中心の会社で女性管理者になるには、よほどの積極性がなくては無理である」と思っていることがわかった。女性は、「エネルギーに恵まれている女性でなければ管理者に向かない」と思っているし、「女性管理者として成功するために必要なことは、自信を持つことである」と思っていることがわかった。

第2に、男女間で統計的に有意差が見出されたのは、25項目中12項目である。男性が女性より反応得点が高いのは、項目10、13、17、18であった。また、女性が男性より反応得点が高いのは、項目2、3、5、6、9、15、19、22の8項目であった。結果をまとめると、男性は、女性よりも次のように強く思っている。「若い男性は、女性管理者により心理的抵抗を持つていないし、アレルギーを示す男性も少なくなつてきている」と考えている。しかし、女性管理者は、感情に流

	内 容	男性	女性
1	男性以上の努力	4.02	4.18
2	男性よりも心理的・肉体的に強い	3.12	3.40**
3	エネルギーに恵まれている女性	3.80	4.06**
4	企業イメージアップ	3.48	3.63
5	職場内の人間関係への配慮	2.83	3.23***
6	自信を持つこと	3.87	4.14**
7	サービス産業	3.50	3.59
8	独身であること	2.90	3.13
9	女性の社会的地位	3.68	3.97**
10	若い男性は心理的抵抗なし	3.16	2.97*
11	上司に対しては、自己意見をい	3.31	3.33
12	高い能力	3.70	3.86
13	アレルギーを示す男性の減少	3.35	3.19*
14	課長、部長が女性の職場	3.26	3.14
15	結婚していること	3.39	3.56*
16	仕事より家庭や子供を優先	3.32	3.24
17	感情に流されやすい	3.84	3.64*
18	視野が狭く、マクロな見方が多い	3.53	3.28**
19	部下に思いやり	3.11	3.39***
20	若い女性にとつての励み	3.90	3.96
21	積極性	4.29	4.29
22	ほつとやまらした自然な気持	2.68	2.98***
23	働きやすい社会的環境	3.00	2.90
24	部下に好まれない	2.94	2.87
25	公平な態度	2.67	2.80

*** $p < 0.01$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

やすく、視野が狭いとも思っている。女性は、男性よりも次のように強く思っている。「女性管理者には、エネルギー、自信が必要で、社会的地位の向上により、女性管理者が増加すると考えている。また、女性管理者が下で働くことに男性は心理的に耐えられなさうとも考えている。他方、女性管理者の方面、人間関係への配慮はよく、部下に思いやりを持つので、やさしい気持で仕事ができるはず」と考えている。また、独身より既婚の女性管理者が下で働く方が働きやすいと考える。

4. 考察

以上の結果から、男女間にある態度の差異の解消が今後に残された課題であると考えられる。

中年で挫折した職業婦人のCase Study

○ 橋本 泰子 (横浜市病院心理室)

吉 沢 勇 (横浜市大病院小児精神神経科)

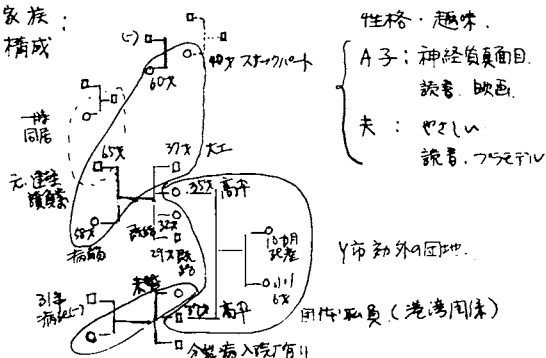
Case: A子(S18-6-1生35才) 会社員

初診: S53-9-12 当院精神神経科を受診する。

主訴: 5月に担任より子ども(小1)の減点指摘され、

これまで家庭と仕事を両立させていることに自信を持っていたのでショックを受ける。

お勤困難、不眠、希死願望が強い。



生育: 静岡県で4人同胞の長女として出生、祖母と①親が農業をし、父親は横浜で建築請負業を営んでいた。長女への厳格に躰られ、夜驚があつて祈禱のように連れて行かれ小学の低学年は病弱であつた。高学年からは男の子のリーダーになり活発になる。中3で受験準備もあり、母親はA子と父親と一緒に生活をさせればせ遣業も減るためといった母親の見惑で横浜に転校をする。高1、父親が突然付き合っていた女性と同棲を始めたためアパートでの独り暮らしをする。高3、父親の負債の整理のため田舎の財産を処分し母親と弟が来て生活を伴にする。兄と妹は住込みで直所で働いていた。A子は進学を断念し就職をして生計を維持する。入社後組合運動に熱中して知り合った男性と24才で結婚、オチ子は死産、その後母親が悪く喘息発作が春社にある。オチ子は用心をして両親と同居し養育をしてもらう。3才から団地に引越せ最寄りの保育園に入れ理想的に育ててきた。会社では仕事を任せられ、働くことが生きがいだった。女性用放りたため管理職を目標に試験を受ければ昇進するものと希望を持っていた。女性には主事補止まりで給料も男性と異なることを知り落ち込み。

現病: 静岡県で4人同胞の長女として出生、祖母と①親が農業をし、父親は横浜で建築請負業を営んでいた。長女への厳格に躰られ、夜驚があつて祈禱のように連れて行かれ小学の低学年は病弱であつた。高学年からは男の子のリーダーになり活発になる。中3で受験準備もあり、母親はA子と父親と一緒に生活をさせればせ遣業も減るためといった母親の見惑で横浜に転校をする。高1、父親が突然付き合っていた女性と同棲を始めたためアパートでの独り暮らしをする。高3、父親の負債の整理のため田舎の財産を処分し母親と弟が来て生活を伴にする。兄と妹は住込みで直所で働いていた。A子は進学を断念し就職をして生計を維持する。入社後組合運動に熱中して知り合った男性と24才で結婚、オチ子は死産、その後母親が悪く喘息発作が春社にある。オチ子は用心をして両親と同居し養育をしてもらう。3才から団地に引越せ最寄りの保育園に入れ理想的に育ててきた。会社では仕事を任せられ、働くことが生きがいだった。女性用放りたため管理職を目標に試験を受ければ昇進するものと希望を持っていた。女性には主事補止まりで給料も男性と異なることを知り落ち込み。

3才から団地に引越せ最寄りの保育園に入れ理想的に育ててきた。会社では仕事を任せられ、働くことが生きがいだった。女性用放りたため管理職を目標に試験を受ければ昇進するものと希望を持っていた。女性には主事補止まりで給料も男性と異なることを知り落ち込み。

そこに子どもの問題が重なり症状が発症したため受診。

A子の印象: スーツを着て大柄な知的キャリアウーマンtype.

治療経過: I期 S53年9月~55年3月迄(1年6か月)

精神科医(男性)によるカウンセリングと抗うつ剤等の薬物治療。11月から約2か月休職、復帰するも「お茶飲みと文字を書く時に手が震える」と象徴的な症状が出現する。12月に退職をし家庭に入り治療に取り組みようと決意を(したところ、1月に医師から転勤を知らされ症状が場変し、3月に退職をする。

II期. S55年4月~59年4月迄(4年)筆者が担当する。両親に対する敵意と夫が頼りなく依存要求が満足されないことへの不満を表明する。女性に対する否定的感情の言語化をし、訓練校のホームヘルパー科で主婦業の勉強をし児童保育のアルバイトをする。少し安定をし活動的になるが、保母との対人関係がしっくりいかず止める。老人ホーム等の仕事を勧められ自信がないと述べる。その後読書会に参加し、高校時代の友人の浮気をまのあたりに見て、かつての子どもと医師に対し転移感情が両極し、担任と数回面談を実施する。

母親が胃の手術のため入院した時には、母親との立場が逆転して東り越えられたが、しかし、父親が入院すると、それと契機に「病気でいる方が楽だ」と赤病逃避をする。子どもは中学に進学し、夫とも仲が良く自分だけ孤立をし家においても淋しいからと再就職をしたがいかに今に自信がなく職場復帰ができない。まとめ: 一応、家庭と仕事を両立させていることに自信を持っていたキャリアウーマンが、いわゆる「人生の午縁」で挫折をしそこから立ち直れないでいる。A子の場合確かに「子育ての失敗」と「女性であるために管理職に昇進できない」ことが発症の引き金になっている。

しかし、実際には育児は両親と保育園が肩代りをしてもらい母性に欠けている。また職場でも頑張っている割には人から認められていない。このような現実を直視せず、両親との問題も解決されておらず、当然路替に耐える不満もあり、更に女性性への同一化も育っていないために病理は深いものと考察される。

ところで、女性の職場不適応者の中には、自己の解決されていない心理的葛藤のために drop out を中年でして行くCaseが存在するのではないかと推察される。

ところで、女性の職場不適応者の中には、自己の解決されていない心理的葛藤のために drop out を中年でして行くCaseが存在するのではないかと推察される。

ところで、女性の職場不適応者の中には、自己の解決されていない心理的葛藤のために drop out を中年でして行くCaseが存在するのではないかと推察される。

高度情報化社会と働く女性

○墨岡 孝 成田 猛

(成城墨岡クリニック)

高度情報化社会の進展にともなって、働く女性の意識や、環境はここ1～2年の間に急激に変化しています。

なかでも、企業におけるOA化の進行は、かつてない労働内容の変化をもたらし、心理的ストレスを増大させています。

すなわち、それは企業における事務部門（間接部門）における生産性の向上、効率化という現象を促進し、女性の仕事の量の増大や、作業管理の強化という方向で認められるのです。

また、VDT労働も増加し、肉体的、精神的に新しい問題を持たらせてきています。

現在、第三次産業の第二次産業化ということが指摘されつつあります。

働く女性の精神的な問題も、このような視点から分析されなければなりません。

私達は、最近の、VDT労働に関する意識心理調査から次のような点を明らかにしたいと思います。

第一に、VDTなどOA器械そのものによる直接的なストレス要因の分析。

第二に、事務部門の管理化によるストレス増加の要因。

第三に、これらの総合的なあり方としてのシステム労働の持つ意味についての分析です。

企業（職場）のOA化とは、まず第一に、女性労働者をワープロやコンピュータなどの機械の操作によって、一人で何十人、何百人分の仕事を実行させることにはなりません。すなわち、その結果として企業はごく自然に女性を経済の法則にのっとって管理し、雇用していくようになったのです。

若い女性労働者は、従来とはまったく異なった環境の中で仕事をするのを余儀なくされたのです。

OA化やVDTによって起こってくる精神的・心理的な不調や障害について述べていくつもりですが、このような現象はやはり合理化・管理化の進んだ社会からの自己防衛の姿といってもよいと思われます。

これまででは、企業内で扱われる心の問題というのは、そのほとんどが精神分裂病やそううつ病といった内因性の精神病の問題でした。しかし、最近の労働者の相

談や訴えはもっと純粋な心の悩みに属するものになってしまっています。そして、その中でも最も頻度の高いものが、OA化がもたらしている精神障害の問題なのです。

しかも、OA化の中の労働者が、仕事の過程でさまざまなOA機器とどのような接し方をしているかによって、持ち上がってくる症状もさまざまです。

VDTの問題、コンピュータ端末操作にかかわるもの、コンピュータのソフト部門に関係あるものなど多様な出現を認めます。

たとえば、VDTに接するとき、それはそれで大変に重要な心理的なストレスが加わるわけですが、それだけに限らず、その職場のおかれているOA化の度合いや仕事の内容によっても特徴的な症状が現われてくるのです。

症状としては、身体症状（頭痛やめまいなど）を主に訴えてくる心身症の段階から、ストレス回避型の特異な抑うつ状態や、不安やうつ傾向に陥る場合、対人恐怖の進行や強迫傾向の増大などが認められるのです。

これらの症状はOA化による職場環境の変化と、仕事量の増大、機械操作からの直接変化などが組み合わされて出現するものです。

O A 化 と 働 く 女 性

〇 函 角 智 成 田 猛 墨 岡 孝 (成 城 墨 岡 ク リ ニ ッ ク)

はじめに

企業のホワイトカラーの率は、ここ10数年の間に、25%から45%に増え、企業の事務部門の占める割合は次第に大きくなりつつある。その功は、企業に事務処理の合理化のためのOffice Automation (OA)の導入を迫り、今日では一般事務員の65%が広い意味で情報処理の作業にたずさわっているといわれる。

この社会的・技術革新の変化は、特殊な労働環境を作り出し、深く静かに個人に様々な影響を与え、人間のあり様にまでががわりをもち、労働者一特にOA化によりOffice Workを余儀なくされている女性(OL)の健康ををしばみ、社会問題化しつつある。

目的

精神的・身体的不調を訴える当クリニックを来訪した女性の職場環境、意識構造、症状を分析し、OA化の及ぼす影響を明らかにする。

対象

女性の例(OA従事者35例-A群 非OA従事者25例-B群 平均年齢各々 22歳 24歳)。

方法

1 PSE(現症状診票表)により、症状の評定を行った。2 Psychological Test(RT SCT CMI)を実施した。3 以下の調査表の記載も依頼した。

アンケートの要旨

環 境	職場内	業務関係(業種・満足度) 対人関係(トラブルの有無) その他(欠勤の有無)
	職場外	余暇時間(週レポ・内容) 対人関係 家庭内人間関係
	その他の条件	身体の疲労度 転居・転職 近親者の死

結果

1 A群は、孤立感、絶望感、生きがいの喪失 B群は人間関係へトラブル・業務上の不満を訴えた。

2 AB群とも仕事の満足感、達成感はないが、前者では、仕事を緊張を要する割には単調であると訴える者が多かった。

3 A群は、うつ状態、無気力状態などの精神症状、

偏頭痛、拒食、過呼吸症候群などの精神身体症状を、B群は、不安、緊張、抑うつ、不眠などの精神症状を訴える傾向がみられた。

4 B群は、Stress Coping Behavior(例 レジャー相談)により問題を解消できる傾向があるのに対し、A群では、それがうまく機能せず怠業、出社拒否するケースを多くみられた。

5 大企業より、中小企業にA群が多くみられた。

考察

Technological Innovationは時代の否応のない要請であるが、必ずしも労働者の必要から生じたものではない。人間の労働能力、個性を全く無視して進む作業個々人の分断され孤立化した状態での作業、それは必然的に表面的で希薄な人間関係を形成し、やがて、個人への人格を養成する機会さえ人間からうばい、しましう。個人主義的傾向は強化し、Communicationの成立しう危うくする。

人間から機械への移行は、労働そのものを受動的にさせ労働者は生産管理体系の中に組み込まれ、終日、非個人的な時間表の中で、OAにむかぬざるをえなくなる。機械の前の幽霊とい、まよいだらう。

OAに代表される労働密度の増加は現在の職場は精神的な消耗と身体之余剰と云う二律背反した「場」を生み出しつつある。それは二次的に、仕事の曖昧さの喪失、全生産体系での自己の労働の位置づけの希薄化を生じさせる。労働者はTechno Stress 下で働いているのである。OA化のメリット・デメリットは現在つまびらかではない。しかし、変貌しつつある現状に個人は適応しなくてはならぬ。

この様な事態で生じくる精神・身体的不調、しかもStress Coping Behaviorでも解消しきれない不適応状態、現実が生じている問題を直視することなしには解決しないといえよう。

まとめ

OA化は、労働負荷以上にストレス状況を生み出し様々な歪みを生じてきている。企業は、このような摩擦を正面からとらえ、技術革新と労働との適切な結びつけ方を模索する必要がある。

働く女性の消費者行動

——時間節約に関して——

矢内 文

(豊細聖大学大学院経営学研究科)

1. 研究の目的

本研究の目的は、働く女性の消費者行動を「時間節約」の側面から考察することである。

2. 研究の方法

日常生活における「時間節約」志向および「手づくり」志向の行動に関する項目を設定し、5点尺度で反応してもらった。

反応者は、働くミス(20代、30代のひとり暮らしの女性のみ)が51名、働く主婦(20代、30代、40代)が78名、専業主婦(20代、30代、40代)が69名で計198名であった。

調査期間は、1984年6月から7月である。

3. 結果

働くミスが、4.00以上を示した項目はなかった。働く主婦が、4.00以上を示したのは、項目2のみであり、専業主婦が、4.00以上を示したのは、項目(30)、2の2つの項目であった。

また、働くミスが、3.50以上から4.00未満を示したのは、項目43、12、24、2の4つの項目であった。働く主婦では、17、(38)、(41)、12、6の5つの項目であり、専業主婦では、17、(41)、26、6、(14)、3の6つの項目であった。

	項 目	働くミス	働く主婦	専業主婦
29	天ぷら油処理に凝固剤利用	1.45	1.62	1.59
36	翌朝夕食の後片付け	1.67	1.46	1.59
12	休日にまとめて掃除	3.96	3.87	1.86
13	紙タオルの利用	1.88	1.82	1.77
23	換気扇にパックの洗濯布	1.31	1.30	1.72
18	洗濯簡単な素材の衣服購入	3.12	3.11	3.12
21	1-2日の衣服の購入	2.63	2.79	2.81
24	セーターをフリージング	3.63	3.33	2.78
27	フリースをフリージング	2.88	2.58	2.46
30	休日にまとめて洗濯	3.31	2.50	1.43
33	コインランドリーの利用	1.75	1.42	1.35
20	リフォーム店の利用	1.16	1.67	2.22
26	布団締めのうけえ依頼	1.96	3.03	3.68
32	着たばかりの洋服を廃棄	2.63	2.83	2.51
39	着たばかりの洋服の交換	2.39	2.97	3.39
(42)	枕カバー、座布団カバーを縫う	2.08	2.17	2.71
(45)	セーターなどを縫む	2.14	2.25	2.49
6	食料品のまとめ買い	3.22	3.55	3.68
7	深夜営業店の利用	2.67	2.17	1.74
8	カタログショッピング	1.63	1.95	1.86
9	訪問販売の利用	1.27	1.50	1.75
11	クレジットカード利用	2.86	2.26	2.06
(14)	夕食材料は4日分の購入	3.18	3.45	3.87
2	手紙より電話で用件をすませる	3.98	4.34	4.36
3	公共料金以外の支払いも自動振替	3.39	3.03	3.93
4	引越サービスの利用	2.08	1.92	2.26
5	家政婦さんを頼む	1.06	1.11	1.12

(下線はグループ間に有意差のあったことを示す。)

4. 考 察

(1)働くミス、働く主婦が共通して示している「時間節約」志向の行動は、「休日にまとめて掃除」(項目12)、「手紙より電話で用件をすませる」(項目2)のみであった。

(2)働く主婦と専業主婦では、「手紙より電話で用件をすませる」(項目2)、「刺身の購入」(項目17)、「食料品のまとめ買い」(項目6)が共通していた。

(3)「手づくり」志向については、働く主婦と専業主婦は共通して項目(30)、(41)を示している。

(4)グループ間の差異からみると、食行動の場合、働く主婦と専業主婦の間に類似性が認められる。働くミスの方が、若干「時間節約」傾向を示している。

(5)衣生活、住生活については、専業主婦と比較して働くミス、働く主婦ともに、あまり手間をかけていないように思われた。

	項 目	働くミス	働く主婦	専業主婦
1	おかずの冷凍貯蔵	2.02	2.71	2.99
10	休日の食事に手間をかける	3.41	3.36	2.99
15	ファミリーレストランの利用	2.35	2.26	2.55
17	刺身の購入	2.98	3.62	3.70
19	炊飯にタイマー利用	2.18	2.62	2.70
22	お弁当の購入	1.88	1.66	1.59
25	即席食品の利用	2.35	1.91	2.16
28	暖めてできる食品の利用	2.43	2.09	2.30
31	下ごしらえ済み惣菜の利用	2.33	2.08	2.15
34	店屋ものの利用	1.82	2.12	2.42
35	本格的レストランの利用	2.20	2.24	2.29
37	缶詰の利用	2.61	2.82	2.87
40	調理済み惣菜の利用	2.76	2.28	2.46
43	サラダドレッシングの購入	3.88	3.46	3.39
(16)	ルーローを作る	1.90	2.25	2.52
(38)	お弁当の手づくり	2.94	3.92	4.17
(41)	パンを焼く	2.96	3.53	3.52
(44)	パンを作る	1.33	1.38	1.86

働く主婦の贈答行動に関する調査研究

—— 専業主婦との比較を中心として ——

井 下 理
(国 際 商 科 大 学)

I 研究の目的

既婚女性の中に占める「働く主婦」の割合が半数を越え、増加する傾向にあるが、働く主婦の贈答行動が専業主婦のそれと異なる相異を示すかを明らかにすることを通して、これからの日本社会における人間関係を「物のやりとりと贈答行動」という観点から推察するための基礎資料を得ることにある。

II 研究の方法

1 調査対象者の設定

20～49歳の既婚女性を今回の調査対象としたのは、50歳以上の主婦は、そのライフサイクル・ステージの違いが、20～40代の主婦と比較して、日常生活における生活課題及び生活行動の違いが大きいと考えたため今回の調査においては、50代以上は対象外とした。

2 被調査者の抽出

埼玉県川越市に在住の主婦を対象として、住民基本台帳より二段無作為等間隔抽出法により、対象サンプルを決定した。抽出指令数 400

3 調査実施概要

調査実施期日は、昭和58年11月15日～25日で、調査方法は、対象者を調査員が個別訪問して、直接依頼し、後日再度訪問して回収する留置法を採用した。有効回収率数は、362票（有効回収率 90.5%）であった。調査票は、自記式簡問紙調査票である。

4 調査項目

A: 個人属性変数

年齢、学歴、子供の数、本人職業、主人の職業、結婚年数、月平均こずかい他

B: 贈答行動

贈与頻度、受贈行動、贈答品の購入行動、店舗選択他

C: 贈答意識

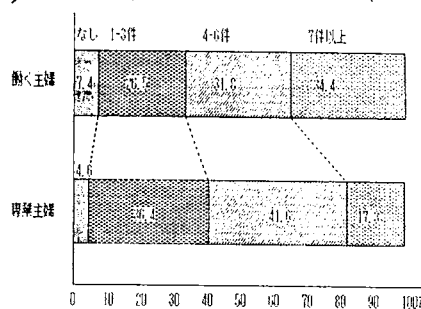
贈与計画、受贈予定、習慣的贈答への評価
その他

5 仮説

贈答行動・贈答意識は、働く主婦と専業主婦とでは違いが見られるであろう。その違いとは、働く主婦のほうが、専業主婦よりも「活発に贈答行動をおこない、意識の面でも、より積極的・肯定的な傾向を示す」であろう。

III 結果

- 1) 父の日や母の日などのお祝いは、働く主婦の方が、よく贈り物をする。
- 2) 働く主婦のほうが、受贈傾向が強い。返礼として予想されたより高価な贈り物でもそれを受理する場合の多様さは働く主婦の方が多い。
- 3) 歳暮の習慣に対して、全体的には廃止支持派が多いが、継続賛成派は専業主婦より働く主婦の方が多い。
- 4) 働く主婦は、歳暮を贈る相手によって、「価格」及び「品物の銘柄セメーカ」などを変えている人の割合が、専業主婦よりも多い。
- 5) 歳暮品購入先としては、都心のデパートや大型スーパーで買う人の割合は、働く主婦のほうが多い。一方、もらうてうれしい「歳暮品の購入先」として都心のデパートをあげる割合は、働く主婦より専業主婦のほうが高い。
- 6) 店舗選択理由として「包装の良さ、有名である、安っぽく見られない」などをあげる人の割合は、専業主婦のほうが働く主婦より多い。
- 7) 歳暮の受贈予想件数は、働く主婦の方が多い(7割)。



IV 結論

働く主婦のほうが、贈答意識も高く、贈答行動も積極的に盛

んで、また「ていさい」よりも実質性志向が強い。今後も習慣的贈答は維持され、機会・頻度は増加する。

その他の贈答

自動車走行時の速度感に関する研究

○ 太 田 博 雄
小 松 紘

(東北工業大学)
(東北福祉大学)

シミュレーションによる実験が実走行場面をどの程度再現しているか、との疑問はたえず付きまとう。本研究は、速度感に関して実走行場面と録画ビデオによる画像観察との対応をみながら、両者の異同を検討し、更には、画像観察による実験的研究の限界と可能性を検討することを目的とする。具体的には、観察者による客観的速度の判断、評定尺度による絶対判断、そして、速度感の尺度化をはかりながら、両者の異同を検討する。実験は、実走行およびビデオ録画テープを使用し、第1次から第3次にわたりおこなわれた。

〔第1実験〕目的：S.S.Stevens のマグニチュード推定法により、速度感の尺度化をはかる。

方法：二種類の速度により定速走行を行ない、最初の速度を基準の速度 (S_s)、第2の速度を比較の速度 (S_c) とする。観察者は実験者の合図により、各々の速度について3, 4秒間観察を行ない、 S_s の速度感を“10”とした場合、 S_c の速度感がどのくらいに感じられるかを数で報告するよう求められる。 S_s は80km/h、 S_c は40km/h, 60km/h, 80km/h, 100km/h, 120km/h の5種類の速度のいずれかである。各 S_s - S_c について7回(計35回)の観察が行なわれた。

〔第2実験〕目的：客観的速度の判断、および7段階評定尺度により速度感の判断をもとめる。

法：30km/h, 40km/h, 50km/h, 80km/h, 70km/h, 80km/h の6種類の速度について客観的速度の判断、および7段階評定尺度(1.非常に遅い~7.非常に速い)により主観的速度の評定を行なう。ゼロ発進後、課題速度に達したら約10秒間定速走行を行ない、その間に判断を行なう。実験の順序としては、はじめに客観的速度の判断を各速度について5回ずつ行ない、次に7段階による評定を各速度について3回ずつ行なった。

〔第3実験〕目的：録画ビデオ観察により速度感の評定をし、実走行における速度感との差異を検討する。

方法：実験車の助手席よりビデオ録画したテープを編集し、実走行実験とほぼ同様の観察条件で行なわれた観察は、ソニー22インチのカラーテレビを使用し、観察距離は実走行時の視角にほぼ一致させた。

結果と考察

(1) 客観的走行速度と主観的速さとの間にはベキ関数の成立が認められた。ベキ指数値を条件ごとに比較す

ると、昼間運転条件が夜間運転条件に比べてやや高い値を示す傾向にある(昼間運転; $Mdn=1.68, R=.79$ 、夜間運転; $Mdn=1.63, R=.93$)。また、画像観察では実走行に比べかなり低い値が示された(昼間走行ビデオ; $Mdn=1.40, R=0.68$ 、夜間走行ビデオ; $Mdn=1.40, R=0.79$)。このことは速度変化に対する感受性が夜間走行よりも昼間走行が、録画ビデオ観察よりは実走行がすぐれていることを意味するものと思われる。

(2) 客観的速度の判断についてみると、実走行では30, 50, 60km/hについては過小評価の方向において誤差が大きく、70km/h, 80km/h と速度が増すに従って誤差が小さくなる傾向を示す。他方、画像観察に関しては速度の増加に伴い過小評価の方向において単調増加の傾向を示している。(なお、実走行についての傾向はL. Evans(1970)の実験結果とも一致している)。また、昼間走行と夜間走行と比較してみると、実走行では昼間走行の方がより一層の過小評価を示すが、画像観察では、逆に夜間の方が過小評価のつよい傾向にあることが示された。

(3) カテゴリー尺度による速度感の評定結果をみると「速いとも遅いともいえない」と言う、いわば速度感のゼロ点は、実走行夜間運転・実走行昼間運転・昼間走行画像・夜間走行画像の順に速い速度の方向にずれておりその差はそれぞれ5km/h程度であった。また、30km/hでは実走行でも画像観察でも、カテゴリー値としては「2」(かなりおそい)の付近にかたまっているが、速度の増大に伴い、次第に両観察条件の間で評定値に差がでてくる。80km/hでは実走行では、6.5付近、画像観察では5.5付近で、ほぼ1.0のひらきとなった。

以上のように実走行と画像観察では速度感の評定のうえでいくつかの相違点がみいだされた。その原因としては、第1に、速度感の重要な手掛りである運動感覚や平衡感覚の手掛りが画像観察では欠如すること、第2に、ビデオモニター使用のため視野が制限されていること、第3に、シミュレーションのもつ基本的な限界性、すなわち「現実場面ではない」ことによることも見逃せない。

付記：本研究は1983年度、国際交通安全学会からの研究助成金によっておこなわれた。

通勤途上の車運転の ヒヤリ、ハット分析

谷 本 富 男

東京 安全衛生 教育センター

最近、企業内において産業災害は管理活動の充実に
より減少したにもかかわらず、通勤途上の車による交
通事故が減少しないまま、いざいざの事業所でもから
れる現象である

この調査では通勤途上において車運転中、“ヒヤリ、
ハット”した経験と、特に事故の多い交差点にしばり
N社工場車通勤者1,510人と対象に調べたもの
のである。

調査の内容は車運転に必要な心身機能と、場面把握
思考の統合、作業行動のミフにわけ、ヒヤリハットが
いづれの機能で発生したかを、定められた様式に従い
自己診断してもらった。

時期は昭和48年10月であり、“最近、ヒヤリ、ハッ
トした体験”について1人1件報告してもらったもので
ある。

調査の整理

調査対象 1510人 男70% 女30%

年 令 30才以下 ... 30.6 %
31才~40 ... 36.8 %
41才以上 ... 32.6 %

信号の有無 有 ... 37.2 %
無 ... 62.4 %

交差点で 直進 50.2 %
どうした時 スタート 5.4 %
右折 25.9 %
左折 13.9 %

自己診断したところ

場面把握 同11 見落し理由 同12 見落したの
1196人 1214人

判 断 同13 同14 同15
その時の気分 からたの言子 判断の割合
857人 521人 840人

操 作 同16 操作の問題 同17 間違えたもの
258人 272人

同18 その結果 “どんな事故又はヒヤリか”
1425人

同11

見落し理由 (1196人)

薄暗い 13.7 %
道路複雑 9.7 %
同乗者と話し 7.4 %
よそに気をとられ 25.3 %
死角に入つて 23.7 %
はじめの道 7.0 %

同13 その時の気分は

うずうずしていた 47 %
他のことと考へていた 29.8 %
イライラしていた 5.8 %
焦つていた 36.9 %
ボヤケていた 18.4 %

同15

判断のしかたは (840人)

強引に 13.8 %
大丈夫と思ひ 38.6 %
なんとなく 31.0 %
迷う 16.1 %

同16

運動操作で何が問題か 258人

車体のちがひによる不慣れ 53.9 %
初心者のため 32.7 %
点検不備のため 9.7 %

同18

その結果どんな事故、又はヒヤリ、ハットと経験
したか

前車に追突 7.9 %
後車に接触 3.2 %
自転車、オートバイと接触 11.3 %
人をはねやうになった (はねた) 8.0 %
自分で転倒 (自転車、オートバイ) 3.9 %
溝にはまる (はまりやうになった) 5.4 %
電柱、家にはづれる (はづれやうになった) 2.5 %
交差点からの車と接触又は衝突 (しやうはな) 57.8 %

むしろ “交通ヒヤリ、は”見落し、によるものが多く、その時の気分
体調に起因し、判断の甘さにはなる傾向にある。男女
の相異は“見落し”女はよそが多く、男は死角に入るが多く
“判断”では男の強引に対し女は大丈夫のちがひが立つ。

同12

見落したの (1214人)

対向車 14.2 %
前走車 9.7 %
歩行者自転車 17.5 %
信号 9.1 %
交差点走行車 20.7 %
並走行車 5.5 %
交通標識 4.6 %
後走車 6.8 %
倒溝、電柱 5.6 %

同14

からたの調子は (521人)

疲れていた 76.8 %
精力不足だった 22.3 %

同17

どこの操作と間違え
たか

ハンドル 30.5 %
エンジン 13.2 %
ブレーキ 33.1 %
アクセル 13.6 %
ウィンカ 9.6 %

出合頭事故時の第1当事者と第2当事者の エラー行動とその誘因

松 浦 常 夫
 (科 学 警 察 研 究 所)

目的 一時停止標識のかかった見通しの悪い十字交差点で、交差点接近速度を測定したところ、少数ではあるが少し減速しただけで交差点に進入する運転者が観察された（松浦1984）。本研究はこの日常の運転行動と比較する意味から、出合頭事故が発生した際に／当と2当の運転者はどのような不安全行動をとったか、またそのエラーを誘った道路環境や運転者の要因は何であったかを分析する。

方法 対象 東京西部の警察署管内で発生し交通事故調査原票に記載された一時停止標識のかかった十字交差点における出合頭事故／3／件。

調査項目 原票にコード化されている項目に加えて事故概況および現場見取図から抽出された項目43個。

分析方法 ／当と2当のそれぞれの側から、標準的な交差点接近行動ストラテジーのどの段階の誤りに起因して事故が起きたかにより行動を分類する。次いで分類されたエラー行動に特有なエラー誘因が調査項目の中にあるかどうかを調べるために、各項目のカテゴリの度数分布がエラー行動間で等しいかどうかを χ^2 検定し、有意差をもたらしたカテゴリを特定化するための残差分析を行う。

結果 1. ／当のエラー行動は以下の4つに分類された。
 E／（ $n=27$ ） 見通しの比較的良好い交差点の手前で一時停止したが、その後の左右確認が不十分。E2（ $n=26$ ） 見通

しの比較的良好い交差点にはいる前に交差道路の状況を確認しないまま一時停止せずに交差点に進入。E3（ $n=20$ ）見通しの悪い交差点の手前で一時停止したが、左右がよく見える所で左右確認のための一時停止を再び行うのを怠った。E4（ $n=58$ ）見通しの悪い交差点の手前で一時停止せず交差点進入。

4群の度数分布に有意な差が見られた項目は／0個。このうちいずれかのエラー行動の誘因と考えられる項目は7個あった（Table参照）。これをまとめて各エラー行動をおこしやすい運転者、環境像の理念型を示せば以下の通り。E1の行動は年齢が比較的高いベテランの乗用運転者がとりやすく、他の方向に注意を払ってもう一方を確認しないまま突進した際に、交差道路から原付や自動二輪が来る場合に発生しやすい。E4の行動は相交わる道路の幅員がほぼ等しい交差点で、年齢の若い二輪運転者が起こしやすい。E2とE3の行動はそれぞれE4とE1の行動と誘因の種類が似ているがほとんど有意ではなかった。

2. 2当のエラーは以下の4種。ER1（ $n=34$ ）見通しの比較的良好い交差点で／当を事前に発見せず。ER2（ $n=9$ ）見通しの比較的良好い交差点で／当を事前に発見したものの衝突。ER3（ $n=33$ ）見通しの悪い交差点を制限以上の速度で進入。ER4（ $n=39$ ）見通しの悪い交差点を制限速度未満で進入したものの衝突。

エラーの誘因は／当の場合ほど明解ではないが、ER1は交差道路よりずっと広い幅員の道路を走行中に起こりやすく、ER2は制限速度が高い道路上で発生しやすい。ER3は制限速度が低い道路上でミラーのある交差点を夜間や早朝に通過する場合にみられ、ER4は幅員差がほぼ同じ交差点で／当を事前に発見できない場合に生じやすい。

考察 同じ出合頭事故でもエラー行動が異なればそれに特有な誘因が存在することが明らかにされたが、調査項目の中に出合頭事故一般に共通した誘因があったとしても、エラー行動群の度数分布に差が見いだされない限り誘因として特定できない点が問題として残された。

Table 第／当事者のエラー行動の誘因

	車道幅員の差			年 齢		カーブミラー	
	1<2	1=2	1>2	~24	25~	なし	あり
E1	17**	9**	1	6*	21*	27*	0*
E2	10	15	1	8	18	25	1
E3	7	13	0	9	11	17	3
E4	13**	42*	3	30*	28*	46**	12**
Total	47	79	5	53	78	115	16

$\chi^2=14.3 \text{ } p<.05 \text{ } \chi^2=8.0 \text{ } p<.05 \text{ } \chi^2=9.5 \text{ } p<.05$

	運転経験年数				どこを見ていたか		
	無免許	~3	~10	10~	他方向	見ず	見てた
E1	0	3**	11*	13*	12*	15	0
E2	0	12	5	9	4	21	1
E3	1	10	3	6	12**	5**	3*
E4	5*	27	13	13	9**	47**	2
Total	6	52	32	41	37	88	6

$\chi^2=19.6 \text{ } p<.05 \text{ } \chi^2=28.9 \text{ } p<.001$

	車 種				2当の車種			
	原／	自2	貨物	乗用	原／	自2	貨物	乗用
E1	1**	0	8	18**	12**	8**	1	6**
E2	8	1	5	12	3	2	6	15
E3	2*	0	5	13*	7	5	1	7
E4	30**	6*	7	15**	11	3**	12	32
Total	41	7	25	58	33	18	20	60

$\chi^2=35.4 \text{ } p<.001 \text{ } \chi^2=29.8 \text{ } p<.001$

注）*、**は調整された残差が各々5％、／％水準で有意に大きい（正である）ことを示し、
 *、**は有意に小さい（負である）ことを示す。E／はエラー行動／の意味。

居眠り運転事故の実態分析

大塚 博 保
(科学警察研究所)

目的 過労等による自動車交通事故は、ここ数年全事故中の7%前後、高速道路上事故中4%前後を占めている。発生率は小さいが損害の大きいことは一般によく知られている。このような事故発生防止の手掛りを得るため過労等による居眠り運転事故発生状況の実態を明らかにする。

方法 昭和55～57年中に発生した過労等による居眠り事故のうち、入手できた121事例の事故記録の分析、昭和56年中全事故との比較により、(1)どういう事故が、(2)どういう道路で、(3)どういう時、状況で、(4)どういう運転者により発生したかの観点から特徴を抽出した。

結果 全事故との対比によって得られた居眠り事故の特徴は次の通りである。

1 事故類型、被害〔第1表〕居眠り事故は全事故に比べ、単独事故が多く、人対車事故は少ない。また、

第1表 事故の態様		居眠り	全事故
事故類型	車対車	61.1	75.5
	単独	33.1	5.7
	人対車	5.8	18.7
(車対車)	正面衝突	50.0	7.3
	追突	50.0	26.2
(単独)	分離帯、柵、駐車車両	52.5	21.8
	路外逸脱、転倒	5.0	37.4
(人対車)	背面通行中の人	57.1	6.6
	路側通行中の人	14.3	0.8
	路側停止中の人	28.6	92.6
被害の程度	死亡(高速道は5.9)	15.5	1.7
	1事故当り死傷者数(人)	2.4	1.3
	1事故当り死者数(人)	0.33	0.02

第2表 事故発生場所の状況		居眠り	全事故
道路の種類	国道	57.9	23.9
	都道府県道、主要地方道	18.2	28.5
	市町村道	10.7	45.9
	高速道路	13.2	0.7
道路の形状	単路部分	75.2	40.0
	交差点	4.1	47.2
	交差点付近	20.7	12.8
道路の線形	右カーブ	12.4	4.5
	左カーブ	13.2	5.1
直線		74.4	90.4

車対車事故は正面衝突、追突のみ。単独は路側障害物への衝突が多く、転倒は少ない。人対車では背面通行中の人への衝突が多く、路側停止中の人への衝突は少ない。居眠り事故は死亡となる事故が多く、高速道事故より高率で、また、1事故当り死者数も多い。

2 事故発生場所の状況〔第2表〕居眠り事故は格の高い道路(国道、高速道)で多く発生している。環境からの刺激の少ない道路で多発していることがわかる。単路部分で75%が発生し、交差点での発生は僅かで、交差点付近は多い。カーブ部分での発生が多い。

3 時刻、天候等〔第3表〕時刻は23～翌6時に多く、雨より晴の方が多い。5～8月、12～1月がやや多く、日曜日に多く、水曜日は少ない。

4 運転者の状況〔第4表〕20～24歳に多く、事故違反前歴ある者に多い。前夜睡眠時間の長さは、一連続睡眠をとっているとき6時間未満が82.1%、仮眠も含め分断睡眠の合計が8時間未満が84.6%を占めていた。同乗者ありはほぼ半数事例あったが、そのうち眠っていたものは73.6%であった。

要約 居眠り事故は、睡眠が十分でないとき、覚醒レベルを低下させる車内、道路環境が存在したとき、ハンドル、ブレーキ操作なしに路上対象物に衝突し、大きな損害を発生させているといえる。

第3表 時刻、天候等		居眠り	全事故
時刻	23～6時	45.6	8.6
	16～22時	13.1	36.7
天候	晴	68.8	60.0
	雨(霧雪を含む)	11.9	14.0
月	5～8月	42.0	35.8
	12～1月	19.8	15.1
曜日	日曜日	30.6	12.7
	水曜日	7.4	14.0

第4表 運転者の状況		居眠り	全事故
年齢	20～24歳	31.5	19.5
	事故等前歴	事故なし、違反なし	14.3
睡眠の状況	一連続睡眠 6時間未満	82.1%	
	分断睡眠 8時間未満	84.6	
同乗者	なし 47.1%		
	あり 52.9	内起きていた 26.4 眠っていた 73.6	

運転と攻撃性亢進：予備的考察

石坂和 ○大判恵一
(大阪教育大学)

「自動車を運転すると、人柄が変わる人がいる」とよく言われるが、運転は個人の心情や行動傾向にどのような影響を与えるのだろうか。本稿では、攻撃性亢進という観点からひとつの実験データを考察してみたい。運転時に攻撃傾向が増大するという仮説は、実は理論的には十分な根拠がある。たとえば、欲求不満、覚醒、プライド揺動、競争心、コミュニケーションの負担化、匿名性、武器効果、など従来から攻撃促進効果を持つとされてきた条件の多くは運転時の経験の中に見出すことができる。しかし、その仮説を直接検証した研究はこれまでなく、たように思われる。本研究は、それを念頭に置いた予備的実験である。

＜方法＞

普通免許を有し1年以上の運転歴を持つ男子大学生14名を被験者(以下、Sと略)に、彼らに実際に自動車の運転をさせていくつもの心理学的測定を行なう。コースは大阪市内の主要幹線道路の一部約5kmで、走行中決められた5地点での停車時と走行前後の合計7回の測定を行なう。測定のオーは12個の感情評定尺度で、各地点での感情をSが自己評定した。オーは運転時の怒りの経験で、その都度Sが報告したものを停車時に実験者が聴取して、怒りの原因と反応を明らかにした。また、実験中Sの発声を録音した。さらに実際には各地点でSの血圧と脈拍も測定したが、後述の信頼性検証が主目的なのでここでは省いた。

＜結果＞

感情評定は12個の感情の各々について、その強さを7段階で、7回Sが評定しなわけであるが、その中で本稿では7回の測定間に有意差が見られた8尺度についてのみ結果を述べる。そのうち、不安、緊張、自信のなさ、困惑、恐怖の5尺度はいずれも軽度の差はあれ、前半に高く後半に減る傾向を示した。典型例として不安の変化($F(6, 78) = 15.48, p < .01$)を図1に示す。反対に、後半高まったのは楽しさであった($F(6, 78) = 2.32, p < .05$)。また、怒りは図1に示されているように、走行前は値の低いところから走り始めて高まり、走行が終了と再び低下した($F(6, 78) = 2.27, p < .05$)。これと対照的に、走行中低くなったのは疲労感であった($F(6, 78) = 3.28, p < .01$)。

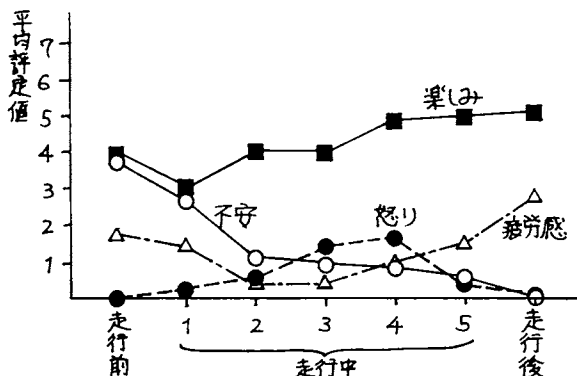


図1 走行前・中・後のSの感情の変化

運転時の怒りの経験は合計45回(S1人平均3.2回)報告された。Sの怒りを誘った排気声と怒りの理由を下の表に示す。Sの怒りを誘った出来事はすべて

表1 排気声

違法駐車	8
割り込み	12
道路妨害	10
他車の不規則走行	8
クラクション	5
渋滞	2

他車の行動で、Sの走行の妨害となつたり、危険を感じさせるものであった。怒りの表現とみられる反応は合計18回観察された。それは、追いつめ8回、クラクション7回、接近3回であった。これら以外にも怒りの言語表出が数多く見られた。

＜考察＞

表2 怒りの理由

邪悪	14
危険	13
マナー不良	9
その他	9

不安などの感情の減少は実験事態への慣れのためであらう。楽しみの増加はそれに関与しているかもしれないが、同時に、自動車の運転には快ともならず苦悶が含まれているかもしれない。怒りが走行中に一時

高まり、たのは怒りの経験のせいであらう。5kmの走行で平均3回の怒りの経験は決して少ないとは言えない。時にはその怒りがSの運転に影響したと思われるが、路上を走る運転者は相互に相手の怒りと攻撃性と排気声合せてどのような印象を受けた。

ろうあ者も車運転適性がある

ろうあ児相談所
金田文

ろうあ者の全体的向上及び通勤用に車運転の必要があつてきた。道路交通法八八条改正は5'47、5月であつた。この発表はその実験で発表表である、行政事務のため保留した。被験者は当時、東京都立ろう学校、立川、後、石神井三校の高等部生徒男女274名。最近の検査判定と大差ないのでこの数値を生かすろうあ者の能力上と考える。

文けんは543、WHO、新指針に基き書きに実験と計画した。WHOは、車運転はもはや人本である。普通免許に限る、と記している。

道路交通法、八八条(免許の各格事由)
第ハ八条(1)次の各号のいずれかに該当する者に対しては、免許を与えない。

1. 大型免許、普通免許、特殊免許にあつては18才に満たない者。
2. 精神病者、精落者、てんかん病者、目が見えない者、耳が聞こえない者又は口がきけない者。
3. 以下有る者。

ハ八条、2の条文を仮設にたて実験をすめた。

1. 場所、ろう学校々庭前の路上及び教室。
2. 時期、546、2月-47、3月。
3. 方法、10人及び集団検査、伝達は口語、手語、空書、合図、連絡、ストップウォッチ、太鼓。
4. 検査者、金田文、午位、数人(ろう学校の先生)

1. 生理的機能検査。
仮設① 耳が聞こえない者は10米離れて90ホンの音に反応しないか。

使用機種、騒音計、リオン、LR-01D。
10人検査、成績は表1。

仮設② 耳が聞こえない者は平衡機能も障害を受けているか。

身体のアラツキを調べた。成績は表2。

表1、耳が聞こえない(目隠して直線上歩く)86.8%
2口、右左50cm/m斜めに歩いた。8.4%

ハ、身体がアラツキ困難。であり。4.8%
又生児も発見、聴力反応も平衡感覚も同様矣。

II 心理的能力検査。

仮設① 耳が聞こえない者又は口がきけない者は精神病者、精落者、てんかんと同列か。

内田クレリン精神検査使用、集団で1回おいて

2回やつた、成績はNO.1、余白少なく書いた。
仮設② 耳が聞こえない者又は口がきけない者は知能も低い。

内田式集団知能検査使用。成績は表7。

表1、内田検査、定型曲線のもの、56.6%。
ヒ、口知能、平均知以上、52.4%。

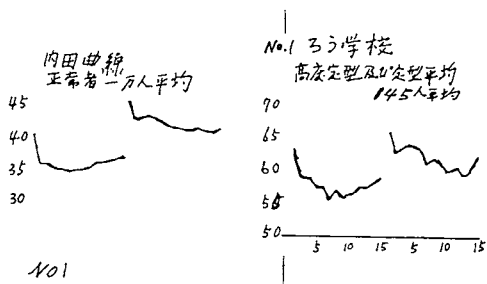
図8、田中寛、先生都市曲線と比較。

III 言語検査。

仮設① 耳が聞こえないもの又は口がきけないものは話がでずるか。

生れつづのろうあ者はことはともたない、手話が言語で精神活動は手話と文字表現で社会参加している。年ばい者は漢文体で書く、ろう教育は音声言語訓練のことは学習を指導、車運転免許取得の学力は向上した、当り前になりたい心理が努力目標で書きことは「正確に意思を通かせる、558、発表運転免許証取得者、13,968人という。

以上の結果から道交法は改正された、しかし運転規則違反事故が多い。第84回会、参議院質問では、普通人、3.8%。ろうあ者4.2%の事故外である。これはろうあ者の特異性格の表れで甘やかされている、17氏団体の一例に西しく隣人相互に切磋たたくましていかなばならない。



アラツキ 検査	1	2	3	4	5	0	計	%
裸耳	55	17	10	6			86	39.8
A10装	74	13	11				98	45.4
皮巻缶						32	32	14.8
計	184 ~ 85.2%						216	

職業運転者の安全意識について

自動車事故対策センター 伊藤 典 幸

目的: 本研究は職業運転者に対する安全教育の基礎資料を得ることを目的として行なった。

方法: 自動車事故対策センターの職業運転者用適性診断ペーパーテストの質問項目の中の安全意識に関するもの及びそれに類する項目について分析を行なった。分析の対象とした質問項目は以下のとおりである。

1. 営業車の場合、少し車間距離が短い運転をしてもやむをえない場合が多い
2. 乗客または荷主にせかされたら、速度をあげざるえない
3. 自分だけ安全運転をしても、事故をなくすことはできない
4. 事故を防止するにはドライバーを規則や法律で強く取りしめなければダメだ
5. 交通規則を守らない歩行者は、車にはねられてもしかたがない
6. 違反でつかまるのは、運が悪いと思う
7. 速度取りしまり(ネズミとり)はヒキョーだ

調査対象: 自動車事故対策センターに来所した職業運転者1412名(乗合バス(以下乗合)218名、貸切バス(以下貸切)55名、ハイヤー・タクシー(以下ハイタク)569名、路線トラック(以下路線)30名、地場トラック(以下地場)136名)を対象とした。調査対象の年齢は、20代123名、30代520名、40代603名、50代171名、60代2名となっている。また、その他に自家用運転者50名を対象とした。

結果: 「1. 営業車の場合～」の質問には、職業運転者の32.4%が「はい」と答えている。特にハイタクの運転者においては、38.7%が「はい」と回答してる。それに比べ貸切、路線、地場ではそれぞれ27.3、22.9、26.7%と「はい」と答えている者の比率が低い。また、50代において他の年齢層に比べ「はい」の回答が多くなっている。

「2. 乗客(荷主)にせかされたら～」では、職業運転者の42.1%が「はい」と答えている。業態別では、「はい」が乗合では24.8%であるのに対し、貸切、ハイタク、路線ではそれぞれ、49.1、48.0、51.8%とその回答率が高くなっている。また、年齢については、20代が54.5%と他と比べその比率が高くなっている。(30代、40代、50代はそれぞれ42.7、40.1、38.4%)

「3. 自分だけ安全運転しても～」では、職業運転者の71.6%が「はい」と答えている。(自家用:78.0%)この質

問では、業態間に回答の差はみられない。しかしながら年齢層についてみると、20代では、80.0%が「はい」と答えているのに対し、50代では67.7%となっており、年齢層が上がるにつれ、「はい」が少なくなっている。

「4. 事故を防止するためには～」では、78.4%がこれに賛成している。(反対:15.0%、自家用:賛成70.0%)業態別にみると、乗合において、賛成が多い(86.2%)のに対し、地場では73.3%とその比率が低くなっている。年齢についてみると、20代では67.1%が賛成しているにすぎないのに対し、50代では85.8%と年齢が上がるにつれて賛成する率が上がっている。

「5. 交通規則を守らない～」の質問に対しては、32.0%が賛成している。(反対:57.2%、自家用:賛成32.0%)業態別にみると、貸切において38.2%とその率が高いのに対し、乗合、路線では28.4、28.9%と低くなっている。年齢では、20代において38.2%が賛成しているのに対し50代では25.6%と年齢が高くなるにつれて賛成するものの比率が下がっている。

「6. 違反でつかまるのは～」については、46.0%が賛成している。(反対:32.3%、自家用:賛成52.0%)貸切、ハイタクにおいてこの比率は高く54.5、49.0%となっている。一方、乗合では35.7%と賛成する者の比率が他と比べ低くなっている。年齢別にみると、年齢層が高くなるにつれて賛成の比率が低くなる。

「7. 速度取りしまり(ネズミとり)～」に対しては、54.3%が賛成としている。(反対:39.3%、自家用:賛成48.0%)これについても、貸切、ハイタクにおいて60.0、58.0%と賛成とするものの比率が高く、乗合において低い。年齢別にみても、20代では63.4%なのに対し50代では46.3%と年齢が上がるにつれてその比率が低下する。

結論: 営業用自動車の運転者において、営業車であるからといった特別意識を持つものは、比較的少ない。

また、交通法規、取り締まりに対してそれを事故防止の手段として是認する度合は、自家用運転者より高い。さらに、事故防止に対する意識も運転を職業としているためか自家用に比べ高いと思われる。

営業形態の違いによるものか、業態による差異もみられる。また、全般に年齢層が上がるに従い好ましい方向へ変化する傾向がみられる。

ウィーン決定装置による運転者適性の研究

林 昭 博

(大阪大学人間科学部)

〔目的〕 オーストリアのKuratorium für Verkehrssicherheitで開発・実施されている検査機器のうち、ウィーン決定装置の日本人運転者の適性検査としての可能性を、事故者・違反者の検査結果に基づいて検討する。

〔方法〕 (1) 被検者：60日以上免許停止処分者692名(男性615名、女性77名、事故者365名、違反者327者)

(2) 検査手続：ウィーン決定装置による検査とコグニトロン検査を2人のテスターで同時に行なう。また、調査票にも記入させる。

(3) 決定装置(DG)：5色のランプ(上下)に対してそれぞれの色の反応ボタンで、高低音に対して右と左のボタンで、中央部の2つのランプ(右/左)には右足または左足で反応する反応検査。以下のテストをこの順序で実施した。

① D試行(reaktion)：刺激表示時間がテスターによって決められるforced-paced taskで、被検者は刺激が呈示されている間に早く正確に反応しなければならぬ。次の刺激が呈示されてから反応すれば遅れ反応になる。難易度15段階のうち 9, 6, 5 を使用(D-9, D-6, D-5 の3試行、表1参照)。刺激数は各50、測度は正答数、遅れ反応数、誤数。

② R試行(aktion)：刺激表示時間無制限のself-paced taskで、被検者が正しい反応をすれば次の刺激が呈示される。早く正確な反応が要求される。約1分間の試行を2度行う(R1,R2)。測度は正答数と誤数。

これらの測度および調査票のデータ(年齢、性別、運転経験、事故/違反の別、事故の種類、違反の種類、態度質問項目への回答)を分析した。

〔結果〕

表1. ウィーン決定装置の各試行と正答数

試行	刺激数	刺激表示時間	平均正答数
D-9	50	1.40 sec	39.82
D-6	50	0.95 sec	25.19
D-5	50	0.83 sec	16.50
R-1	∞	(全61.1 sec)	59.97
R-2	∞	(全61.1 sec)	64.23

(1) 被検者の年齢は16歳から71歳(平均31.1歳)、運転経験は1年未満から48年(平均9.3年)である。

事故365件のうち、追突事故27.7%,出合頭事故10.7%、右折時の事故18.9%,左折時の事故14.0%,その他の接触事故15.3%で、違反358件(事故関与者の違反31件を含む)のうち、スピード違反46.9%,酒気帯び17.3%,駐車違反12.0%,通行禁止7.0%である。

(2) DGの試行が進むにつれて単位時間あたりの正反応数は増加する傾向がある。

(3) クロス集計してカイ自乗検定を行うと、決定装置の測度はすべて年齢に関連し、若齢者ほど正答数が多く誤数が少ない。

(4) 事故/違反の別によって D9,D6,R1,R2 の正答数および D9, D5 の遅れ正答数が違い、事故関与者ほど正答数ないし遅れ正答数が少ない。

(5) 事故の種類はDGの変数とは関係しないが、違反の種類は D9, D6 の正答数, D9, D5 の遅れ正答数および R1 の正答数に関連する。

(6) 態度質問項目のうち、「ひとよりスピードを出すほうです」と「嬉しいとすぐはしゃぐほうです」に対する回答は、DGの変数のうち正答数と遅れ正答数および年齢、運転経験年数、事故/違反の別に関連している。

〔考察〕 ウィーン決定装置は単純な情報を摂取し動作で反応する能力を forced-paced および self-paced のタスクで判定する検査であり、前者からは外部からの刺激に対応する能力、後者からはペースが自由の時に求める事態の困難さの程度とその状況下での反応能力が測定できる。交通状況のデマンドが高い場合、または低い場合に、どれだけ正確に状況に対応し、どのような状況を作ろうとするか、またその結果どのような事故や違反に関わるかを、決定装置で判定できるかどうかを検討しようとした。

以上の結果から、決定装置のスコアにより事故/違反の別や違反の種類を予測する可能性が示されたが、運転者の教育・指導の基準として活用するためには、年齢層別のスコアの分析や事故・違反に関与した運転者以外の集団による検討、事故や違反のイメージの明確化が望まれる。

心理学の位相幾何学的方法の再検討 ～ 環境心理とトポロジー的方法～

片岡 靖博

((株)トリケップス)

1. 研究の目的

物理的、生理的、心理的な現象が同一の科学的な言葉を用いて、同一の概念を用いた討論で扱えるようになることは理想でもある。場理論のアプローチが目標としたのはそれであり、レヴィンの場の理論は「漸進的接近」的と A. J. アローは伝えている。ここでは、トポロジー的方法の一般的特性および特異性について検討する。環境心理とトポロジー的方法に見る展開の類似性をあわせて考察する。

2. 方法

観測のスケール・メトリック、巨視的か微視的か、あるいは中間視的かが問題される世界像を対照とする科学の方法にモデルを見る。世界像の分析を主題とする研究に、宇宙物理(宇宙論)、生態学、社会科学、幾何学等を数えるならば、計量、解析又は分析、評価の面で不変性と退化(変化)の対概念は深い直感をなす。

空間(宇宙論)の幾何学におけるゆらぎをスケール別に見ると明らかにになる。

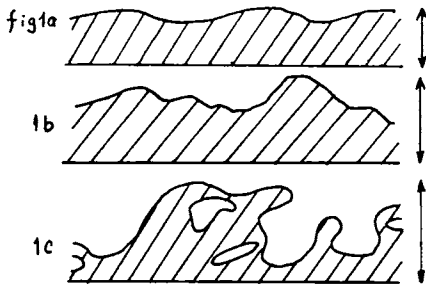


図1 観測の3つのレベルにおける空間の幾何学における典型的なゆらぎのシマティックな表現。上は観測の巨視的尺度でのゆらぎ。下はプランクの長さに対応する観測の尺度 (Patton and Wheeler から, 1975, 一節改題)

2次元ユークリッド空間から 2次元球をみると、

$$R^2 \supset \{(x, y) | x^2 + y^2 \leq E^2\} = B_E^2 \text{ (半径 } E \text{ の円)}$$

$$R^2 \supset \{(x, y) | x^2 + y^2 = E^2\} = \delta_E^1 \text{ (半径 } E \text{ の円周)}$$

$$R^2 \supset \{(x, y) | x^2 + y^2 < E^2\} = \dot{B}_E^2 \text{ (半径 } E \text{ の円内部)}$$

一般に

$$R^n \supset \{(x_1, \dots, x_n) | x_1^2 + \dots + x_n^2 \leq E^2\} = B_E^n$$

を n 次元円球と呼ばれる。球 $\subset$ 量子空間を並列する。

1a は原子核のスケールでは、空間はなめらかに見える。1b はどこどこがはら現われはじめる。1c のスケールでは、空間の曲率と位相は絶えずゆらぐ

ることになる。

2次元球と比べると 巨視的尺度でのゆらぎは、 δ_E^1 。微視(超微視)的尺度でのゆらぎは、 δ_E^1 (円周上)。中間的規模では 2次元球(円)に対応する。

この三態のゆらぎの発端は ウィラー(1957)による量子真空の考察により作られた。

行動の様相にも巨視的、微視的のスケールの取り方により個体、集団、種族(民族)の遺伝的、環境的特性が情報として検出される。

3. 結果

以上、 R^n 上で、ここでは2次元の球を用いて表面(Surface)の幾何学として空間を扱い量子論的ゆらぎ(変化)をみた。一般的にスケール化とは任意で自由な認識をつくるから、観測する尺度を選ぶとるのが課題である。場の理論では、「漸進的」に時系列で表現された。階層的スケールがヒトの行動に独立した見解を与えてくれるのは、種特異性、歴史性、因果律及び量子的ゆらぎの各スパンによる。心理学が位置づける巨視性とは人間生態学の領域ほどであり微視性とは細胞から遺伝子情報までのカバーであった。

4. 考察

方法論としてトポロジー的方法は多様であることが期待される。数学の進展を待つべくあるのか、応用する者の寄与であり道であらう。心理学の尺度は、トポロジー的にはステイグムスの尺度化以来、未解決の問題が山積している。トポロジー的方法そのものに、数学と共通の一般的特性があるとするれば、幾何学的直観の基盤をもとめることにある。特異性は、生体膜-ジョルダン円曲線-感覚入力場の形態形成の力を境界で分水するモデル化に見られる。

5. 結論

なぜ環境心理とトポロジー的方法が対照されるか。これは物理世界への心理的世界の優越を主張する以外に、尺度化の言語相対論にみる危険にたえず陥込か可能性を明らかにする。環境心理は局所性の実験する大域性の生態学的観測によってヒトをゆらぎの中の関係的存在としてまとめることができよう。

<主献> C. M. Patton and J. A. Wheeler.

'Is physics legitimized by cosmogony?'

Quantum Gravity, An Oxford Symposium, OUP

錯視画の効用

今井省吾

(東京都立大学人文学部)

日常生活のなかで、分量は小さくても、本質的には錯視と同様の知覚の歪み(くいちがひ)が生じている場合が多い。錯視ではくいちがひが顕著に生じているのにすぎない。錯視は正常な視知覚現象である。視知覚の研究は客観的世界と視知覚世界との間のくいちがひと原因をしらべることである。現在、錯視の研究は空間知覚の原理を探る有力な手段と考えられている。

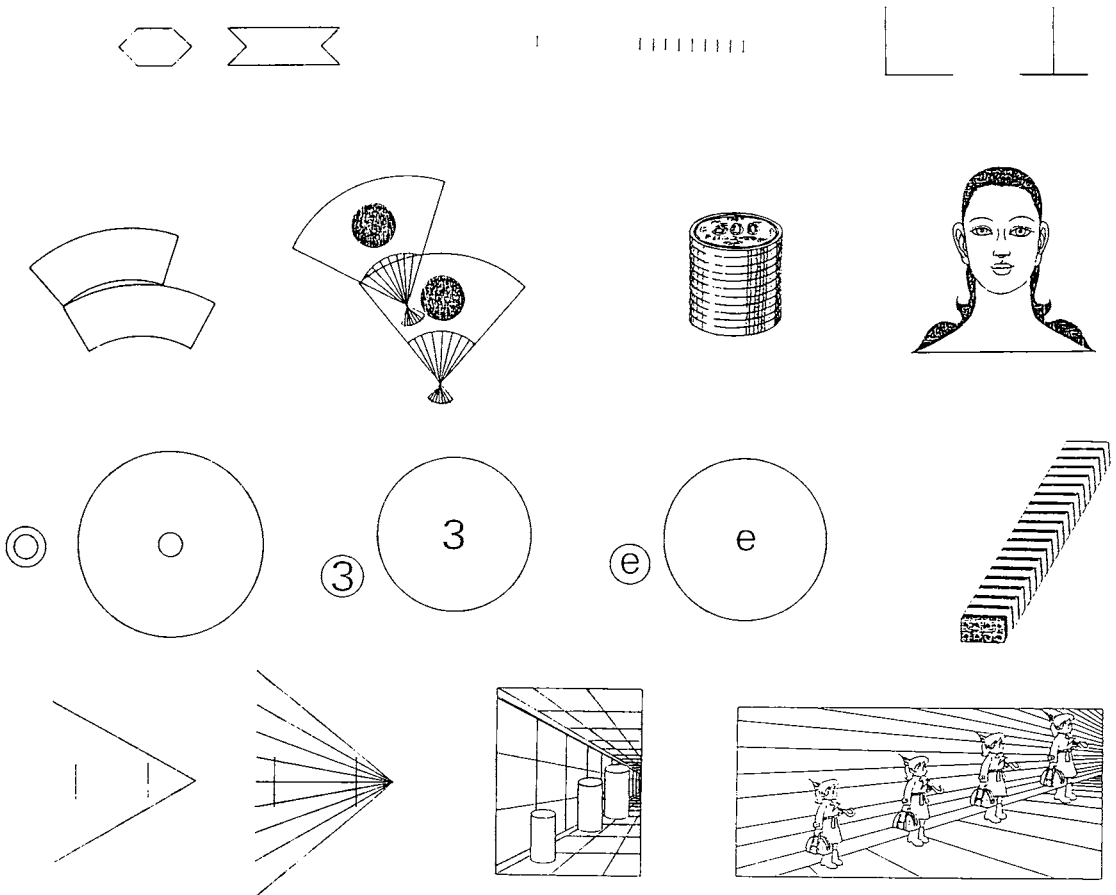
錯視図形にはいろいろな種類がある。幾何学的錯視図形、多義図形(おのまい図形、反転図形)、逆理図形(矛盾図形、不可能図形)が主なものである。

「錯視画」とは、錯視図形、錯視図絵、錯視絵をまとめた呼び方である。ここでは、錯視図形とは抽象的な幾何図形、錯視図絵とは具体物(人物、建物など)を表現するもの、錯視絵とは、錯視をモチーフとした美術

作品である。反転図形、埋めこみ図形、かくし絵、矛盾図形、(ルビンの盃と顔、シュレーガーの階段、ボーリングの嫁と義母、ペンローズの三角形、不可能な乾草かきなど)は具体物的要素が極めて強く、錯視図絵と呼べるものが多い。一方、幾何学的錯視図形は抽象的図形が主で、具体物的要素はほとんど含まない。

幾何学的錯視図形に日常生活的な具体物の要素を意図的に盛りこんだ多種類の錯視図絵は実験材料(実験図形)として組織的に用いられれば、視空間知覚の研究にとって新しい有効な手段の一つとなるであろう。とくに、2次元と3次元の視空間知覚の関係、主体的要因の効果、具体物のデザインへの応用などの問題にとって、錯視画(主に錯視図絵)は有効な材料となろう。

以下、著者が創り出した図絵を主軸にして示す。



教育評価の研究(その24)

—生涯学習時代のあり方を求めて—

岸本英男

目的； 今日までの一貫研究の結果、現時点に於て明らかにされつつある事は、次の3点に要約できる。

- 1). 人間は評価する動物であり、評価によって、今日の進歩を遂げてきた。
- 2). 教育は世代間の互換作用であり、同時に個人的発達を政治的に保証する政治的現象である。
- 3). 教育評価は、する側とされる側のカウンセリング関係であり、複雑多変化する価値観を調整する社会的現象である。

以上の仮説は本学会第26回大会に於ける筆者の研究発表以来、年次報告の形で、公立小学校特殊学級担任の立場から提唱し、実践し、実証を試みてきたものであるが、これを要約すれば、 $E=f(G, A, T)$ の周知関係でとらえられるものである事を実証し、その普遍妥当性を提唱し来つたものである。しかし行政の遅れがその科学的真理を政策化できなかつたため、今日の所謂教育荒廃をもたうすという不幸な現実を招いて了つた。 $E=f(G, A, T)$ という事は、評価は柔構造でなければならぬという事なのであるが、それが真理として社会的市民権を得るまでには至らず、僅かに教育界の一部で提唱の形で行われてきたにすぎないが、それも亦評価の変数としてT(時間)が内在する事から、計らずもこの教式の普遍妥当性を実証する事になった。この事実を事実として、誤れる今日の教育評価のあり方を正し、教育荒廃に対する適切な処置策を提供する事を、本研究の目的とする。

研究の経過； 本研究は従来、教育の場からしめ出されてきた精薄児の潜在能力を、いかに探索し、発掘し、生きる力を身につけさせるかという歴史的必然性にこたえるため始められたものであるが、特殊学級という小集団で濃密な人間関係と適切に調整する指導技術が開発されるにつれ、所謂精薄症状的問題は集団構造の従属変数としてout putされてくるものである事が明らかにされ、集団構造(G)と本人の素養(A)の周知関係として評価(E)が定まつてくるものである事が実証されるに至つた。それは学校での評価と社会でのそれとが甚だしく食い違

う、そしてそれがそのまま精薄児たちの就業を通しての死生問題となる所から、従来の教育評価観と集団構造的見地から見直す試みが生じた事、つまり学校教育の意味が内面直されねばならない筈であつた事になる。しかし不幸な事に、その集団構造的見地の転換も愚直した入試競争制度の緩和策として、内申書重視による入試の便法へと脱骨脱胎されて了つた。(1966年、第33回本大会発表)そして特殊学級の問題は養護学級へ吸収された後の差別抑圧排除問題の起因となり、内申書重視の問題は入試競争の白熱化を増幅し、教育評価の硬直化をもたうし今日の教育荒廃の遠因となつた。しかし集団構造的見地の教育的根拠は時流にねきんで、その正当性を実証しつつあり、制度発足の当初に於ては、それまでの弊害を正し、明い未来を予見し得たのであるが、時代的制約を免れる事ができず、新たな矛盾にさらされるに至つたが、それから15年後、教育評価が改めて内面直され、構造的変じ(評価は柔構造化せよ...東洋若菜などの能力が教育評価、UP運営)教育臨調の主要テーマとなりつつある。このような時局の推移に伴う評価観の変遷をTとして、 $E=f(G, A, T)$ と筆者は提唱するに至つたが、その契機となつたものは、第44回大会に於ける中原弘之教授のサジェスションによるが、元来評価には「人間」を包摂して定まる、の諺があつたように、時間には不可変数である。高齢化社会に於ける学校教育の評価の意味は今後解明されねばならぬ必然性をもつが、政治という有限性(権力関係の故に)が、評価という無限性(人間関係の故に)にどのようにかわるが今後の課題であろう。

方法； かけがえない時間と空間の中に、被動的・企図的存在として生命が燃焼させつつある人間は、それぞれの発達段階に於いて、それぞれの政治的社会的参加を、達成するにせよ、しないにせよ余儀なくされている。その種の実在状況の中に於て、時流を見守る主体性の恢復は不断に必要であり、その記録も紙屑として白紙のよすがとする方法をとつた。具體的には書翰的事実のRecognitionと、思索検証のClusteringである。

考察； 自由と教育、或る時はプロメテとして、又或る時はエピメテとして、アラジン魔法のランプのオバケのような力を教育評価に求める事も亦、自由であろう。

定心と時間意識に関する心理学的研究(16)

茅原 正
(駒沢大学文学部)

一連の実験結果によると、「諸縁を放捨」する坐禅時には身心の機能変化がもたらされ、主体的時間が長くなり、客観的時間が過い評価される傾向が認められる。本実験では、単なる「時間のみつもり」ではなく、比較的長い時間間隔で固定された不快刺激に対する「時間のみとおし」と、それに対する坐禅の効果を、呼吸、心搏、GSR等の自律的反応をもとに、検討・考察する。

【方法】(1)被験者；数年の坐禅経験をもつ男子大学院学生、3名。

(2)装置と記録；呼吸、心搏、GSRを日本光電製ME-135D型膨波計を用いて増幅記録した。実験開始後(10分目と20分目)、被験者に呈示される音刺激は、三栄測器製刺激装置Ps-202型による音圧レベル82 dBの白色雑音(5秒間)である。

(3)手続き；被験者は、心搏、呼吸、GSRなど、安静時の記録(3分間)をとった後、実験中に与えられるかも知れぬ電撃(70V, 1秒)を体験する。さらに被験者は、実験中、この電撃が与えられるとすれば、実験開始後10分目と20分であることが教示される。しかし、実際には電撃が与えられることはなく、10分目と20分目の定時には82 dBの白色雑音が5秒間呈示される。この後、被験者は、22分間の坐禅(実験群)と22分間の坐禅なしの椅坐(対照群)を、休息をはさみ、順序を替えて行なった。

【結果と考察】(1)呼吸数；非坐禅に対し、坐禅群は全体に呼吸数が減少し、一回当たりの呼吸時間が長くなる。Fig. 2.)。実験開始10分目以後の呼吸

数は、それ以前に比して増加の傾向。

(2)心搏率；安静・坐禅・非坐禅群の間に差がなく、群内の時間的な変動にも一定の傾向がない。条件に関わらず、実験開始後の最初の10分間は心搏率が高まる傾向。

(3)GSR出現頻度；坐禅群は、非坐禅群に対し、全体にGSR反応の頻度が高く(Fig. 2.)、その傾向は特に刺激が呈示される10分目以後に著しい。時間的な変動をみると、両群ともに初めの10分間に出現率が高く、特に被験者Aは最初の坐禅条件で、実験に対する不慣れを報告した。

坐禅時の生理的特徴の一つに、GSR自発性反応の増加が挙げられるが、本実験の場合、定時の音刺激による誘発反応を考慮する必要がある。また、坐禅中のGSR反応は、外部刺激に対する順応が少ない(Hirai, 1961)点から、本実験の坐禅群におけるGSR反応の増加は、音刺激による影響が大と考えられる。外部刺激に囚われず、「はからい」を捨てる坐禅時には主体的時間が長くなる。従って、不快刺激に対する、比較的長い時間のみとおしも、これまでと同様に短く体験され、それに伴って生理的变化の位相も移ることが予測された。しかし、「時間のみとおし」と生理的变化とは必ずしも対応しないこと、定時に呈示される音刺激の有無、被験者自身による時間のみつमोरの有無、被験者の実験に対する不慣れ、等、更に検討を要する問題が多く、現時点では早計に結論を下すことを控えたい。今後さらに詳細な研究を重ね、上述の問題点を検討するつもりである。

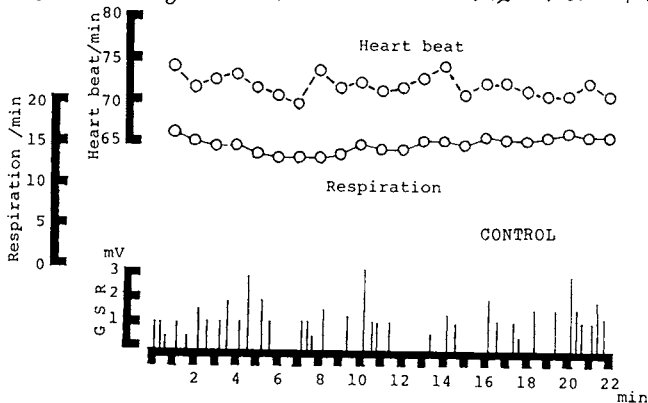


Fig. 1. Changes of mean values of Heart beat, Respiration, and GSR under the condition of control.

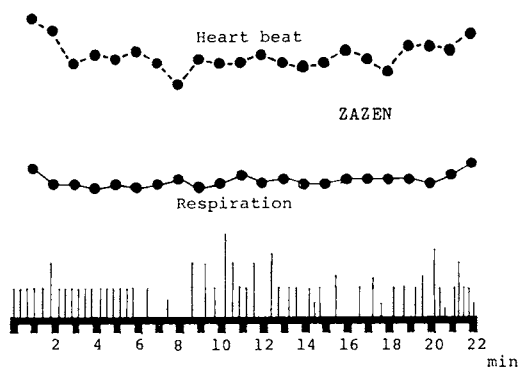


Fig. 2. Changes of mean values of Heart beat, Respiration, and GSR under Zazen condition.

性格のなおしかた (N式作業性格検査 62)

高 善 倉 板
(適 性 研 究 所)

作業曲線から判定した性格を考察して、その人の性格を矯正する方法を簡単にのべる。なお、職業適性との関係も判定できる。

	前半型 後半型	N	U	D	O	I	S
N 3.4%	安定した健康的な生活をおくること 協調的な生活を送る	()	よくケガをしないようにする 出おくれで	落ちついてねばあわてないで 落ちついてねばあわてないで	落ちついてねばあわてないで 落ちついてねばあわてないで	落ちついてねばあわてないで 落ちついてねばあわてないで	ねばること 出遅れないで
U 15.2%	足が強い根拠意欲概ね内向消極的	()	よくケガをしないようにする 出おくれで	うねはることを初めか 態度を変え	すること しなやかにあわててケガを	はることを 落ちついてねばあわてないで	ねばること 出遅れないで
D 16.7%	早く起きれず無意識に弱視・弱身	終りまでねばること	終りまでねばることをよくし	最後までねばあわてないで	最後までねばることを始め終り 落ちついて仕	までねばること 仕事を始め終り あわてないで	リまでねばること 気力を出し終り 出遅れないで
O 14.2%	気が強い興奮気ま調い激しい	感情に走り暴力を振わない	感情に走り暴力を振わない	感情に走り暴力を振わない	感情に走り暴力を振わない	感情に走り暴力を振わない	感情に走り暴力を振わない
I 9.9%	性散漫弱り弱視 注意散漫弱り弱視 疲注意散漫弱り弱視	終りまでねばること あきさないで	終りまでねばること 出おくれでないで	終りまでねばること あわてないで	ねばること 感情に走りあわ	ねばること 感情に走りあわ	ねばること 感情に走りあわ
S 40.6%	口表情力強い 内気で無表情 無気さしょうめん コッコツ関心	()	よくケガをしないようにする 感まよふ機敏	むろなくねばあわてないで	こと ついでねばる あわてず落ち	こと ついでねばる あわてず落ち	尊重すること 他人の意見も

(住所 松戸市 本町 3-15)

ヒトにおける強化スケジュールの研究(XII)

——並立スケジュールにおける履歴効果(1)——

○ 藤田 勉 佐藤 方哉 伊勢 民人 小野 浩一
(慶応義塾大学文学部) (駒沢大学 文学部)

【目 的】

3成分の並立スケジュール (Concurrent schedule of reinforcement) における履歴効果を検討する。

この種の研究では、被験体としてハトを用いた Epstein, Rらの実験(1983; 私信)がある。彼らの実験では、3つのキーが横に等間隔にならんだスキナー箱を用い、実験の第1フェイズでは左端のキーにつき反応のみがVIスケジュールで強化 (Conc VI EXT EXT)、続く第2フェイズで中央のキーにつき反応のみを強化 (Conc EXT VI EXT) した後、第3フェイズで、全ての成分を消去 (Conc EXT EXT EXT) した際、第3フェイズでのハトの反応は、第1フェイズで強化された左端のキーへ集中するといった、所謂、退行 (regression) 現象が見られた。本研究は、ハトで観察されたこの現象が、ヒトを被験体とした場合も生じることかを検討するものである。

【方 法】

被験者： 6-83才の健康児および健康成人27名 (男14名, 女13名)。

装置： オペラダムとしての押しボタン(3つ)の他に強化ランプ(3つ)、得点表示カウンタ(3つ)、および完了反応ボタン(3つ)が取り付けられたコンソールがテーブルの上に置かれ、被験者はこのテーブルに向い着席したまま実験を行なう。一時期に2つ以上のオペラダムへ反応することを避ける為、反応は必ず人差し指一本でなされるよう実験前、被験者に教示される。強化可能時設定後の各オペラダムへの反応は3秒間強化ランプを点燈し、その点燈中、完了反応ボタンを押す度に得点表示カウンタに一点ずつ加算され、その得点に応じた金額が実験後に支払われた。

実験中は、実験以外の音を遮断する目的で白色雑音が流され、実験の制御および反応記録は隣接する実験操作室でなされた。反応の記録には、各オペラダムに接続された3台の累積記録器が用いられた。

手続き： 27名の被験者は、ランダムにA群(17名)、B群(10名)に分けられ、実験は、基本的には次に示す3つのフェイズからなっている。

第1フェイズ： A・B群とも、このフェイズでは、3つ

のオペラダムのうち、左端のボタンへの反応のみがVI30秒もしくはRR30スケジュールにより強化される。

第2フェイズ： A群は中央のボタンへの反応、B群は右端のボタンへの反応のみが、VI30秒もしくはRR30スケジュールで強化される。

第3フェイズ： A・B群とも、このフェイズでの反応は強化されることがない。つまり、並立スケジュールの3つの成分は全て消去 (Conc EXT EXT EXT) される。

第1フェイズおよび第2フェイズは各10分、第3フェイズは、被験者が、3つのオペラダム全てに全く反応しなくなるか、実験の続行が不可能と判断されるまで続けられた。

【結 果 および 考 察】

A群・B群ともに第1フェイズでは、左端のボタンに対する反応のみが強化されているので、“退行”が生じるとすれば、各被験者の第3フェイズでの反応は左端のボタンに集中すると考えられる。しかし、実験の結果、第3フェイズにおいて、左端のボタンへの反応が他の2つのボタンに対する反応よりも多かったのは27名中、2名の被験者で見られただけであった。但し、この2名の第1および第2フェイズでの反応数を見ると、必ずしも強化されているボタンに対する反応を多く自発しているわけではない。つまり、両者の3つのボタンに対する反応の割り当て (allocation) は進行中の強化スケジュールに従ったものではなく、何らかの選好 (preference) もしくは、強化を最大限に得る為の方略 (strategy) に従ったものと考えられ、この意味では Epstein らの言う“退行”とは区別されるべきであろう。この2名の他にも、何らかの選好もしくは方略に従って反応の割り当てをしたと見られる被験者は多く、特に、左→中央→右→中央→左という連続でボタンを押す方略をとっていた被験者が多く観察された。これは、本実験で用いられた装置のボタン押しの切換 (changeover) が低負荷 (low cost) であったことに帰因すると思われる。第1・第2フェイズで強化スケジュールに従って反応の割り当てを行っていた被験者は27名中6名いたが (6名中5名がRRスケジュールで強化されていた被験者)、彼らの第3フェイズでの反応は“退行”ではなく、強化されていないボタンへの反応が多く自発される傾向にあった。

ヒトにおける強化スケジュールの研究 (XIII)

— 並立スケジュールにおける履歴効果 (2) —

○ 伊勢 民人 小野 浩一 藤田 勉 佐藤 方哉
(駒沢大学 文学部) (慶応義塾大学 文学部)

〔目的〕

本実験の目的は第1実験と同様、並立スケジュールにおける強化のヒストリーが消去過程に及ぼす効果を調べるものである。但し、本実験ではオペラダムを変え、より反応コストの高いレバー装置を使用した点が異なっている。

〔方法〕

被験者： 21-24才の大学生12名(男4名・女8名)。

装置および実験環境： 実験は5m×2.5mの特設ブース内で行われた。ブース内正面の壁面は灰色の布でおおわれ、1つのカウンターおよびオレンジ色の強化ランプ(100V, 25W)が3ヶ取り付けられている。壁面下の長テーブル上に鋼鉄製の反応レバー装置(350×250×350mm)が120cm間隔で3台(左からL1, L2, L3とする)、各レバー装置の右横に完了反応用のボタンが1つずつ設置された。強化は各レバー上の強化ランプの3秒間の点燈であり、その間にレバー横のボタンを押すと押した数だけカウンターの数字が上がるようになっている。従って、実験1で用いた装置との相違は、(1)3つの反応装置が空間的に離れていること、(2)レバーを引くのに強い力を要すること(約50N)、などである。また、実験中、実験室内には白色雑音を流した。スケジュールの制御および反応の記録にはマイクロコンピューターを使用した。さらに、レバー引き反応のアナログ・データを記録するためにデータレコーダーを使用した。

手続き： この実験では実験1と異なりV130秒スケジュールのみを使用した。実験セッションの構成は基本的には実験1と同じである。すなわち、第1フェイズとして(Conc VI EXT EXT)を10分間、第2フェイズとして(Conc EXT VI EXT)を10分間を行ない、その後の第3フェイズはいずれのレバーも消去であった。消去基準は第3フェイズ10分経過後の5分間以上の無反応であった。また、どの被験者も消去が60分経過した時点で実験を終了した。被験者に対しては、できるだけ高得点をあげること、強化ランプの点燈はレバーを引くことに関連していることだけを教示した。

〔結果〕

表1に各フェイズにおける反応数によるレバーの序列パターンとその序列パターンを示した被験者の人数をのせた。第1フェイズ、第2フェイズでは、強化スケジュールに従ってほぼ全員がL1そしてL2の反応を増加させた。第2

表1 反応頻度によるレバーの序列とそのパターンを示した被験者数

	第1フェイズ	第2フェイズ	第3フェイズ	
			消去後10分間	全体
L1>L2>L3	10	1	—	1人はL1
L1>L3>L2	1	—	—	1人はL2
L2>L1>L3	—	5	1	2
L2>L3>L1	—	5	10	9

()内は第2位と3位の値が等しいもの

フェイズでL1>L2>L3の序列を示した1名も、L1を激しく引いたのは第2フェイズ移行後の4分間で、その後の6分間をみると0-20-6とL2に集中している。第3フェイズの消去になっても反応頻度の高いのは相変わらずL2であった。しかしながら、第3フェイズでは多くの被験者がL1よりも一貫して消去レバーであったL3を2番目に引いている。図1に被験者の5分ごとの反応数の平均値を示した。図からも、第3フェイズにおいてL3の反応がL1よりも増加していることがわかる。また、図2・3に2名の被験者の累積記録を示す。以上の結果から、本実験においてもEpsteinらの言う“退行”の事実は認められなかった。何故、ハトとヒトとの間にこのような相違が生じたかについて、今後、理論的・実験的分析がなされる必要であろう。

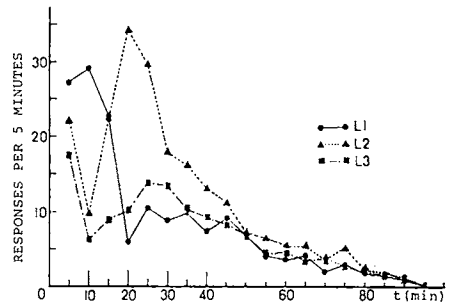


図1. 3つのレバーに対する反応頻度の推移

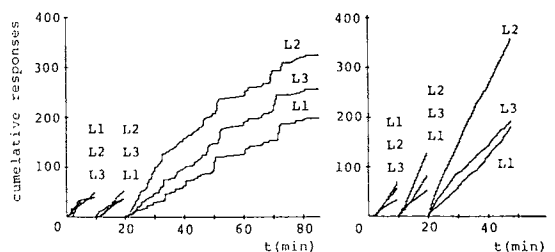


図2. 累積記録(1)

図3. 累積記録(2)

乳 幼 児 発 達 検 査 の 基 礎 的 研 究

3. S-P表による信頼性と妥当性の検討

○松田浩平・佐藤 誠 (日本大学) 西野泰広 (豊橋短期大学)
中村博志 (国立療養所足利病院) 菅 美登子 (明星大学)

本研究はビジュ・S-Wらが1972年に開発した「ポータージ早期教育ガイド (Potage guide to early education, P.G.E.E.)」をベースにしたものである。日心第48回大会ではS-P表を用いて項目分析を行った結果を発表したが、今回は信頼性と妥当性の検討についての報告を行う。

【目的】ビネー式テストの信頼性と妥当性の検討にS-P表を持ちいることの有効性、及びS-P表によるポータージ・プログラムの信頼性と妥当性の検討。S-P表は、主に教育現場で学力テストの反応分析に用いられてきた。これは、結果が視覚的に得られる点と、計算が容易であるためと考えられる。本研究では、S-P表の適用範囲を乳幼児発達検査の信頼性の検討に拡張した。

【方法】被験児：0ヶ月～12ヶ月までの乳児。
手続き：実施方法は、小児科または保健所等の検診時にポータージ・プログラムをベースに作成した乳幼児発達検査表 (I型, II型) を母親に記入してもらった。

処理方法：一般に信頼性を表す測度としてキューダー・リチャードソンの公式による相関的内部一致性が広く用いられている。しかし、これらの方法すべてに共通する点として、テストを構成する項目の量的均一性が要求される。ところが、ビネー式テストでは項目の難易度に伴う通過率はもともと均一ではない。そのため、相関的内部一致性は用いることができない。そのような場合、今までは平行検査法もしくは等価検査による信頼性の検討が行われてきたが、本研究ではそれらに該当する検査は行われていないので、信頼性を検討する方法として、S-P表による一連の手続きを試験的に用いた。ところで、S-P表により得られる指標には、通過率、差異量、差異係数、注意係数、などがある。(これらについては、第48回日心大会にて発表)

処理法の原理：本研究では信頼性を次のように定義する。1) 各項目の通過率の大小による順位は被験児の月齢が変化しても一定である。2) 一般に

発達段階が高い被験児ほど、難易度が高く全体の通過率が低い項目をより高位まで通過できる。

以上にもとづいて、具体的に信頼性を記述できる指標について考察する。

定義1について：月齢ごとに項目の通過率を算出し、通過率の高いものから順に順位づけを行い次に、月齢間の順位の一致性を調べるために、ケンドールの一致係数を求め有意性の検定を行う。

定義2について：S-P表の差異量は、そのグループ内で定義2が棄却される確率である。SラインとPラインのずれは、たくさんの項目を通過できる被験児が比較的難易度の低い項目を通過できなかったり、その逆の場合に生じる。ここで、差異量は、全体の反応に占める上記の理由によって生じた反応の割合である。従って、1から差異量を減じたものが、定義2の保証される確率となる。さらに、信頼性係数は相関係数として与えられるため、その平方根を信頼性の指標として用いることにした。

【結果と考察】1) 領域別の信頼性：6領域をつづじて、信頼性を示す係数は、表1で示されるように、少なくとも .50以上を示した。しかし、ここで示された数値は一般に信頼性係数として示される値よりも少なめであるが、ケンドールの一致係数が定性的な一致性を示すためである。これらの値を χ^2 -検定した結果は十分な信頼性が有ることを示している。

2) 月齢別の信頼性：表2で示されるように、その領域が有効である範囲内では、かなり高い値を示した。1)の結果に比べて大きな値を示しているが、相関係数に換算したためと考えられる。

今日まで、テストの信頼性は相関係数で与えられ、それ等はある意味での連続量に基づく値であった。しかし、本研究で用いた方法は、新たに定められた基準を用いて信頼性を定義した。この信頼性の定義の妥当性が今後の研究で確認される必要がある。

表1. 定義(1)にもとづく信頼性係数

	W:一致係数	m ₁	m ₂	f(m ₁ , m ₂)
言語	0.780	9	54	21.263***
刺激	0.551	38	152	4.899**
運動	0.603	44	396	13.653***
社会	0.554	29	319	13.647***
身体自立	0.408	12	108	6.208**
認知	0.517	11	88	8.553**

... $P \leq 0.01$ *... $P \leq 0.001$

表2. 定義(2)にもとづく信頼性係数

	0月	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月	
言語							.912	.794	.809	.870	.912	.792	.888	
刺激	.926	.902	.819	.837	.288									
運動				.822	.889	.878	.872	.901	.873	.865	.862	.834	.903	
社会			.986	.890	.910	.835	.924	.928	.918	.921	.916	.802	.880	.840
身体自立				.853	.898	.909	.849	.869	.918	.868	.886	.747	.871	
認知					.910	.935	.914	.923	.899	.938	.898	.815	.890	

無意味図形の認知にみられるパーソナリティの投影性(Ⅲ)

— Ambiguity Toleranceと黒色刺激との関係 —

藤木伸顕

(関西学院大学文学部)

[問題]

筆者は、認知過程とは個人が感受した刺激に対して投影的に意味を付与していく能動的過程であると考え、無意味図形を用いてその仮説を検証してきた。その一環として、無意味図形の認知に、パーソナリティ特性のひとつである曖昧さへのトレランスambiguity toleranceがどのように関係しているかを報告してきた。それと並行して無意味図形を用いて、インクブロット・テストにおける黒色の持つ刺激価についても再検討を加え、黒色は被験者の否定的感情が伴う側面について開かれた刺激であると考えられた。

以上のことから、無意味図形を黒く着色することによって、反応がより困難になると推測され、曖昧さへのトレランスが高い(HAT)者と、低い(LAT)者との間で、着色の有無による反応の変化のしかたが異なると予想される。本研究では、同一被験者に、着色を施さない無意味図形と、着色した図形とを用いて、数ヶ月の期間において再検査し、反応の変化と曖昧さへのトレランスとの関係を報告する。

[方法]

被験者として、阪神間の大学の3・4年生男性9名女性34名を用いた。曖昧さへのトレランスを測定するため、Norton, R.W.(1975)が作成した質問紙MAT-50の邦訳版を用いた。

無意味図形は、縦横10cm四方に100×100の座標をとり、その内からランダムに選択した点を直線的に結ぶことによって作成した。着色しない図形は輪郭線だけのものである。同じ図形について、図形内部を黒く着色したもの(Sシリーズ)、図形外部を黒く着色したもの(Rシリーズ)、図形の内部、外部共に黒く着色し、輪郭線を白く表わしたもの(Bシリーズ)の三様に着色した。Sシリーズは8枚、R、Bシリーズは各4枚の計16枚からなっている。

調査は、その無意味図形が何にみえるかを2分間で自由に記述させることによって行った。1回目は輪郭線だけの図形を用いて、集団法により施行した。2回目は被験者によって異なるが、5～15ヶ月の間隔をおき、着色図形を用いて個人法により行った。また反応については、質を検討するため、ロールシャッハ・テストで行われているクローパー法によってスコアリン

グをした。なお、この報告は筆者の他の研究(1984)と曖昧さへのトレランスとの関係から分析しなおしたものである。

[結果及び考察]

MAT-50の得点の平均は、169.44(SD:16.53)であり、中央値は171.00であった。同じMAT-50を用いた吉川の研究結果(1978,1982)からみて、高得点の者が多いと考えられるため、中央値で二分することは避け、吉川の報告に基づき、124～163の得点であった18名をLAT群とし、168～204の得点であった25名をHAT群とした。この2群各々について、1回目と2回目の調査の各スコアの平均値について、別個にも検定を行った。スコア値は、主反応に付加反応の2分の1を加えることによって算出した。また、反応数が1回目の調査より2回目において有意に高くなっているため、各スコア間のバランスをみるため、各スコアを反応数で割った比率を被験者ごとに算出し、その比率の平均についても検定を行った。

その結果、3つのシリーズにおいて同じような傾向がみられた。各スコアそのものについては、反応領域決定図、反応内容の全般に渡り、HAT群、LAT群共に1回目より2回目において有意に高いことが示されたが、比率については有意差があまり示されなかった。即ち、HAT群、LAT群共に、輪郭線だけの図形より着色した図形に対して、各スコア間のバランスを崩すことなく、多くの反応を示したと考えられる。このことは着色図形の中でも、比較的反応が容易であると思われるSシリーズにおいて顕著であった。より否定的感情を喚起しやすいと考えられる、B、Rシリーズにおいても、両群間に大きな相違はみられなかった。

この点について、筆者の一連の研究結果を踏まえて考えると、黒色が持つ刺激価は強烈であり、図形を明確化したために、曖昧さへのトレランスがあまり影響せず、HAT者とLAT者の対応のあり方に相違がみられなかったという可能性がうかがえる。曖昧さへのトレランスという特性は、曖昧な状況における情緒的ゆとりといえる態度と考えられるために、直接個人の行動や、図形認知での反応中に反映されることは少ないのであらうと考えられる。

Ambiguity Toleranceと適応のダイナミクス(VI)

吉川 茂
(小曽根病院)

認知スタイルの1つと考えられるAmbiguity Toleranceの心理的・行動的反応は、Ego StrengthあるいはEgo Autonomyといった自己の安定性・確実性を基礎として成立するであろうとの観点からの研究を継続してきた。今回は、自己概念—自己受容、自己批判—と、精神的健康についての考え方それぞれとAmbiguity Toleranceとの関係について報告する。

Study 1

(目的) Ambiguity Toleranceの高い者はより良好な自己概念をもつであろうという仮説を検証する。

(方法) 195項目の形容詞からなる加藤(1977)のチェックリストを、保育専門学校1年生1クラスを対象として、4週間の間隔を置いて、2回提示し回答を求めた。1回めの提示では、各形容詞項目について、それらを人間の性質や状態として「望ましい」「望ましくない」「どちらともいえない」の判断を答えさせ、2回めの提示のときには、自分自身にあてはまる項目をチェックさせた。自己受容指数は、チェックした望ましい項目の数をチェックした項目の総数で除して100倍した数値として算出される。自己批判指数は、チェックした望ましくない項目の数を、チェックした項目の総数で除して100倍して求める。最終的に対象は女子31名となった。

Ambiguity Toleranceの測定にはNorton, R.W.

(1975)作成の質問紙の邦訳版を用いた。

(結果) Ambiguity Tolerance得点の高低により、HAT(High Ambiguity Tolerance)とLAT(Low Ambiguity Tolerance)の2群に分割した χ^2 検定の結果、自己受容指数には有意差はみられなかったが、自己批判指数に有意な傾向($\chi^2=2.896$, $df=1$, $P<.10$)が認められた。

(考察) 自己批判のみに関してではあるが、Ambiguity Toleranceと良好な自己概念との関連は一部認めら

れたといえよう。しかし「望ましい」「自分にあてはまる」などの形容詞の選択数が両群でかなり異なっており、二分化傾向の影響もあるものと考えられる。

Study 2

(目的) Ambiguity Toleranceの高い者は、その低い者と比較して、より高いAmbiguity Toleranceを精神的健康の指標として示すであろうという仮説を検証する。

(方法) Study 1と同じ対象に、さきの質問紙を約2ヵ月あけて、2回集団施行した。1回めはノーマルな教示を与え、2回めは「各自が考える『精神的に健康な人』ならばどのように答えるか」を想定させた。

(結果) 検定の結果、「精神的健康」教示条件でHATとTable 2 2種の教示下でのHATとLATのAT得点

		1回め	2回め
		ノーマル教示	「精神的健康」教示
HAT	M	171.9	165.8
	n=17 SD	12.02	19.18
LAT	M	146.7	147.1
	n=17 SD	10.32	21.38

Table 3 ATスケール2回の相関係数 LAT間に有意差が

Philosophy	.089	認められた。(t=
Interpersonal Communication	.396*	3.740, $P<.001$)
Public Image	.247	(考察) 仮説は一応、
Job-Related	.182	認められたが、ノ
Problem Solving	.087	ーマル教示条件よ
Social	.411*	りもAT得点が減
Habit	.690**	少している。この
Art Form	.312†	減少は有意ではな
Total	.497**	いが、さらに検討

† $P<.10$ * $P<.05$ ** $P<.01$ が必要と思われる。

Table 1 チェックリスト項目への各種回答および自己受容・自己批判指数についてのHATとLATの比較

		「望ましい」とし			「望ましくない」とし		
		で選択された	で選択された	とされた形容詞	「望ましい」	「望ましくない」	
		形容詞数	形容詞数	数	形容詞数	形容詞数	
HAT	M	72.8	70.1	40.5	25.5	5.1	64.3
	n=15 SD	14.73	18.06	11.53	7.62	4.72	11.2
LAT	M	82.3	73.3	56.9	34.9	11.2	64.1
	n=16 SD	11.90	17.81	20.01	15.87	7.38	19.3
							13.62
							11.91

飛行状況に伴う心理と「情意生活しらべ」との関係について

岡上巳弥子
(航空医学実験隊)

パイロットは、種々の飛行状況下において、不安、緊張等の心理的不安定を経験していると推測される。これら飛行状況に伴う心理的不安定が、日常生活における情意不安の傾向とどのように関係するかをみるため質問紙調査と労研版情意生活しらべを実施した。

方法：

調査対象者は、24歳以上40歳以下の飛行を主任務とするパイロット173名である。

飛行状況に関する心理的体験を調査するための質問紙は、多肢選択法と文章完成法とを用いて作成した。質問項目のうち、回答を心理的不安定の面から評価し、尺度化することのできる以下の項目を用いた。

(1) 選択法による項目

- 今日は飛びたくないと思う日の有無
時々ある、たまにある、ほとんどない、全然ない
- 飛行に関し、恐しい体験をしたことの有無
何回かある、一度だけある、ない
- 身近で航空機事故を体験した後、飛行に際し不安を感じた程度
かなり、ちょっと、ほとんど感じなかった、全く感じなかった

(2) 文章完成法による項目

- 初めて飛行機に乗ったとき、私は・・・ ○初めてのソロでは・・・ ○フライト前の私は・・・ ○コックピットに座ると・・・ ○天気の良い日には・・・

- 雲の中に入ると・・・ ○夜間飛行訓練のとき・・・ ○私にとって飛ぶことは・・・

文章完成法による項目への回答は、不安等心理的不安定の表明されている回答を一、その程度の強い表現を二、喜び等前向きな感情表現のある記述を十、その程度の強い衰弱を十十、仕事等何ら感情の表現されていない記述を0と評価した。

回等はすべて2得点に変換して用いた。

結果及び考察：

各項目間の相関係数を算出したところ、いくつかの項目で、年齢及び飛行時間との間に有意な相関が認められたため、年齢と飛行時間の影響を除く偏相関係数を計算した。その結果、情意生活しらべは「今日は飛びたくないと思う」頻度とフライト前の心理的不安定との間で有意な相関が認められただけだった。文章完成法項目の合計得点と情意生活しらべ得点との間の相関は $r = .209$ (偏相関は $r = .164$) で $p = .05$ の有意な相関だったが、一人前のパイロットの場合、飛行状況における心理的不安定の程度を情意生活しらべ得点から推測するのは難しいと考えられる。

飛行状況に伴う心理的不安定と情意生活しらべのどの質問項目とが関係あるかを検討した結果は、恐怖症的傾向や疲労の傾向が「今日は飛びたくないと思う」頻度と、また、臨場恐怖的傾向がフライト前の心理的不安定と若干関係のあることが推測された。

(表には有意な相関のみられた項目のみ掲げた)

各項目間の相関係数

相関	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 年齢										
2 総飛行時間	.85									
3 今日は飛びたくないと思う日	.16	.19			.14	.21		.17	.30	
4 初めて飛行機に乗ったとき					.17					
5 フライト前の私は	.20	.25	.19					.12	.22	
6 天気の悪い日には			.22	.17		.22	.18	.13		
7 雲の中に入ると					.22					
8 夜間飛行訓練のとき					.19					
9 私にとって飛ぶことは	.18	.22	.20		.17					
10 情意生活しらべ	.29	.30	.33		.28	.15				

$r < .01$ $r < .05$

情意生活しらべの項目との点双列相関係数

($p = .01$ で有意な相関の認められたもののみ)

	飛びたくない日	フライト前
高い所や危険物がこわい	.243	
橋を渡る時や高い所を歩くのがこわい	.235	
やみ夜に外を歩くのがこわい		.230
朝起きたとき疲労感がある	.328	
毎日の仕事でくたくたに疲れる	.268	.207
肩や腰がしばしばこる	.275	
耳鳴り、めまいのすることがある	.214	
よく眠ろうと思って努力することがある	.214	
ものがぐわやみに気になる		.263
人からきられるかと気になる	.225	.304
何か言われるとすぐに顔が赤くなる		.280
人前に出るとき固くなる		

女子中学生の価値観についての調査研究

高 嶋 正 士 ・ 石 渡 倫 子
(共 立 女 子 大 学)

○ 藤 田 主 一 ・ 駒 崎 勉
(城 西 大 学)

1. 問 題 と 目 的

昭和43年9月、神奈川県青少年センターの委託研究に高嶋と駒崎が参加し、神奈川県下の「中学校生徒の生活意識」についての調査を行なった。中学生の心性の諸特徴のうち、特にどんな現代的気質を持っているかを明らかにし、青少年の健全育成上の資料とするのが目的であった。

以来15年経過した今日、中学生の価値観、考え方や態度がどのように変わってきたのかを比較検討するものである。

2. 方 法

調査対象：東京都内の女子中学生735名（1年生259名、2年生242名、3年生234名）である。

調査内容：今回の調査は、前回調査した項目の中から次の三つの質問を選定し、自由記述の形式で回答を求めた。

(1)尊敬する人物（あるいは偉いと思う人）を1名または2名まであげさせる。

(2)人間の偉大さの評価（どういう点で尊敬するか、またはどんな点で偉い人というか）。

(3)将来の生活態度について（中学生がどんな態度でこれから生活しようと思っているか）。

3. 結 果 と 考 察

上記質問の中から、ここでは(1)(2)の回答内容を中心に女子中学生の考える人間像についてまとめた。

1. 尊敬する人物

尊敬する人物を何名記入したかをみると、1名のみ記入が1年生74.13%、2年生70.25%、3年生62.39%、2名記入は1年生16.99%、2年生15.70%、3年生18.38%、無記入あるいは「いない」が1年生8.88%、2年生14.05%、3年生19.23%であった。1名記入が1年生に、2名記入および無記入が3年生に多いことがわかる。

列挙された人物は、1年生67名、2年生58名、3年生55名で延べ93名におよんでいる。家族関係以外で列挙された人物をはっきりと性別区分できるものと、どちらも判断し難いものに分けてみると、全体で男性43.08%、女性33.02%、不明23.90%であった。学年別では、高学年になるに従って男性が増し、反対に女性が減少している（男性36.89%→44.90%→47.01%、女性36.89%→32.65%→29.91%）。

女子中学生が尊敬する人物としてその意思を表現したとき、総数に占める家族の割合が最も高い。全体の50.69%が何らかの形で家族をあげているが、その比率は学年とともに減少（58.42%→51.06%→41.88%）している。記述の仕方はさまざま（両親、親、父と母、父、母）であるが、自分の親をあげる者が全体で44.91%いることは、モデルや感謝としての親の姿への現われであるとすれば喜ばしいことと思われる。

次に、どのような分野の人びとがその対象になっているのかを、大まかではあるが15種に分類（家族を除く）し、比率を

求めた。女子中学生は、教師18.33%を第一の対象とし、以下先輩・友だち15.46%、芸能・タレント14.79%、政治家10.93%、文学者6.75%の順になっている。また、1年生では先輩・友だち15.40%、2年生では教師23.16%、3年生では芸能・タレント23.21%が最も高率であった。3年生は先輩・友だち16.08%も多く、このころに親近感の強い具体的人物へ対象が移行するものと思われる。

実際に列挙された個人名の中で、実数の多かったものを順に並べると、ナイチンゲール15名、ヘレンケラー10名、キューリー夫人9名、聖徳太子8名、マザーテレサ6名、福沢諭吉5名などで、偉人伝に登場するような歴史上の人物が多いものの、前回の調査に比べて低率であった。また、前回最高の支持を集めたケネディ大統領は今回は誰ひとりとも記入しなかった。その時代における「時の人」が大きく変容してきていることを示している。さらに、現代の「時の人」ともいえるべきテレビスターが、彼女たちの生活に深く入りこんでいる様子がうかがえる。

2. 人間の偉大さ

現代女子中学生の考える「人間の偉大さ」とは、どんな点を指しそれに高い評価を与えているのであろうか。前回調査は品等法によったが、今回は自由記述させ、その内容をわれわれが検討した結果、おおむね次の8種のカテゴリーに分類が可能と思われた。すなわち、

- (1)その人の知的能力の高さを主として記述したもの
- (2)その人の努力している姿を主として記述したもの
- (3)その人の人柄を主として記述したもの
- (4)その人の仕事や業績を主として記述したもの
- (5)その人の行動の基準を主として記述したもの
- (6)その人の社会や家族への奉仕を主として記述したもの
- (7)その他主旨のはっきりしないもの
- (8)無記入や「わからない」といった記述のもの

表1.に回答のカテゴリー別の比率を示した。たえざる努力を続けている人や、人柄のすぐれた人に高い評価を与え、それに大いなる価値を認める傾向が、わずかではあるが学年とともに増加していくことが理解されるであろう。

表 1. 人間の偉大さの評価（%）

	1年生	2年生	3年生	全 体
(1)	5.79	8.27	6.84	6.94
(2)	13.51	14.46	19.23	15.65
(3)	20.08	21.07	23.50	21.50
(4)	6.18	7.02	4.27	5.85
(5)	18.15	21.07	16.24	18.50
(6)	26.25	16.53	20.09	21.09
(7)	5.02	3.31	6.41	4.89
(8)	5.02	8.27	3.42	5.58

I. 高校生の対人関係

— T.A.Tを用いて —

〇門田 春秋（岐阜精神病院） 丸井 澄子（岐阜大学 教育学部） 北瀬 扶美代（黒野病院）

<目的>

学令期にあたる児童・生徒を調査対象とした集団的研究には、質問紙法を用いたものは、多く見られたが今回、我々は、投影法の一つであるT.A.T.を用いて、現在の中・高校生の心理的特徴一特にその中でも、個人と環境・他者との相互作用を一中・高校生の対人関係のあり方に焦点をあて、Murrayの欲求・圧力分析を用いて解明を試みた。

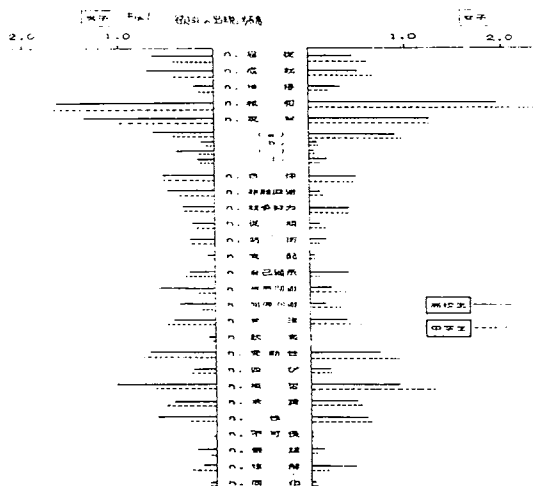
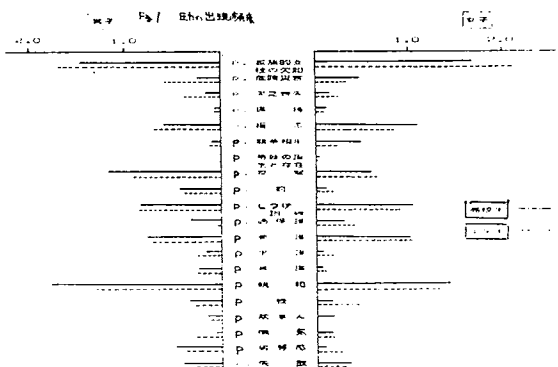
<方法>

被験者は、G市内中学2年生112名（男子52名女子60名）、県立高校1年生128名（男子65名女子63名）。T.A.T.名大版の中から、中・高校生の対人関係の特徴の投影がしやすいものであろう6 cardsを選び、集団記述法で施行した。

整理のために用いた欲求・圧力のリストは、中学生高校生において、発達上重要な変数であり、また、出現しやすいものであろうと予想したもので、Fig. 2に示す。さらに今回は、出現した欲求・圧力に対し、それぞれ1,感情的表現のない記述レベル、2,感情的表現は見られるが、問題となるほど強くはないもの、3,感情的表現の程度が問題となるほど強いもの、の3段階による質的強度による分類をも行なった。

<結果>

全体の欲求・圧力の出現傾向を、Fig. 2に示し、カテゴリー別・強度差による順位性の検定結果を、Tab. 2に示す。



Tab. 1 欲求の対象における男女の比較

	父親	母親	同性	異性	教師
n 親和		男<女(高)			
n 攻撃	男<女(中)	男<女(高)		男>女(低)	
n 拒否	男<女(高)	男<女(高)			
n 同性				男<女(中)	

Tab. 2 圧力となる対象における男女の比較

	父親	母親	同性	異性	教師
P 親和性	男<女(高)	男<女(中)			
P 攻撃性	男>女(高)	男<女(高)			
P 親和		男<女(高)		男>女(高)	
P 性				男>女(高)	

* P<.05
** P<.01

<考察>

母親と女子との情緒的結びつきは強く、また、友人的な関係性も表出している。女性性を確立していく前段階を示唆するものであろう。父親と男子との関係において、中学年代では関係性の稀薄さが特徴的であり高校年代において、進学・就職等から父親との関係性が見られるが、それに対し、干渉的としき男子は受けとておらず拒否・自己律も高くなっている。異性に対しては、女子の方が性的に早熟であるが、空想的であり、男子の方が、より現実的であると言える。

II. 中学生と高校生の対人関係の比較

— T.A.T を用いて —

○北瀬 秋英代 (黒野病院) 丸井 澄子 (岐阜大学・教育学部) 門田寿秋 (岐阜精神病院)

(目的・方法) 研究Ⅰで述べた目的・方法により、中学生と高校生の対人関係の特徴の推移を見るため、父親・母親・同性・異性・教師という対象に対して、男子・女子・男・女子統合したものの各々について中学生と高校生の比較をおこなった。

(結果・考察) 結果は、中学生、高校生各々の各対象に対する欲求・圧力の出現傾向は研究Ⅰでの Fig. 1・2に、中学生、高校生各々の男・女子の比較は研究Ⅰでの Tab 1・2に、中学生と高校生の比較は下の表に記した。

女子の母親に対して持つ関係をみると、中学生では母親に対する親和的な感情と共に、母親から男子より女子の方が社会化の圧力をより強く受けていると感じ、競争・訓練等の社会化の圧力を受け入れたい、しかし、それらの圧力を拒否し、批判したいというアンビバレントな感情を持ち、それらの葛藤を直し、自律したいという欲求も持っているようである。男子は父親の情緒的関係の薄さに比べ、女子の母親との情緒的結び付きの強さがみられ、母親への同一化が早く、母親に批判的ともなり、女性性を獲得していつているようである。高校生になると、女子が母親から社会化の圧力を受けているのは、中学生と同様である。しかし、中学生では母子相互性の認知があったのが、高校生になると、子供から見ると距離を置き、客観的に母親を見ており、母親から親和の圧力を受けている、言い換えれば、束縛して感じており、ここに、母親の子離れしない面があらわれているのではないかと考えられる。

男子の父親との関係をみると、中学生では父親から社会化の圧力を受けているのだが、その結びつきは弱いものであった。高校生になると、

特に中学生ではこの傾向が強いものであった。

性に関しては、中学生では女子の方が心理的な性的成熟が早い。しかし、高校生になると、男子はより現実的な形で性を感じ、異性との現実的な関わりを持ち始めているのだが、女子では、対象との現実的な関わりの薄さがみられ、より、あこがれ、妄想の中で、欲求、性を満たそうとしているようである。ここに、従来から言われている男・女子の性の成熟過程のちがいがあらわれてきていると考えられる。

男・女子共、同性・教師に対する顕著な違いはみられなかった。これは、学校場面での教師、また、同性のみ登場している刺激が今回施用した T.A.T の図版になかったという刺激規定の影響が考えられ、今後の課題と考えられる。しかし、教師の登場するストーリーはなしかったが、学校、勉強、テストというテーマは出現しており、比較的マイナスの圧力として取らられている点から、現在の中・高校生が、学校場面を心理的負担として感じているようである。同性に対しては、中・高校生の男・女子共、親和的な感情は持っているが、男子の方が同性を競争相手としてみやすい傾向を持っているようである。

これまで、中・高校生の対人関係の特徴を見てきたのだが、現在、一般に言われているように、母親の子離れの遅さ、父親の家庭での存在感の薄さ、また、男子において特に、子供の将来への父親の期待を子供に向けながら、子供がそれを干渉して受け取り同一化の対象となっていくなどの問題が感じられ、これらの点が、人格形成にどのように影響しているのか、さらに検討をすすめていきたい。

表・I 中学生と高校生の比較

社会化の圧力をより強く受けていると感じているようである。これは、進学・就職など将来に対して父親が関わり方としているのだが、それら子供は相談相手、同一化の対象として感じるより、父親からの干渉として受け取り、自律したいという感情を持っているようである。また、現実的には、男・女子共、父親の家庭での存在感の薄さを感じており、

欲求	対象	父親	母親	同性	異性	教師	圧力	対象	父親	母親	同性	異性	教師
n. 親和	男子						P. 家族的 支柱の欠如	男子					
	女子	**>			**>			女子	**>	*>			
	統合							統合	**>	*>			
n. 拒否	男子						P. 親和	男子				**<	
	女子	*>						女子					
	統合							統合				*<	
n. 性	男子				**<		* : P < .05 ** : P < .01 > : 中学生 > 高校生の略						
	女子												
	統合				**<								

青年期におけるSelf-Esteemの性差に関する研究

三田 英二
(静岡県済民生事務所)

1. 目的

本研究は青年期の同一性形成の問題に関連し、その中核的役割を演ずると考えらるSelf-Esteem (SE) の性差について検討するものである。本研究ではSEを個人が主観的に重要だとする自己の側面についての評価としてとらえ、自己認知と自己評価の両面からSEを考えようとするものである。なぜならば、個人のSEを考えるとき問題となるのは、総体的なSE (global Self-Esteem) よりも個人的な意味合いの強い次元で自己評価 (中核的Self-Esteem; CSE) と考えるからである。このため、本研究ではSEを単に質問紙により測定される得点でとらえるのではなく、個人にとり重要であるとする自己の側面 (SEを決定する次元) がどこにあるか質問紙により測定し、「重要である」と回答した項目の得点をCSE得点とみている。本研究は先の研究 (三田, 1984) でのSEの決定する次元の因子分析の結果を用い、青年期のSEの性差を検討するものである。

2. 方法

- (1) 被験者 大学生167名 (男子73名, 女子94名), 高校生167名 (男子82名, 女子85名)
- (2) 用具 Janis & Field (1959) の質問紙の邦訳版を点尺度として用いた (SEI)。また、SEの決定する次元を測定するために、このSEIの質問項目を意味が果たらないように短くし、その質問項目が被験者にとり重要であるか否かを問う質問紙を作成し (SEI-B) 重要であると回答した項目のSEIでの得点とCSE得点とした。

表1. 第1因子 (他者評価)

項目	Low	Middle	High
男子	36	35	38
女子	55	45	27

$$\chi^2 = 5.74 \quad p < .10$$

項目	Low	Middle	High
男子	36	25	27
女子	43	46	19

$$\chi^2 = 6.25 \quad p < .05$$

表2. 第2因子 (社会的自己意識)

項目	Low	Middle	High
男子	19	13	17
女子	28	19	7

$$\chi^2 = 6.79 \quad p < .05$$

項目	Low	Middle	High
男子	27	15	14
女子	41	5	5

$$\chi^2 = 11.94 \quad p < .005$$

3. 結果

SEI-Bの因子分析の結果、次の6因子が抽出されている。第1因子「他者評価」、第2因子「社会的自己意識」、第3因子「否定的自己価値」、第4因子「肯定的自己価値」、第5因子「劣等感」、第6因子「コミュニケーション」。

- (1) SEを決定する次元での全ての因子の項目選択数に性差は見られなかった。
- (2) CSE得点については、第1因子に含まれる6項目中2項目 (表1)、第2因子に含まれる6項目中2項目 (表2)、第4因子に含まれる3項目全て (表3) に性差が見られた。これら性差の見られた項目は全て男子が相対的に高いCSEを持つことを示している。

4. 考察

- (1) SEを決定する次元は、全体では性差が見られなかったが、参考までに、高校・大学別に性差を見ると、高校では「否定的自己価値」で女子が高く ($t = 1.79$ $df = 165$ $p < .10$), 「コミュニケーション」で男子が高い ($t = 2.11$ $df = 165$ $p < .05$)。また、大学では「他者評価」で女子が高い ($t = 1.19$ $df = 165$ $p < .10$)。このことは、高校生では、女子がより内面的な自己認知を、男子はより外面的な自己認知をすることを示唆するように思われ、大学生では、女子がより依存적、外面的な自己規定をするように思われる。
- (2) 「他者評価」因子に含まれる2項目や「社会的自己意識」因子に含まれる2項目の男子の相対的なCSEの高さから、社会的・対人的場面での自己の能力への確信といったものが男子の方が持ちやすいと考えられる。また「肯定的自己価値」因子でのCSEの男子の高さについては、高校女子が「否定的自己価値」、大学女子が「他者評価」などの自己認知をし、主体的に自己概念を明確にするに至らないため、このような結果にはなったものと思われる。

表3. 第4因子 (肯定的自己価値)

項目	L	M	H
男子	41	39	21
女子	78	34	11

$$\chi^2 = 12.94 \quad p < .005$$

項目	L	M	H
男子	21	13	19
女子	15	18	7

$$\chi^2 = 5.64 \quad p < .10$$

項目	L	M	H
男子	26	57	40
女子	54	59	21

$$\chi^2 = 15.31 \quad p < .0005$$

学 生 の 自 我 意 識 と 不 安

武 田 徹
(中京大学 体育学部)

〈問題〉 4年制大学で教養課程から専門課程への進級に際し、所定取得単位の不足などの理由から留年する学生の毎年相当数生ずる。入学後の解放感、失望、異なる学科による興味の喪失、学業に対する緊張感の乏しさなどから無為のよう、学期末を迎えざる者が少なくない。現場指導の関係者の側からみれば生き生きとした能動感や主体的感覚の希薄さ、かたしはは消極されるようになった。他方、精神衛生面について保健管理や相談室の立場からUPI等を用いた調査報告がなされてきた。

本研究の目的は学生の留年対策をにらめるための資料作りの一環として、青年後期の自己認知のあり方と自己に関する不安な性格動的特性を調べることにある。

〈方法〉

自己概念や意識を測定する手法は多数あるが、今回はNMHI(名大式精神健康度検査)および、バウムテストを用いた。対象は本学の1〜3年次619名。(男408, 女211)である。なお本調査は心理学の授業の一部として実施された。

NMHIは6つの特性について各20項、計120項目からなる質問紙調査であり、回答は肯定、否定の2件法による。特性は①身体的徴候因子(H)、②自我と自己概念因子(E)、③家族関係因子(F)、④神経症的因子(N)、⑤抑うつ—自較傾向因子(D)、⑥精神分裂病的因子(S)である。これらの特性選定の理由として、報告書(1963)では、精神医学的、臨床心理学的な臨床経歴によると、青年期の自己認知様式、感情体験、他人認知様式が、精神的な不安定さをもたらす要因として最も中核をなすものであり、又精神健康度に対する異常体験としては神経症的、抑うつ的、あるいは分裂病的な体験が、精神健康管理の面での重要な因子と見なせると説明している。尚、質問項目は各因子にのみ特有の内容とは限らず、他の因子と重複する場合もある。

結果の評価は各項の肯定を1点とし、集計された因子別得点を標準化された7段階尺度と照合させる。問題例：H(40)何となく胃の具合が悪く、気がなやまなくある。E(10)過去の失敗をよくよく考えることがよくある。F(40)最近家から飛び出したと思うことがよくある。N(109)自分か他人に病んでいると気にすることがよくある。S(120)以前に比べてこの頃自分の性質が変わったように思う。

〈結果と考察〉

- (1) NMHIの因子特性別の平均得点は表1のごときで男女とも自我E因子が高い。他のNSHDがほぼ同じ得点に続き、下位得点は最も低い。得点は検査作成当時の資料に比べていられし男子は1点低い値を示す。女子は男子よりH因子以外に有意に高い得点がある。
- (2) 表2はH・E因子と他の因子得点間の相関を示した。自我因子は情動性関連のN、D、Sと高い相関が見られ、身体因子とA間とのほゞ同様の傾向がある。
- (3) 表3は肯定回答率とその項目数を示した。E因子のみでなく、N、D、S系統の約1/4の項目では概して高い肯定があり、自我感情の多様性を示唆している。
- (4) 下因子は過去の家族関係や体験感情を尋ねており、自我意識との関連は乏し。得点分布に片寄りがある。
- (5) バウムテストとNMHIとの関係、同一学年次の男子270名に就き、NMHIの得点順位を7段階(多得点、下位(低)各25%ずつの2群(N=134)の描画と比較した。樹木の形態と芽勢動態について所定評価基準に従い2項目以上問題点を有する事例は高得点群にのみ出現する傾向が見られた。($\chi^2=3.61, 0.05 < p < 0.1$)

表1. 各因子平均得点と性差(*- $p < 0.05$, **= $p < 0.01$)

因子	男 M	SD	女 M	SD	性差
H	5.300	3.51	5.700	3.592	*
E	8.386	4.714	7.875	4.292	**
F	2.645	2.526	3.542	2.890	**
N	5.783	3.371	6.549	3.730	ns
D	5.307	3.745	5.781	3.768	*
S	5.547	3.852	6.157	3.445	*
T	33.188	18.28	38.052	17.180	**

表2. 身体因子および自我因子の他因子との相関

	E	F	N	D	S
H因子 M	.613	.332	.649	.606	.558
F	.430	.297	.509	.471	.416
E因子 M	-	.427	.761	.761	.707
F	-	.261	.748	.734	.693

表3. 因子別肯定回答率と項目数

肯定%	H	E	F	N	D	S
40~	4	14	0	5	5	7
20~39	5	5	4	7	8	4
19以下	11	1	16	6	7	7

学生生活の充実感について(2)

○中村昭之

駒沢大学文学部

林 潔

白梅学園短期大学

研究目的: 前回(応心50回 1983)の報告に引きつづいて、大学生の学生生活における充実感の特質を明確にしたい。とくに今回は、達成動機、意欲減退度などとの関連についても考察した。

研究方法: (1) 学生生活の充実感に関する53項目からなる質問紙A(応心50回 1983)のうちから因子負荷量の高い項目を中心に、36項目からなる、5段階評定による学生生活の充実感質問紙Cを作成した。この質問紙を首都圏の私立大学1校の男子学生190人、女子85人、私立短大2校の女子97人、計372人に対して施行した(1984 4月~6月)。またこのうち男子学生61人、女子56人に対して、下山の「達成動機テスト」・広島大学保健管理センター作成の「意欲減退度診断テスト」の項目中、60%以上の学生が意欲減退を表明した23の質問項目をあわせて実施した。

(2) 大学生による充実感についての自由記述の回答内容を検討し、13項目からなる自由記述の質問紙Dを作成し、これを首都圏の私立大学1校の学生、男子77人、女子46人に対して施行した(1984 5月)。

研究結果と考察 1- (1) 平均と標準偏差; 平均と標準偏差ならびにT検定の結果は表(1)に示すとおりである。Tテストの結果は表(1) 平均と標準偏差

	N	$\bar{X}$	SD
太・男	104	128.7	14.0
太・女	76	133.86	9.8
短・女	97	132.5	11.1

大学生男子と女子、ならびに大学生男子と短大女子との間に、いずれも1%以下の水準で有意差が認められた。大学生男子と比較して、大学生女子、短大女子はいずれも平均得点が高く、充実感が高いといえる。1-(2) 性差; 大学生男女間に10項目、大学生男子と短大女子間に15項目、大学生女子と短大女子間に4項目の有意差があった。授業、友人関係、評価、勉学、将来の見通し等の項目であり、いずれも女子学生の得点は男子学生のそれを上回っていた。1-(3) 上位10位までに選択された項目; 3群によって上位10位まで選択された項目「自分のやりたい勉強をつかんだとき」「生きる目標をつかんだとき」「授業に興味をもつて受講できたとき」「自由な時間を好きのように使えるとき」「スポーツをしているとき」「友人を得たと思ったとき」「授業の内容がよく理解できたとき」「講義の内容が把握

できたとき」「大学でよい先生と出会ったとき」「自分の将来の見通しがついたとき」「大学での課題を仕上げたとき」「大学における集団生活がスムーズになったとき」で、男子では、将来の見通し3、授業3、友人関係1、課外活動1、教師1、女子では授業4、将来の見通し3、友人関係2、自由時間1で、男女とも大体類似の項目を選択しているが、男子では将来の見通し、課外活動、教師、女子では授業、友人関係への志向がやや強いことがうかがえる。1-(4) 質問紙Cの得点と、達成動機、意欲減退との間には、それぞれ0.1638、-0.3560の相関係数が得られた。検定の結果、達成動機との間には有意差はなかったが、意欲減退との間の相関係数は($t=4.03$)1%以下の水準で有意差がみとめられた。2 大学生男子77人、女子46人計123人に対して、充実感の度合を「非常に感ずる」から「全く感じない」まで5段階に評定させ、その選択理由を自由記述させた。表(2)はその結果を示したものである。検定の結果($\chi^2=7.858$)で5%の有意水準に達しなかったが、今これを考慮にいれないで大体の傾向を見ると、肯定(非常に、やや)的選択は否定(あまり、全く)的選択よりも多く、男子では「やや」が一番多くついて「あまり」の順であるが、女子では逆に「あまり」が最も多く、ついて「やや」の順位であった。

表(2) 充実感

選択理由; () は選択数を示す。'非常に、やや'(N=68), フラグ・サークル(29), 全体として今ひとつ充実感を感じないので(25), 授業(12), 友人関係(7), 異性関係(4), 勉学と	非常に感ずる	やや感ずる	どうでもよい	あまり感じない	全く感じない	計
男 7 35 12 19 4 77						
サークル活動が両立しない % 5.6 28.4 9.7 45.4 3.2 62.6						
女 8 16 4 18 0 46						
(4), やりたいことがやれる (3), 将来の展望 (3), % 6.5 13.0 3.2 46.0 0.0 78.4						
その他 (13)。'あまり', 計 15 51 16 37 4 123						
全く (N=41) 目的意識の % 12.1 44.1 13.0 30.0 3.2 100						
欠除(何をどうしてよいかわからない等) (12), 空虚感(何をやって面白くない等) (10), 勉学への意欲の欠除 (10), 講義内容の不満 (3), 将来の展望 (2),						

学生生活の充実感について (3)

中村 昭文
駒沢大学文学部

研究目的

本研究は、学生生活の充実感研究の一環として、主として文章完成法に基づいて、この課題への取り組みについて検討しようとするものである。

研究方法

(1)本研究が2報告の質問紙Dの実施結果について、項目10、11、13に関して、その反応を、「全く説明ができていない」—「詳細に説明ができていいる」の4段階評定をおこなう。みゆせて項目12とく、非常に充実感を感ずる、い、やや充実感を感ずる、着、く、あまり充実感を感ずる、い、全く充実感を感ずる、い、着、くを対比して検討した。

(2)学生生活の充実感について、11項目からなる文章完成法の質問紙Eを作成した（これは本研究が1報告の質問紙作成の予備調査の際の自由記述の回答内容をも検討して作成されたものである）。

この質問紙を、首都圏の私立大学2校の学生134人に付して実施した（1984年5月～6月）。

各質問項目に対する反応は、次に従って4段階評定によ、て判定された。

項目1、3、5、6（消極的—積極的態度）

項目2、7（質問紙Dの1～10の領域）

項目4（反省がみられる/非自己受容的—反省がみられる/自己受容的）

項目8（非好意的—好意的）

項目9（非他者受容的—他者受容的）

項目10（不満足—満足）

項目11（時間的展望が乏しい—時間的展望がある）
また、この結果を、〈2.私のできる（できない）こと〉〈7.私が好きなのは〉の回答領域別に分析をした。

(3)質問紙Cと質問紙Eとを、首都圏の私立短大生女子66人を対象に実施した（1984年7月）。そして、両者の将来の相関係数を算出した。

研究結果および考察

(1)質問紙Dの項目10、11、13について、充実感を待つ着と待てない着との比較結果は次のとおりである（df=3 * p<.05）。

項目10〈自分自身をどのよに説明するか〉

男子 $\chi^2=2705$ 女子 $\chi^2=8.036$ *

項目11〈今最もやりたいと思、ていること〉

○ 林 潔
日本文学部短期大学

男子 $\chi^2=8.644$ * 女子 $\chi^2=10.014$ *

項目13〈将来の計画〉

男子 $\chi^2=7.068$ 女子 $\chi^2=8.407$ *

この結果、男子では項目11に、女子では3項目のすべてに有意差が認められた（p<.05）。また、男子の項目13は5%以下の危険率で有意差が認められるには至らなかったが、その方向にあるものと考えることができよう。「現在やりたいこと」「将来の計画」を詳述できること、すなわちこれらに具体的に記述していることが充実感の前提であることが理解できる。

(2)文章完成法の質問紙Eの各項目についての平均と標準偏差は、次のとおりであった。

項目	1	3	4	5	6	8	9	10	11
$\bar{x}$	2.01	2.03	2.26	2.44	2.35	2.45	2.63	2.09	2.13
SD	.80	.70	.60	.70	.68	.61	.66	.81	.78

この結果、設問に付いて最も肯定的に反応されているのは〈9.大学の友人は〉であり、非好意的に反応されているのは〈1.今までは〉であった。友人関係が学生の充実感を支えている大きな条件であることが、ここでも理解できる。

〈2.私のできる（できない）こと〉とは〈への領域別の反応については〈3.教師への態度〉の反応との関係が注目される。〈7.私が好きなのは〉についても類似の傾向がみられた。充実感と教師認知との関係の検討が課題となる。

(3)質問紙Cとの相関のみられた質問紙Eの項目は、〈4.どうしても私は〉（ $r=.283$ ）、〈8.私連へ大学は〉（.286）、〈9.大学の友人は〉（.258）であった。

充実感と、自己、大学、友人の認知との関連性あることがわかる。

自我同一性の研究(X) — 自己受容、疎外感との関係について —

田端 純一郎

関西学院大学カウンセリングルーム

一、目的

自我同一性の内包・外延を明確にするために、自我同一性を操作的に測定した場合に測られる3つの側面(すなわち、同一性感覚、心理社会的発達、実存的ニュアンスを含んだ各側面)とさまざまな人格関連変数との関係について調査を行ってきた。その一連の調査の一環として、今回は自己受容と自己批判、および疎外感との関係について調べてみる。

二、方法

1) 尺度

同一性感覚・側面を測るものとして自我同一性簡易尺度(EIS)を用いた。

心理社会的発達の側面を測るものとしてローゼンサールによるエリクソン心理社会的調査尺度(EPI S)を用いた。

実存的ニュアンスを含んだ側面として、マーシアのエゴ・アイデンティティ・ステータスを適用したが、その測定には加藤厚(1983)の同一性地位判定尺度を用いた。マーシアの分類は同一性達成(A型)、モラトリウム(M型)、フォアクローゼー(F型)、同一性拡散(D型)の4つであるが、分類にあたっては加藤の方法に従ったのでA-F中間型、及びM-D中間型の2つの型が加わり、計6つになった。ただし、テスト施行にあたっては、例えば「私は今、自分の目標をなしとげるために努力している」という項目を6件法で評定させてから、「目標がある場合、それはどのようなものかを記入して下さい。また何故、努力するのか記入して下さい」。あるいは「私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない。」の項目の

あとに、「決断したことがある人は、それは何についてか、それはいつ頃か、いくつでもあげて下さい。」というような質問をつけ加えた。

自己受容、自己批判については加藤隆勝の形容詞チェックリストを使って測定した。そして自己の標準から見た自己を「望ましい」あるいは「望ましくない」と受け取っている程度、すなわち、加藤のいう自己受容指数Ⅱ、自己批判指数Ⅱを用いた。

疎外感については宮下と小林(1981)の尺度を用いた。これは、4つの下位尺度、孤独感(12項目)、空虚感(9項目)、圧迫拘束感(10項目)、自己嫌悪感(13項目)、計44項目から成っている。ただし、原法は7段階評定であるが、5段階評定に改めて実施した。

2) 対象と方法

保育専門学校2年生(大学2年相当年齢)の女子35名に集団法で上記5つのテストを実施した。また、大学3年生の女子36名に疎外感尺度を除く4つのテストを同じく集団法で実施した。

三、結果と考察

エゴ・アイデンティティ・ステータスのそれぞれの型に分類された人数と、それぞれの型の自己受容指数および自己批判指数の平均と標準偏差(SD)を表1に示した。それぞれの型に分類された人数が少ないので検定は行なわなかったが、A、F系とM、D系の間に差が見られる。表2にはステータスのそれぞれの型疎外感の下位尺度との関係を示した。ここでも表1と同じ傾向が見られる。EIS、EPI Sについては未回収分があるのですべてE回収してから集計を行う。疎外感についても資料を追加し、発表する予定である。

表 1.

型	人数	自己受容指数		自己批判指数	
		平均	SD	平均	SD
A	4	73.5	6.4	11.9	8.3
A-F	7	72.3	15.6	16.9	12.6
F	2	81.4	9.7	10.5	1.9
M	8	51.2	23.4	18.8	10.3
M-D	48	45.6	20.5	31.1	18.6
D	2	46.6	45.7	37.3	23.1

表 2.

型	人数	孤独感		空虚感		圧迫拘束感		自己嫌悪感	
		平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
A	1	23		22		27		35	
A-F	5	20.2	6.1	21.8	4.0	22.4	5.7	31.2	6.7
F	0								
M	0								
M-D	23	26.0	5.1	30.0	4.8	24.6	6.3	38.7	5.6
D	2	25.2	10.6	29.5	2.1	28.5	10.6	41.0	14.1

日本，児童，感情，研究 XVII-221- 移行

児玉 省 阿部 明子 中田 カヨ子 〇加 友 明子
(児玉 教育研究所) (東京 家政大学) (東京 成徳短大) (星美子 園短大)

○ 本研究は、すでに発表してきたように日本の児童が日常生活の中でいかなる事情でいかなる状況・事象においていかにうに表出し、どうように治めていくかを追究している。なるべく実験的・理論的な面を離れて、自然条件下で観察して約5000エピソードを採集し分析している。以下にPsychodynamicsの観点から考求する。ここでは、生起した感情のうように移行するかについて述べる。

○ 移行のタイ7°

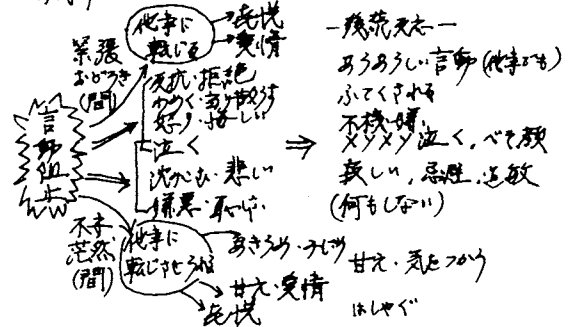
- (1) エピソード中、初めは感情は比較的单純で単一的な方向に流れるが(複合化の割合20%)、移行していく間に複合化もすすむ。(主なる発現中20%)
(2) 同系統の感情が移行するより、連続する場合があるが、基調になる方向によって詰まったり多い類がある。〈不承・恐怖〉には〈怒り〉〈しつと〉〈悲しさ〉〈悔しさ〉、〈愛情〉には〈甘え〉には〈程々つゝ気分〉と漸進系では〈不承〉〈しつと〉〈悔しい〉〈悲しい〉など。
(3) 競合性がある。強い比喩が生じる怒りには、内省的な悲しさがせり合つて表われ→→→→うように二次・三次と移行していく例など。
(4) 内省的な方向に複合化する類がある。例へば「死について悲しさに発するが、自分不足な方向に内省から自分に腹を立て、怒り・悔しさと混在させる複合なやせせない情緒」と長くつた例など。
(5) 〈泣く〉に伴つて表出は、移行中58.6%にみられる。泣くことで、①鎮静化する。(複合感情)②より加増・強化される。③周囲の注意や援助を促す、④事態にやりがつく、などの類がある。
(6) 場面による差異がある。家庭では、〈愛情〉〈孤独〉に発するもの、二次三次では〈怒り〉〈悲しさ〉〈しつと〉〈悔しい〉などの相乗的・否定的な移行をする例の多くなる。しかし屋外では〈不承・恐怖〉に発するものが〈不承と求むる愛情〉〈孤独〉に移行していく。
(7) 概して、発現の過程的に放物型の移行は終結迄の時間的経過が、演進の単調な方向よりも比して短い。外見上は一た終結・鎮静化かに見えても mood, feeling とした情緒状態と長く保つてゐる例と見取ることがある。これは、今後生理学的・神経系の研究とまらぬ。
(8) 移行中しばしば見られる複合感情は、単一的な感情が加算されていくというよりはむしろ相乗的にかか

食わされぬ力として御くことが求められる。

- (8) —エロゾードの滅れの中で、しばしば無・声門がた
られる。ことに移行中には、感情には洋画が含まれる
のであつてこれらを通じてさうに行ふ。

○考案

- (1) 〈花悦〉は比較的貞直に流れていく。〈変情・甘え〉と結がついて移行するよりは33%で多いが、序文内では花悦⇔変情が相互に結ぶ合わせられるがうすすぬ。屋外では花悦は長続きせず、点在する花ばかり悔しやう怒りや不幸やをめで結がついて、めまぐるしく移りすすむ傾向をみせる。
- (2) 〈変情〉子のもは愛されない・甘えぬ・類と愛しない類とか早く親うれる。双方立場と混在させながら移行していく。しかも変情も長く連続レフグする力は弱いことが示唆される。
- (3) 言葉阻止による事例と下に示す如く、多岐に枝分れして移行することになる。



- i 予期しないう事態になして、不斉・おどろき・恐怖を生起するが、この段階で他事に転じ解決する移行は抵抗・変情に何き終結する。しかし、抵抗感の強い場合には、反抗的・拒否的・逃避的な二次・三次の移行とする。
- ii 中心的な表出は怒りであるが、すでに不当に扱われなく悔しさや自分の無力さ梁みなどもある。悲しみなどは複合化しつつ流れていく。怒りにはこの他排拒・しっぺをのこ混在し、泣く・表現となるものも多い。怒りを含む場合感情は60%、さうにその50%には排拒感の多い複雑な面が見られる。
- iii 関連する人の感情表出と分離が、移行に影響が生ずるが、互いに作用しあうこともあれば、一方印である例もある。個別の事例が明かにしない。

幼児・児童の感情の研究 XⅥ (その2)

児玉 省 阿部 明子 加藤 明子 ◦中田 カヨ子
(児玉教育研究所)(東京家政大学)(星美学園短大)(東京成徳短大)

目的:本報告では 前演者の報告の中で示された感情の移行のタイプの中でも多くみられる怒り⇔悲しみの移行の状態をとりあげ、その表現の類型を具体例で示しながら、移行の状態、原動力を検討することを目的として研究をおこなう。

方法:これまでに集めた事例のうち、怒りと悲しみの相互移行をとりあげて、検討を試み、類型化を試みる。

結果及び考察:怒りは、直線的に流れるのが、ふつうであって、自分の思った気持ちを衝動的にはきだしたのがふつうである。ただし、感情は、外からの刺激によっては直線的な傾向からずれたり、直線的傾向が停止されることがある。その時、多いのが、怒りと悲しみの相互関係である。

I.その状況の変化・移行については、次の点が考えられる。① 怒り・悲しみの原因をとり除く。② 母親、保母、友だちなどのなくさめ、はげましなどによって、子どもの心理状態をかえようとする。③ 他人からの強圧的な圧力が加わって、子どもの衝動的感情を変えようとする。または、感情を弱くする。④ 自分の気持ちに変化がおこって、自分の気持ちをコントロールする。

以上のように、感情が変化して移行する場合は、その状況が、外的な刺激によって変化する、それに伴って、感情も、変化、移行する。また、子ども自身の気持ちが変化し、それに伴って感情も、変化、移行する。

II. 怒り⇔悲しみの表現類型

A:叱られる——ほとんどが、自分の上り者より叱られたり、グチを言われたり、嫌味をいわれる。

① 思いもしない事で叱られる

事例1:ヤッと暗れたので、外に出ていいと言われて、喜んで、外に出たが、すぐぶもどされて「なぜ、外に出たのか」と言われる。(6歳、男児)

② 予想に反して、期待に反して

事例2:先に、手を出した子は叱られず、自分だけ激しく叱られ、手をたたかれた。(4歳、女児)

あやまっても許してもらえない。[怒り⇔悲しみ]

B:責められる、からかわれる

① すでに自分で気づいていることを指摘される

事例3:スポーツ刈りにした翌日、友だちにからかわれる。(4歳、男児) [悲しみ→怒り]

事例4:成績が悪いテストの答案を勇気をだして見せた。「どんなのでも見せなさい」と言われていたのに、突然悪いことで責められた。(4年男児) [悲しみ→怒り]

事例5:人前で、再び注意される。(6歳女児) [怒り→悲しみ]

② とばかりで責められる

事例6:けんかを横で見ているとき倒され、先生には「また、あなたがやったのね」と責められ、「私じやない」と言っても聞いてもらえない。(4歳女児) [悲しみ→怒り]

事例7:笑いかけたのに、不機嫌な子につつかかれて、「見るな!」と言われた。(5歳男児) [悲しみ→怒り]

C. 無視される、取り残される

① 期待外れ

事例8:折り紙をくばるのをはずされ、保母に言いかけるが、気づいてもらえない。(5歳女児) [怒り→悲しみ]

② 疎外感

事例9:ボール投げが下手で出来ない子は列からはずされる。(5歳男児) [悲しみ→怒り]

以上の例でみられるように、子どもの感情で、怒りと悲しみは、時には重複し、時には、互いに移行しやすい状態にある。それらの感情の出現しやすい状態は次のような場合に多くなっていることがわかる。

1. 外力を受けた場合:叱られるなど自分の立場を攻撃される、自分の納得のいかない場合は、怒りとしてあらわれることが多い。自分で納得のいく場合は、悲しみの感情がふりやうすい。

2. 無視された場合:仲間はずれにされたり、保育者などおとなに無視される場合、悲しみの感情が多くふりやうすい。時間の経過とともに「なぜ」の感情が伴って怒りへ移行しやすい。

まとめ:感情は、1つの流れとして精神的・動的に苦える場合、その状態は、外からの刺激などの圧力が加わって、また自分自身の心的変化とともに、変化、移行することが多い。

高齢者の高達成感と精神的健康度の研究(I)

本明 寛 織田 正美 ○ 糸伯 松信 雄 黒岩 誠 谷口 幸一
(早稲田大学) (東邦大学) (国国女子短大)

問題提起および目的

高齢者の心理的要因を明らかにするための研究の一環として、精神的健康度、社会的自信、気力の充実度等を調べる検査用紙を作成した。この検査用紙については後述する。今回某市の公的施設で主催している高齢者のための教養講座に参加した方々に回答を願い、回答された方を被験者として同時に、高達成感を持つとした。達成感の測定によって抽出した群ではなく、行動レベルでの評価である。それは積極的に講座に参加し、自己研鑽に努めている者と、回答は8項目2/頁におよび、かなりの努力を要するもので、非強制、無報酬で協力された者より判断。専業講座参加者400名に配布。回収されたのは不備を含む100名分であった。今回この高達成群に属する者の健康度、社会的自信、パーソナリティの積極的側面を検討することを目的としている。

方法

被験者: 男60代25名 男70代22名、女60代27名、女70代12名 計86名

検査用紙の構成: 1) life historyの調査、学歴、職歴、結婚歴、家族構成、過去と現在の経済状態および健康状態の調査、2) life eventの調査、長い人生で現在まで影響を及ぼしている、印象に残る体験の記述、3) 文章完成法(SCT)による成熟度、Hepner H.W(1978)の成熟度テストの質問項目を参考に、文章完成法の形式に改め、10項目を抽出したものを使用、4) 文章完成法(SCT)による老人のPersonality Typeの分類、老人用SCT項目(下仲、村瀬1975, 1976)のうち11項目を利用、5) 社会的自信度調査、文部省青少年対策本部(1981)の国際比較調査にある青少年の「自信の源泉」調査の項目をわが国の高齢者用に改作し、10の質問項目にしたものを活用、6) morale調査、Lawton, M.P(1972)らによって作成されたPGCモラールスケールの翻訳版を使用、7) 指導法形式による老人用達成動機尺度、8) パーソナリティの積極的側面の評価、従来から使用されているパーソナリティ・テストを参考に60項目からなる質問項目を設定し、人格特性として、指導性、協調性、行動力、慎重性、創造性を評価する。

分析視角: 今回は特に5) 社会的自信度、6) morale

調査、8) パーソナリティの積極的側面の評価に焦点を合せ、検討する。

結果と考察

表は男女別、年齢別の5) 社会的自信度、6) morale調査の平均値と標準偏差である。またパーソナリティの積極的側面の具体的内容は、支配性から独創性までの12特性である。社会的自信度は10項目Yes、Noの二件法であるから10点満点となる。6) morale調査は17項目で同様17点満点である。パーソナリティ特性は各特性5項目二件法で、満点は各5点である。男子70代の平均8.5は相当高い数値であると思う。老齢化するに従って社会的自信を失うというのが、一般的考えのように思うが必ずしもそうではない結果がでている。男性の方が女性より、70代の方が60代よりわずかに社会的自信度が高い。次に高齢者の意識の指標となるモラールの得点を見ると、男子70代が最も高い値を示している。社会的自信と同じように男性の方が女性より、70代の方が60代より高い値を示している。パーソナリティの積極的側面を見ると、4群に共通して高い得点を示しているのは、責任感、細心性、共感性である。男性では特に低い得点はないが、女性では支配性が低い。高達成高齢者のパーソナリティ像とは仕事に対して男勝り、責任感が強く、他人に対して思いやり深く、情緒が比較的安定していることが推察される。

表 高達成高齢者の精神的健康度一覧

項目	m60	m70	f60	f70	m	f	60	70
社会的自信度	mean	7.1	8.5	7.0	6.3	7.7	6.8	7.1
	s.d	2.28	1.65	2.16	2.15	2.10	2.15	2.20
モラール尺度	mean	12.3	14.0	12.2	11.6	13.1	12.1	12.3
	s.d	3.34	2.59	3.23	4.68	3.09	3.65	3.25
1 支配性	mean	2.3	2.6	1.7	1.9	2.4	1.8	2.0
	s.d	1.65	2.18	1.89	1.92	1.90	1.87	1.78
2 自己信頼性	mean	2.6	3.6	2.4	2.5	3.1	2.4	2.5
	s.d	1.26	1.22	1.36	1.51	1.34	1.38	1.30
3 権威性	mean	2.8	3.2	2.4	3.3	3.0	2.7	2.6
	s.d	1.32	1.44	1.55	1.49	1.38	1.56	1.44
4 社交性	mean	2.3	2.8	2.3	2.6	2.5	2.4	2.3
	s.d	1.49	1.60	1.32	1.69	1.54	1.42	1.39
5 共感性	mean	3.8	4.0	3.5	3.5	3.9	3.5	3.7
	s.d	1.18	1.02	1.14	1.00	1.10	1.08	1.16
6 活動性	mean	2.8	3.3	3.3	2.7	3.0	3.1	3.1
	s.d	1.21	1.08	0.83	0.99	1.16	0.91	1.05
7 持久性	mean	3.7	4.1	3.6	3.0	3.9	3.4	3.6
	s.d	1.35	1.04	1.30	1.28	1.22	1.31	1.31
8 細心性	mean	3.8	3.8	3.6	3.9	3.8	3.7	3.7
	s.d	1.15	1.33	1.39	0.90	1.23	1.25	1.27
9 情緒安定性	mean	3.2	3.7	3.8	3.2	3.4	3.6	3.5
	s.d	1.16	1.12	1.21	1.12	1.41	1.21	1.45
10 責任感	mean	4.2	4.6	4.3	4.2	4.3	4.3	4.2
	s.d	1.20	0.86	1.25	0.94	1.06	1.15	1.22
11 思考性	mean	2.6	3.2	2.8	3.3	2.9	3.0	2.7
	s.d	1.66	1.45	1.48	1.23	1.58	1.41	1.56
12 独創性	mean	2.7	3.0	2.8	2.6	2.8	2.4	2.8
	s.d	1.51	1.73	1.53	1.57	1.61	1.52	1.51
m: 男性 f: 女性 60: 60代 70: 70代								

高齢者の高達成意欲と精神的健康度の研究(Ⅱ)

本明 寛 織田正美
(早稲田大学)

糸谷信雄 黒岩誠
(東邦大学)

谷口幸一
(磐国女子大学)

問題提起および目的

研究Ⅰで高達成意欲の高齢者の社会的自信とPGCモラール尺度の総得点の4群の平均値を算出した。今回の研究では高達成群に比べ、対照群が設定されていないので、同年齢の母集団と比較してどの程度高い得点であるのか明らかにされていない。研究Ⅰで述べたように、行動レベルでの判断であるが、life historyでの字、職などを見ると、かなり高い字で、しかも高い階級にある被験者であることが明らかとなった。そこでこれらの方々の社会的自信度10項目とPGCモラール尺度17項目のYes、Noの出現率を調べることで、高達成高齢者から、どの領域の自信やモラールにYes、Noを回答しているかを調べることで、高齢者の意識を探る。

方法

被験者、検査用紙は研究Ⅰと同じである。

一、社会的自信度 このスケールは総理府青少年対策本部(1981)の国際比較調査にある青少年の「自信の源泉」を調べる項目および構成の視点を参考にしながらわが国の高齢者の自信の源泉となると考えられる10の質問項目を作成し、「はい」「いいえ」の2択法で回答を求める。各質問につき「はい」と答えたとき評点1を与え、全項目の総統計をもって、対象者の自信度スコアとする。二、モラール このスケールはLawton(1972)らによって作成されたPGCモラールスケールであり、わが国でも近年、高年齢者の情緒的適応度を測る有効な指標として、多くの研究会に使用されているものである。このスケールは17項目の質問からなりそれぞれの質問において生活適応上、望ましいとされる方向の回答をした場合に、評点1が与えられる形式となっている。全項目の総統計をもってその個人のモラールスコアとなる。一高年齢者の人格特性と成熟度に関する研究 精神衛生研究29号 谷口他

結果と考察

表Ⅰは、社会的自信度10項目のうち、紙面の都合上、高齢者に特有の傾向を示している項目3、性差がはっきりしているもの項目4と7、年齢差が大きい項目9、高達成群の特色を示している項目10を掲載した。項目3の自己判断力に対して、男子高齢者の自己評定の高さを、またある種の頑固さの反映と思われる。

項目4の健康度は男子70代が相当自信を持っているのに対して、女子70代は全く逆である。項目7の社会的役割の点では、仕事の有無による性差を反映しているように思われる。項目10、まだまだやれるという意識は、男女共相当高いものである。これが高達成高齢者群の特色と考えられる。

表はモラール尺度17項目のうち紙面の都合上、特徴的なものを掲載したものである。項目6に注目すると、男子は70代、女子は60代が厳しめと感じる割合が少なく、女子60代は現役として活動しているためと思われるが、男子70代は時代的背景を反映していると思われる。項目6は、社会の第一線より引退したという意識の反映で、女子60代のなかまだ家庭の主婦として現役であることを示している。項目7は性差が明確である、女性は晩年まで気にするよりも男性より多くかかえていることを示している。項目15は、性・年齢による満足度の割合が高い、これは講座に参加できる精神的、経済的余裕の反映である。

表1. 社会的自信度

質問項目	肯定	否定
3. 日ごろ、自分の判断はまちがっていることは少ない。	m60 22(91.7) m70 19(90.5) f60 20(87.0) f70 7(63.6)	2(8.3) 2(9.5) 3(13.0) 4(36.4)
4. 私はいたって健康である。	m60 17(68.0) m70 18(81.8) f60 12(46.2) f70 3(27.3)	8(32.0) 4(18.2) 14(53.8) 8(72.7)
7. 自分の過去の生き方や社会的役割(業種など)に満足している。	m60 15(60.0) m70 17(77.3) f60 13(52.0) f70 6(54.5)	10(40.0) 5(22.7) 12(48.0) 5(45.5)
9. 私はよその人に感謝されることが多い。	m60 12(48.0) m70 18(81.8) f60 17(73.9) f70 5(50.0)	13(52.0) 4(18.2) 6(26.1) 5(50.0)
10. 何でもやる気になれば、私はまだまだやれる。	m60 21(82.0) m70 19(86.4) f60 22(84.6) f70 9(81.8)	4(16.0) 3(13.6) 4(15.4) 2(18.2)

m: 男性 f: 女性 60: 60代 70: 70代

表2. モラール尺度

質問項目	肯定	否定
3. さびしいと感じることがありますか。	m60 13(54.2) m70 16(72.7) f60 19(70.4) f70 6(54.5)	11(45.8) 6(27.3) 8(29.6) 5(45.5)
6. あなたは年をとって前よりも役に立たなくなったと思いますか。	m60 10(41.7) m70 8(38.1) f60 5(18.5) f70 5(45.5)	14(58.3) 13(61.9) 22(81.5) 6(54.5)
7. 心配だったり、気になったりしてお世話になることがありますか。	m60 8(34.8) m70 5(23.8) f60 15(55.6) f70 5(45.5)	15(65.2) 16(76.2) 12(44.4) 6(54.5)
15. 今の生活に満足していますか。	m60 22(88.0) m70 21(95.5) f60 23(85.2) f70 11(100.0)	3(12.0) 1(4.5) 4(14.8) 0(0.0)

m: 男性 f: 女性 60: 60代 70: 70代

数値は頻度(%)

問答法による人生観同定の試み(2)

○ 斎藤 幸一郎 千田 茂博
(慶応義塾大学文学部)

目 的

前回、われわれは、問答法とでもいうべき方法によって、被験者の人生観を同定するためのひとつの手続を開発したが、本研究は、われわれの方法によってつかまえられる人生観がどの程度に客観性のあるものであるか、そしてまた、客観性を高めるためにさらにどのような考慮を払う必要があるか、を追究するために行なわれた。

方 法

材料——1)分類カード;前回の研究で用いられたもの。すなわち、「人生とは・・・」といった10~20字程度からなる短文38箇を、それぞれ、縦50ミリ、横85ミリの大きさの38枚のカードに横書きしたもの。2)人生観類型カード;C. Morris によって設定された13箇の類型中の10箇に手を加え、それぞれ、100~130字程度のできるだけ流暢な文にしたものを縦75ミリ、横125ミリのカードに横書きしたもの。

手続——実験は6名の成人の被験者について個別的行なわれた。まず分類カード38枚を順不同にして被験者に手わたし、「気に入ったもの」、「気に入らないもの」、「その他」の3群に分類した上で、前二者については、それぞれ順位をつけてテーブル上にならべてもらった。つぎに、それら順位づけられた結果を話題として、面接者(実験者)は、被験者の「人生についての見方や考え方を可能なかぎり共感的かつ統合的に理解することを目指して、自由に被験者と問答を行なった(約30~60分)。問答のプロセスはテープ録音された。問答終了後、こんどは人生観類型カード10枚を被験者に手わたし、気に入ったものから順に順位をつけてもらい、その順位を記入用紙に記入して密封してもらい、以下に述べるブラインド判定の妥当性をみるための材料とした。

ブラインド判定は、面接者と、面接場面にいなかった第三者とが行なった。すなわち、各被験者が、人生観類型カードについてどのように順位づけを行なったかを推定して記入用紙に記入し、後に照合を行なうための材料とした。但し、第三者は、まず、被験者による分類カードでのデータのみに基づく判定を行ない、その後、こんどは問答プロセスの録音を聴取しつつ、あらためてもう一度順位づけ判定を行なった。

結 果

表1に示された結果によれば、一般的傾向として、10箇の人生観類型に関して被験者自身によってなされた順位づけと最もよく一致していたのは、第三者による問答録音聴取後の判定結果であった。

このことから、問答法による人生観同定に際しては、面接者が単に問答を行なったという体験のみにもとづくよりも、むしろ、被験者が眼の前にいない場面で、問答プロセスの録音をあらためて聴きなおしながら、いわば、心にゆとりある状態で同定を試みる方が正確な同定に近づくことになると思われる。

表1. 「人生観」順位における被験者、面接者、第三者間における一致率

		被験者との一致率				面接者との一致率				第三者内一致率
判定者 被験者	面接者	第三者		全	第三者		全	全		
		分類データのみに よる	問答録音聴取後		分類データのみに よる	問答録音聴取後				
第1位のみに	A	0/1	0/1	0/1	0/3	1/1	1/1	2/2	1/1	
	B	1/1	0/1	0/1	1/2	0/1	0/1	0/2	1/1	
	C	1/1	1/1	1/1	3/3	1/1	1/1	3/2	1/1	
	D	0/1	1/1	0/1	1/3	0/1	1/1	1/3	0/1	
	E	1/1	1/1	1/1	3/3	1/1	1/1	3/2	1/1	
	F	0/1	0/1	1/1	1/3	0/1	0/1	0/2	0/1	
	全	3/6	3/6	3/6	2/18	3/6	4/6	7/12	4/6	
	%	50.0	50.0	50.0	50.0	50.0	66.7	58.7	66.7	
上位3位まで	A	2/3	2/3	1/3	5/9	2/3	1/3	3/6	2/3	
	B	2/3	1/3	2/3	5/9	1/3	2/3	3/6	2/3	
	C	2/3	2/3	2/3	6/9	2/3	2/3	4/6	2/3	
	D	0/3	1/3	2/3	3/9	0/3	1/3	1/6	1/3	
	E	2/3	2/3	2/3	6/9	2/3	2/3	4/6	2/3	
	F	1/3	1/3	2/3	4/9	1/3	2/3	3/6	1/3	
	全	9/18	9/18	11/18	27/54	8/18	10/18	18/36	10/18	
	%	50.0	50.0	61.1	53.7	44.4	55.6	50.0	55.6	
上位5位まで	A	3/5	3/5	2/5	8/15	2/5	2/5	5/10	4/5	
	B	4/5	4/5	5/5	13/15	3/5	4/5	7/10	4/5	
	C	3/5	4/5	5/5	13/15	4/5	3/5	7/10	4/5	
	D	2/5	3/5	5/5	10/15	2/5	2/5	4/10	3/5	
	E	2/5	2/5	2/5	6/15	4/5	4/5	8/10	5/5	
	F	5/5	3/5	4/5	12/15	3/5	4/5	7/10	3/5	
	全	19/30	19/30	23/30	61/90	18/30	19/30	38/60	23/30	
	%	63.3	63.3	76.7	67.8	63.3	63.3	63.3	76.7	

人格に関する心理学的研究 (1)

○ 中 北 茂 牧 野 晋 及 口 郁 富
(駒沢大学文学部) (駒沢大学文学部) (駒沢大学文学部)

〔研究目的〕

Eysenck (1967) は、MPIにおけるE尺度に関する行動差が、上行性網様体賦活系の各部における閾値差と同一視され、N尺度における行動差は、視床下部等の内臓系における覚醒の閾値差と同一視されると考えた。Fenton ら (1967)、Broadhurst ら (1969)、Gale ら (1969, 1971) は、脳電図を指標として、MPIによる被験者のサンプリングを行ない、その類型との関係を検討している。一方、Häseth ら (1969)、Stelmack ら (1977)、Campbell ら (1981) は、誘発電位を指標として、EPIによる被験者のサンプリングを行ない、同様の研究を行なっている。しかしながら、岩井 (1975)、細部 (1976) により、質問紙法 test 得点の時系列的変動の存在が明らかにされており、従って、これらの研究に関しては、第に、測定時における特性として議論される必要性が示唆されている。

本研究は、これら一連の研究を基に、質問紙法によつて得られた性格特性が、脳誘発電位にどのように反映されるかを検討した。

〔研究方法〕

被験者：MPIによりサンプリングされた本学学部生 8 名 (図1)。内訳：男4名、18才～22才、女4名、19～23才。

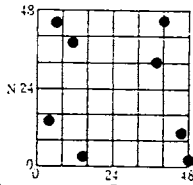


図1. 被験者

装置及び導出部位：誘発電極；Fz, Cz. 不関電極：左右両耳夾結合。アース：鼻根部。脳波計：日本電気三栄製EEG 1 A 96, time constant: 0.3. データ・レコーダー：TEAC・XR-30. シグナルプロセッサ：日本電気三栄製AT 08. X-Yレコーダー：日本電気三栄製8 U 11。

条件及び手続：被験者をシールドルーム(防音暗室)の音楽椅子に楽な姿勢で座らせ、眼前2mの位置にセットしたスピーカーより、50回の音刺激(8000Hz, 64dB, duration: 20msec, interval: 5980msec)を与えた。MPIは、測定直後、電極等を装着した状態で自然に行なった。なお、EOGを同時記録し、アーチファクトの混入していないものを30回平均計算した。

〔結果及び考察〕

本実験の結果、内向性群のN₁-P₂及びP₂-N₂の振幅

が、外向性群のそれより大きいことを示している(図2)。Stelmack らも、向性の次元と誘発電位成分(N₁-P₂)の振幅が、内向性被験者において有意に大きいという結果を得ている。しかしながら、本実験(8000 Hz, 64 dB)と、Stelmack らの実験(500 Hz, 80dB)とは、刺激の物理的特性が異っており、直接の比較は難しい。

Eysenckは、これらの差異を皮質活動のレベルと関連付けているが、解釈する問題も多く、まず、被験者の数、サンプリングの方法、あるいは、実験状況のあり方などを含めて検討中である。

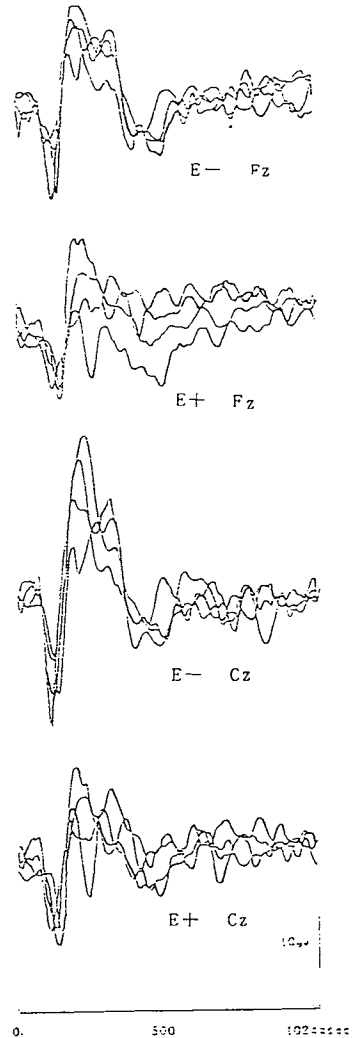


図2. 各群における誘発電位

幼児をもつ母親の養育態度について — 現実と理想におけるズレ —

大 塚 一 郎
(日本大学 文学研究科)

〔問題と目的〕 幼児期における母親の養育態度が幼児の人格形成に大きなかわりをもつことはいうまでもない。しかし子どもに対する意識、社会的環境の変化などにより、母親が子どものしつけや教育が大切と感じながらも実際には行き届いていないなど、母親の意識と行動にはズレが生じやすい。このことから本研究では、幼児をもつ母親の養育態度における現実と理想のズレの一面面について検討を行なう。

〔方法〕 調査対象は都内の2つの幼稚園児の母親273名、手続きは母親に対して質問紙調査を行なった。調査のための質問紙は田研式親子関係診断テスト(両親用)第一部から40問を選出し、それを参考に支配服従、保護、拒否の4つの分野が見られるよう作成した。各分野について10項目。回答法は3件法。なお回答に際して、実際にどうしているか、理想的にはどうかという2方向からの回答を求めた。

〔結果と考察〕 質問紙の回収率は83%。226名そのうち記入もれなどのミスのなかったもの197名を分析の対象とした。母親の平均年齢は34.8歳、記入上対象とした子どもの平均年齢は4.8歳であった。また子どものきょうだい数はひとりっ子66名、2人きょうだい以上131名であった。Table 1, Fig. 1 は各分野の項目を得点化して得られた現実と理想における態度のズレである。Table 1, Fig. 1 に見られるように全ての分野で現実のMは理想のMを上回っていた。かつ支配、服従、拒否において現実理想間に $P<.001$ で有意な差が認められた。またより具体的な

ズレの検討を行なうために差の認められた3分野において現実理想間の差をR-I群(現実時の点が理想時より高い群)I-R群(理想時が現実時より高い群)という2群に分け比較検討を行なったところFig2~4のような結果を得た。各分野内の2群において差は0から

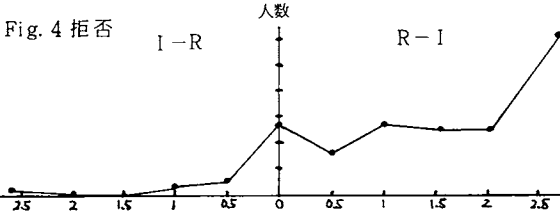
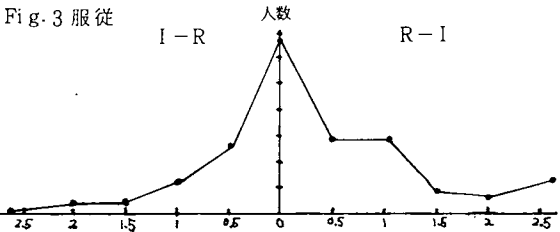
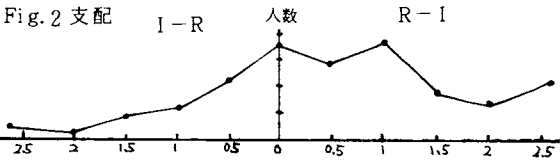
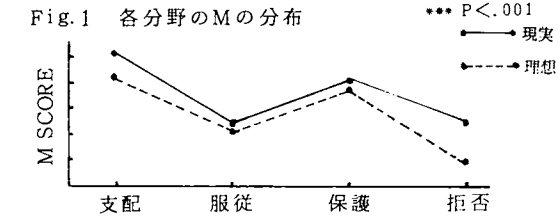


Fig. 2~4 各分野におけるズレの分布

7まで広く分布していた。特に拒否においては86%の母親がなんらかのズレを示していた。各群のMとSDは支配I-R群M 1.04 SD 0.78 R-I群M 1.48SD 0.1 服従I-R群M 0.78 SD 0.54 R-I群M 1.2 SD 0.83 拒否I-R群M 0.9 SD 0.73 R-I群M 2.03 SD 1.13であり3つの各分野内の群間において $P<.01$ で有意な差が認められた。これらの結果から現代の幼児をもつ母親の理想と現実面の態度のズレは明らかであり、それらは現代における育児の難しさを指唆するものであると考えられる。今回の分析においては、あくまで全体的なズレの分布について検討したが、今後より具体的な項目分析、およびズレの発生に影響すると思われる母親をとりまく社会的環境などの要因検討の必要性が示唆される。

Table 1 各分野のMとSD

分野	r	現 実 時		理 想 時		検 定
		M	SD	M	SD	
支 配	.46	5.07	1.37	4.38	1.26	***
服 従	.68	2.56	1.32	2.31	1.27	***
保 護	.63	4.03	1.62	3.91	1.40	
拒 否	.43	2.64	1.52	1.05	0.88	***



食事時のコミュニケーションのパーソナリティに与える影響についての一考察

大野 敦子 大村 政男 〇手 島 茂 樹
(国際学院埼玉短期大学) (日本大学文理学部) (国際学院埼玉短期大学)

Ⅰ目的 家庭内の食事のあり方が、子ども達のパーソナリティにどのような影響を与えているのか。前回までの研究で食事行動とパーソナリティ形成面との関連は食事時のコミュニケーションが重要な要因であることを見出している。そこで以下の二点がここの目的となる。

1. 食事場面以外にもコミュニケーションはおこなわれるが、他の場面より食事時の会話が重要でパーソナリティと関連をもつといえるか。

2. さらにこの仮説が支持されるならば、食事場面でのコミュニケーションを促進する諸条件はなにかな。

Ⅱ方法並びに手続き

1. 目的1は次の二点より考察する。

(1)コミュニケーション場面としての食事時の占める位置 会話場面と会話量より食事時の重要性を分析する。場面としては行動面より9場面(例、おこづかいをもらう時、相談をする時etc.)を設け、父と母を対象とし、小学生の頃と高校から現在までの二段階各々について会話の多し順に三つを選択させる。量に関しては一日の流れより10場面(例、起床、朝食etc.)を設け、各々小学生の頃と高校から現在までの二段階各々について、非常に話すからほとんど話さないまでの6段階評定をさせる。

(2)食事時のコミュニケーションとパーソナリティとの関連について (1)の前者の10場面毎の会話量よりよく話している群とほとんど話していない群とに分けそれぞれの群間において、家庭のイメージ、両親への態度、パーソナリティ検査の回答の差異を分析する。家庭イメージは対を用い(例、明るい-暗いetc.)7段階評定を、両親への態度は試案した7項目(例、よく理解者だと思ふetc.)より一つを選択を、またパーソナリティ検査としては、YG、顕現性不安検査、田中向性検査、簡易態度検査、エゴグラムを用いる。

2. 目的2については、食事時によく話している群とほとんど話していない群に分け、試案した項目[食事内要因(衛生的・栄養的・人間関係的・食卓環境的・作法的・愛情的配慮の12項目)と食事外要因(両親が明るい人等3項目)間の差異を分析する。

対象：大学一年生228名[男118名(都市55名、農村63名)女110名(都市48名、農村62名)]

調査日時：昭和58年10月

Ⅲ結果並びに考察

1. 目的1に関して

(1)コミュニケーション場面としての食事時の占める位置について

コミュニケーションは主に食事場面となされ、かつ量的にも多い。また、段階別・性別における差がみられない。ここに年齢・性別問わず食事場面の重要性が伺われる。

(2)食事時のコミュニケーションとパーソナリティとの関連について

①夕食、団らん並びに朝食の差が他の場面よりも大きくみられる。よく話している群は家庭に肯定的イメージをもち、両親に対してもよい態度をもち、パーソナリティ的にも問題がないといえた。つまりY-Gでは情緒も安定し、社会適応がよく、外向性の結果が多く、不安テストでは不安が少なく、向性テストでは外向性を示し、またエゴグラムの結果では白他肯定のタイプが多い傾向がみられた。食事時の会話はパーソナリティに良い影響をもたらすらしい。

②また段階別、性別では男子は小学校に女子は小学校・高校から現在ともに差が多くみられた。

これらのことよりコミュニケーションはさまざまなところでなされるが、食事場面での会話が大切であるといえ、また男子は小学校時代のコミュニケーションが、女子はいずれも大切であると認められた。

2. 目的2に関して

食事時の会話を促進するものは、食事にかかわる周囲の衛生、栄養の面を考えてつくる、食事作法的な面を考えるなど食事内容的要因は少なく、「両親が明るい人である」「きょうだいがいやまういている」「家族がうまいいている」「食事外要因が重要」という結果がみられた。その他「食卓を楽しい雰囲気にするようにしている」等食卓環境的要因並びに人間関係的配慮がかわっている。まとめると食事時の会話は食事内容ではなく、親を中心とする家族のダイナミクスと食卓場面の環境が重要といえよう。

歯科患者用SCT作成のこころみ（その1）

・駒崎 勉（城西大学）・西川博文（城西歯科大歯内療法講座）

研究の目的： 近年、医療場面における心理学の重要性がとみに強調されてきたように思う。それは患者の心理的側面を切離して心理検査を行うことから一歩進んで、疾病を生理生物的次元に加えて、心理社会的次元からも捉えた包括的理解が必要となってきたからであろう。本研究も、たんに患者に用いる心理検査の一例の紹介ということではなく、患者を中心に据えたこれからの医療に、心理学的なアプローチの一つとして歯科患者用SCT（以下SCT-Dと略）を考案したこと、及びその妥当性や応用について報告する。

方法： 筆者らは、1978年、SCT-Dを試作し、多くの患者に応用してMASとの関連、ないしは患者の診療中の行動などとの関係をみてきた。SCT-Dは当初、僅かに10問からなるもので、既存のSCTの規模や内容には、ほど遠い。しかし、そこには従来のアンケートなどでは得られなかった患者の本音が、かなり明確に現われ、またMASとの間にも相関のあることが見出された。これらの結果については文末の文献に詳しい。

今回は内容を改善して15問（内2問は緩衝項目）のSCT-D改訂版を作成、歯科大3年次生151名にMASとともに実施した結果を発表する。

次にSCT-D15問の内から抜萃した数問を示す。

1) 子どもの頃私の歯は____（緩衝項目）。2) 診療イスに座ると____。3) 歯科の先生はたいてい____。4) 口を開けているとき____。5) 歯を削るとき____。6) 歯科の看護婦（衛生士）は、いつも____。7) 受付の窓口で____。

SCT-Dの結果の解釈については、あまりこまかな規準や、ウラを読みとるような技法を用いず、表現された反応文を次のカテゴリーの何れかにあてはめ、1項目1反応を1点、2つの意味をもつ反応文は各0.5を与える方式をとり、整理を簡易化した。カテゴリーを示す記号と、その内容は次の通りである。

P（生理的、肉体的不快感を示す表現；ムカムカする、筋肉がこわばるなど）、F（不安や恐怖感）、Ag（攻撃性、皮肉、反感）、Fr（強い要求や不満感情）、O（客観的反応；至極当然な事実を事実として表現しているようなもの、冷静で感情をまじえぬもの）、S（満足感や感謝、やすらぎの心情など）、E（期待や甘えなど）。

結果と考察： 結果は下表に示した通りである。

151名中MASの高得点者（HA）34名と低得点者（LA）34名について分析したもので、どんな医療場面に、どんな患者の本音が表されているか、がうかがい知れよう。例えばAg反応は歯科医に集中し、E反応は衛生士に多く、Fr反応は受付の窓口に集まる。これほどはっきりした結果はアンケートなどではとうてい知り得ないことであろう。また、HA群とLA群間には有意差のみられるものが多く、HA群は客観性に欠け、P、F、Ag、Frなどが多いことが分った。

SCT-Dの結果と不安度との関係

～各カテゴリーの頻度(%)小数点以下切捨～

(HA=MAS25.7, LA=3.9)

項目	内容(要約)	不安度	P	F	Ag	Fr	O	S	E	計
2	治療の方法	H L	0 0	0 6	0 2	0 7	82 84	0 7	10 2	100 100
3	治療イス	H L	21 29	52 32	0 0	3 0	25 24	0 15	0 0	100 100
4	注 射	H L	0 0	22 3	0 0	7 0	71 97	0 0	0 0	100 100
5	歯科医師	H L	0 0	0 6	53 13	12 6	25 65	0 13	10 0	100 100
6	抜 歯	H L	13 0	18 9	3 0	4 0	62 88	0 0	0 3	100 100
7	看護婦 (衛生士)	H L	0 0	0 4	10 0	25 3	35 72	7 0	22 21	100 100
9	開 口 時	H L	40 22	22 3	0 0	6 3	32 68	0 4	0 0	100 100
10	歯科医師	H L	0 0	0 0	60 25	0 3	35 62	4 10	0 0	100 100
11	治 療 中	H L	21 0	22 10	7 0	10 4	32 81	4 0	3 0	100 100
12	受付の窓口	H L	0 0	20 7	4 4	32 18	35 63	4 4	3 3	100 100
13	歯の切削	H L	28 15	25 19	0 0	4 3	35 60	4 0	3 3	100 100
14	看護婦 (衛生士)	H L	0 0	0 0	7 3	44 3	21 60	10 22	18 12	100 100
15	口 臭	H L	43 25	0 0	0 0	0 0	57 75	0 0	0 0	100 100
	SCT-D全体	H L	13 7	14 8	11 4	12 3	42 69	3 6	5 3	100 100

結語： より包括的な患者理解と医療が行われるためにも、本研究を発展させ、現場で応用してみたい。

文献 患者の不安度と歯科医師などに対する意識・態度との関係について 西川博文、駒崎 勉、片山伊九右衛門 日本歯科医療管理学会雑誌 13～16 1978～1981

看護学生の特性に関する研究

。田中千鶴子 相馬朝江 山田泰子

宮崎和子

P-F スタディによる調査Ⅲ

内海 渥

(神奈川県立衛生短大)

(千葉県立衛生短大)

(千葉大学看護学部)

今日、医療技術の高度化や疾病構造の多様化に伴い病院の診療は専門分化が進み、機械化され合理的に行われている。しかし、合理化の中で患者はややもすると人間疎外になりかねない状況下におかれ、より人間的なかわりが医療の中でも重要視されつつある。患者をとりまく医療スタッフの中でも、日々の援助を直接的に行うことの多い看護婦には専門的技術ばかりでなく、この人間的なかわりがより一層求められているといえよう。

P-F スタディは、ストレスに対する反応の様態を明らかにするテストであり、他者を受け入れていくという対人関係の大切な看護婦の特性調査に適当と思われる。

私たちは、すでに神奈川県立衛生短大看護科学生を対象に、健康・経済・精神生活、看護婦志向、学習等とP-Fの関係を報告した(第49回応用心理学会、第9回日本看護研究学会)。今回は、看護婦志向として特に「絶対看護婦になりたい」「看護婦になりたくない」と答えた2群について検討した。看護婦志向については、入学時と現在において絶対になりたい—なりたくないを両極とした5段階から選択させた。

表1 各群の評点因子別標準得点のMとSD

	(+) M		(-) M		(±) M		t	F
	M	S.D	M	S.D	M	S.D	%	
E'	2.2	1.2	2.9	1.6	2.6	1.2	*	
E	3.2	2.0	4.6	2.7	3.7	2.5	*	
e	1.8	0.8	1.5	1.0	1.5	1.3		
I'	2.1	1.1	2.1	1.1	2.3	1.1		
I	3.3	1.4	2.8	1.2	3.0	1.3		
i	1.8	1.0	1.8	1.2	1.9	1.0		
M'	2.6	1.3	1.7	1.4	2.2	1.4	*	
M	3.1	1.6	3.0	1.8	3.0	1.5		
m	1.9	1.2	1.7	1.1	1.6	0.9		
E	3.3	3.6	3.7	3.7	3.6	3.9		
I	8.3	4.5	6.9	4.6	6.1	3.8		
E+I	11.7	5.0	10.9	5.3	9.2	4.2		
E-I	10.3	7.5	17.2	11.4	13.2	10.1	**	
I-I	7.2	7.1	5.5	3.7	7.7	5.3		
M+I	42.5	10.2	35.1	10.3	32.0	11.6	**	**
GCR	51.6	11.3	51.2	15.4	52.5	10.8		
E%	32.6	8.9	40.9	14.2	35.8	12.1	*	
I%	32.9	7.1	30.1	8.4	33.1	8.1		
M%	34.5	6.9	29.0	9.3	31.1	9.4	*	
O-D%	31.4	8.4	30.2	8.7	32.9	9.7		
E-D%	43.9	9.0	47.5	10.5	44.7	9.6		
N-P%	24.4	8.2	22.4	8.9	22.5	7.7		

** P<.01

* P<.05

「絶対になりたい」(看護婦志向(×)群)26名、「なりたくない」(一)群22名、「どちらともいえない」(±)群30名のP-Fスタディにおける評点因子別標準得点を比較し、(+)群と(一)群のt検定および三群間の分散分析を行った結果が表1である。t検定では、(+)群のM%が有意に高く、(一)群ではE%が有意に高く相対的にM%が低い傾向を示した。つまり、両者を比較すると看護婦志向(+)の学生は妥協の動機が強く攻撃方向において無罰的反応を起こすことが多いが、(一)の学生はストレスに対しその原因を他人や環境のせいにする外罰的反応が強いことが認められる。また、他者弁護および自己弁護の傾向を示し社会性・精神発達との関係を有する(M+I)が、三群間の分散において有意の差を示していることは興味深い。

次に反応転移を分析したところ、第1~12場面に対する第13~24場面の差は表2のように認められ、看護婦志向(+)・(一)群同志では転移数に大きな差は認められなかったが、入学時(+)だった者が(一)に転換し者と入学時(一)だったが(+)に転換した群を比較した場合で著明な差が認められた。反応転移の内容において、(一)→(+)群は1~12場面に出ていたE反応が13~24場面ではMまたはI反応に転じ、攻撃や憤りがテスト後半で妥協し協力する姿勢に変わっていることがわかる。

表2 反応転移の傾向

	(+) 1~12		(-) 1~12		(+)→(-) 1~12		(-)→(+) 1~12	
	1~12	13~24	1~12	13~24	1~12	13~24	1~12	13~24
E'	3	2	5	3		1		1
E	7	1	5	4	3	2	6	1
e	2		3		1		2	
I'		4	1	1				2
I		6	1	2		1		3
i	4		2	2		1		1
M'		2						1
M	1	5	1	1			1	5
m		2		2				1
E	6	1	7	1	2	1	3	1
I		5	3	3	1	2		4
M		4	1	6		1		6
O-D		7	2	4		4		3
E-D	3	1		1	1			3
N-P	7	1	3	2	2	1	6	1
計	33	41	34	32	11	14	21	32

描画に示された看護婦・看護学生の特性(3)

○ 川 本 利 恵 子

(山口大学医療技術短期大学部)

〔目的〕 第48回応用心理学会で発表した内容をさらに発展させる。とくに知的水準、無意識的な自己像。対人関係の問題を、とくに描画の示す歪みの分析を通じて特性として分析する。

〔対象〕 看護婦 67名(以下N群と略)、看護学生80名(以下SN群と略)、および比較対象群として3歳から20歳までの一般短大生とする。描画・年齢別人数は、Tab. Iに示す。

Table. I Number of Subject

Group	20歳以下	小学生	中学生	高校生	看護婦
age	3-4	5-6	7-8	9-10	11-12
N	11	23	31	21	20
T	10	23	31	21	20
P	13	24	31	22	35

〔方法〕 Buck, J. N. の量的分析項目・解釈項目のチェックにより出現率を算出し、これを基礎に特性を検討した。集団検査のため描画後の質問(PDI)については省略した。

〔結果と考察〕

(I) BuckのScoreの年齢的变化

全チェック項目の中からBuckの量的分析項目をチェックし、各年齢群の平均のDetails, Proportion, Perspective, TotalのPRG(Percent of Raw Good Score)を算出し、Fig. I・IIに示した。

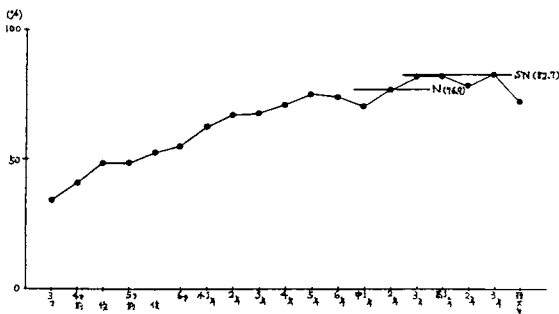


Fig. I. HTP total における PRG の年齢的变化と Student N と Nurse の比較

Fig. I より知的水準を示すといわれるPRGにおいては、SN群が高値を示している。知的水準の高い学生が高度な知識を要求される看護職をめざしていることは望ましい傾向である。しかし、PRGは9歳前後までは直線的に上昇するが、その前後は無意識の情緒のバイアスがかかり、発達段階との対応関係が弱くなり、知能測定としての限界が生じるといわれているため、過信することは避けなければならない。

内 海 規

(千葉大学看護学部)

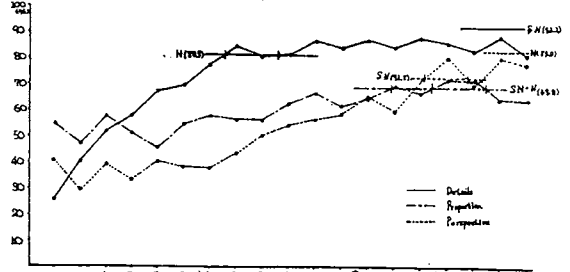


Fig. II. HTP total における Details, Proportion, Perspective の年齢的变化と Student N と Nurse の比較

Fig. Iより、DetailsにおいてはSN群が高値を示しPerspectiveにおいてはN群が高値を示した。日常生活の基本的側面への関心・処理能力を示すといわれる

DetailsにSN群が高値を示すことは看護職をめざす学生の特性といえる。また、BuckはPerspectiveが最も高い機能水準を示し、一般的成熟の見地からは最後に獲得されると示唆しているが、N群の職業的特徴を示す特性と考えられる。

(II) 特に歪みを示す下位項目

Buckの下位項目において、特に問題を示すと思われる項目をTab. II示した。その結果、N群の特性は

家屋画から

対人関係面

においては

外界への警戒

心があり

直接的交流

を避けている

面がある

樹木画から

自我の確立

はされている

るが、SN群は短大生と同様に不安定の時期といえる。

SN群が樹皮を描く傾向が強いの、外界や他人との接触を円滑に適応しようとしているものと考えられる。

人物画からは、N群は脚密着の出現率が高値であることより、緊張感が強いのではないかと推察される。

SN群が腕を後に描く出現率が高いが、仲間と協調できないことを示す項目であり、問題項目と考えられる。

また、N群・SN群とも全裸の出現率が高いが、職業的な意味あいをもつのか今後の課題である。

物質の燃焼による変化・概念に関する研究

萩生田 忠昭
東京都杉並区立松澤中学校

1. 研究の目的. 理科学習における科学的概念の論ずべき点については, すでに, 概念の形成に至る, 認識過程を調査する必要がある. そこで, 今回, 理科1分野における教材「鉄と硫酸と混合物を加熱して化学変化を起させ, 生成物を確かめる」という一

1) 変化・概念・認識・ようす

2) 瞬間に発生する燃焼の現象と, 程度把握できるか, 以上を調査し, 指導上の問題点を研究した. 2. 研究の方法. 調査対象, 杉並区立松澤中学校(年生(同級132)男39名 女44名計83名調査期日, 昭和58年7月9日. 授業展開, 導入, ①スカーラー・レーン燃焼炉を用いた物質を熱した場合がある. ②で, 2つの物質を混ぜて燃焼させるという内容. ③本時の内容(プリント使用)課題「鉄粉と硫酸・粉とによって起こる変化について調べてよ」

〈問1〉「鉄粉と硫酸・粉・混ぜたもの. 性質について調べよう」といふように, その方法をあやうくし. 〈実験1〉混合物を加熱後のものについて, 色, 磁石希硫酸, について, 性質を調べ, 表1と表2の結果を比較し, わかることを記録した.

調べ方	A) 混合物	B) 加熱後の物	A)とB)を比較して, どのくらい変化しているか(自由記述)
1) 色	灰色	黒色	
2) 磁石	引きつけられず	変化なし	
3) 希硫酸	泡がでる	泡がでる. (変化なし)	

〈実験2〉鉄粉と硫酸・粉. 混合物(試験管). 上端を(分液を熱し, 赤く点火したとき熱するまで, 試験管を支持金架の上に立て, 変化がはじまると, 止むところまで起こる観察し, 自由に記録した.

3. 結果と考察

1) 鉄と硫酸・粉の区別に対する判断・観点・結果

表1. 性別による判断の観点

判断・観点	(ア) 色	(イ) 色	(ウ) 燃焼	(エ) 燃焼	(オ) 火を消す	(カ) 硫酸	(キ) 磁石	(ク) 電気
男 N 39	22(84.6)	14(35.8)	12(46.1)	13(46.1)	3(7.6)	19(48.7)	27(69.2)	0(0)
女 N 44	23(52.3)	17(38.6)	16(36.4)	20(45.5)	1(2.3)	24(54.5)	35(79.5)	4(9.1)
計 N 83	66(78.5)	31(37.2)	28(41.0)	33(41.0)	4(4.8)	43(51.6)	62(74.6)	4(4.8)

()の中, 100パーセント

2) 鉄粉と硫酸・粉の区別が明確に判断しているか
点について, 調べたところ, 表2に示す通りである.

表2. 観点数・内容・理解率%

観点	内容	計 N 83	男 N 39	女 N 44
1)	燃焼せず.	16.9	23.0	11.4
	石灰石.	1.2	2.5	0
	計	18.2	25.6	11.3
2)	燃焼せず. 石灰石.	30.1	25.7	34.0
	燃焼せず. 硫酸.	7.2	7.6	6.8
	計	37.3	33.3	40.9
3)	燃焼せず. 硫酸. 石灰石.	44.5	41.0	47.7

3) 混合物の加熱後の物 の理解

表3. 変化・概念の説明・定着率%

カテゴリー	回答例	計 N 83	男 N 39	女 N 44
概念的説明	物質が変わった.	14.4	7.6	20.4
	違う物質になった.	20.4	15.3	25.0
	計	34.9	23.0	45.4
現象的説明A	性質が変わった.	22.8	25.6	20.4
	違う性質になった.	21.6	25.6	18.1
	計	44.5	51.2	38.6
現象的説明B	性質が対照的	1.2	0	2.2
	性質が逆だった	6.0	7.6	4.5
	計	7.2	7.6	6.8
漠然として説明	変化がわからない	1.2	2.5	0
	変化がわからない	9.6	10.2	9.0
	変化がわからない	2.4	5.1	0
	計	13.2	17.7	9.0

4) 瞬間に発生する変化のようすについて程度把握

するかの理解. 表4. 変化・把握. ()の中は%

項目	観点	(ア) 燃焼	(イ) 燃焼	(ウ) 燃焼	(エ) 燃焼	(オ) 燃焼	(カ) 燃焼	(キ) 燃焼	(ク) 燃焼
表示	男 N 20	11(55.0)	15(75.0)	16(80.0)	7(35.0)	17(85.0)	0(0)	13(65.0)	8(40.0)
	女 N 21	13(61.9)	20(95.2)	17(81.0)	8(38.1)	11(52.4)	7(33.3)	10(47.6)	17(81.0)
	計 N 41	24(58.5)	35(85.2)	33(80.5)	15(36.5)	28(68.7)	7(17.1)	23(56.3)	25(61.0)
	男 N 20	6(30.0)	15(75.0)	20(100.0)	1(5.0)	7(35.0)	7(35.0)	14(70.0)	10(50.0)
表示	女 N 21	7(33.3)	20(95.2)	17(81.0)	8(38.1)	11(52.4)	7(33.3)	10(47.6)	17(81.0)
	計 N 41	13(31.7)	35(85.2)	37(90.2)	9(21.9)	18(43.9)	14(34.1)	24(58.5)	27(65.9)
	男 N 20	2(10.0)	15(75.0)	20(100.0)	1(5.0)	7(35.0)	7(35.0)	14(70.0)	10(50.0)
	女 N 21	7(33.3)	20(95.2)	17(81.0)	8(38.1)	11(52.4)	7(33.3)	10(47.6)	17(81.0)
	計 N 41	9(21.9)	35(85.2)	37(90.2)	9(21.9)	18(43.9)	14(34.1)	24(58.5)	27(65.9)

5) 化学変化における過程・理解

表5. 化学変化における過程・理解率

結果

4. 結論. 略 (プリント参照)

短期大学秘書教育課程における心理劇について

神 蔵 幸 子
(酒田短期大学経済科)

はじめに

昭和48年、全国短期大学秘書教育協会が発足し、加盟校において所定の単位を習得した者は、卒業時に、「秘書士」称号が認定されることとなった。本学にも「秘書・教養コース」が設定され、必修5教科9単位と、選択科目10単位が開設されている。選択科目については、各短期大学において指定し、協会へ届け承認をうけることになっており、多様な内容となっているが、そこにおける充実が、特色ある秘書教育の大きなポイントとなる。本研究者は、コース担当者としての「ゼミナールと選択科目「人間関係論」を担当している。

(本研究の目的)

短期大学で秘書教育を始めて10年の歳月が流れ、人格的にも、技能的にも優れた秘書(社会人)を育成するために、様々な立場から、多くの研究がなされて来た。秘書としての技能的な面における教育は、かなり輪郭がはっきりしており、また、各種検定によるその評価もとらえやすい。しかし、「秘書教育」は、断片的な知識をよせ集めたり、「技能」を重視するばかりでなく、組織の一員として、状況に応じた役割を適切に担える人を育成することも大きな目標である。しかし、それらの方法は、担当者の独自性にまかされている部分も大きい。本研究者は、秘書教育において、とくに、自己においても、人においても、物においても「関係的なとらえ方」ができることが、重要であるとの考えにたち、関係理論に基づく心理劇を授業にとり入れている。過去において、「接遇」に関わる学習や、仕事の中で遭遇するであろう場面について、case studyとして「実演」や「role taking」が行なわれているようであるが、本研究者は、それをさらに広げ、深い、学生自身の人格形成にむつなげるようにしたいと思い、「秘書」に限定されずに、場面や役割を設定し、「状況と認識する」「状況にかかわる」「状況を変革する」などのテーマにより劇を展開している。本研究では、現在試みている学習内容を整理し、その効果を考察し、今後の方向を明らかにしたい。

(参考文献)

松村康平「心理劇—対人関係の変革」誠信書房1961
「秘書教育研究年報」第5巻～第8巻 全国短期大学秘書教育協会

(結果と考察)

学生は、秘書としての技能や社会人としての教養を身につけようと学習しているが、また、自己自身の中に様々な疑問や悩みをもっている。それら、今の自分の直面している問題といかに整理してとらえ、それを解決していくかということは、人間理解にも深く関係する。そして「人間理解」や「自己の確立」ということは、学習法を工夫することによって学び得るものである。

本研究者は、学生との対話形式による授業形態を重視し、特に、以下のことをしている。

- ①問題の成立のさせ方(とらえ方)を明確にする。
—はく然としたものをより具体的なところでとらえる。(問題が明確になったところで問題が問題でなくなることもある。)
- ②問題を頭で考えるばかりでなく、行為をして明確にする。—役割をとってふるまうことによって解決することがある。
- ③状況を認識的にとらえる訓練をする。
「〇〇をして△△と思った自分がいる」ということをとらえられるようにする。
- ④場面転換の技法を学ぶ。

今、展開している場面に自分がどうかわるることによって、その状況がどう発展するかを考えながら、役割をとって参加することを訓練する。

(あらゆる状況で、認識的にとらえて、そこを発展することができるようにすることは、人間関係の担い手として重要である。)

- ⑤関係学的思考を育てるための理論を紹介する。

以上のことを通して、学生は、問題を具体的にとらえ、整理することを学んでいる。そして関係を構造的にとらえようとする姿勢が育ってくると、いわゆる技能を要する仕事についてもその手順や整理の方法がとらえやすくなるようである。

今後は、より実践的な仕事の中でもその能力が十分生かされるよう「自発的に、また創造的にふるまうことのできる人格形成が目指される」心理劇の展開を目指したい。

WISC-Rによる児童の性格診断の方法の研究XVI

— 今の平均的な子供が示す問題は何か —

児玉省 渡谷伊津子 ○齊藤 璋子 (児玉教育研究所)

I. 目的 私達は WISC-R による性格診断のための角度として12角度を設定し、その妥当性の検討を重ねて来ているが、児童308名の WISC-R のテスト結果から、それらの児童が12角度において如何なる様相を呈するかを知能段階別、年令別、男女別群(1-5群)に12角度の角度別適合率を求め、その適合をみようとするものである。対象:表IIを参照(男子149名、女子159名)

II. 方法 (1) V及びP検査の各6種の評価点(SS)合計に手を乗じた修正評価点を求め (2) 性格評定角度の適合率:基準点(下位検査SS10点)・角度構成項目子以上確得(図I)は適合率(知能段階別、年令別、男女別の群別)1群(IQ120以上) 2群(110~119) 3群(100~109) 4群(90~99) 5群(89以下)に合せて示した12角度適合率 現実の児童の実態と性格診断12角度の適合状態が実在の子供と如何に一致するかを考えた。下表は 308名の知能指数と WISC-R 下位検査との相関である。

WISC-R下位検査	知識	類似	算数	単語	理解	数唱	完成	配列	積木	組合	符号	迷路
相関係数	.66	.64	.62	.64	.51	.49	.61	.57	.66	.54	.39	.37

III. 結果及び考察

(図I)は WISC-R による性格診断12角度の適合率を知能段階別及び年令別、男女別に整理した群別の平均を示す。1群は殆んどどの角度においても95%。年令別的にも男女別においても6~13才まで成績が良い。社会的判断は86% (男88%、女65%)と低い。2群は1群同様、言語性概念化と長期記憶はかなり高い適合率。短期記憶、知覚的組織、見本の再生など動作性関連による適合率がおちている。社会的判断は1群に比べ更に61%と低い。(男66%、女59%) 又、年令的には知覚的組織は6~7才(69%) 12~13才で(91%)と伸びている。それに対し、短期記憶、見本の再生はどの年令でも成績が悪い。男女別では言語性概念化 推理

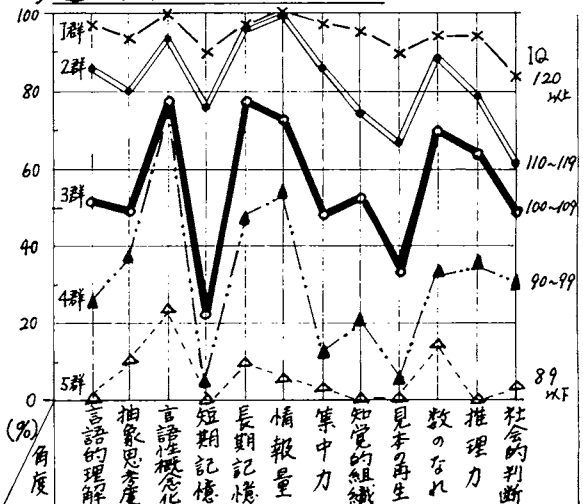
力、社会的判断の3角度で男子が高い。3群は角度同士の適合率の差が高く、変動が大きい。特に短期記憶、見本の再生の適合率が低い。(共に注意力、集中力を要求するテストである点が重複する可能性もあるが違った能力を取扱っている) 言語性概念化は1,2,3,4群共に適合率が高い。ここでは下位検査の中の3種類、類似単語、理解と典型的なV検査を選んであるが、V検査に限らずP検査にも積木、配列、符号等、概念化を要求されるものがある。年令的には抽象思考度、推理力、社会的判断は6~7才より漸次伸びて12~13才で67, 87, 67% 男女別では知覚的組織(男59%、女43%)で男子が高く、言語的理解、抽象思考度、数のなれ、推理力で女子が高い。

4群は言語性概念化76%。他は全て低い。年令的には言語的理解、知覚的組織、推理力など緩慢ではあるが12~13才になり上昇。男女別では特に短期記憶(男6%、女3%) 見本の再生(男11%、女3%)と低い。5群は言語性概念化24%で他は皆成績が悪く、男女共に適合しないものが多い。年令的には数のなれが10~11才で漸く23%。

IV. まとめ ① 高知能群に適合率が高く、低知能群にはこの評価基準は殆んど適合できない。② 社会的判断は知能の高低に拘わらず低い傾向を示し、実践力が弱い側面が考えられる。以上 上述の方法を用いて評価したものと性格の実際の評価とは一致しているように思われる。

範囲	IQ	89	90~	100	110	120	計
6~7	5	12	29	16	18	80	
8~9	11	12	28	24	29	104	
10~11	13	18	15	15	23	84	
12~13	0	8	9	11	12	40	
計	29	50	81	66	82	308	

図I) 適合率(知能段階別、年令別群)



表I) 性格診断角度 対応する下位検査 項目

性格診断角度	対応する下位検査	項目
1 言語的理解	知識	類似 単語 算数 理解
2 抽象思考度	類似	単語
3 言語性概念化	類似	単語 理解
4 短期記憶	知識	算数 数唱 積木 符号
5 長期記憶	知識	算数 単語
6 情報量	知識	単語 配列
7 集中力	算数	数唱 配列 積木 組合 符号
8 知覚的組織	完成	配列 積木 組合 符号 迷路
9 見本の再生	完成	配列 積木 組合 符号
10 数のなれ	算数	数唱 符号
11 推理力	数似	算数 理解 配列
12 社会的判断	理解	配列

WISC-R による児童の性格診断の方法の研究 XVI

— 子供の問題に関連して考えらる親の問題 —

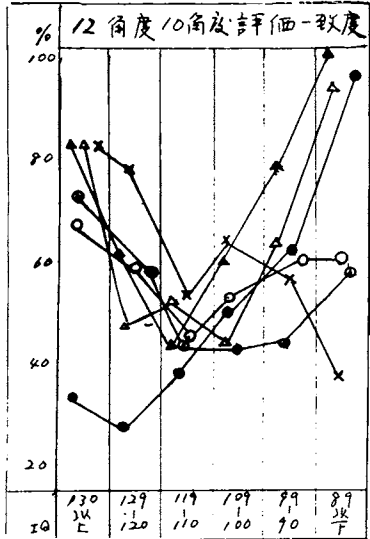
児玉省 大村孝子 石田聡子 (児玉教育研究所)

I) 研究の目的と方法 叔連はWISC-Rによる児童の性格診断の方法をKaufmanの分析角度を参照して叔連独自の性格診断12角度を作成し、これについては叔連者が被験者の性格的適合率と知能段階別、年齢別に考察したが、このテストとは無関係にテスト中の観察、親、教師、友人等から得た資料と臨床的性格診断10角度として作成した。現在A児童の周囲の人達A臨床的観察を総合したもので、こういう生の性格資料がWISC-Rのテスト結果とどのように適合するかを検討したいと考えた。本研究の目的である。対象はA児童と同一である。10角度の項目は次の通り。1) 積極的、外向性。2) 消極的、内向性。3) 落ち着き、安定。4) 不安定、神経質。5) 衝動性、残虐。6) 自制心あり。7) 依頼心。8) ませている。9) 集中力。10) 反応早い。10角度のうち12角度と対応ができてゐるものは下の表を示す。

性格診断12角度	性格診断10角度
1) 集中力	集中力
2) 知覚的組織力	落ち着き、安定
3) 社会的判断力	ませている
4) 短期記憶	不安定、神経質

この外、下位検査経路と、10角度中4) 衝動性、残虐下位検査経路と、10角度中4) 不安定、神経質。と対応ができて、比較検討を試みた。この結果と知能段階別の対応率が見ると図Aとおりである。

II) 考察 テストの結果から評定される児童の性格像と、児童に近く生活して、比較的長期にわたる観察者である親、教師、友人等の印象、テスト中に見えらる観察者の結果が、どのような関連を示すか。この図を基に検討を試みた。



図A 12角度10角度評価一致度

1) 集中力について。両角度の共通項目

- 1 ▲ 集中力
- 2 △ 知覚的組織力
- 3 ● 社会的判断力
- 4 ○ 短期記憶
- 5 × 衝動性
- 6 * 残虐

左図に示された数値

1	83	61	43	60	79	100
2	83	47	52	44	60	94
3	33	27	38	50	62	97
4	67	59	45	53	60	60
5	83	78	53	64	56	36
6	72	58	43	42	44	58
IQ	130	129	119	109	99	89
	上	上	上	上	上	下

であり、高知能者と低知能者においては一致度が低く、IQ 119-129の中上段階の児童については、一致度が最も低い。EP5 119-129の知能段階と底にV字型の分布を示している。

2) 知覚的組織力: 落ち着き、安定。について。互に関連が有ると考えられるこの対比項目について同一傾向がみられ、この項目では、両角度の一致度が最も低いのは109-129の知能段階に於いてである。

3) 社会的判断力: ませている。について。この対比項目では、グラフの形としては上述二項目と共通する部分もあるが、高知能者では両角度の一致度は、比較的的低く、低知能者においては、高い。但しこの項目は、高知能者では高知能者として、社会常識にうといことが思ひ合はれる。

4) 短期記憶: 不安定、神経質。について。この対比項目では、上記集中力、知覚的組織力: 落ち着き、安定。の項目程に深いV字型ではないが、119-129の知能段階で、両角度の一致度は最も低く、高知能者、低知能者へ一致度は高くなりV字型となっている。

5) 其の他。次に12角度ではないが、WISC-Rの下位検査中、衝動性、衝動的な行動の抑制が必要と思われる経路の成績と「衝動性、残虐」項目と対比させたところ、高知能者では一致度が高く、119-129の知能段階で一致度が最も低く、109-129の段階で多少高くなり、低知能者では、一致度が更に低くなっている。これは経路テストが、IQと相関が低いこと、又低知能者が果敢とていやすい、或る意味で機械的な検査であること、考慮しなくてはならない。次にWISC-Rの下位検査中、全体への貢献度が高い「積木」は、早く正確な判断力と柔軟性を必要とすが、10角度中の「不安定、神経質」と比較したところ、両者ではあるが、他の項目と同様、IQ 109-129と最低にしてV字型を示している。

IV) 結び。以上考察の結果、12角度と10角度の対比項目で、両角度の一致度が最も低いのは、IQ 119-129の知能段階に於いてである。EP5、人口中最多数と占むこの知能段階で、テスト結果から児童の性格像と、児童周辺への観察結果とが一致する割合は、50%弱と考えらる。又大体において、高知能者、低知能者は、両角度の一致度が低いと考へられる。性格診断10角度の中にはテスト結果からは推定しにくい大事な性格診断要素を包含している。テスト結果からだけ児童の全体像を推定することは出来ないと考えた。12角度10角度を用いてもまだ、児童の実態を十分にとらえることはむづかしいかもしれない。

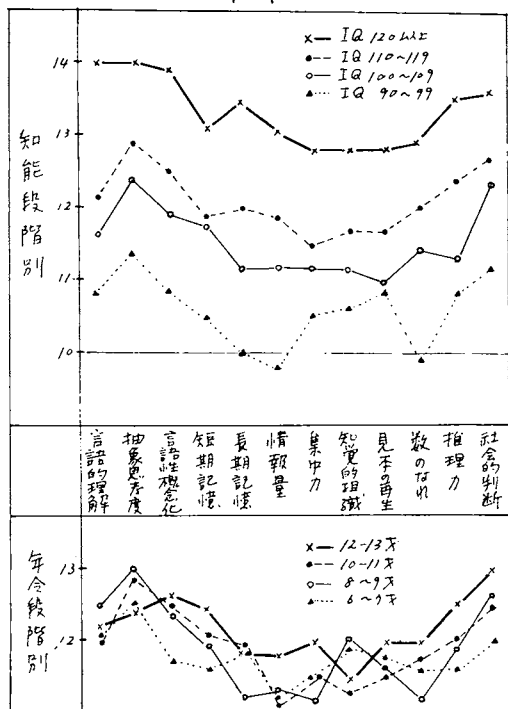
WISC-Rによる児童の性格診断の方法の研究 XVIII

—— 教育相談で考えられるWISC-Rテストの問題と限界点、 ——

児玉省 横田愛子・清水とも子 (児玉教育研究所)

I. 目的: 本発表は前演者の後を受けて、同一の対象を用い各10人対象をWISC-Rによって性格評定を行う場合いかなる点に注意し、考慮すべきかについて総合的考察を行おうとしたものである。WISC-R検査の結果を12性格角度によって整理した児童は、そのままで性格診断を行えるが、これは一面可能であるが同時に他面危険性がある、というのは、各評定角度の適合率をみて、そのまま判定しようということによって普通これだけで診断しがちである。しかしながら、二人の前演者も述べたように、適合率は該当項目の $\frac{2}{3}$ 以上の適合をもってすることになっているが、この $\frac{2}{3}$ というのは、項目によっては二項目しかない場合がある、これでは一項目による判断となるし、又似たような児童、すなわち知能段階が似ていて、更に年令段階でも似ているという他の児童の判定はどうなるであろうか、ということを考慮しないでは適正な評定を下すことはできないであろう。ほかの多数の児童も適合率が低くなれば、当の児童だけを取り上げて低いということ、又高い場合にほかの児童も高ければ、高

図1. 適合率平均



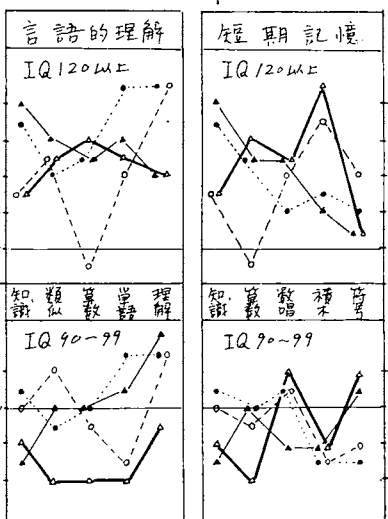
い適合率ということだ

くで同一評定によるとはいかないであろう。図1.はこういう視点を与えるために作製したものである。

II. 方法と考察: 私達はこの二種類の適合率平均表をみて評定を下すことが必要であると思っている。

①. 知能段階別に言えば、大体、最高段階と、中間段階、最低段階になり、最低段階の場合は、この評定角度は殆んど適用出来ないようである。最高段階では、殆んどどの児童も適合率基準以上である。しかしながら児童がその群の中で、どうあるかということも正確にめなければならない。又全体的に適合していても現にこの平均よりかなり高い者と、低い者がある。この点を考慮することが必要である。②. 中間段階では適合しない角度と適合する角度が交錯し、この点比較的考察が容易のようである。③. 最低段階では、規定によって決定された適合率では不適合であっても適合率以外の角度から検討することが必定である。即ち適合はしていても高い、低い、のはどれであるかということ、又適合していないのはどのテストであるかということなどである。④. 図2.はこういう観点から二つの角度を取り上げて参考にしたと思うものである。これは四人の被験者の12角度における言語的理解と、短期記憶の位置を個人的に示したものである。これらの通り同一知能段階でありながら、各人ちがった成績を示しているのだから、この個人差こそ、性格診断上、重要な要素となるであろう。

図2. 個人適合率例 (各4例)



これ以外の角度についても同一なことが云える。なお年令段階別については、知能段階ほど差はないが年令別を考慮することが必要である。要するに二つの段階別を頭に入れて、かつ12角度の適格、不適格のテストを考慮し、更に10性格角度を用いて総合的に判定することがのぞましいと思う。

中学生による親の教育的態度の認知と親への交信性(2)

山 本 都 久
(富山大学教育学部)

目的 D.K. Berlo (1960), K.R. Scherer et. al (1978)らは、自己への態度(肯定的か、否定的か)や他者の態度の認知は、他者に対する交信(ここでは、Verbal communication)のあり方に影響を及ぼすものであるといっている。筆者はこれまで、子から親への交信が急速に減少する思春期の子どもへの親への交信のあり方を探って来た(前回報告)。今回は思春期(中学生)の子どもの親の教育的態度の認知と交信性にかかわりのあると思われる親の属性(子どもに対する会話姿勢、職業)を手がかりにして、子どもの親への交信の規定因を探ろうとするものである。

方法 父(母)への会話量(会話と成績、学校生活、友人と遊び、生活態度、世間の出来事、進学の6領域について、どの程度父(母)と話し合うかを各5段階評定でたすねる。得点範囲は30~6)を基準変数とし、説明変数にEICAによる父(母)の態度認知型と父(母)の会話スタイル(虚勢黙認、指示説教、説明提案、迎合容認)と父の職業を用いて、数量化理論I類による多変量解析を試みた。

((会話量測定尺度: 5 毎日話し合う, 4 話し合う日の方が多い, 3 話し合う日と話し合わない日が同じくらい, 2 話し合わない日の方が多い, 1 話

を全然しない))

結果と考察 Table 1の説明率(R^2)は28~25%ぐらいでそれほど高くはないが、偏相関係数とRangeで見ると、子→父の場合はEICAタイプと会話スタイルが、子→母の場合はEICAタイプが、子→親の交信性を規定する要因であるとみなすことができそうである。

総じて見たときの子→親の交信性の一般的特徴はEICAタイプで、(1)準型より典型の各タイプで子の親に対する交信性(話す、話さない)が極端となる。(2)AC, AC-COとAC-AU(すなわち、AC傾向)ではよく交信するが、RE, RE-COとRE-AU(すなわち、RE傾向)では交信されなくなる傾向がよい。

このことから、受容(AC)——拒否(RE)の次元軸が子→親の交信性と深いかわり合いがあるといえる。EICAでのACは子どもを気持ちの上で支持する傾向や子どもとの一体感を意味するものである。そうした親の態度認知は、聞き上手な親として子→親の交信行を誘発するように作用するのではないかと考えられる。(聞き上手は単に聞くだけでなく)

次に、会話スタイルでは、虚勢黙認、指示説教では

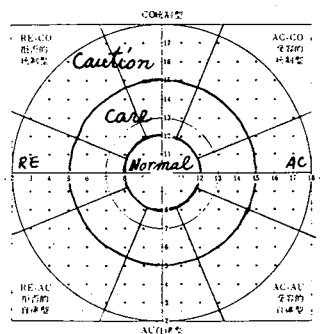
子→親への交信はなく、説明提案的で交信されやすいといえる。威圧的、迎合的極端的是思春期の反抗心や清潔さを刺激してか、親への交信性は回避される傾向が見られるようである。

Table 1 The Results by Quantas- 1

SON, DAUGHTER → FATHER					SON, DAUGHTER → MOTHER				
VARIABLE	CODE	N	WEIGHT	RANGE	PART. COR. RELATION	N	WEIGHT	RANGE	PART. COR. RELATION
SEX	MALE	175	0.33	0.78	0.09	175	-0.66	1.57	0.19
	FEMALE	128	-0.45			128	0.91		
	NORMAL	46	-0.15			50	-0.64		
	CO	20	-1.47			19	-0.22		
	RE-CO	17	-2.03			24	-1.08		
	RE	11	-2.72			6	-3.40		
	RE-AU	12	-1.44			10	-2.99		
	AU	13	-2.40			7	-1.34		
	AC-AU	19	-1.89			19	0.89		
	AC	29	0.84			23	-1.28		
	AC-CO	28	2.07			21	1.30		
	CO	22	1.37			29	1.63		
	RE-CO	11	-1.13			21	-1.09		
	RE	2	-8.50			4	-4.89		
EICA TYPE	RE	6	0.63	12.17	0.43	6	-3.69	7.82	0.40
	RE-AU	7	-3.02			9	-1.48		
	AC-AU	12	-0.32			10	2.92		
	AC	22	3.67			17	2.93		
	AC-CO	26	1.65			28	2.10		
	CO	22	1.37			29	1.63		
CONVERSATION STYLE	KYOSEI	55	-1.92	2.92	0.25	38	-0.74	1.19	0.11
	SIJI	66	-0.37			60	-0.51		
	SETUMEI	122	1.00			125	0.45		
	GEIGOU	60	0.13			80	0.03		
VOCATION	SALARY	153	0.11	3.32	0.13	153	-0.10	3.05	0.14
	SALA.yaku	15	-0.47			15	1.96		
	JIEI.ser	38	0.09			38	0.23		
	JIEI.prod	8	-2.79			8	-0.38		
	KOUMUIN	24	0.52			24	0.59		
	TEACHER	18	-0.51			18	0.01		
	UNIV.RES	13	-0.48			13	-1.08		
	MEDICAL	34	0.34			34	-0.59		

Multiple correlation coefficient R=0.53

R=0.50



最近の親子関係の特徴について

—— 一般児童、養護児童、非行児童の親認知の比較を中心として ——

熊 天 良 雄
(大妻女子大学文学部, 埼玉施設養護研究会)

目的：いくつかの特徴あるグループについて、その親子関係の特徴を比較し、親子関係をめぐる諸問題の研究資料としたい。

方法：質問紙法の一つであるTK或診断的新親子関係検査と、投影法の一つであるCCP (Children's Cognition of Parents) の二種類のテストを用いた。対象は、3養護施設の児童6名、1施設・3少年鑑別所の収容少年14名、小・中各2校の児童・生徒220名である。

結果

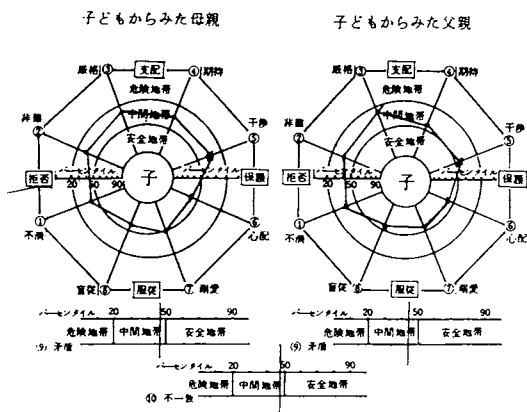
1. TK或診断的新親子関係検査から見た3グループの比較

この質問紙法による親認知の全体像と比較したもの。下記の図1, 2, 3である。

父親認知、母親認知を通じ、調査、盲従、心配の項目が一番問題が多いのは養護児童で、次いで非行児童、一般児童の順となっている。逆に、厳格、期待、干渉の項目が一番問題の多いのは一般児童で、次いで非行児童、養護児童となっている。すなわち、養護児童において、最も保護・服従型の親認知が示され、逆に、一般児童において、最も拒否・支配型の親認知が示されており、非行児童は、その中間の位置にしていると、おおよそ言えようである。

なお、一般児童における子図形が標準値からずれているのは、本テストの標準化の時期から10年を経過し、その間、親子関係も変化していることによる。

図1 一般児童全員の親子関係



2. CCPから見た3グループの比較

CCPによる親認知についても、上記とほぼ同様の傾向が見られる。

3. 両テストを通じての考察

両テストの結果から同じ対象者について関連することもあることが見られるが、これは、一方のテストが感情の比較的表層レベルと、他方が比較的深層レベルを測定していることに由来すると考えられる。例えば、養護児童では、CCPにおいて全体的に拒否(ΣR)が少なく、受容(ΣA)が多いのに対し、質問紙法においては、拒否・支配の多いことが見られる。これは、日常生活レベルでは不満が多いものの、深層では、親の愛情を求めていることを示しているのではないかと。

図2 非行少年全員の親子関係

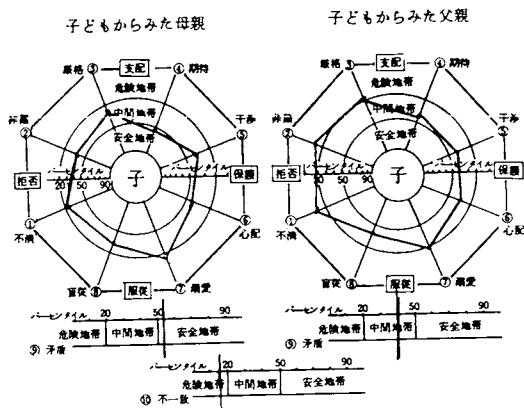
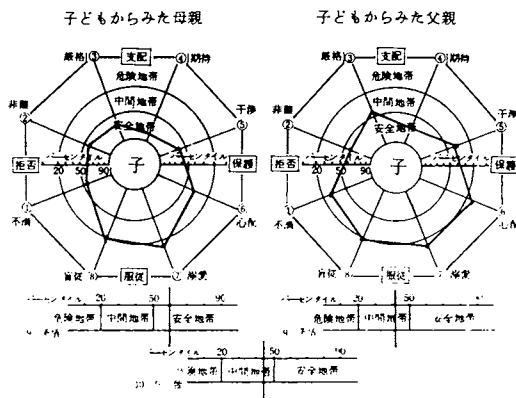


図3 養護児童全員の親子関係



* 高宮裕子, 田島淳子, 田畑弘美, 服部敬, 福重智里, 若林清子

幼稚園での社会性発達と感情発達

教師と母親による評価の検討

○櫻葉和英

高橋 豊

児王 省

(児王教養研究所)

(")

(")

(櫻の実幼稚園)

I 目的と方法 本研究は科研費による研究で実施した調査用紙を用いて、一幼稚園で施行した調査で、1年保育の児童の分(男女各20名)だけととり上げて考察する。社会性は、接触、依存、愛情、支配、従順、拒否、競争、模倣、責任、自律性の項目に下位項目101項目、感情発達には、喜悅、愛情、不機嫌、嫌、怒り、恐怖、過敏、はずかしがる、嫉妬、くやしがる、さびしがる、かなしがる、よく泣く項目と更に下位項目83で、同一児童に教師2名と家庭の母親に記入してもらう方法をとった。評価はABC段階(非常には、普通、余りない)で行われ、本発表は1年保育児男女40名の分についてABCの観点から報告する。評価には園の教師と家庭の母親がおり、園から一致不致また男女差もある。結果の別添で以下ABC段階の評価の状態と表に示す。なお社会性では、児童の対大人関係と対児童関係が別々に調査してある。

II 結果(表) 極めて大ざっぱではあるが、大体の傾向を示した。

項目	評価者	児 童		教 師	
		児童対大人	児童対児童	児童対大人	児童対児童
社会性	接 触	B多	A:B混在	A:C多い	男A:女B
	依 存	B	男C:女B	B:C	B:C混在
	愛 情	男A:女B	男A:女B	男A:女B	B:C混在
	支 配	B	B	B:C	男B:女B:C
	従 順	B	B	男女A	男B:女B
	拒 否	B	B	C	C
	模 倣	男A:女B	A>B	男A:女B>C	男A:女B>C
	責 任	B:C	B	男A:C:女B	男A:B:C:女B
	自 律	男A:女B	男A:女B	男A:B:女A	男A:B:女A
	自 律	男A:女B	男A:女B	男A:B:女A	男A:B:女A
感情	喜 悅	男大部分A:女一部A	男大部分A	男大部分A	男大部分A
	愛 情	男A:女B	男A:女B	男大部分A:女A:B	男大部分A:女A:B
	不 機 嫌	男A:女B	男A:女B	男大部分A:女A:B	男大部分A:女A:B
	嫌	男A:女B	男A:女B	男大部分A:女A:B	男大部分A:女A:B
	怒 り	B:C	B:C	男B:C:女B:C	男B:C:女B:C
	恐 怖	男B:C:女B>C	男B:C:女B>C	男C:女B	男C:女B
	過 敏	男A:女B	男A:女B	男A:女B	男A:女B
	は ず かし がる	男B:C:女B	男B:C:女B	男A:女B	男A:女B
	嫉 妬	男B:C:女B	男B:C:女B	男A:女B	男A:女B
	く やし がる	男B:C:女B	男B:C:女B	男A:女B	男A:女B

III 考察 この表を見ながら、何らかの傾向が見られるのかと考察した。

(1) 社会性 教師の評価は園と中心としたものの、母親の家庭と大部分のよりどころとしていることがあつて、環境的にそれがえいさようすることはいうまでもないが、それにしては評価のずれがある。社会性接触の点で、教師が対大人対子供を含めて、非常にAを占めているものが多く、母親はBの方が多。従順についても、教師の方が評価が高い。児童は園の方が従順

にあるまっているかも知れない。拒否のCが多い(即ち拒否が少しい)のも同じ傾向かも知れない。競争では園の方が多。子供の同年今の間に自ずと競争が多くなるかも知れない。模倣も教師による観察の方が多。児童も園の方が多。結局、児童は園ではその行きの行動をしている可塑性がある。園は自律する雰囲気をつくっているということと同時に、訓練者と前に置いているということ。自ずとこういうことになるであろう。そのくせ競争は園の方が多。結局、同年今の児童がいるということは競争心をかき立てるのであろう。模倣も園の方が多。これも雰囲気に押しつけられている可塑性がある。

(2) 感情 喜悅については、母親の見ていた子供の方にはだんぜん多い。勿論、その観察は家庭が主となるであらうから、家庭の持つ緊張排除の雰囲気と子供が喜ぶ諸々の機会のあることを示すであらう。子供の愛情的表現については、喜悅と同じ結果で家庭の方に多いかも知れないと考へたが、本資料から、園・家庭でかなり差がはい。不機嫌についても、怒りについても同様。恐怖についても大差なし。過敏についても同様。その他の項目についても大体同様。愛情については、社会性の項目としても挿入してあり、感情にも入っているが、ともに社会性でもあり感情でもあるからであるが、社会性の方では大人におおび、他の子供に対して、手助けをするとか、怪我に同情するとか、他の子供をかばってやるとか、具体的に愛情的行動を多くとっているのに対して、感情では、動物と可愛がるとか、花や木に水をやるとか、人物を可愛がるとか、いわゆる情緒的な面をとっている気が違う(勿論、同じ項目も入れてはあるが)。しかしながら、ABC段階の出現率を見ると、社会性でとった結果と感情でとった結果とはあまり差がはい。また更に検討を要するが、一応このままを受けとておこう。

(3) 総合的にいうと、社会性の方に発達差がよく現われて、感情の方には社会性ほど差が見られない。これは両者の性質からくるものか、または他の原因によるものか検討したい。

(4) 一応独自の結果がでたが、本調査表を用いた科研費研究の結果と比べて、どういうことにはなるか、更にその結果をまて補完したい。

高 年 齢 に お け る 知 能 の 変 化 ⅩⅣ

○高橋 豊 児玉 省 柳田 ふさ 鈴木 光子

(児玉教育研究所)

目的: これまでの一連の研究で、高齢者の知能の変化には地域差があり、山の予地域では75才を境にして、I Qの著しい低下が認められた。今回はこれまでに蓄積されたデータに基づいて、山の予、下町①、下町②の3地域の被験者群を75才未満と75才以上の年齢群に大別し、各地域間でI Qの低下度に差があるかどうか、統計的な面から検討を加えようと試みた。

方法: 各地域ともI Qの平均値のレベルそのものに差があるため、単純な比較は困難である。そのため次のような方法を用いた。即ち、WAIS検査法手引(児玉他著)では2種類のI Q, A, B, を比較する場合、 $(\bar{x}_a - \bar{x}_b)$ の絶対値が $2\sqrt{S_e}$ を超える場合に真の差があると解釈してよいとしている。全検査I Qの標準誤差 S_e は35であるので、A B間に10点を越す差があれば二人の間に真の差があると言ってよい事になる。厳格に見れば10点以内はまだ誤差の範囲であり、11点以上を真の差とも考えられる。本研究では更にその差を明確にするため11点の所に境界線を引き、12点以上離れている場合を有意な差があるものと解釈した。

各地域毎に、75才未満の年齢群の全検査I Qの平均から、12点以上低下した場合を明らかな低下と考えた。そして75才以上の年齢群の中で、75才未満の全検査I Qの平均から12点以上低下した人数の%を求めて、各地域のI Qの低下度の指標とし、これを減退率と名づけた。もし75才を境に著しいI Qの低下が起るならば、75才以上では有意な低下を示す人の数は増加し、減退率は上昇するはずである。この減退率について、C.R. (critical ratio) を使った比率の検定、及び χ^2 検定を行い、各地域間で差が見られるかどうかの検討を行った。なお整理の過程で、一部不備なデータは削除した。

結果と考察: 山の予、下町①、下町②の平均年齢及び被験者数は表I、IIに示してあるが、この減退率の比較を行う前に、まず前提として、3地域の各群に年

齡的な有意差があってはならない。そのため、この3地域の75才未満の3群と75才以上の3群について各々分散分析を行った。その結果は、75才未満、75才以上共に地域間の年齢的な有意差は認められなかった。

次にFig I、表IIの結果を見ると、(1)山の予と下町①の場合、山の予の減退率が66.7%、下町①が25%で山の予がかなり高い。これはC.R.による比率の検定、 χ^2 検定共に5%水準で有意差が見られた。(2)山の予と下町②は、山の予66.7%、下町②が31.6%で、上と同様に山の予の減退率が高い。これもC.R.による検定、 χ^2 検定共に5%水準で有意差が見られた。(3)下町①と下町②ではC.R.による検定、 χ^2 検定共に有意差は見られなかった。(4)更に広い意味での下町地域という観点で、下町①と下町②を合わせた群と山の予とを比較した結果は山の予66.7%、下町25.6%となり、C.R.による検定、 χ^2 検定共に1%水準で有意差が見られた。

これらの結果からも分る通り、減退率は下町①が25%、下町②が31.6%、と比較的低いのに対して、山の予地域が66.7%と著しく高い値を示している。しかも下町①、下町②に対しても、またより広い範囲の下町①+②に対しても統計的に有意差が見られる。この事は下町地域に比べて、山の予地域の75才以上の知能の低下度が著しい事を示しているように思われる。

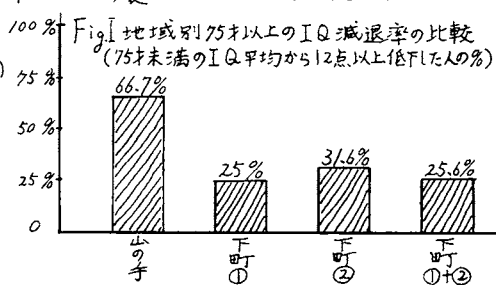
これまでの研究から山の予地域の高齢者は75才を境にしてI Qの著しい低下が認められ、下町地域ではその低下度が低いという知見を得ていたが、今回の結果は、それが統計的にも裏づけられるものである事を示しているように思われる。即ち、老齢化による知的能力の低下についても、コーホート間の差異、即ち、異なった生活環境又はその地域の人達の日常の生活活動そのものが、その低下度にも大きな影響を与えている、という事の一つの裏づけになるように思われる。

表I 地域別の平均年齢及びI Qの平均

	山の予	下町①	下町②	下町①+②
75才未満				
年齢	68.3才	67.9才	68.9才	68.9才
I Q	111.0	89.4	86.1	92.7
75才以上				
年齢	78.9才	77.6才	78.7才	78.1才
I Q	97.0	88.7	88.7	88.7
全体				
年齢	71.1才	71.4才	72.9才	72.1才
I Q	107.2	89.1	93.6	91.4

表II 地域別のI Q減退率の比較
(75才未満の平均I Qより12点以上低下した人数)

	山の予	下町①	下町②	下町①+②
75才未満				
人数	41	36	36	72
75才以上				
人数	15	20	19	39
減退者	10	5	6	10
減退率%	66.7%	25%	31.6%	25.6%



高年令における知能の変化 X V

— 地域別に成績差のある項目 —

児玉省 ○飯島澄子 鈴木光子 柳田ふさ

(児玉教育研究所)

研究の目的と方法 私達は東京の2下町地域山の寺神奈川の老人ホームを対象に、日本版WAIS(1.Q基準64歳)を用いて高年令における知能の変化を検討し、地域的に差があるという結果を得た。本研究ではその内容を明らかにするため、テストの問題を個別的に検討を加えようとするものである。方法としては、まず言語性検査から、一般的知識、一般的理解、算数単語の4下位検査、動作性検査から積木符号の2下位検査を選び、各下位検査の問題毎に出来なかった率、即ち無得点率を出した。そして、どのような問題が地域的に著しい差を与えているか、及び年令的・角度問題の性質と其関係等について検討を試みた。結果の処理は男女合計とし、神奈川のホームは女性だけのため、今回の考察から省いた。

結果と考察 前回発表の老人の意識調査で、62%が70歳以上を老人と考えているという結果を参考に、今回は70~74歳と75歳以上の2グループについての結果(図1、図2、表1)を示した。図1より問題別に見ると、知識では信号の色、ボールの形、天皇誕生日など、9問までは地域差、年令差ともあまり見られないが、政治、文学、地理等に関する項目(問題)では地域差が大きい。問⑩「世界中で現在の首相や大統領5名列挙」、⑪「1年は何週」、⑫「衆議院の定数」などはどの地域も無得点率が高く、年令差は殆どない。理解では、法律、化学語などで地域差が見られるが、「何故着物を洗うか」、「なぜ税金を払わなければならないか」の等、日常的な生活に関連した項目が多いため、他の下位検査に比べ、年令・地域とも関係なく成績がよい。単語では⑬船、

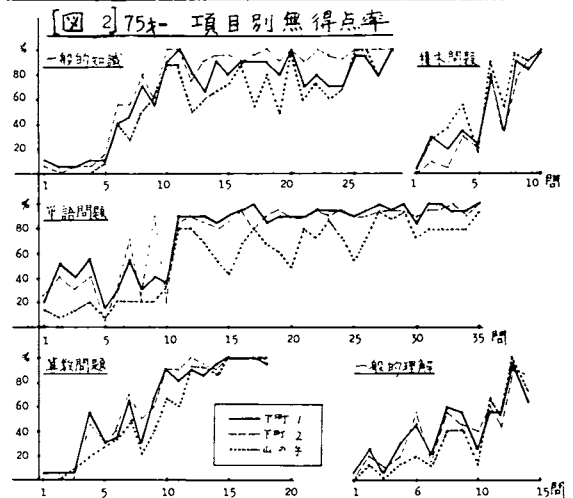
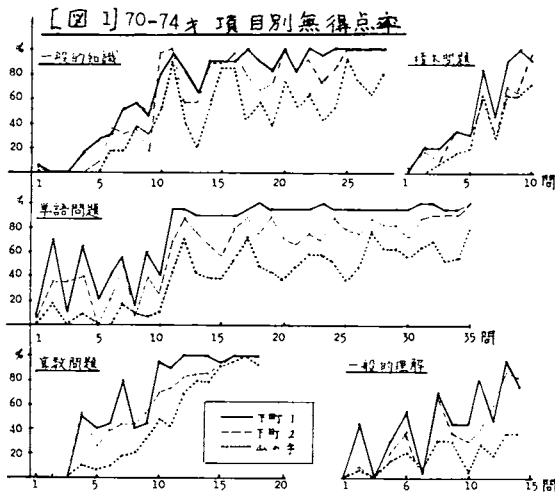
⑭名、⑮原爆といった一見わかり易い単語に対して地域差が大きいのは、知識として簡単なようであるが概念化の対象としては多少困難性があり、不確実な知識と持っているに過ぎないことを示している。また、⑯気圧、⑰相成関係、⑱運倫などはどの地域も成績が悪かった。

全般的に見ると、図1、70~74歳では山の寺知識階級はどの下位検査も成績が良く、次いで下町2、下町1となっており、これらは1.Qの結果からも予測できる。しかし、図2、75歳以上で地域差が見られるのは知識、単語であり、1.Qの差の影響も大きいと考えられる。即ちこれらは知識階級では低下が少なく、理解では大差ではないが山の寺の無得点率が最も高くなり、算数や理解でも一部その現象が見られる。符号では、各地域とも70~74歳よりも75歳以上の方が施行数が減少し、誤答率が増加しているため、粗点がおなり低下しているのが目立つ。

まとめ 一般的に言語性検査では知識階級では低下が少なく、動作性検査では知識に無関係に低下すると言われている通り、本研究でもその傾向がみられた。特に言語性では高年令な常識だけでなく、一見わかり易い単語に対しても地域差の大きい項目もあった。また、動作性においては地域差が少なく、低下率は知識階級が最も大きい。

【表1】 符号問題(平均)

	70-74歳			75歳+			全年代別		
	下町1	下町2	山の寺	下町1	下町2	山の寺	69-74	75-	75+
施行数	22.9	26.8	34.3	18.3	22.1	25.6	32.3	27.7	19.2
誤答率(%)	0.7	0.2	0.5	1.6	2.9	3.4	0.5	0.7	2.4
粗点	22.7	26.8	34.2	18.0	21.5	24.9	32.1	27.5	18.7
N	20	23	19	20	20	15	57	70	86



高令者における知能の変化 XVI

——生活意識調査——

児五 省 鈴木光子 高橋 豊 ○柳田ふさ

(児五教育研究所)

I 目的と対象： 人間の知的能力は、高令化と共にさまざまな変化をしていく。前回までWAISによる知能テストを用いて、高令者の知能の変化を調査してきたが、高令化と共に起こる知能の変化は、個人の身体的・精神的健康や生活歴、生活環境、生活状況、生活意識等が大きく影響していると考えられる。本研究は、前回までの研究対象群に加えて、東京近郊の一公団ホームに在住する約60名の男女高令者を対象として、身体的・精神的健康状態を中心に、生活態度や生活意識について調査検討するものである。調査の方法は個人的面接による。

II 結果と考察

〔1〕健康留意、体調、精神状況

(1) 日頃から健康に留意している者は、ホーム2に於いて全体の84%で、東京の下町地域在住の対象者の90%に比して、やや少ない。留意内容を項目別にして、まとめると次の表のとおりである。下町2の対象者に於いて、男女差はあまりなかったが、このホーム2では男女の差が大きい。男性の方が女性より自分の健康管理に神経質のようである。

留意項目(数値は%)	～75才		76才～		全体	
	男	女	男	女	男	女
食事	60	25	64	35	62	31
規則正しい生活	60	17	50	18	55	17
適度の運動	47	42	43	24	45	13
酒・タバコの節制	47	17	57	6	52	10
健康診断等	67	33	64	35	66	34

(2) 体調については、年令差・男女差の特徴はなく、全対象者のうち71%の者が「健康である」と答えている。「弱い、通院中である」と答えた者合わせて29%である。ホーム2の対象者は、下町2の対象者より年令層が少し高令(最85才)であるので、健康な者が66%である下町2の対象者と比べると体調は悪くない。

(3) 精神的状況について不眠、食欲不振、便秘しがちな者57%、忘れっぽい、覚えられないという者74%、イライラ、気分不安定な者31%、元気が、淋しいという者22%。(ただし、項目毎の比率であるから合計100%とならない) いずれも高令者の特徴であるが、イライラ、気分不安定な者31%に関しては、13%であった下町2の対象者に比して多い。同室者と意見や生活のペースが合わないためという注釈つきの者もかなりいる。

(4) 体調と精神的変調との解答数を対比した結果は次の表の通りである。どちらの対象群も身体的に健康な者は、精神的にも健康である。病弱な者は、ホーム2の対象者では、下町2の対象者のように身体的健康度に比例しない。ホーム2では、同室者との協調に多少の不満があって精神的に不安定という者もあるが、全体的にみて、高令者の団体生活の中で精神的に比較的安定した生活をおくっているといえよう。

発調項目数	下町2 (%)			ホーム2 (%)		
	0～1	2～3	4以上	0～1	2～3	4以上
健康者	49	42	9	49	32	20
病弱者他	22	33	44	41	29	29

〔2〕老人意識

(1) 自分を「老人」と思っているか否かの質問に対して次の

数値は%	下町2				ホーム2			
	～75才		76才～		～75才		76才～	
	男	女	男	女	男	女	男	女
肯定	21	65	70	67	40	67	71	82
否定	79	35	30	33	60	33	29	18

結果を得た。どちらの対象者も、～75才群で男女の考え方に差がある。すなわち、～75才群の男性の多くの者が「老人」であることを否定している。また、世間が「年寄り」というから、一応「老人」と思う解答もある。(2) 老人意識と体調との関係を数値的に見ると、「老人」であることを否定した者で体調に何らかの不調をうったえた者は、～75才群で下町2が13%、ホーム2が15%である。76才～群に於いても、下町2が11%、ホーム2が29%である。やはり「老人」であることを否定する者は、健康にも恵まれているということであろう。ちなみに対象者中の最長老者(95才)も「老人」とは思わない」と答えている。

〔3〕仲間意識

「助け合ったり意見を交換したりする人がいる」という解答者が下町2で87%であるのに、ホーム2では、59%と低い数値である。また、このホーム2に於いて、「話し合える人がいない」と断言した者が35%もあった。

III 結び： 紙面の都合で、データは省略するが、クラブや同好会の参加者は、身心共に健康で知的能力の衰えもあまりないようである。不参加でも新聞をよく読んで読書する者も身心健康で、知的水準も高い。このホームは最長24年間の在住者を始めとし長い在住者も少なくない。今後は上記以外の角度の調査資料も使って、高令化にともなう知能の変化について究明したいと思う。

高令者における知能の変化 XVII

— 語い検査による —

児玉省 飯島澄子・鈴木光子 高橋 豊

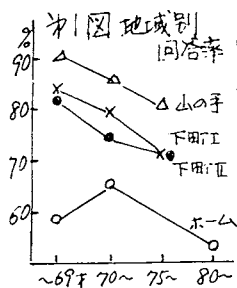
(児玉教育研究所)

I 目的と方法 高令者の知能の年令による変化に地域差があることを、老人ホームの人達に加わってもらって検討し、その原因を解明しようとした。前年と同じ質問紙(明治から現代までの各時代を代表する事件を内容とする刺激語120語を無差別に並べ知っている語に○をつけてもらう)を用いた。語いは、A政治経済 B芸能スポーツ C科学医学 D社会文化宗教に分け、○の数によって整理した。対象は前年度と同じ60才から95才までの56名である。

II 結果と考察 結果はオ1図~オ4図及びオ1表に示す。オ3図オ4図の年代は、I.日露戦争 II.オ1次大戦 III.オ2次大戦 IV.朝鮮事変 V.石油ショック VI.現代を表す。

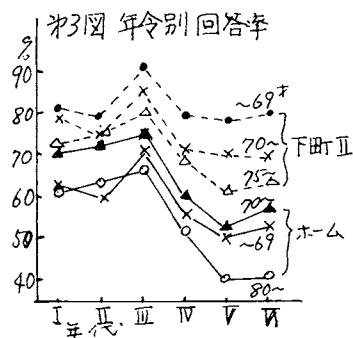
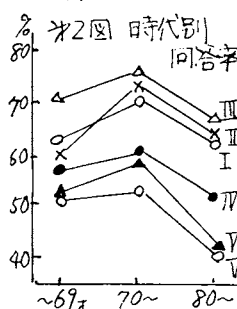
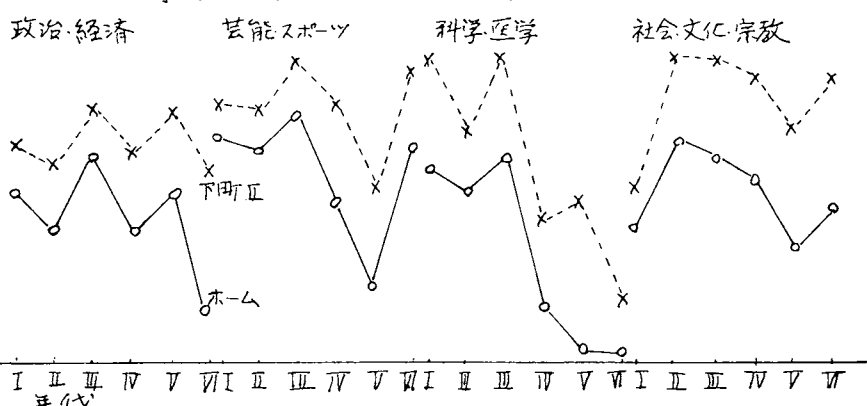
答率は低くなるがホームでは逆に60才台が70才台よりも低回答率である。他地域の人は自分で積極的に生活を営んでいるのに対し、ホームではすべて与えられたまゝに従って生活しており、自分で情報を補完判断して行動をよこす必要が余りない。生活するための積極性がないことに原因するのではないと思われる。

2. 下町ホームの各年令群ともオ2次大戦時の事柄はよく記憶され現代の事よりも昔の事の方がよく記憶されている。3. 各年令群とも下町の方が高回答率を示す傾向にカーブを示している。4. 芸能スポーツ・社会文化宗教はよく記憶されているが科学医学の記憶は悪い。現代の科学医学は記憶が非常に悪いのに芸能スポーツ・社会文化宗教は現代までもよく記憶されている。5. 時代分野を問わず社会に喧伝されたものはよく記憶として残り、又現代の科学医学は高年令には残りにくいように思われる。



1. 一般にホームの回答率は山の手・下町Iに比べて低い。又他地域では年令が高くなるにつれ回答率は低くなる。

オ4図 分野別回答率 (都内下町との比較)



オ1表 分野別回答率

分野	年令	下町			ホーム			分野	年令	下町			ホーム		
		~69才	70才	75才	~69才	70才	80才			~69才	70才	75才	~69才	70才	80才
A	I	74.1	71.0	71.0	56.3	70.9	60.0	B	I	82.4	81.0	77.0	70.0	80.0	65.6
	II	68.2	66.0	72.0	52.5	61.8	52.2		II	81.2	80.0	75.0	62.5	79.1	67.8
	III	83.5	81.0	73.0	63.8	75.5	68.9		III	91.8	86.0	88.0	73.8	85.5	71.1
	IV	80.0	67.0	67.0	55.0	59.1	54.4		IV	85.9	79.0	76.0	68.8	62.7	52.2
	V	87.1	80.0	72.0	60.0	70.9	55.6		V	70.6	59.0	63.0	50.0	50.0	33.3
	VI	82.4	66.0	54.0	45.0	50.0	26.7		VI	95.3	84.0	80.0	70.0	78.2	65.6
	VII	91.8	93.0	83.0	65.0	69.1	67.8	C	I	74.1	70.0	59.0	56.3	60.9	52.2
C	II	77.6	74.0	74.0	60.0	70.9	58.9		II	90.6	89.0	87.0	63.8	81.8	73.3
	III	97.6	89.0	83.0	72.5	71.8	64.4		III	97.6	88.0	82.0	76.3	71.8	63.3
	IV	60.0	60.0	52.0	40.0	44.5	38.7		IV	92.9	82.0	82.0	65.0	73.6	58.9
	V	71.8	65.0	47.0	38.8	35.5	26.7		V	80.0	78.0	71.0	56.3	56.4	46.7
	VI	48.2	39.0	39.0	40.0	36.4	21.1		VI	90.6	87.0	78.0	60.0	67.3	54.4
	VII	91.8	93.0	83.0	65.0	69.1	67.8		VII	90.6	87.0	78.0	60.0	67.3	54.4

分野: A:政治経済 B:芸能スポーツ C:科学医学 D:社会文化宗教

言語発達診断検査と知能検査の関係について

藤 岡 秀 樹
(京都大学 教育学部)

〔目的〕 幼児の読み書き能力についての研究は、これまで比較的多く行なわれてきた。その代表例として、国立国語教育研究所(1972)のものがあげられよう。また、読書レディネステストと読字力の関係をみた研究もある。しかし、これまでの研究の大半は、知能検査との関係を十分に調べられてはいない。本研究では、文字学習のレディネスをみる言語発達診断検査と知能検査の下位検査間の関係を明らかにすることを目的とする。

〔方法〕 材料 1. 言語発達診断検査 文字学習のレディネス診断を目的として河井(1979)によって作成された言語発達診断検査(田研出版)を使用。「語い」「発音」「音韻分解」「読字」の4検査から構成。2. 知能検査 TK式幼児用田中B式知能検査(田研出版)と京大NX5-8知能検査(大成出版牧野書房)を使用。田中B式は全検査を、京大NXは「同図形発見」と「語いⅡ」を実施した。

被験者 大阪府下のT幼稚園の年長・年中組園児102名(男子59, 女子43)。CAは5;0~6;2

手続き 田中B式知能検査は、担任または副担任により、3~6名のグループ単位で実施。言語発達診断検査と京大NX知能検査は、筆者により個別実施。

〔結果と考察〕

知能検査・言語発達診断検査とも下位検査の粗点を

分析の指標とした。下位検査間の相関係数を求めたのが表1である。言語発達診断検査と知能検査の相関は有意だが低い。被験者のCAからみると、言語発達診断検査の得点に天井効果が生じ、相関が低くなったと考えられよう。田中B式の「ことば」が言語発達診断検査の各下位検査と比較的相関が高い(.30~.41)といえる。言語発達診断検査の内部相関は、「発音」と「語い」、「音韻分解」、「VQ(語い指数)」との相関を除けばかなり高いといえる。次に、知能検査と言語発達診断検査の各下位検査間の関係を調べるために、正準相関分析を行なった。係数ベクトルを表2に示す。正準相関

表 2 正準相関分析の結果

		係数ベクトル	係数はそれほど
目的変数	語 い	.583	高くない。係
	発 音	.441	数ベクトルの大
	音 韻 分 解	.477	きい下位検査は
	読 字	-.194	言語発達診
説明変数	数	.095	断検査では読
	田 中 用 途 (機能)	.031	字を降ろすつ
	用 途 (場面)	.057	の検査、知能
	B 式 欠所不合理発見	.189	検査では田中
	こ 事 ば	.691	B式の「ことば」
	同 図 形 発 見	-.040	であること
正 準 相 関 係 数		.201	がわかる。
		λ = .524	

表 1 知能検査と言語発達診断検査の相関係数

	B式 IQ	数	用途 (機能)	用途 (場面)	欠所不 合理発見	ことば	同図形 発見	語いⅡ	語いⅠ	発音	音韻 分解	読字	V Q
田中B式IQ		**	**	**	**	**	**	**	**	*	**	**	**
田 数	.82		**	**	**	**	**	**	**	*	**	**	*
中 用途(機能)	.68	.44		**	**	**	**	**	**	*	*	**	**
用途(場面)	.76	.55	.61		**	**	**	**	**	*	*	**	**
欠所不合理発見	.79	.35	.42	.47		**	**	**	**	*	*	*	**
式 ことば	.69	.41	.56	.54	.44		**	**	**	**	**	**	**
同図形発見	.36	.30	.27	.34	.49	.38		**	*	*	*	*	*
京大NX 語いⅡ	.49	.37	.42	.45	.41	.47	.35		**	*	*	**	**
言語発達検査 語いⅠ	.38	.26	.35	.37	.30	.41	.20	.32		**	**	**	**
発 音	.22	.16	.22	.21	.20	.30	.11	.24	.34			**	**
音韻分解	.26	.25	.25	.23	.24	.40	.24	.25	.59	.16		**	**
読 字	.29	.27	.31	.30	.25	.36	.25	.30	.77	.51	.59		**
V Q	.37	.25	.32	.36	.28	.40	.19	.33	.88	.32	.55	.73	

右上は相関係数の有意水準を示す

* ; $p < .05$

** ; $p < .01$

因果性の多次元的属性性についての5ヶ国の比較文化的研究(2)

永沢 幸七
(東京家政学院大学)

目的: 本研究は、5ヶ国(米国、南アフリカ、日本、インド、ユーゴスラヴィア)にわたって、教員養成・社会科学、並びに自然科学の三学科専攻学生における学力達成度と親和関係などの成功と失敗に対し、四つの要因となる属性(能力、努力、社会的文脈、運)の要因となる属性(能力、努力、社会的文脈、運)を調査したものである。

方法: 以前4大陸にわたるいくつかの大学において協議の結果(日本、南アフリカ、米国、ハンガリー、ユーゴスラヴィア及びインド)、レフコート(1978)のMMCS(多次元的属性性因果性尺度)が、それぞれの国語に翻訳され、それを使用するに必要であることが明らかにされた。またその調査の実施を標準化し、相互比較の可能な標準を得るために、共同研究者たちは、次のような指針をおさめと与えられた。すなわち①年令幅19~24才②略同数の男女③大学又は予備校に在籍中の全日制の学生、④次の学科専攻が、各科最小限40名・社会科学とは又は心理学、社会学など)教育学(教員養成)自然科学(化学、生物学、物理学など)⑤10月乃至11月中にグループとして授業を実施する。

8項目の5変式リソカート型のMMCSは、無作為に並べられた学力達成度の領域を診断する24の項目、及び親和関係の領域を診断する24の項目とから成つていて、それぞれの領域の中に、成功と失敗の項目にわたって、同様に無作為に並べられた属性(能力、努力、社会的文脈、及び運)の各々に対する6箇の打診項目があった。一連の実験におけるレフコート(1978)は、それぞれの領域の中に、成功と失敗の項目にわたって、同様に無作為に並べられた属性(能力、努力、社会的文脈、及び運)の各々に対する6箇の打診項目があった。一連の実験におけるレフコート(1978)は、それぞれの領域に十分な有効性と信頼性のあることを例証している。以上のMMCSを、5変式リソカート法(それぞれの項目ごとに「賛成」「やや賛成」「賛成でも反対でもない」「やや反対」「反対」を回答を求め、それぞれの正規分布をよびに+2,+1,0,-1,-2を得点化して合計点数を尺度値とする態度尺度構成法(一種)で各領域ごとに診断した。

結果: 親和関係については、次のような比較が

示唆された。①能力の属性性に対しては、インド、南アフリカ、及び米国がユーゴスラヴィアと日本よりも高い得点を示している。女性も、どの国でも、男性よりも得点が高く、とくに失敗も能力に帰因する点で高かった。②努力については、女性も成功を努力に帰因する点では、また失敗も努力に帰因する点では、インドが他のすべての国よりも高かった。③社会的文脈の属性性に対しては、インド、南アフリカ、及び米国が、ユーゴスラヴィアよりも高い得点で、南アフリカは日本よりも高い得点を示した。しかし成功と社会的文脈に帰因するという点では、日本は最高点であった。また教育学専攻学生は社会科学専攻学生よりも得点が高かった。④運の属性性に対しては、インド、南アフリカ、日本が高くて、しかも印度は最高点であった。成功を運に帰因する点では、日本は他の国々よりも得点が高かった。教育学専攻学生は、運の属性性に関して、社会学専攻学生よりも高い得点であった。

学力達成については①能力の属性性に対しては、インドが高得点であった。女性も、それぞれの国でも、とくに失敗も能力に起因する点では、男性よりも高かった。②努力の属性性に対しては、インドは南アフリカよりも得点が高く成功も努力に帰因する点でもインドが米国をのぞいたすべての国よりも高い得点であった。③成功も社会的文脈に帰因する点では、米国が日本よりも高かった。失敗も社会的文脈に帰因する点では、南アフリカが、米国、ユーゴスラヴィア、及び日本よりも高い得点を示した。また教育学専攻学生は、社会科学専攻学生よりも高かった。④運の属性性に対しては日本は高い得点であった。

TABLE 1
MEAN ATTRIBUTION AND COMPOSITE SCORES FOR AFFILIATION SUCCESS, FAILURES, AND TOTAL

Country	Ability	Effort	Context	Luck	Internality	Stability
Affiliation successes						
India	12.50	10.85	11.39	8.48	3.53	4.64
Japan	9.81	11.38	12.03	9.71	-1.04	1.25
S. Africa	10.20	10.21	11.60	8.22	2.76	4.45
USA	10.40	10.47	10.68	5.88	4.40	4.42
Yugoslavia	10.54	10.55	10.90	8.14	2.06	2.75
Total	10.73	10.79	11.14	7.59	2.60	3.68
Affiliation failures						
India	9.81	9.78	8.17	9.51	2.11	-1.11
Japan	9.04	9.08	8.47	7.95	1.30	.48
S. Africa	9.00	9.16	8.60	8.15	1.50	.37
USA	8.00	8.40	7.90	7.02	1.68	.47
Yugoslavia	8.50	9.18	7.64	8.03	2.01	-1.02
Total	8.69	9.14	8.16	8.09	1.82	-1.17
Total affiliation						
India	11.20	10.31	9.78	8.99	2.84	1.22
Japan	9.42	10.23	10.25	8.58	.83	.86
S. Africa	9.64	9.70	10.10	7.79	2.08	2.86
USA	9.20	9.40	9.29	6.45	3.24	2.44
Yugoslavia	9.51	9.91	9.31	8.08	2.03	.84
Total	9.82	9.92	9.35	7.84	2.10	1.15

Note: Negative numbers indicate external or unstable attributions for the internality or stability composite scores.

Focusing のインストラクションについての一考察

。白岩 祐子

川村 玲子

井上 登子

(ちば心理相談ホーム)

(とげぬき生活館相談所)

(港区教育センター)

< 目的 >

Focusingは人間の脳を含むからだ全体が**すでに**知っているが、私達には未だ認識されていない内面の「ある感じ」を象徴化していくプロセスである。その体験は自己への新しい気づきであり、新しい発見であり、特にその深い体験はまさに実存に触れる体験である。私達は、5年間のFocusing体験からFocusingは自己への信頼と人間性の回復に役立ち、潜在的な創造力の開発を促すものであると確信している。

Focusingはその理論に於いては、多くの人達に支持されながらも、体験することは難しいと敬遠されているのが現実である。私達は人間の体験過程の流れを重視、内面に起ってくる真の自己に触れる体験を大事にしあいながらFocusingのStepを理解してきた。その経験から、どんな人にも体験できる。より日本人に合ったFocusingのinstructionをめざして工夫を重ねてきた。S57 東京フォーカシング研究会としてinstructionの表を制作したが、この下の表はその後の体験に基づいて修正、改良したものである。

< 重視点 >

日本人は欧米人に比べ、より情緒的であり、状況の中で常にかからだに「ある感じ」をかかえて生きているといえる。その「ある感じ」に集中できさえすれば、自然に自己の深い内面に触れ、それを象徴化すること

は容易である。従って「ある感じ」(felt sense)にいか
に集中できるか」ということがこのinstructionの大きなポイントである。(1) Clearing a spaceのstepでは表に示したように例の3つからFocuserが選択できるようにし、あくまでもFocuserのペースで進むことを大事にしている。そして莫然とした感じに触れ続け自然の流れにまかせてその全体の感じを味わうことである。(2) get a handleのstepでは意識的につかむのではなく十分に味わうことによってピッタリしたことがでてくる。そして自然にshiftがおこりからだ全体が解放される。そしてreceiveのstepに移る。(3) askのstepを表のように二重枠にした理由はresonateのstepの次のstepという意味ではないということである。ここではshiftがおこっていない場合にfelt senseに戻るためのstepであることを明確にした。

< 結論 >

私達がFocusingを学び始めた当初はGendlinが数示したようにstep毎に理解しながらFocusingのプロセスを体験しようとしたがなかなか困難だった。今ではこのようなinstructionによって、始めての人でも容易に自然にかからだの感じに触れられその感じを象徴化し易くなってきている。しかしこのinstructionは始めての人でもFocusingに入っていられるように配慮したものであるから、体験の積み重ねている人は、自己の体験

段 階	ポ イ ン ト	イ ン ス ト ラ ク シ ョ ン
空間をつくる (clearing space)	△からだも心もリラックスし、クリアで落ち着いた状態になる。 △注意を自分の内面に向け、真のところで自分がどんな状態なのかゆとりをもって感じようとする。	△静かにゆったりと楽に下すべ。眼を閉じて、ゆっくりと深い呼吸をしましょう。 △今からだの感じはどうか。リラックスしているかな。と確かめてみましょう。 △注意を自分の内面に向けてみて下さい。 例1. 「何か気にかかっていることあるかな」とやさしく問いかけて尋ねてくるままだいでみましょう。 2. 「その頃どんな感じに生きているかな」と問いかけて尋ねてくるままだいでみましょう。 3. 「今どんな感じに自分の中に感じているかな」と問いかけてその感じのままだいでみましょう。
フェルト・センス (felt sense)	△何かがはっきりしないが確かに感じているその感じに注意を向け続ける。 △その中に入りこまないとその全体の感じをからだで感じようとする。	△気がかりなことあるいは莫然としたものがひびくようになるのを待ってみましょう。 △でできえある感じとか莫然とした感じに注意を向け続けてみましょう。 △その全体の感じはどんな感じかな △その感じをしばらく味わっていてみましょう。 △わかきかってくるままだ、まかせていてみましょう。
その全体の感じに ピッタリしたことが でてくるのを待つ (get a handle)	△そのフェルト・センスからその感じにピッタリしたことはかイメージがでてくるのを感じを味わいながら待つ △核心に触れその質をとらえようとする。	△「その感じはどんな感じかな」とじっくり味わいながら待つでみましょう。 △ピッタリしたことはかイメージがからだの中心から昇ってくるのを待つでみましょう。
共振させる (resonate)	△できたことばとかイメージがフェルト・センスにピッタリ合っているが全身で覆われる。 △ここでシフト(Shift)がおこることが多い。	△そのことばとかイメージがその感じにピッタリ合っているかな
フェルト・センスに たずねる (ask)	△シフトが十分に起きていない場合、フェルト・センスをもどってその感じをもう一度味わってそれに問いかけてみる。 △シフトがわからなくとも、そのフェルト・センスはからだの中でなじむための時間を必要としているかもしれない。待つことも大事。	△まだその感じあるのかな、と問いかけてみましょう。 例1. 「なんでこの感じができたのかな」とゆっくりやさしく自分に関わけてみましょう。 2. 「そのフェルト・センスは何を必要としているかな」とやさしく自分に関わけてみましょう。 「ああ、そうか」となるまでその感じに触れ続けていてみましょう。
受け取る (receive)	△解放感をもたせてできたものはどんなものでもそのままだまま受け取る。 △フォーカシングの後、体験を感ずることで戻ったとき受け取ることができる。	△しばらくその感じのままだいでみましょう。 △おこったものはそのままだ「そうだ」と楽に受け取りましょう。

過程の流れにそつて自由に自分に合ったFocusingを工夫していつている
Focusingの体験が深まるにつれて私達は、この途方もない人間の内面の豊かな未踏の世界の一週に立った感じがしている。
Focusing体験に基づいた人間への臨床的アプローチは緒についたばかりと感じている。

東京フォーカシング研究会 発行

Focusing による成長過程の一事例

。井上澄子

(港区教育センター)

川村玲子

(とげぬき生活館相談所)

白岩紘子

(ちば心理相談ホーム)

<目的>

フォーカシングの特徴は、からだの内部のある特別な気づき(からだの感覚)に直接触れながら、体験的变化をもたらしところにある。したがってfelt sense(特定の問題や状況についてのからだの感覚)から、felt shift(意味が象徴化され、体が解放される)へとむかうプロセスは、全身的なものであり、まさに実存に接近するものである。このように深い体験への直接的集中により、自分自身の在り方が変わり、より自分らしく、ゆとりをもった人間へと成長していくことを強く実感している。事例をあげ、考察を進めたい。

<事例> K 55才 女性(主婦)

突然思ってもみないトラブルに巻きこまれ、抵抗する術もなかった。心の中でその人との縁を切ったが、気持はなかなか整理がつかず、ノイローゼ気味だった。頭では分っている、モヤモヤした状態が続いていたのでカウンセリングを受けるなどしたが、全くの進展はみられなかった。

第1回 「ある問題についてやってみよう」

胸がだるいー目の前がつかまった感じーこめかみが重いーリヤス式海岸のようなギザギザ、亀裂ー胸が不安な感じーランドキャニオンの断崖のように何層にもなる深い亀裂ー深いー胸のあたりがぐーっとくるー深い、深い、深いですね(さめざめと涙を流す)

Kさんは、思ってもみなかった傷の深さに驚き、涙と共に全身が解放された。この時初めて自分がどんなに深く傷ついていたかをからだで感じ、全身で納得することができたのである。こんなに深いのなら無理に解決しようとするのはやめよう。自分をいたわって自然の時がくるのを待とうという気持ちになった。このように体の感じが象徴化され、全身で受けとることができた時、今までとは違ったあり方になり、ゆとりをもって落ち着いて暮せるようになったのである。

第2回 「1回目の続きをしたい」

おなかの中に何かある感じーどんどん固まってくるーこのしこり宝石みたいに輝いているー体が動いてきちゃー体がふるえるー体を動かすことによって持ちこたえているようなものがあるーゆさぶられるーおなかのぐーっと絞られる(涙が出る)ーおなかの中に入っている子どもみたい(さめざめと泣く)ー私のおな

かの中のものだから苦しいんだーだからすごくきつく感じていたーあっ分ったんだ(大きな声で笑う)

Kさんは「おなかになにかある」という漠然とした感じに焦点を合わせていくうちに、からだが表示し、その全体の感じを味わっていた時、そのことの意味を全身で受けとることが出来たのだった。つまり自分の内面に深く入り、憎んでいるだけと思っていたけれどその中には、自分にとって大切な宝の部分もあり、宝だったからこそこんなにも大変だったということに気づいた。Kさんはこのことによって問題に取り組む姿勢が憎しみから優しさへと変わっていった。その後自分でフォーカシングをし、体にききながら自信をもって接触を求めて行くことで人間関係の回復がみられた。第3回 「漠然と何か感じているので確かめたい」

首が左右に自然にゆれてとまらない(10分)ー平な表面をなでている感じー上腹部がつれるー固い四角い鉄の固まりー苦痛ではないーそこにカチッとあって動かないーあっこれが私、私自身なんだ(突然叫ぶ)

Kさんは首を振りながら漠然としたものに触れ続けた。そしてカチとした鉄の四角い固まりが上腹部にあり、その全体の感じがまさに自分自身だと気づいた時は全くの驚きだった。人づきあいがよいように見えて、絶対に入れない部分がある。「まさにこの感じづーつと持ち続けていた」と体の感じから自分自身の人間関係の特質に気づいたことは意味のあることだった。

<考察>

以上3回の経過をのべたが、フォーカシングは日常レベルの問題解決から、実存のレベルに至るまでの体験なのである。そしてその入り方も、問題から入ってそのことについての体の感じに焦点をあてていく場合(第1、2回)と、日頃から体が漠然と感じていることに直接ふれていく場合(第3回)等がある。いずれにせよ、リラックスして優しさをもって体の内面の深いところから、自然に湧き起ってくるのをじっくり待つことが非常に大切であり、また起ってきたことを素直に受け取ることが重要なのである。そしてリスナーも自らの体験にフォーカスし、フォーカサーの体験の深さに共感し得た時、フォーカサーはより自らの実存にふれることによって人間を信頼するようになり、より自分自身へと成長して行くことを実感している。

集団用新訂人格診断検査における反応の特徴 (その1)

— 登校拒否児と非行児の比較 —

○小田智子 前田茂則 高橋直昭 柏女聖峰 鈴木信司

(千葉県市川児童相談所)

目的: 集団用新訂人格診断検査と登校拒否児及び非行児に個別に実施しそれぞれの反応特徴について考察する。

方法: (1)対象者 過去5年間に当所に来所した中学生の登校拒否児(医学、精神障害を除く)と非行児(精神障害を除く) (2)分析方法 反応決定図、Key-、P反応、簡易診断(簡易診断法の1から10までのチェック数)、形態水準について平均値の差をt検定した。

結果: 表1、表2、表3、表4のとおり。なお、標準値は、検査手引(S47年金子書房)より引用した。

反応決定図で有意な差が出たのは Csym(非行)登校拒否のみであったがFK(登校拒否)非行、F(登校拒否)非行、Cdes(非行)登校拒否にも10%以下の差のみ見られた。また、標準値と比較した場合CF(非行)標準に有意差が、C(非行)標準には10%以下の差のみみられた。

た。

形態水準では登校拒否児の方がより高い傾向にあった。

また、簡易診断法のチェック数では、2の知的効率、8の不快感、憂うつ感より非行児が高く、7の硬さ、より登校拒否児が高くなっていた。

考察: 登校拒否児は非行児に比べ形態を重視し、非行児は色彩(彩色、無彩色)を重視する傾向があるといえよう。他の傾向とも合わせて解釈してみると、登校拒否児は情緒的反応を直接にうけとめようとせず、距離をおき、知的統制によって抑制しようとし、非行児は知的統制よりも情緒的反応(衝動、抑うつ等)が強くなる傾向がみられる。

登校拒否、非行を更にタイプ別、予後別に分析していくことが今後の課題と思われる。

項目	M	FM	Em	FM	FK	KF	K	Ek	KE	K	F	FC	CE	C	Csym
非行児	15.9	9.8	36.17	59.32	48.17	38.22	50.27	42.23	55.26	62.33		9.5	13.5	58.30	49.31
1	38.21	15.2	28.16	6.1	15.15	20.7	13.4	23.4	10.7	2	19.13	29.19	4.3	16.2	
2	11.3	19.11	1		1.1	7.4	2	1	1	2	30.10	17.4	3		
3		6.3									7.4	4.5			
4		13.5									4	2			
5		2.3									1.2	1			
6		1.1									5.2				
7											7.3				
8											7.3				
9											20.8				
10											11.3				
11											3.3				
12											3.3				
13											1.4				
14											1.2				
15											1.1				
平均	0.22	0.87	2.14	2.24	0.46	0.48	0.04	0.03	0.28	0.52	0.52	0.45	0.26	0.19	0.35
標準値	0.9	2.6	0.6	0.1	0.2	0.2	0.1	0.3	0.1	0.1	8.54	9.4	1.54	1.52	1.28
分規	0.42	0.34	2.21	3.66	0.28	0.26	0.09	0.03	0.23	0.32	0.47	0.51	0.26	0.11	0.23
7	0.17	0.30	0.21	1.30	0.15	0.46	1.62	0.19	0.71	0.13	0.17	0.23	0.11	0.16	0.19
非行児	35.24	27.22	45.26	62.33	25.13	37.19	58.32	60.31	71.5	10.8	15.8	20.15	12.3	25.13	
1	24.8	23.7	14.6	3	26.18	19.11	7.1	5.2	15.8	20.15	11.10	19.5	13.6	11.4	
2	6.1	3.2	6.1		14.2	9.3			17.6	8.1	10.10	10.10	5.5	5.5	
3									7.2	5.3	16.7	7	2		
4									1.1	1	1.1	1			
5									1.1	1	1.1	1			
6									1.1	1	1.1	1			
7									1.1	1	1.1	1			
8									1.1	1	1.1	1			
9									1.1	1	1.1	1			
平均	0.55	0.30	0.45	0.39	0.40	0.24	0.05	0.0	0.83	0.67	0.57	0.52	0.11	0.03	0.05
標準値	0.3	0.9	0.3	0.03	1.1	0.4	0.04	0.2	2.51	1.94	1.80	1.76	2.85	3.27	1.29
分規	0.44	0.25	0.34	0.37	0.43	0.25	0.04	0	3.22	1.87	1.36	1.34	2.63	2.64	1.94
7	1.87	0.41	1.30		1.07	0.35	0.45	0.10	1.72	1.52	1.22		0.71		

表2 反応決定図別標準値との比較 *は5%で有意。

項目	FC	FK	CF	C
非行児	9.98	42.65	37.72	19.58
1	19.32	23.32	9.19	23.11
2	30.33	10	1.1	9.48
3	7.18	4		3
4	48			
5	4	1		
平均	1.53	1.27	1.51	0.35
標準値	0.25	0.23	0.23	0.24
分規	0.75	1.08	1.20	0.23
7	1.77	1.40	0.16	0.13

表1 反応決定図別の比較 *は5%で有意。

非行児 N=65(男50 女15)
登校拒否児 N=33(男23 女10)

表3 形態水準の比較

項目	FC	FK	CF	C
非行児	11.99	13.11	10.02	0.02
7	12.11			

表4 簡易診断チェック数の比較 ()内%

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
非行児	2	12	20	4	2	7	2	16	11	6	6	9	0	17
登校拒否児	4	1	7	1	3	5	6	5	3	1	1	3	0	7
分規	12	3	2	3	9	15	18	13	9	3	3	9	0	21

小学生非行と微細脳機能障害(MBD) -その1-

○柏木聖峰 前田茂則 高橋宣昭 鈴木省司 小田智子
(千葉県市川児童相談所)

＜目的＞小学生期に窃盗、万引、家財持ち出し等で相談のあったケースについて分析を行ない、その中で大きな位置を占めると思われる微細脳機能障害症候群や脳障害児(以下1群)と、そうでない児童(以下2群)とを比較検討することを目的とする。

＜調査方法＞過去6年間に当所に来所した上記児童を選出し、1群と2群とに分けて統計的検討を加えた。

①結果 ①群と2群の比率は男女比は表1のとおりである。(1)は%。なお1群の内訳はMBD(疑いを含む)18名、統合失調症の軽い軽度MR1名、器質障害2名である。両者とも男児が圧倒的多数である。また1群は全体の30.9%を占め、これは一般児の中のMBDの出現率2.2%(上野1982)、2.98%(牧田1968)に比し圧倒的に高率である。

②取り扱った年齢は表2のとおりである。全体としては3～6に多いが、1群の方が相談に来所する年齢が早い傾向にある。

③非行初発年齢は表3のとおりである。幼児期～小1～2期で全体の74.2%を占め、低年齢初発が顕著である。また1群の方がやや早い傾向にある。

④家族関係は表4のとおりである。実父母がそろっているものが全体の44.1%にすぎず、単身家庭は26.5%、継父母家庭は25.0%を数え、家族構成上からも愛情に恵まれず、非行をくい止めにくい家庭状況が浮かんでくる。なおここで1群の方が2群に比し実父母がそろっている割合が高い(57.1%)ことは1群の児童の持つ性格的問題傾向(自己統制力の弱さ等)を示しているともみることが出来る。

⑤学業成績を3段階に分けて示したものが表5である。下位が全体で66.1%を占め、上位はわずか3.2%である。表6でIQが平均的であることを考へれば、学業不振が非行に与える影響も無視

することは出来ない。

⑥知能レベル(WISCによる)は表6のとおりである。知能水準は全体では平均的であるが、FIQでは1群がやや低く、また1群はPIQとVIQ

に差が大きい。2群ではPIQがやや高い。なお両群とも最優から最劣段階にまで分布し中位が多い。

⑦脳波検査結果は表7のとおりである。異常が全体で半数を越え、ボーダーラインを含めると74.5%を占めている。1群の方が異常の割合が高い。異常の内訳は年齢に比しslowであるというものが多い。

⑧性格傾向：幼児児童性格診断検査(保護者記入)の各項目平均粗点を4桁五入しパーセンタイル表示したものが表8である。2群ではこの検査で「注意」、感情性、自己顕示性(1)、自制力の低下(4)、依存性(5)、退行性(6)、攻撃・衝動性(7)家庭への不適応(9)があげられ、また個人的(8)にも社会的(10)にも不安定傾向が著しい。この結果から1群の方がパーソナリティ上多くの問題を有しているといえる。

⑨医学的治療：2群では1名、1群では7名が治療を受けている。

＜考察＞小学生の盗みの問題は男児に圧倒的に多く、幼児期、小学校低学年期に多くその発症がみられる。家庭環境は悪く、愛情欠乏感、非行抑止力の弱さ等が指摘され、知的には平均して普通域にあるにもかかわらず学業成績は下位のものが多い。脳波異常の多さにもみられるように、中枢神経系の未成熟さとも関係があるとみられる。特にその顕著な例としてMBDを中心とする中枢神経系機能・器質障害が全体の約3割を占め、後者はパーソナリティ上も片寄りが大きく早期から家族の心配を集めている。小学生の盗みに関する点では、特にMBDのケースについては、上記結果から、環境調整的、心理療法的、及び医学的、治療教育的アプローチが必要であるといえる。

脳器質障害者におけるWAISについて

○ 箱 富 正 治
(駒 沢 大 学)

岡 部 健
(川崎市心身障害センター、しいのき学園)

最近、CTスキャンなどのME機器の進展は目ざましいもので、脳の器質障害の部位や程度の診断が容易になってきた。脳器質障害に伴う精神機能(知能・性格など)の評価における臨床心理学的なアプローチでは各種の心理検査が用いられている。これらの精神機能の障害の中では、とりわけ知能障害が目立つものであり、この評価に最も多く用いられるものがWAIS(Wechsler Adult Intelligence Scale)である。WAISによる知能障害の指標として、従来より全知能指数(以下TTIQと略す)の低下、下位検査得点のばらつき、中でも積木・絵画配列・類似問題の成績の低下、また、言語性IQ(以下VIQと略す)、動作性IQ(以下PIQと略す)間の差の拡大などが指摘されている。VIQとPIQの差については、8~10程度が適応範囲であるとされ、また、VIQに比べPIQが低下するとされている。しかし、臨床的な経験では脳器質障害者で、その両IQの差が大きい事やVIQ>PIQの傾向を示すものも必ずしも多くないとの印象を持っており、従来指摘されてきた特徴と異なっていた。この為、本研究は、VIQ、PIQ間の差が、1). いわゆる適応範囲を逸脱するものの出現率、2). VIQ>PIQの出現率の検討を試みることを目的とした。

方法及び対象者

対象者は、昭和49年から昭和57年までの8年間に某大学病院の精神科・脳外科の通院もしくは入院となった患者で、WAISを施行した122名(平均年齢37.1歳)である。その内分けは、表1に示す。

表1. 各疾患ごとの症例数(N)及び平均年齢(age)

	頭部外傷	脳腫瘍	てんかん	循環器障害	脳血管萎縮
N	37	23	41	13	8
age	35.8	33.1	32.9	45.7	45.9

なお、以下の者は除外した。1). TTIQ、VIQ、PIQのいずれかが60未満である者、2). 特に脳腫瘍・循環器障害の術後の者、である。

結果及び考察

各疾患ごとの平均IQは表2、VIQとPIQ間の差が10もしくは15以上の者の出現率は表3、VIQ>PIQの出現率を表4に示した。

表2. 各疾患ごとの平均IQ及びVIQとPIQの差

	TTIQ	VIQ	PIQ	VIQ-PIQ
頭部外傷	88.81	88.92	89.49	-0.57
脳腫瘍	81.92	83.38	84.08	-0.70
てんかん	83.68	84.10	86.54	-2.44
循環器障害	84.78	84.87	88.35	-3.48
脳血管萎縮	83.50	87.38	81.63	5.75

表3. VIQとPIQの差が10以上の者、15以上の者の出現率の検定

	頭部外傷	脳腫瘍	てんかん	循環器障害	脳血管萎縮	χ ² 検定
10以上	57%	31%	39%	35%	38%	4.578
15以上	38%	15%	27%	26%	25%	2.829

P.05>9.488

表4. VIQ>PIQ 傾向者の出現率の検定

	頭部外傷	脳腫瘍	てんかん	循環器障害	脳血管萎縮	χ ² 検定
VIQ>PIQ	41%	54%	46%	35%	63%	2.722

P.05>9.488

表2によると、TTIQは全疾患において、80代と低いIQであった。VIQとPIQの差についても、脳変性・萎縮を除いて他の全疾患がVIQに対してPIQが上回っていた。また、VIQ>PIQの出現率では表4でわかるように約半数、つまりVIQ<PIQとほぼ同数の出現率であり、有意差も得られなかった。表3の、VIQ、PIQ間の差が、10以上あった者と15以上あった者の出現率では、どちらの有意差も得られず、出現率は低かった。

結果から、従来指摘されてきたように、脳の器質障害が、知覚・運動系の障害として特異的に出現するという傾向は必ずしも肯定することは出来なかった。つまり、TTIQが低下する事によってVIQとPIQ間の差が認められなくなったのではないかと、脳器質障害者の知的障害を一般化する事は困難であった。今後、個別に障害の部位・程度などの差を明らかにする事によって知的機能の障害のあり方を検討して行く必要があらう。

環境音楽の内省的効果の基礎的研究—各種音楽のイメージについて—

○味酒 理恵 内海 規
(東京白十字病院) (千葉大学看護学部)

音楽が人へ及ぼす影響に関しては、ギリシア時代から最近の脳生理学の科学的研究に至る文献がある。工場や公共の場に音楽を流して心理効果をはかろうとしたり、音楽を積極的治療に用いようという音楽療法の試みも現在行なわれている。これら研究においては音楽の鎮静効果と向活動効果が認められているが、今回はそれらの効果と共に自己の存在を考える内省的効果について確認する為、音楽を聴いた後その印象を、SD法によって分析する研究を行った。

男女11名(全て学生)を被験者とし、遮音された暗室に臥床、閉眼させイヤホンで喜多郎「大地」以下これをAとし、ブライアン・イーノ「ON LAND」以下これをBとし、の2種の音楽と無音テープCをそれぞれ7分間聴取させた。このABCを組み合わせて一実験とし、終了後音楽毎の自由連想場面の記述、及び15項目の言語対による5段階評価のイメージ調査を行ない、相関を検討した。ABCの順序は実験毎に違わせ、順序の影響を除く配慮をして、自由連想場面からは名詞を抽出し、ABC別語数、及び表に示す18項目に分類して被験者毎に比較している。(表1・表2)

表1 連想語数

	A音楽時	B音楽時	C音楽時	計(%)
1	22 (64.0)	28 (66.0)	0 (0)	50 (100.0)
2	107 (82.2)	53 (30.8)	12 (6.9)	172 (100.0)
3	16 (57.1)	10 (35.4)	2 (7.1)	28 (100.0)
4	24 (51.1)	22 (46.8)	1 (2.1)	47 (100.0)
5	23 (44.2)	29 (55.8)	0 (0)	52 (100.0)
6	45 (98.2)	30 (37.5)	5 (6.3)	80 (100.0)
7	48 (52.2)	40 (43.5)	4 (4.3)	92 (100.0)
8	92 (51.1)	61 (33.9)	27 (15.0)	180 (100.0)
9	40 (64.5)	18 (29.0)	4 (6.5)	62 (100.0)
10	35 (37.8)	32 (34.5)	26 (27.9)	93 (100.0)
11	25 (40.4)	19 (30.6)	18 (29.0)	62 (100.0)

表2 カテゴリー別の連想名詞数(%)

NO	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1. 自然物	28.0	20.3	35.7	42.6	38.0	18.8	24.0	25.7	53.2	18.4	25.8
2. 人工物	10.0	5.6	25.0	19.1	14.0	27.5	13.0	12.2	8.1	10.8	17.7
3. 抽象物	32.0	5.2	3.6	10.6	16.0	8.8	7.0	8.9	9.7	4.3	9.7
計(1-3)	68.0	31.3	64.3	72.3	68.0	55.1	44.0	57.8	71.0	34.0	61.3
4. 人	2.0	19.7	3.6	6.4	12.0	11.3	13.0	20.0	17.7	39.8	8.1
5. 動物	10.0	5.2	3.6	4.3	4.0	7.5	8.0	3.9	1.6	1.1	1.1
6. 植物	9.9	3.6	3.6	6.4	6.0	8.8	17.0	12.8	1.6	12.8	16.1
7. 抽象的	29.7	14.3	4.3	10.6	3.6	16.0	2.1	6.5	6.4	18.1	1.1
計(4-7)	120.0	64.5	21.5	21.4	32.0	31.4	55.0	39.8	27.4	59.5	32.2
8. 現在	2.0	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
9. 過去	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
10. 未来	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
11. 夢	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
12. 意識	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
13. 感情	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
14. 思考	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
15. 行動	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
16. 時間	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
17. 空間	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
18. その他	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5
計(8-18)	20.0	3.2	14.3	6.3	0	13.5	1.0	3.4	1.6	6.5	6.3
計(全)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

イメージ調査は15言語より相関係数を算出して主因子解を求め、基準バリマックス回転を行った(表3)。

表3 バリマックス回転後の負荷量行列

Aキアロー				Bイーノ				
	f ₁	f ₂	f ₃		f ₁	f ₂	f ₃	
1 雄しい	悲しい	0.72	0.25	0.23	1	0.73	0.10	0.01
2 晴しい	晴しい	0.78	0.20	0.13	2	0.84	0.03	0.07
3 暖かい	冷たい	0.46	0.04	0.05	3	0.71	-0.18	0.07
4 暑い	寒い	-0.22	-0.62	-0.03	4	-0.60	-0.24	0.21
5 おかしい	はやい	-0.32	-0.37	-0.16	5	-0.41	-0.20	0.32
6 暑い	短かい	-0.04	-0.12	0.02	6	-0.54	-0.34	0.02
7 うるさい	静かな	0.17	0.51	0.08	7	-0.10	0.58	0.20
8 はやい	ゆっくり	0.24	0.66	0.19	8	0.20	0.47	-0.08
9 特色ある	平凡な	0.16	0.00	0.81	9	0.11	0.28	0.62
10 涼しい	地味な	0.04	0.86	0.14	10	0.08	0.76	-0.08
11 健康な	不健康な	0.75	0.20	0.10	11	0.77	-0.21	0.17
12 若い	若い	0.16	0.17	0.84	12	-0.08	0.61	0.21
13 現代的な	夢のよう	0.07	0.64	-0.08	13	-0.06	0.15	-0.83
14 よい	わるい	0.57	-0.12	-0.15	14	0.77	-0.15	0.13
15 新鮮な	くさい	0.79	0.28	0.20	15	0.78	-0.14	0.00
計		3.21	2.68	1.63	計	4.50	1.99	1.40
平均率 (%)		42.0	36.0	22.0	平均率 (%)	57.0	25.0	18.0

因子の解釈は「受容性」「明瞭性」「個性」の3因子である。第1・2因子を軸とする音楽別の因子平面上に、計47回の実験の因子得点を被験者毎に平均した値をプロットし、それに連想語数、18分類の結果をのせ、関連を分析した。(図1)

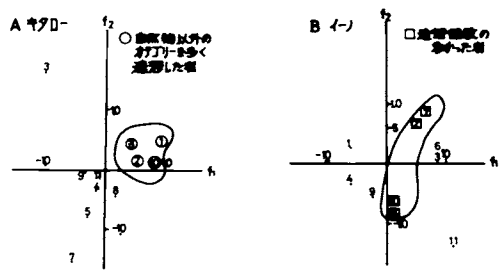


図1 各例の因子負荷量による位置と連想の関係

これからA・Bそれぞれにおいて4名に集積傾向が見られたが、前者は自然物と明瞭性とを結びつけぬ日本人のイメージ想起の特徴を表わし、よってAから明瞭性を見出した4人は自然物より他を多くイメージしたと思われる。後者は受容の程度がイメージ想起、表現に重要であることを示している。

自律訓練法やストレス自己制御に活用すべく、今後自己の精神的成長を助ける内省的音楽について、研究していきたい。

自律訓練時の精神生理学的分析

・成田 猛 墨岡 孝 西角 智 (成城墨岡クリニック)
ハ木 孝彦 (白梅学園短期大学)

目的

自律訓練短期練習者(5月-自律訓練習得の指標は
手足皮膚温の上昇)の(I)脳波(II)自律系反応を同時
記録し、標準練習時-閉眼安静、重感練習、利き手の
温感練習、全身の温感練習(各々2分)、練習解除下
の閉眼安静(3分)-の各公式の特徴を比較検討する
対象

健康で比較的同質な成人女性8例(右手きき、平均
年齢20歳)。精神・神経疾患の既往歴・聴力障害は
ない。

方法

I 脳波の導出部位は頭皮上の7部位($P_3, P_4, O_1,$
 T_3, T_4, Cz 10-20法)。両側耳朶を不閉電極とする単
極誘導。T-C 0.3 sec

II 自律系の指標には皮膚温、指尖脈波、呼吸を用い
た。 S_8 は半防音ラールトルーム内のバット仰臥姿勢
となり、利き手の手掌面、第3指第1関節腹側、手背
に皮膚温測定用センサー、左右の第2指第1関節腹側
に指尖脈波測定用ピックアップ(ピックアップは周囲
を黒布で被い遮光 T-C 1.5 sec)、胸部・腹部に呼
吸測定用ピックアップ(インピーダンス法 T-C 3 sec)
を装着された。増幅には脳波計を用いた。

ラールトルーム内は22±1℃に調節し、 S_8 は30分以上
室内にいた体温を安定させた。練習開始前に基礎体温
を測定した。各公式の開始台図は実験者の肉声で行な
った。

解析

I 脳波計の増幅レマ得られた脳波をデータレコー
ダに収録し、これをATAC-450で周波数分析した。サン
プリング時間は各公式終了前30秒。各公式の各部位・各
帯域の周波数は、練習前安静閉眼時の周波数を基準に
その比を求めた。

II サンプリング時間は同上。皮膚温は練習前1回、
重感練習時2回、温感練習時各2回、練習解除後1回
(各公式1分経過後)測定し、練習前のそれを100とし
各公式の指数を求めた。指尖脈波・呼吸は練習前の振
幅回数を100とし、各公式の指数を求めた。

結果

1 皮膚温の上昇したものは8例中4例であった。部
位は各公式とも第3指第1関節腹側である。その他の

部位では、それが判然としなかった(以下 自律訓練
習得者-A群・非習得者-B群とし、各公式について
I・IIを分析する)。

2 (I) A-B群とも、練習前の脳波に背景活動の異常、
突発波(鋭波、棘波……)はみられなかった。練習時
練習解除下でもそれは認められない。

3 A群はB群に比べ、重感・温感練習時とも α 波の
増加がみられた。特に O_1, O_2 ではその傾向が強い。 θ 波
 β_1, β_2 波の増加はみられない(図1)。

4 A群は練習前の α 波が各部位とも9, 10, 11/sec
に分散していたが、重感・温感練習時では O_1, O_2 で11/
secに凝縮する傾向がある。練習解除後もそれがうかが
われた。B群にその傾向はない(図2)。

5 (II) A-B群の指尖脈波は練習前と比べ、練習時に増
加した。練習解除下では一定の傾向がない。

6 呼吸は、A群では練習前と比べ周波数、振幅の減
少傾向がみられた。B群はそれが明確ではない。

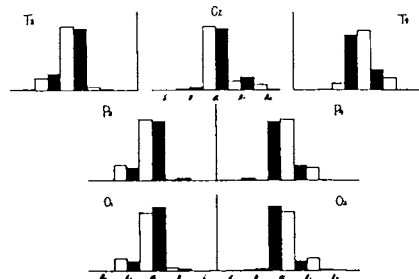


図1 重感練習時の各部位・各帯域の周波数(■習得者 □非習得者)

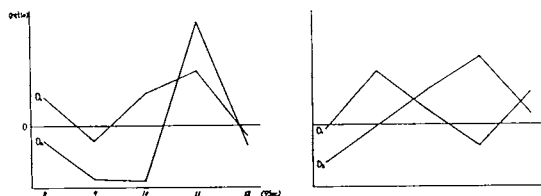


図2 重感練習時の O_1, O_2 の α 帯域の周波数(■習得者 □非習得者)考察

A群は、自律訓練に特徴的な α 周波数の増加があり
B群ではそれが不明瞭であった。I・IIは両群とも必ず
しもパラレルではなかった。今後は、訓練習得の有無
による個体条件・同一の被験者の状態像による習得
の有無など周到な実験により、綿密に調べる必要があ
ると思われる。

研修による死のイメージの変化

○加藤 基子 内海 況

(立教大学社会福祉研究所)(千葉大学看護実践研究指導センター)

目的：末期患者を care することの多い看護婦が患者の死にたいしてどのような態度をもっているか S D 法で調べた。その結果、患者の死と自分の死は否定的なイメージをもち、肯定的な死を理想的な死としてイメージしていることがわかった。また、各イメージ間の差は末期患者の看護について講義とグループ討議の研修を受けることにより縮小する傾向がみられた。(表1左欄) このような変化を意味尺度対の相関を吟味し

因子分析によって更に検討する。

方法：対象は看護婦 46 名、年齢は 22 ～ 41 才、平均 28 才、末期患者の看護経験は全員が有り、家族や親しい人の死の体験者は 75 % であった。調査用紙は S D 法を用いた。18 の意味尺度対の項目は柏原等の「死と臨死患者の看護に対する看護婦の態度に関する研究」のなかから選んだ。意味尺度は 7 段階評定とし、2 週間の研修前と後につぎの教示にしたがって記入された。「一枚目は自分の死についてどんな想いやイメージがうかびますか。両端のことばを読みあげますので適当と思うところに○印をつけて下さい」「今度は看護婦として白衣を着ている自分です。看護婦である私は患者の死についてどんな想いやイメージをもっていますか」「自分が理想的な死と思っているイメージを書いて下さい」

結果：46 名の意味尺度対にあらわれた得点相関係数を算出し三因子がひろい出された。第 1 因子は、おちついた、楽な、優雅な比較的関与するもので静穏因子、第 2 因子は、現実的な、身近なに関与する近縁因子、第 3 因子は、不吉な、敵意のある、憂うつなに関与する凶感因子と考えられる。(表 1 右欄)

46 名の因子得点の平均値を研修前、研修後において比較すると表 2 のようになる。表 3 は研修前後の因子得点の有意差検定を行った t 値である。理想的な死においては研修前後に各因子とも差はないが、自分の死、患者

表 1 (左)看護婦のもつ死のイメージと研修前後の平均値の比較・表 1 (右)回転後の因子行列

死のイメージ 評 価		理想的な死		自分の死		患者の死		因子負荷量					
意味尺度対		前	後	差	前	後	差	前	後	差	f ₁	f ₂	f ₃
理性的な	感情的な	2.76	3.43	-0.67	4.72	3.93	0.79	4.17	4.46	-0.29	-0.069	-0.026	0.085
喜ばしい	不吉な	3.37	2.89	0.48	5.46	4.50	0.96	5.17	4.46	0.71	0.100	0.013	-0.314
平和的な	恐怖的な	1.63	1.80	-0.17	5.50	3.91	1.59	4.37	3.20	1.17	0.100	0.228	0.005
現実的な	非現実的な	3.13	2.48	0.65	4.72	3.48	1.24	1.67	1.72	-0.05	0.031	0.440	0.075
服従的な	反抗的な	2.70	3.04	-0.34	4.50	4.11	0.39	3.54	3.83	-0.29	-0.016	0.029	0.032
親しい	敵意のある	3.13	2.83	0.30	4.52	3.70	0.82	4.39	3.50	0.89	-0.135	-0.020	-0.355
身近な	遠い	3.43	3.22	0.21	4.63	3.70	0.93	1.91	1.78	0.13	-0.077	0.372	0.005
楽しい	憂うつな	3.78	3.74	0.04	5.52	4.65	0.87	5.93	4.93	1.00	-0.092	-0.042	-0.300
あたたかい	冷たい	2.17	2.13	0.04	4.96	3.57	1.39	4.85	3.89	0.96	0.092	0.028	-0.187
関心のある	無関心な	1.87	1.91	-0.04	2.24	1.98	0.26	1.93	1.63	0.30	0.008	0.025	0.019
おちついた	あわただしい	1.43	1.89	-0.46	3.41	3.00	0.41	5.22	4.30	0.92	0.317	-0.136	0.155
安心な	不安な	1.50	1.83	-0.33	5.65	4.24	1.41	5.48	4.00	1.48	0.125	0.025	0.015
受容的な	拒否的な	1.65	1.91	-0.26	4.39	3.39	1.00	3.91	3.11	0.80	0.014	0.004	-0.026
楽な	苦しい	1.48	1.69	-0.21	4.69	3.17	1.52	5.72	4.00	1.72	0.286	-0.091	0.070
優雅な	ぶざまな	2.29	2.34	-0.06	4.48	3.65	0.83	4.37	3.70	0.67	0.333	0.016	0.185
強気な	弱気な	4.50	4.15	0.35	3.17	3.76	0.59	3.07	3.50	-0.43	0.050	-0.006	-0.059
軽やかな	重々しい	4.39	4.11	0.28	5.15	4.50	0.65	6.19	5.33	0.86	-0.141	-0.124	-0.195
公平な	不公平な	2.69	2.28	0.41	4.09	3.19	0.90	4.59	3.57	1.02	0.133	0.150	0.025

df 45 *p<.05 **p<.01

表 2 死のイメージの研修前後の因子得点の平均値

因子イメージ	f ₁		f ₂		f ₃	
	MEAN	SD	MEAN	SD	MEAN	SD
理想的な死	研修前	-0.82 (0.45)	0.12 (0.73)	0.31 (0.62)		
	研修後	-0.68 (0.60)	-0.07 (0.72)	0.58 (0.78)		
自分の死	研修前	0.43 (0.78)	0.93 (0.76)	-0.44 (0.84)		
	研修後	0.01 (0.71)	0.38 (0.92)	0.05 (0.72)		
患者の死	研修前	0.79 (0.70)	-0.69 (0.44)	-0.55 (0.80)		
	研修後	0.25 (0.73)	-0.67 (0.49)	0.03 (0.72)		

表 3 因子得点の平均値の検定

因子イメージ	f ₁	f ₂	f ₃
理想的な死	1.23	1.32	1.87
自分の死	2.67*	3.07*	3.04*
患者の死	3.64*	0.19	3.73*

df 90 *p<.05 **p<.01

ばしく楽しい方向へ変化したと考えられる。

考察：今回は意味尺度対の一つ一つの有意差検定とワリマックス回転による因子得点の有意差検定とにおいて研修前研修後の 3 つの死の態度変容を検討した。3 因子による比較は研修前後の変化をより明確に説明することができた。

の死に関しでは有意差が認められた。静穏因子では研修前に多く研修後に少くなる。研修前はあわただしく、苦しく、ぶざまな死が、研修後はおちついた、楽な、優雅な死のイメ

ージに変化している。近縁因子は減少する傾向にあり特に自分の死では著しい。自分にとって遠く、非現実的な死が研修後は患者の死と同様に身近で現実的なものとしてイメージされている。凶感

因子は自分の死、患者の死ともに研修後著しく増加する傾向にあった。死にたいする不吉で憂うつで敵意のあるイメージが研修後は親しく喜

自己受容性の研究 (2)

板 津 裕 己 (駒 沢 大 学 文 学 部)

研究目的

先に筆者が作成した自己受容尺度(応心第50会大X)を、神経症及び抑うつ状態にある人に実施し、大学生と比較して、これら2群の自己受容の特徴について考察する。

研究方法

1. テスト材料

5段階評定法による自己受容尺度。自己受容を7領域・6因子について測定する。質問項目は76項目、その内10項目は採点対象から除く。

2. 被験者

東京都下〇病院で入院治療を行なっている神経症患者43名(男性16名、女性27名、平均年齢30.6才)。抑うつ状態にある者31名(男性13名、女性18名、平均年齢41.7才)。なお、この病院では、主として比較的軽度の軽い人達を治療対象としている。

3. 調査日・実施方法

神経症群・抑うつ状態群は、1983年3月から8月に個別形式で実施した。その際、入院時の心身の動揺を考慮し、各人の入院日から2週間程時間をあけて実施した。大学生群は、1982年12月に集団形式で実施した。

結果と考察

1. 神経症群

全ての質問項目で大学生よりも低い平均値をとり、非自己受容的と言えよう。領域別因子得点において、願望・欲求の領域と生活態度・生き方領域間に全んど相関関係がなかった($r = -0.06$)。このことから神経症群の自己受容得点の低さが説明出来るのでは

ないかと考える。

因子別因子得点では、第1因子：積極的に生きる姿勢($t = 4.04$)、第2因子：対人場面における自己受容性($t = 5.22$)、第3因子：自己のおかれている立場の受容性($t = 5.45$)、第4因子：自信・自己信頼性($t = 2.59$)で大学生群と比較して有意に低い値を得た。一方、第5因子：情緒安定性では大学生群よりも高い得点を得ているが、これは自己の情緒不安定さに対する防衛機制が働いたためと考えられる。

2. 抑うつ状態群

質問項目ごとの平均値が、質問紙の初めでは大学生とあまり変わらないが、質問項目が進むにつれてその平均値は低下する傾向にある。これは、質問文に答えているうちに、だんだんと自己叱責・自己無価値感情が強くなるためであろう。このような傾向が、抑うつ状態群の自己受容の特徴のうち最も注目されることとは言えないだろうか。

因子別因子得点については、大学生群と比べて第2因子($t = 4.48$)、第3因子($t = 3.81$)、第4因子($t = 3.49$)で抑うつ状態群の方が有意に低い値であった。第5因子の因子得点では逆に高くなるのは、神経症群と同様なのが考えられる。

因子別因子得点からの特徴は、第1因子についてを除くと神経症群に類似している。

第6因子：自己へのこだわりのない態度では、神経症群・抑うつ状態群と大学生群に有意差がみられなかったが、これは質問項目が少なく因子得点に差が生じにくいためによると考えられる。

神経症群と抑うつ状態群間においてはいずれの因子の因子得点間にも有意差はみられなかった。

表 1
神経症・抑うつ状態にあるひとの因子得点

質問項目数	神経症群 N=43		抑うつ状態群 N=31		大学生	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1	9.40	3.77	9.77	3.00	10.00	1.84
2	4.44	1.90	4.93	1.66	5.00	1.41
3	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
4	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
5	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
6	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
7	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
8	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
9	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
10	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
11	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
12	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
13	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
14	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
15	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
16	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
17	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
18	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
19	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
20	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
21	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
22	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
23	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
24	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
25	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
26	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
27	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
28	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
29	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
30	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
31	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
32	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
33	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
34	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
35	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
36	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
37	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
38	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
39	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
40	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
41	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
42	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
43	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
44	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
45	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
46	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
47	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
48	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
49	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
50	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
51	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
52	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
53	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
54	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
55	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
56	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
57	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
58	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
59	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
60	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
61	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
62	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
63	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
64	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
65	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
66	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
67	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
68	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
69	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
70	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
71	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
72	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
73	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
74	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
75	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41
76	3.37	1.90	3.83	1.47	4.00	1.41

##印 危険率0.1%水準で有意差のあることを示す

Gestalt Awareness Training(気づき訓練)の試み(2)

前田 茂 則
(千葉県市川児童相談所)

<目的> John, O. Stevens の手法に基づいて Awareness Training (気づき訓練) を実施し、トレーニング別に、それぞれの興味・関心度や内容特徴を比較検討する。

<方法> (1) 対象者: 学生 (短大生) 43 名

(2) 実施方法: 1 週 1 回, 1 時間をかけて 4 つのテーマ① Zone of awareness (気づきの領域), ② End of the world (世界の終末), ③ Motorcycle (オートバイ), ④ Contacting (視覚接触) を 4 週間連続して体験する。体験後, 相互にフィードバックを行ない, 自由記述形式で, 各人の体験を卒直に報告してもらう。

※①～④はイメージを用い, ⑤はペアを組み, 視覚接触を通じて気づきの促進を図る体験学習である。

なお, 表 1 については, χ^2 検定をした。(P<0.05)

<結果> 表 1, 表 2 のとおり

表 1. テーマ別にみた興味・関心度の順位 (%)

1 位 群		2 位 群		3 位 群		4 位 群	
テーマ	N	テーマ	N	テーマ	N	テーマ	N
① オートバイ	17 (40)	② 世界の終末	12 (28)	③ 気づき領域	15 (35)	④ 視覚接触	18 (42)
② 世界の終末	16 (37)	③ 気づき領域	11 (26)	④ 視覚接触	10 (23)	① 気づき領域	12 (28)
③ 気づき領域	5 (12)	① オートバイ	10 (23)	② 世界の終末	9 (21)	① オートバイ	7 (16)
④ 視覚接触	5 (12)	④ 視覚接触	10 (23)	① オートバイ	9 (21)	② 世界の終末	6 (14)
⑤ ①と②の間に観察あり	有差なし			有差なし		⑤ ③と④の間に観察あり	有差なし

表 2. テーマ別の内容特徴 (%)

内容 特徴	プ ラ ス 評 価		マ イ ナ ス 評 価	
	肯定的・親和的・積極的	N	否定的・回避的・消極的	N
① オートバイ	1. 自己解放, 楽しい壮快な経験 2. 自己理解の促進	29 (67) 6 (14)	1. よく分からない 2. イメージでささおもしろくない	5 (12) 3 (7)
② 世界の終末	1. 自己凝視し, 他者への関心を喚起 2. イメージやすく, 集中しやすい	33 (77) 1 (2)	1. 死をイメージするのは怖い 2. 死を脱却するために必要な覚悟	6 (14) 3 (7)
③ 気づき領域	1. 心の静寂とやすらぎの体験 2. 集中体験自体の意義 3. 身近な人への新鮮さの発見 4. 自己をふり返る経験	12 (28) 8 (19) 6 (14) 3 (7)	1. よく分からない 2. じっと集中するのが苦痛	11 (26) 3 (7)
④ 視覚接触	1. 他者の非善しを愛する経験 2. 他者に対する新たな気づき 3. 恥かしいが, おもしろい 4. 恥かしいが, 自己発見してもらう喜び	12 (28) 8 (19) 6 (14) 2 (5)	1. 恥かしくてしたくない	15 (35)

表 1. 興味・関心度の順位から 1 位群では, ① オートバイ, ② 世界の終末と③ 気づき領域, ④ 視覚接触間

に有意差あって, 前 2 者の占める割合大。2 位群, 3 位群のテーマ間には有意差なく, 相互に拮抗傾向にある。4 位群では, ⑤と①, ⑤, ①間に有意差あり, ⑤の比率が顕著。表 2 内容特徴をプラス評価からみると, ①オートバイ〔自己解放でき, 楽しい壮快な経験 67%〕と②世界の終末〔自己凝視し, 生きる意味を問う, 他者との関係を考える 77%〕では, 1 つの内容特徴に集中している。一方, ③気づき領域, ④視覚接触では, 4 つの内容特徴となり, かなり多方面に分散している。特に⑤では, 「恥かしいが, おもしろい」, 「恥かしいが, 自己発見してもらう喜び」という両面的評価がみられる。マイナス評価では, 4 テーマとも, 「分からない 38%」, 「恥かしく, したくない 35%」など, 1～2 の内容に集中している。

<考察> テーマ別の興味・関心度では, ①オートバイ, ②世界の終末が高く, ③気づき領域, ④視覚接触が低い。特に⑤の低いことが顕著である。前二者は, テーマの主旨が理解しやすく, 自己解放できる楽しい経験とか, 深刻な内容であっても体験の意義をフィードバックしやすいことによる, と考えられる。後二者では, 主旨が体験を通じても分かりにくかったり, つかみにくいことによるのである, と考えられる。特に⑤の場合, 強い恥じらい感情が抵抗となっている。

テーマ別の内容特徴では, ①, ②で 1 つの纏った特徴を示している。①ではオートバイという具体物に自己投影をし, イメージを自由奔放に発展させやすいこと, ②では死という極限状況設定の中で, イメージを働かせてゆくため, 必然的に自己凝視・生の意味を問う・他者関係もふり返ること等が, 生じやすいと言えよう。これに対し, ③, ④では, 内容特徴が分散化する傾向があるが, 「心の静寂とやすらぎの体験」・「集中体験自体の意義を認識」, 「他者のまなざしを受とめたり, 気にしなくなる貴重な経験」・「他者に対する新たな気づき」など, 気分の平穏化・安定化, 自己改善及び他者理解の促進に役立つ経験となっている, と考えられる。今後とも別種テーマを用いて, 検討を重ねてゆきたい。

体験学習：“気づきの自由な話し合い”

みえない世界のことがみえる世界に現われ出ることをめぐって

上野 轟

(大阪教育大学教育学部)

1. 問題

対人・対話関係を基軸とする体験学習：“気づきの自由な話し合い”は、a) “人間の科学”が依拠する現象学的方法の具体化であること；b) 人間の人間による人間的援助・理解 (care) 実現に深くかかわっていること；c) 前者を支える「関係存在としての人間」のあり方にかかわって、荒井洋一が指摘のみえない時空の属性がきわめてはっきりとみえる時空において現われ出る人間の生き場であることが知られた。

それは、a) 自己世界の拡大にかかわるあり方；b) 自己世界の開示にかかわるあり方；c) 自己世界に対する肯定感情指向にかかわるあり方。そしてd) 自己世界と対象にかかわる距離のとり様にかかわるあり方である。

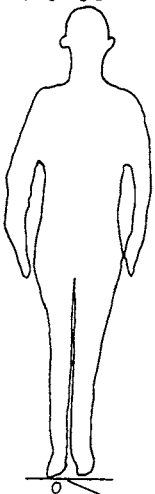
上記a) b)の検討に引き続いて、ここではd)について検討を加える。

さて、生活世界では、われわれはたとえば“近づく”、“遠ざかる”に代表されることからのみみえる世界にいつも生きている。と同時に、“近しさ”、“疎遠さ”に象徴される気持のみみえない世界にいつも生きている。

この体験学習の場は、そこでわれわれが自分も含めてお互いに出会える場であり、疎遠さから近しさへと転換する場でもある。あり方のこうした転換が遠近というみえる時空の距離としてアプローチされる。

2 手続き

ここでは援助的理解に深くかかわるナースの場合に着目する。病院勤務で卒後3, 4年のナース18名(平均年齢25.2歳 $\sigma=0.81$)と1泊2日の体験学習を毎月1回、計3回もった。これに先立ち、2泊3日の集中的体験学習を各ナースは既に体験している。この背景のもと、1泊2日の体験学習開始時(前)と終了時(後)に、左図に示す次のアンケートを実施した。図の線上に、a) ナースという役割、b) “私”の病気、c) この学習グループ、d) 患者という4つのターゲットをどの位の距



離におくかのチェックを求めるものである。そして、0からチェックまでの距離(cm)を測定し、これを各ターゲット毎、体験学習の前・後で比較検討した。

3 結果・考察

結果は表1に示す如くである。

表1 距離の体験学習前後の比較

a)		$\bar{X}(cm)$	σ	t	P
	前	3.42	2.21	0.42	Nonsig.
	後	3.01	2.08		

(18名中8名 Nonsig.)

b)		$\bar{X}(cm)$	σ	t	P
	前	16.41	6.76	2.83	<.02
	後	9.83	6.78		

(18名中17名 $P<.005$)

c)		$\bar{X}(cm)$	σ	t	P
	前	13.30	4.34	4.16	<.001
	後	7.35	4.04		

(18名中16名 $P<.005$)

d)		$\bar{X}(cm)$	σ	t	P
	前	2.69	2.07	0.21	Nonsig.
	後	2.53	2.48		

(18名中14名 $P<.05$)

表1から、グループ体験で実感する自分を含めたお互いの近しさ(双グループの幅が濃縮して小さくなる etc.)が、おそらく、物理的距離の短縮のうちに現れ出ていることが示されている。

詳細にみてみよう。

a) ナースという役割との距離に変化はみられない。患者とのそれは二項分布で有意差がみられるが、

実測距離では変化が

みられない。しかしいづれも近接距離におかれている。このことから、メンバーがナースであることの自覚・使命が相当明確であることを示唆しているように思われる。

またb) “私”の病気とc) この学習グループはともに前後で明確な有意差を示している。このことは、ナースが自分のこと(病気)を大切にすることの気づきと、居心地の悪さや異質感を伴うこと(このグループ)の受容を示唆しているように思われる。

全体を幼用という通からみれば、この体験学習がナースの患者への人間的なケア実現にかかわるナース自身のあり方を実現するのに相当の意味をもつもの示唆を与えてくれているように思われる。

方法論的には、このようにみえない世界の属性がみえる世界の属性として実証可能になることは、この体験学習が体験・実感に流れ込むのを留め、これが公的承認をえていく重要な手がかりを手立てとくすることになるであろう。

自覚性の構造に関する研究

V 自覚性の諸機能

○ 本村 康平 土屋 明美

(関係学研究所・日本心理劇協会)

研究の目的：本研究Ⅴは、ⅠからⅣまでの研究に続く「自覚性」の、諸機能についての研究である。この研究によって、自覚性の構造の把握に新たな視点と成立させ、「自覚性」の研究を促進して、「構造と機能」という観点からほらえ切れない「自覚性の特性」を明らかにすることを目的としている。その研究の端語は、研究法として「心理劇」*を用いることによって開かれていく。それは、研究Ⅵ自覚による場面構成において展開される。

研究の経過(本研究まで)：

1. 自覚性の構造と役割の機能-役割交換技法について- (「関係学研究」第9巻第1号, 1981)
2. 自覚性の構造に関する研究Ⅰ 状況における自覚性Ⅱ 心理劇の演者における自覚性 (日本応用心理学会第49回大会発表論文集 1982.10.)
3. 自覚性の構造と機能に関する研究 (日本保育学会第36回大会研究論文集, 1983.6.)
4. 自覚性の構造に関する研究Ⅲ 自覚性と人格構造Ⅳ かかわり方と自覚性 (日本応用心理学会第50回大会論文集, 1983.10.)

自覚性の機能：

本研究では、自覚性は、人間の根源的な自己・人物の接在共存状況への志向活動の特性であるとする。(1) この接在共存状況への志向活動が自己において働き、自己における接在共存状況の顕在化する過程で、自己の構造化(人格の発達)が促らされる。(2) この志向活動が人において働き、人および人・人における接在共存状況の顕在化する過程で、人の構造化(人間関係の変化、集団の発達など)が促らされる。(3) この志向活動が物・物において働き、物および物・物・自己または人における接在共存状況の顕在化する過程で、物の構造化(物の変化、社会形成、規範の成立など)が促らされる。

自覚性の機能は、接在共存状況への志向の仕方、かかわり方によって異なってくる。自己において働く自覚性の機能は、自己が接在共存状況に、内在的にかかわるか、内接的にかかわるか、接在的にかかわるか；人に関しては、内接的にか、接在的にか、外接的にか；物に関しては、接在的にか、外接的にか、外在的にか、などによって、異なってくる。

人において展開する自覚性；かかわり感情

表一 自覚性の動態と展開体験(かかわり感情)

人に	動的動態	経過の動態	結果の動態	かかわり感情
肉体的に 存在する 相手の 存在	自己満足気候 ・持たない ・自分勝手 ・安心する ・引き連れる	・肩がわりする ・寂寥する ・自分が汚れる ・言いなりになる	・すばいこと果た くたす ・喜びがわく ・繰り返る期待 ・次をまた期待する	人との 関係 ・人との 関係 ・人との 関係 ・人との 関係
肉体的に 存在する 相手の 存在	・やさしく口を ・思いやりを ・あたためる ・優しく接する	・受けいれる ・寂しさを感じる ・大切にされる ・のびのびする	・(やまになつた ように)身重く ・(疲れしうと 後学に目をつける ・(肉がかり力が たうくのまをえる ・(みとめられ 主見だす	人との 関係 ・人との 関係 ・人との 関係 ・人との 関係
接在的に 存在する 相手の 存在	・やさしく口を ・思いやりを ・あたためる ・優しく接する	・受けいれる ・寂しさを感じる ・大切にされる ・のびのびする	・(やまになつた ように)身重く ・(疲れしうと 後学に目をつける ・(肉がかり力が たうくのまをえる ・(みとめられ 主見だす	人との 関係 ・人との 関係 ・人との 関係 ・人との 関係
外接的に 存在する 相手の 存在	・やさしく口を ・思いやりを ・あたためる ・優しく接する	・受けいれる ・寂しさを感じる ・大切にされる ・のびのびする	・(やまになつた ように)身重く ・(疲れしうと 後学に目をつける ・(肉がかり力が たうくのまをえる ・(みとめられ 主見だす	人との 関係 ・人との 関係 ・人との 関係 ・人との 関係
外在的に 存在する 相手の 存在	・やさしく口を ・思いやりを ・あたためる ・優しく接する	・受けいれる ・寂しさを感じる ・大切にされる ・のびのびする	・(やまになつた ように)身重く ・(疲れしうと 後学に目をつける ・(肉がかり力が たうくのまをえる ・(みとめられ 主見だす	人との 関係 ・人との 関係 ・人との 関係 ・人との 関係

(関係学研究No.9, 1981 88 参照)

* 望月 萬寿美：心理劇を方法とする研究(Ⅱ)「関係学研究」第7巻第1号, 1979 [注. この研究においては「構造化すること」が同時に機能化を伴う性質の活動ゆゑとつとして「形態-構造化」をあげ、これは構造が固定的に作用するのではないあり方を構造自身に見いだすことを意味し、構造自身の発達過程を明らかにすることにつながる』と考えられている。]

自覚性の構造に関する研究

Ⅶ 自覚性による場面構成
松村 康平 ○土屋 明美
(関係学研究所 日本心理学会)

研究の目的

心理劇の場面構成にはたらく自覚性の特色を明らかにする。

方法 心理劇体験の類型化法 参加観察法

1 場面構成について

自覚性心理劇の舞台空間は、演者・補助演技・監督・観客・舞台の、どの機能によっても構成される可能性ある。心理劇空間がいま・今・この現実空間へと移行される動機相においては、主として次の場面構成法を展開することが出来る。

①主として監督と演者とのセリとリにより方向づけられる場合 ②場面設定が主として監督により状況内容・接点・外発的になされる場合 ③場面設定が主として演者により自己内在的になされる場合、他がある。心理劇の経過相では各役割機能の特色をいかした場面構成を展開出来る。本研究では、演者の一者関係が強調される（自己が自己において構成する）場面構成を中心として述べる。

2 実践例（心理劇研修会 月例研究会より）

①扉の技法（基本型）

監督による指示：あなたの前には扉があります。その扉をあけると、いまあなたが行きたいと思ってるところへ行くことができます。扉はどのように、いえるでしょうか。さあ、あけて入ってみよう（体験例：あけたいと思ってる扉をあけると裏面が白くくまみだる...）

②モノローグ演技の技法

「うす暗い部屋なのに男の子がひとりいます」この男の子になつて部屋にすわって下さい。（一人であんなに静かにかくら... 部屋の外ではささやき声か...）

③霧の技法

みなさんはいま、濃い霧の中にいます。何もかもさうにおおわれていて見えません...、少しはれつきました...。だんだんはれてきます...。

④場面擁護の技法

本屋さんを思い浮かべて下さい...。その本屋さんを今にうつして下さい。なには？ なかはどのようなにうつていようか？（演者は動きながら場面をつくる）

⑤空想一者関係体験の技法（基本型）

いま・今にいて外へ行きたい。目とじて、自分の好きなところへ行きたい。念図をしたら帰ってきた下さい。

＜考察Ⅰ＞自己とイメージの関係

ここでは一者関係強調の具体的活動として、イメージする、思い浮かべる、なかが位置づけられている。

①扉	②モノローグ演技	③霧	④場面擁護	⑤空想一者
自己と物（扉）との関係 イメージとして関係する。 イメージのなかでイメージが深まる。 (あり)	イメージのなかで自己とイメージとの関係が深まる。 (深まり)	自己のイメージと人のイメージとの関係が広がる。 (広がり)	イメージを身体で活用してイメージと現実の物が重なって明確なイメージが生まれる。 (視覚化)	何ものか（空想）をイメージしてイメージを身体で活用してイメージと現実の物が重なって明確なイメージが生まれる。 (視覚化)

＜考察Ⅱ＞場面構成に働く自覚性一演者の場合

①物をイメージしようとする（以下同様、イメージするの意味）みたてた物に関わる。イメージの中に入る、意外性を受け入れる ②言語による働きかけを受け入れる、身体でイメージ空間に入り込む（イメージで自分と重なる）、身体感覚に集中する ③空白な状況へのイメージを自己覚醒の推進力とする、人からの働きかけとうつてイメージが広がりイメージを共有する。関係の漸進的変化も感知する ④特定場面をイメージする。イメージのなかに物語性質を捉えて現実の方向へ視覚化する。人から身体がけられていてもよい ⑤いま・今にいて、行きたいところがある。イメージが連続・非連続に動く。

演者による場面構成に働く自覚性の特色として次のものが明らかにされた。①障壁をこえて新しくささくする自覚性 ②外のもの（自己）にとりいれる自覚性 ③人と一者において働く自覚性 ④イメージを空間化する自覚性 ⑤自己を充てる時間、空間をつくる自覚性、自己を充てる時間、空間にふかいて働く自覚性

わが国矯正施設における心理学の定着と展開 — (1)

牧 野 勝 (国際商科大学教養学部)

わが国において、犯罪・非行に心理学がどのようにかかわってきたか昨年の本学会大会シンポジウムで概括的に述べた。今回は犯罪者の矯正の分野に心理学がどの様にうけ入れられ定着していったか、明治から大正初期について、特に、わが国で初めて心理学者として監獄に勤務した寺田精一を中心として述べる。彼は犯罪・非行に関する実際研究にたずさわり且つ諸外国の犯罪学について紹介し、日本で犯罪心理学を体系化した最初の学者である。

1880年前後からイタリー、フランス、ドイツなどを中心とした欧州各国に広がった新しい法思想や制度の改良運動を背景として日本でも明治40年には刑罰主義的な旧刑法および監獄則から教育主義(改善主義)的色彩をもつ刑法に改正され41年には新たに監獄法が制定された。このような経緯で制定された監獄法による収容者の処遇には科学的な分類制度が必要になり、そのための人格の理解ということが基本になってくる。ここで日本の行刑施設に心理学者として最初に入ったのが寺田精一である。

寺田精一は、東京帝国大学で心理学をまなぶ元良勇次郎教授のすすめで犯罪心理の研究に着手。明治42年卒業後巣鴨監獄の嘱託となって受刑者の心理学的研究を行い、又、監獄官練習所の講師として大正3年から10年まで「犯罪心理学」を講じ翌11年40才で死去した。この13年間にわたる行刑施設での研究は、受刑者74名から1224名までを対象として心理学および人類学的研究、社会学的調査研究を行い、或いは裁判心理学に属する供述についての実験心理学的研究にも手をつけている。その他ロンブローゾの紹介やグロスの犯罪心理学の翻訳もあり研究の対象は女子、少年、児童にまで広がっていた。これらの調査研究を基に独自の犯罪心理学を体系化し著書を残している。その内訳は、論文、講演論文をあわせて15編、著書11冊(1冊は翻訳)で、その著書の中に日本で最初に犯罪心理学として体系化された「犯罪心理講話」が大正7年に刊行されている。(同書は大正15年に改訂され「犯罪心理学」として再刊)

彼はロンブローゾに最大の影響を受けているが、またグロス、フェリー、シゲール、タルドなどからもそ

れぞれに影響を受けているといえよう。彼の犯罪心理学の立場は彼の言を借りれば「犯罪心理学の研究面は特殊心理的方面を中心とし他性心理学の他に社会心理的研究も必要とする。犯罪心理学の論ずる事実も吾人の生活と別世界に存するようにみることができない。要するに犯罪の規定によるすべての行為、その行為に伴った精神的事実ならびに行な者の精神面を研究するものが犯罪心理学というべきである」と述べている。彼によれば犯罪行為は、その人の生活の上に一時的あるいは持続的に主体的人格に欠けるところがあるために生じるという観点から特殊心理学の範疇に属するものとしている。更に彼は、当時の犯罪心理学の流れの一つである裁判心理学とでもいべき犯罪行為者ならびに証人の証言の信憑性に関する研究をシュテルンの記憶の実験法を用いて東大の法科学生にテストをしその正確度を測定して「証言の価値」として報告している。

彼はロンブローゾの学説を詳細に検証し追試も行っている。例えば人類学的測定で皮膚感覚、文身、利手について調査してロンブローゾの身体測定による人類学的犯罪人説を否定してをり、またロンブローゾのいう隔世遺伝は否定しているが近接遺伝については肯定している。併し彼はロンブローゾの学説に対して、狭義の人類学的論拠の許に結論を出すことは誤りであり、医学者であったロンブローゾが生物学的な方面に興味をもつて研究したことはやむをえないことでその上で更に社会的な面と犯罪との関係を研究していることに注目しなければならぬとし、ロンブローゾの立場を広く理解する立場をとっており、著書の中にもロンブローゾの犯罪心理学的立場に立つ論述が多くみられる。

以上の奥から寺田精一の犯罪心理の体系としての論拠はロンブローゾにあるといつてよい。彼の研究の前半は行刑施設での実証的研究と文献による研究で、その後はそれに基づく理論構築であったといつてよく、彼は日本の犯罪心理学の先駆者でありロンブローゾの学説をよく理解して広く紹介し、矯正施設に実証的心理學を導入する基礎を築いた最初の心理学者である。

家庭内暴力の一症例

高橋 泰子

(ヤどかりの里)

症例 Aは中学2年の時、登校拒否を始め、その後現在まで家庭に引きこもって母親に暴力を働いている19才の青年である。彼の日頃の言動や症状を通して、その原因と、かのかり方、今後の対策等について考察してみたい。

原因 Aは、4才の時顔の一部に自傷ができた。そのために友人や近所の子たちから仲間はずれにされた。「うつろから遊んではいけない」と近所の親が言ったその一言を、現在もくり返し言い、他人と憎んでいる。小学校、中学校時代も友人はなく、常に一人ぼっちで寂しい学校生活であった。中学時代は家に引きこもって菓子ばかり食べていたために、肥満児となり友人から「デブ」と言われていじめられた。そのために登校拒否を始め、中学の時の高校受験にも失敗する。その後、家の中に引きこもって母親に暴力を働いた。家具を破壊し続けている。友人たちにはいじめられて家に帰っても、そのことを母親に言えなかった。彼にとって母親は頭から押さつて命令する強い存在であって、甘えた経験がない。父親は温和しく存在感のうすい人で、毎晩夜中に帰宅し、早朝出勤のため、殆んどAとのかわりはない。口づいたこともない代りに、子育てについては口を出さない。Aの暴力が烈しくなると母親が堪えられなくなった時、父親が手を貸して彼を精神病院に入院させた。そのことでAは父をうらみ憎んでいる。Aにとって家庭は安らぎの場ではなく、不安が増す場所であり、憎悪のつこの場所である。母親の顔を見ていると殺してやりたい程、憎いと言う。母親との共生関係の中で、自立しようともおけなさがく程、母親なしには外に出ることも出来ない自分の惨めさに気づき、いろいろなしで暴れている。支配的過保護、過干渉の母親に吞み込まれている自分や姿を、Aは、『僕は母親の着せかえ人形でした。』と語っている。自己中心的、衝動的、攻撃的、強迫的で自我が弱く、現実適応性や社会性に乏しい反面、感受性が鋭く、優しい青年でもある。団地の5階で母親と二人だけ暮らし、来た5年間は、彼にとっての同一化の対象は母親だけという閉鎖的な社会生活を予備なくされ、彼と母親との愛憎生活が続けられてきた。彼の性的欲求も強く、エディプス的母子関係の中で、压抑された彼の愛情欲求を、受けとめてゆくことは、容易でない。

知的水準は高く、テレビや新聞による知識は豊富で、社会や両親に対して評論家の姿勢で批難し攻撃する。自分がこんな状態で苦しんでいるのは、父親不在と、母親の過保護、偏差値教育、いじめの子、高度成長のひずみのせいだと言いつづけている。そして、最後は、親や教師、近所の人を含めて全ての大人が悪いのから、子供は不幸になると言う。しかし、彼の内面のやさしさは、時に音楽を聞くことで安らぎを求め、ラジオの宗教放送によって魂の救いを得ようと、1人死亡にもかかっている様が見られる。

対策 Aの精神的な、発症症状、愛情欲求不満、対人恐怖などを取り除くためには、心理療法、薬物療法が必要と考え、精神科医と協力しながら治療に当たっている。現在も尚、継続中のケースであるので、特に重点をおいて治療に当たっている点と、今後留意すべき点を記してみたい。

(1) 二人の間の信頼関係を大切にすること。(カウンセラーと)彼の内面にうつ積している不平不満、憎しみの感情を非指示的に受容する。週2回の面接、電話相談も事情の許す限り十分に時間ととって応対する。

(2) 母親と離れて一人で居る時間を作る。母親が外出すると、不安が増すので、その間カウンセラーが彼の不安を聞き、話し相手となる。

(3) 対人恐怖をとるために、外に出る練習をする。母親とカウンセラー同伴で、初めは車で外出する。現在は電車やバスを使って外出できるが、まだ一人では不安である。

(4) 目的を決め、それに向けて努力する。高校の通信教育を始めたが、勉強がむずかしくなったり、スクリーニングや試験の前には、不安が増して母親に暴力を振う。ギターを習いたいとの本人の希望により、個人レッスンを受けている。

(5) 大学生と一緒に、新しい体験をする。ボランティアの学生と話し合ったり、勉強やスポーツをやっている。まだ対人の関係を持つことがやっとでグループの中には入れない。最近、せ友だちが欲しいというところから、女子大生とも話し合っている。

(6) 宗教によって心の支えを得る。今後の問題として、御指導、御教示を願う。

登校拒否と家庭内暴力

中 里 弘
(精神医学研究所)

1. はじめに

今日ほど家庭内での暴力が問題にされることはなかった。いわゆる家庭内暴力児の暴力と登校拒否児の家庭内暴力は今日の日本社会に大きな課題を示していると言える。それは、日本の家庭が大きな変化をしているとも言えるのである。

登校拒否児の大半が回復までにながりの家庭内暴力を繰り返している。家庭内暴力をほとんど振わり型、の登校拒否児でさえも、きびしい状況下に置かれると防禦のための攻撃・暴力を示すことがある。

そこで今回は、登校拒否児たちがなぜどれ程まで暴力を繰り返し、それも家庭内だけで振うのであるが、そこにはどんな意味があるのかを考察するとともに、いわゆる家庭内暴力児の暴力との心理的相違を考察する。

ここで家庭内での暴力をあつかうのは、日本の今日の家庭内において攻撃性処理の問題が疎かにされているからである。

2. 家庭内暴力の多発時期

これまでの研究では、登校拒否児の回復過程を①閉じ込め期 ②混乱期 ③仮適応期 ④回復期 に大別される。

この過程で登校拒否児が家庭内暴力を多発させるのは②混乱期である。それは学校に行きたい、行かぬばならないけれども行かれないといったイライラや高い緊張からの解放されるためのようであるが他にも意味があると思われる。

3. 登校拒否児の家庭内暴力にはどのような意味が読み取れるか

- ① 退行した自我に耐えられないため内的エネルギーの放散
- ② 不安の解消としての攻撃性
- ③ 新しい心的安定への試み
- ④ 反抗期
- ⑤ 親から伝えられる不安への抗議・復讐
- ⑥ 母子関係の距離のとりかた。とくに母子の共生関係の解球。

① 自己に向けてしまいやすい攻撃性を共生関係に近い関係の母親に向けることで、自己のそれ以上の破壊を防いでいる。

4. 登校拒否児の必要な統合

登校拒否児たちの家庭内暴力の発生は、やみくもに出現するわけではない。しかし、出現せずにはすむならそのほうが周囲にとっても本人にとっても楽なのである。この暴力というnegativeな面の統合こそが登校拒否児に必要な課題なのである。この認めにくい部分の自我による統合がなされることにより登校拒否の心理的特徴は解決されるのである。そのため、この暴力を振う心理状態は回復のための鍵であるとも言える。

5. 周囲はどう理解したらよいのか

周囲の者は、登校拒否児が暴力を振ったからといって、本人を攻撃したり、罰したりすることよりも、登校拒否が暴力をしかたなしに振ってしまい、本当は振いたくないし、振ってしまっただけに對してすぐ後悔していることがわかっていし、そのつらさも理解していることを児に伝達する必要がある。これは、登校拒否児自身に暴力を振ったのは自己でありし、そうする攻撃性が自己の課題であることを認めやすくするのである。このことは、自己の統合をさせやすくすることになる。

6. 対象の問題

登校拒否児は母親への暴力が多いが、しだいに犬等のペットに向けられていくことが多い。これは自己の分身へのかかわりがりと共存する攻撃性とも理解できる。このことは母との関係もほぼ共生関係に近いと思われることから、自己への攻撃性の防禦としての意味が高い。母親からしだいにペットに移っていくことを考えれば、本人自身でも母親への配慮が育ってきていると理解できるのである。

7. いわゆる家庭内暴力の心理との比較

いわゆる家庭内暴力の心理は親からの独立を具現化することではしか獲得できなかったために、親の世界を具体的に破壊することによって精神的距離を形成しようとする試みと理解できる。これは登校拒否児にも似たことではあるが、その水準に大きな差がみられる。

両者とも攻撃性処理の課題が大きく存在しているという点では共通性がある。この点は、このものたちにかかわらず、今日の若者にもかなり共通している課題であると言える。

家庭内暴力児童の保護者集団指導について（その２）

—— 事例の過程分析を中心に ——

○鈴木省司 仁科義数 高橋宣昭

藤田政義 柏女電峰 小田智子

(千葉県市川児童相談所)

【目的】家庭内暴力児童の保護者集団指導に参加した一事例の経過を報告し、保護者の史答過程、指導効果等について考察する。【方法】開放集団で集団中心のグループカウンセリングを月2回、2時間ずつ実施。心理判定員、家庭児童相談員、精神科医師等がたつた。

〔事例の概要〕A男、受付時にオマ月、主訴登校拒否。家族は両親、本児、妹の4人。父は郵便局勤務、司法書士をめざす勤勉家で児童は「勉強ばかりしている人」とみている。母は仕事をしており、幼児期の養育の中心は同居していた父方祖母（小1に死別）であり、溺愛を受ける。その為に母は厳しく躾けようとしており、「自分のことと分らない人」と児童はみている。

〔生育歴および問題の経過〕発育は順調。幼児期に適切な養育がなされず、幼稚園時には束縛がいやで制服を投げ出して帰ってきたこともある。小3～小5に学級委員、小5、6年には児童会役員に立候補する。運動好きで少年野球の主将区つとめる。在学的で友人は多いが、他児への乱暴、支配性がみられる。小6に学級全員に毎日作文を書かせることを嫌い、拒んだりするうちに担任への反感を強め、2学期末から家財破壊、不登校傾向ととなり、翌年2月から全欠状態。身体的攻撃は母妹から父にも向けられつつある。

〔心理判定所見〕 家庭内暴力華經型（登校拒否型）

知的には平均的、体格は大でがっつりしている。明るく活動的だが、幼らく自己中心的で要求が多い。持経力乏しく、自己主張や自尊心痛癢く葛藤を抱きやすい。

〔精神科医診断〕 神経症（登校拒否、家庭内暴力）

【処遇方針】両親への経緯指導や文料、児童が登場する段階で個人心理療法的関与、向精神薬の考慮、児童が米所拒否（２度米所）しており、保護者集団指導へ、

〔集團指導での経過〕母親面談を中心として下表に示す。

	児童の状況	面会経過・段階	面会者の関わり
56年5月	→ 両親の暴力、特に父に対して執拗。 → 過食・便閉、自分で食事を作ろうとする。 → 要求する金、金を取り去る→ 黒線紙を貼入。 → 6月頃から床にたふすまになり、7月中旬から断食状態。	A男と姉がいると常にビクビクしておりたむれどと言う。その時に妹は4月の初頭入院に避難してている。A男を監禁してまわっており、面会にも来る。保証を求めると、且つ、父はA男にせよ、妹をば、養育せよといふ。A男は不満を述べてより、教育方針が合わないのでも嫌つてゐる。妹にはおむんぽ悪いとでているといふ。7月に片き取れる。2学期から不登校傾向。児童を信頼して行きたいと、父に段々返してやらうといふ。その時姉が病気で、妹の、母の療育の法を量り、恥感・恥感・恥感と一族、父の罵詈雑言、とり得つた人（混乱期）。	集田成夫の自己発見 精神科医師による助言。

[illegible]

【考察】の事例は未熟で耐性の低い性格傾向に加え、思春期に至り教師への反発のなかで自己同一性の動揺を失い登校拒否、家庭内暴力を呈したものである。

②家族統合の推進役を母に期待した為、混乱期後半から児童の退行を受容し児童の動きに合わせた関わりのなかで母親としての役割を再認識している。このことは両親の役割についての課題を父にも喚起させ、父の継続的な協力、支持を得る決定因に立ったものと思われる。

③家族統合を促進している。③また、両親の役割相補性も形成され、半抱強く待ち支持する父のもつポジティブな姿勢も児童の成長を保証したものである。

④継続的な指導のなかで、児童の自立へのプロセスを支持し、家族統合から世代境界の形成への援助ができたことと展開を促進しており、親指導の治療目標について示唆されるところである。

被収容者をめぐる社会関係(8)

——MAPSとTATからみた人間関係——

長谷川孫一郎

(金沢少年鑑別所)

目的: 前回の報告でMAPSの結果から非行化した少年は対人関係についての関心とその範囲が狭く、社会関係の不適応状態にあることを推測した。今回はMAPSの詳細な分析にTATの分析を加えて、個々の少年の人間関係の特性を明らかにする方法を考える。

方法と手続: 昭和57年6月からK少年鑑別所入所の少年のうちMAPSを実施した100例(男69女31)、またそのうちTATも実施した91例(男61女30)について、MAPSは下の表の11の背景、TATは20枚(1, 2, 3BM-GF, 4, 5, 6BM-GF, 7BM-GF, 8BM-GF, 9BM-GF, 10, 11, 12M-F, 13MF, 14, 15, 16, 17BM-GF, 18BM-GF, 19, 20)を用いて、次の諸点を分析した。

MAPSから 1) 画像使用数と範囲、2) 背景別画像数と範囲、3) 背景別のテーマからみた人間関係、TATから 4) カード別のテーマの特性をとらえる。

結果1. 画像使用数と範囲 (関心のある人物の指標)
男子少年の使用数合計は17~55枚(平均30.3)であり男性像5~31(平均16.9)女性像2~20(平均9.7)その他0~13(平均3.7)。女子少年の合計は20~54(平均32.3)で男性像8~30(平均15.9)女性像6~21(平均12.2)その他0~10(平均4.2)。男女とも個人差が大きい。

結果2. 背景別画像数と範囲 (背景の特性)
下の表の通りで、居間・街路・夢・白紙・出入口はとくに個人差の大きい背景であることがわかる。

結果3. 背景別のテーマ (人間関係の特性の指標)
各背景とも共通にみられるテーマを比較すると、家族の親和関係は、男女とも浴室と子供部屋、次いで男子は洋服箆筒、女子は寢室に多くみられ、犯罪非行や災害等の危機場面は、男子の出入口、女子の夢に多い。なお他の自由選択の背景での犯罪非行等の場面は、男子の地下室・屋根裏・洞窟、女子の森・塙立小屋に多かった。この両テーマは個人差がもっとも大きい。

詳細に背景別のテーマをみると、「居間」では、父の帰宅を迎える家族などの親和関係が男子に多く(下表)

が30%にすぎず、殺人等の犯罪場面や他人の往来(男10.1, 女16.1%)などの特異な場面がある。「街路」では、交通違反や事故の場面(男31.9, 女32.3%)のほか殺人等の犯罪場面(下表)、単なる通行人(男7.2, 女16.1%)等がある。「診療室」では、患者と医師・看護婦の関係(男94.2, 女77.4%)が主であるが、犯罪等(下表)や交通事故に結びつくものがある。「浴室」では、夫婦や親子の入浴(男55.1, 女54.8%)の半数以上が母子関係であり、単独の入浴(男33.3, 女22.6%)より多い。また男性の全裸像(男68.1, 女58.1%)女性全裸像(男52.2, 女45.2%)は異性への関心を示すであろう。「夢」では、犯罪の目撃者の恐怖が女子に多く、スーパーマンによる救助(男26.1, 女19.4%)、サンタクロースの贈物(男13.1, 女32.3%)が父母の贈物より多い。「橋」では、犯罪場面や家族関係に次いで、単なる通行人(男10.1, 女19.4%)男女のデートや別れ話(男10.1, 女22.6%)自殺(男10.1, 女6.5%)などがある。「寢室」では、夫婦や親子関係に次いで単独者(男30.4, 女25.8%)恋人同士(男19.4, 女3.2%)がある。「白紙」では、犯罪場面に次いで多くの場面があり、スーパーマン(男8.7, 女22.6%)サンタクロース(男8.7, 女22.6%)もある。「洋服箆筒」では、父の帰宅や着替手伝いなど親和場面に次いで盗難等の場面がある。「子供部屋」では下表の場面が主である。「出入口」では、犯罪場面のほか再出発の希望や祈り(男18.8, 女35.5%)が特異で、幽霊出現(男21.7, 女16.1%)など多様な画像が使用されている。

考察: 結果4のTAT各カードの特性は省略したが、前記の結果から、非行化した少年には、一般に多くみられる特性もあるが、それ以上に多様な特性がみられ、個々の少年の人間関係の特性について、検査結果に基づく面接を通して明らかにしていくことがでる有効な方法であることが確かめられた。なお両検査を併用する際は、MAPSを先行する方が望ましい。

背景		居間	街路	診療室	浴室	夢	橋	寢室	白紙	洋服箆筒	子供部屋	出入口
画像数	男子	1~7 (3.2)	1~9 (3.5)	1~5 (2.8)	1~4 (2.0)	1~9 (2.9)	1~7 (3.1)	1~6 (1.9)	1~9 (3.9)	0~5 (2.5)	0~6 (2.6)	1~7 (2.2)
R (M)	女子	1~6 (3.0)	1~8 (3.5)	1~5 (3.1)	1~4 (2.2)	1~7 (3.1)	1~5 (2.7)	1~3 (2.1)	0~9 (5.0)	1~7 (2.7)	0~6 (2.5)	1~7 (2.4)
家族親和	男子 女子	30.4 9.7	5.8 9.7	10.1 19.4	60.9 61.3	17.4 25.8	13.0 25.8	39.1 45.2	8.7 12.9	47.8 38.7	55.1 74.2	2.9 9.7
犯罪非行	男子 女子	23.2 25.8	14.5 12.9	8.7 9.7	2.9 3.2	29.0 41.9	23.2 3.2	5.8 12.9	34.8 22.6	21.7 16.1	23.2 22.6	44.9 22.6

明治初期における犯行・矯正条件の変動について

安倍 淳吉

(国際政治学・教養学部)

①犯罪行者の生活・行動空間に介入するプラスまたはマイナスのSanction機制状況に巨視的に接近することは方法論的に必然的である。前回報告に引き続き明治前期のその状況の一端にふれたい。②明治期において法とその権力機構の近代化・国民化が比較的急速円滑に推進された原因の一つには200余年に亘る鎖国があると考えられる。その内諸藩は内治に対してそれぞれ独立した権力と法をもちながら、他の東洋諸国に比べて、そのために比較的相互平等性を保つことが可能であった。しかも藩内階層内、革命時フランスと異なり、深い対立が存在しなかった。士族層はまたフランスと異なり、旗本領を除き、農民層との間に土地を媒介とした直接主従関係がなく、ともに藩主の支配下にあり、しかも全人口の10%の多数に達しており、安定勢力となっていた。また士族層は農民層との間には苗字帯刀を許されている層があり、身分的連続性があった。またくに下級士族層には工商を事実上兼ねる場合があり、相互に養子縁組の可能性があり、連続性があった。各階層はフランスの如く藩を離れた横の結びつきがほとんどなく、領主を頂点としたタテの構造が顕著であり、相互の緊張関係は各層をタテにわたる藩集団内におもに生じた。そして政治権力の主体は天皇の主権によって与えられる1000余年に亘る伝統によって支えられており、しかも天皇主権は士族集団間の緊張関係から隔離された象徴的存在としてのみとくに中世以降存続し天皇は自ら統治しない国民の主権として士族集団間競争の勝利者へ形式的順応する柔軟性をもつ存在として国民的分裂を阻止して来た。維新戦争の基本はどちらの政治組織によって近代化国民化を達成するかであり、その何れにせよ、政權獲得が必要であり、天皇主権による支配権の安定、權威化が必要だったのである。また維新はフランス革命のように特定階層に基礎をなくイデオロギーが主導しなかった。共通に存在した意識は外圧に対する富国強兵による国民的独立であった。しかしそれは直ちに近代化ではなかつた。外圧諸国が対等と承認しうる局面の体制をといえることが新政府の目標であり、それが直接的には欧米化(近代化)を訴えたのである。しかし神道イデオロギーの確保は天皇制の上に立つ国民化にとって必須であつた。が外圧と仏教による内圧によって明治4年国教化は抑制され儒教との結合によって政治的倫理的法的理念としての存続し日本独特の近代化に基調を与えた。神道イデオロギーは封建制度を更に逆巻る復古性をもち、封建性理念の抑制に役立ち、他面その無内容性によって近代性受容に当って抵抗

にならなかつた。また儒教理念は封建的社会構造を支える軸となつたがしかしその本質は集団主義にあり、近代的社会構造を集団的に固定化し個人主義的分裂を阻止する積極的役割を果たした。③I混乱期(K4-M2,7月),旧幕府領地500万石の新政府による移住地をK4府(3府)と神奈川・長崎・薩摩・新潟の各開港地と奈良、甲府を指定したがM2,7月までに3府を除いて県とは(22ヶ所)と呼んだがそれと京洛から東京に至る街道筋は勝利後も混乱が続いた。新政府は当時各藩の内治に干渉不可能であつた。新政府自体は直属の兵力をもたず、持藩の兵力による警備に依頼せざるをえず。またその兵が治安の混乱に犯罪の基となつた。新政府は各藩に御土、貢土を出させ朝臣をもつていたがそれも藩内悪勢力が強かつた。II安定期(M2,7月-M6)藩藩奉還の強行により、藩主は旧藩の知事に任命され、家禄と華族身分が保証され、はじめて各藩内治に干渉可能となつた。M4,新政府はそれをもたえて直属の兵力を持ち、続いて廢藩置縣を断行、藩知事を罷免、東京に在任させ、新知事を任命した。華・士・平民に分化し相互婚姻も可能にし、身分による職業選択の制限を廢止した。また官僚組織を全国的に統一し、学制、国民皆兵、地租改定、戸籍法など国民近代化の基礎を準備した。しかし法曹職は舊令・明清の法と士族と平民の刑が異なる懲刑を強し、先考理念が基礎であつた(M3新律制定)。III近代化確定期(M6-M15),岩倉使節団歸國に象徵されるように、国民化の基礎の上に立つて、積極的近代化を模索、実施をはじめた時期である。警察制度における巡邏方式、警視庁などM6,7に知り、M13公布M15実施の刑法、刑罰法に至るフランス系制度の日本化にそれがみられる。④M9の犯罪傾向を東京府統計によつてみた。I竊盜 1807(男1769,女38),淫絶婦女引誘 32則(686(男100,女586),賭博522(男511,女11)詐欺167(男161,女61)殺人22(男21,女1),強盗51(男49,女2),出放火(男87,女10),強姦107(男107,女1)分析表がある。竊盜851(初犯94,再犯89,三犯68)累犯者か圧倒的に多い。70と見られる。強盗86(初犯52,再犯33)その他134(初犯123,再犯,三犯);強姦者888(男885,女3),有夫婦者105(男103,女2)有夫婦無子54(男52,女2),無夫婦者24(男19,女5)年令20才-24(399),25-29(259)15-19(163),30-34(105)35-39(63)50-59(27)40-44(23)45-49(16)15才未満(9)60以上(7)職業商人(士族平民598),無職(士族25平民190)工人(平民198)官宦出仕(士族平民10)田舎(士族平民13)雜業(平民19)神官僧侶(平民);淫絶、強姦56846件衣類45148,金52741円,その他略;重軽微罪で処分された者、A原価的なもの、便所には非ざる所便(4995人),店先で子供に小便させた者(101)裸体で露体た者(2091),いれずみ(44),男女淫絶淫世(30),戸口を開放し淫世する(淫世(8),素面販売(8)婦人にていわれなく断髪3者(14)男袴女袴(8),B交通関係;無大木(506),馬車止の場所を犯す(206)花車止に犯す(5)歩道に犯す(14),馬車止に犯す(3)倒す(48),馬車に衝突往來を妨害する(39)跨つて馬車と妨害する(28),往來の歩道号をこす(15),有車止に並行して往來を妨害する(5),Cその他、喧嘩口論(2727),ふたなき書こえ神を搬送(39),汚物を往來の場などにする(26)軒下に糞尿などをみく(8)田圃の踏み踏場を通行(22)9才以下に妨害(8)外国人を無礼で宿泊させる(3)以上懸念合計19399件728屋比費67414円。

服飾変遷の原理研究(2)

糸 日 谷 孝 幸
(コルボー服飾デザイン専門学校)

〔目的〕

衣服の流行がどのような要因によつて変遷していくのかという問題は、流行論を論じる上で重要視しなくてはならない問題である。服飾変遷の考察には、社会・心理学的立場と衣服形態学的立場とがあるが、今回は、形態学的観点から西洋における服飾史を考察し、筆者独自による分類を試みた。

〔結果〕

新しい衣服が出現してから、普及ないし変化、そして残存または消滅までの過程には、主に次のような特徴をみることができる。

①出現段階

(新種創造型) 新しい形態の衣服が人為的に創り出される。

(伝播導入型) 他の地域から新しい衣服が入り、てくる

(過去復活型) 過去に用いられた衣服が再び現れる

(下衣表出型) 下着が表着化して現われる。

②普及段階

(上層普及型) 下層階級の衣服が上層階級にまで用いられる。

(下層普及型) 上層階級の衣服が下層階級にまで用いられる。

(異性普及型) 男性(女性)の衣服が女性(男性)にまで用いられる。

③変化段階

(機能変化型) 機能的な原因で形態が変化する。

(装飾変化型) 装飾的原因で形態が変化する。

(階級変化型) 階級の差別的な原因で形態が変化する。

(性差変化型) 性差的原因で形態が変化する。

(簡略変化型) 形態の簡略化が進んで変化する。

④残存段階

(停滞残存型) 古い形態が変化せずに残存している。

(痕跡残存型) 過去服の痕跡だけが残存している。

⑤消滅段階

(自然消滅型) 自然にすたれて消滅してゆく。

(人為消滅型) 人為的な原因(服飾禁令、他民族による支配など)によつて消滅してゆく。

〔考察〕

以上の分類を踏まえた上で、現代における変遷例を取り上げてみると、新種創造型の代表としてミニ・ス

カートがあげられる。1965年イギリスのマリー・クワントの創作によつて世界中に広ま、ミニ・スカートは、過去の服装史上初めての一大革命であった。また伝播導入の例としては、開国以来日本における洋装化が、下衣表出の例では、元来男の下着であつたものが表着化したワイシャツ、Ｔシャツがある。上層普及型にはジーンズ、異性普及型としてパンタロンが考えられる。また、現在のフォーマルウェアは、ダブル形式からシングル形式へと簡略変化の途上期にあるといえるだろう。

以上の考察から、過去服の変遷分類が現在における衣服の変遷過程を理解する上で、一つの手がかりとなるものと考えられる。

表1. 変遷の型と具体例(カッコ内は時代を示す)

変遷の型	例
新種創造型	グリーオー(ロマネスク)、ベルチュガダン(ルネサンス)、シュミーズドレス(エンパイア)。
伝播導入型	クラシリス(エジプト)、ダルマチカ(ローマ)、ルダンゴート(ロココ)、パンタロン(エンパイア)。
過去復活型	パニエ(ロココ)、ローブ(ロマンチック)、クリノリン(クリノリン)。
下衣表出型	チュニカ(ローマ)。
上層普及型	ダルマチカ(ビザンチン)、アールボアン(ルネサンス)、パンタロン(ロマンチック)。
下層普及型	多く見られる。
異性普及型	ゴット(ゴシック)、ルダンゴート(エンパイア)、ゴルセツト(ロマンチック)。
機能変化型	クラミエス(ギリシア)、オールド・ショース、バド・ショース(ルネサンス)、ゴルバレネ(バロック)。
装飾変化型	ディ・アロイス(ギリシア)、コタルディ(ゴシック)、パンズ(ルネサンス)、フランス型アビ(ロココ)。
階級変化型	パーニュ(エジプト)、エクソミス(ギリシア)、トガ、チュニカ(ローマ)。
性差変化型	多く見られる。
簡略変化型	ローラム(ビザンチン)、アティ・ドラ(ルネサンス)、ガエスト(バロック)。
停滞残存型	民族衣裳一般。
痕跡残存型	背広における袴の切込み、袖の3つボタン、後裾のベンツ、婦人コートにおけるバックベルト。

新聞マンガによる世相分析研究

松浦 いぬ
(たばこ総合研究センター)

新聞マンガはその時代、その社会の世相や風俗、さらには日常生活の具体的な姿をも映し出すメディアである。

本報告は、新聞マンガを材料に、たばこの意味、機能、日常生活との関連を調べることとをねらいとした研究の一環として、新聞マンガに登場するたばこによって世相の一面を分析することを試みたものである。

経緯

1948年～80年の、朝日、毎日、読売各紙朝夕刊の4コマ連載マンガに出てくるたばこについての内容分析を行なったところ、たばこをテーマにしたものは355篇であったが、時期により多い時と少ない時とがあり、内容にも時期によって違いがみられた。

目的

前記の時期的な違いと、テーマに対する世間の関心のもち方、世間一般のたばこに対する見方の違いの表れの一つと考え、たばこというテーマをどのような視点でとりあげられているかをみる事を通じて、社会のものの見方の一つの分析を試みることとした。

方法と手続き

1. たばこがテーマになっているマンガの各々について、①喫煙者自身の視点、つまり個人的視点でとりあげられているか、②喫煙者周辺の人、つまり第三者的視点でとりあげられているか、③公的・社会的視点でとりあげられているかを評定して各視点の得点とする。一つの作品が二つ以上の視点でとりあげられている場合はその得点を2分した。こうして得たものを三方向に分けて示した軸の各方向への強さとしてベクトルであらわし、その合成点を図示することによって、どのような視点でとりあげられているかを示す。
2. たばこがテーマになっているマンガをテーマの内容によって6種類に分類し、それぞれがどのような視点でとりあげられているかを示す。
3. 新聞への登載年によって次の5期に分け、テーマの内容ごとに視点の推移を示す。

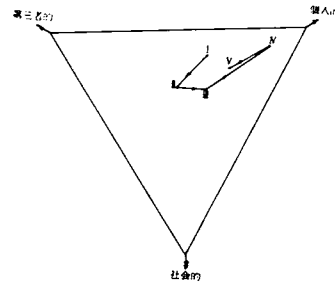
- I. 1950～1959年
- II. 1960～1966年
- III. 1967～1972年
- IV. 1973～1975年
- V. 1976～1980年

4. テーマとしてのたばこ全体の視点の推移を示す。

結果と考察

テーマ内容別にみると、たばこの魅力、値段のことはつねに個人的視点で扱われているが、他の内容のものは時期によって視点に変化がみられる。

テーマとしてのたばこ全体の推移をみると、個人的ないし第三者的視点から、第三者ないし社会的視点の方向へ、それがさらに社会的ないし個人的視点へと移っている。



第I期は個人的関心事であるたばこの魅力がテーマとされることが多く、禁煙、火事といったテーマも、個人的ないし第三者的視点が多い。第II期は健康問題をテーマにしたもの

のふえで社会的視点で扱われており、火事、マナーの問題も第三者ないし社会的視点で扱われるようになる。禁煙の問題はやはり個人的視点の強いものではあるが、かなり社会的関心が強くなってきていて、喫煙が社会的に関心をもたれるようになっていくのがみられる。第III期には健康や禁煙の問題はやはり社会的視点の強いものの、個人的視点でとりあげられる値段とテーマにしたものが出てくるようになって、全体としては社会的ないし個人的視点の方へ移っている。つまり、社会的関心は引き続き強いが、それに対して喫煙者の側からも意思表示するようになったのがみられる。第IV期はたばこがあまりテーマになっていない時期であり、値段のことは魅力のことという極めて個人的な視点に限って若干とりあげられている程度である。第V期は社会的視点から個人的視点の方へ移ってきて、禁煙、火事というテーマは個人的ないし社会的な視点でとりあげられ、マナーの問題は社会的な視点から第三者的視点の方へと移っている。

結論

新聞連載マンガの分析により、社会的習慣の一つであるたばこに対してどのように社会的関心をもたれていたかを知ることができる。

Personal Space の心理学的研究 (Ⅲ)

高 橋 良 博

(駒沢大学 文学部)

[目的]

本研究では以下のような観点から personal space の測定を行ない、personal space における対人距離の設定の要因を研究する事を目的とする。

1) 対人距離の設定は被験者の身長との相関がみられるかどうか。 2) 対人距離の設定は、対面する他者との身長差によって影響を受けるかどうか。 3) 対人距離と性格特性の間に相関がみられるかどうか。

[方法]

被験者 東京都内の栄養士専門学校の学生(1年生)146名を被験者とし、(年齢の分布は19-20歳)一斉に実験を施行した全被験者のうち、男子学生(23名)を除く、女子学生123名が本実験の対象者として選ばれた。

材料 刺激材料は刺激図と記入票からなるプリント。13枚一組で、最初のページは氏名、年齢、身長、視力、利き手、聴覚異常の有無などを記入する記入票になっており、以下に、被験者に自己に見立ててもらふ刺激図1枚と、他者に見立ててもらふ刺激図、A・B・C、三通りの図(9枚)が含まれる。この図は体型を変えずに5%ずつ身長を調整して作成し、これによって、条件A・自己より(5%)身長の高い他者への接近。条件B・自己と同じ身長の高者への接近。条件C・自己より(5%)身長の高い他者への接近という場面を被験者に想定してもらふ事になる。刺激図A・B・Cは、3×3ラテン方格により配置され、一試行が終るごとに、すなわち、第1試行と第2試行の間、および、第2試行と第3試行の間には、被験者に対する作業(脈拍の自己測定)を指示するプリントがそれぞれ1枚ずつ加えられる。

[手続き]

実験は、刺激図版および記入票を含むプリントを配布し、「あなたが、道で人にものをたづねる時、初対面で、自分とほぼ同年齢と思われる同性の相手に対して、だいたいどれくらいの距離をとって話をするかを示してください」との指示により行なわれ、全被験者のプリントへの記入が終了した事を、実験者が確認した後、実験者による強制速度法により、性格検査への回答が求められる。データとしては、プリントの図版上に記入された印の位置から、他者に見立てるように指示された人物像のつま先までの距離が、A・B・Cの三条件それぞれにつき3回測定される事になり、各条件それぞれの距離の平均値とYG性格検査により測定された各性格特性との間の相関が分析される。

[結果]

実験によって得られたデータは、まず、被験者の身長と、対人距離との相関がA・B・C各条件別にもとめられたが、こ

こでは有意な相関はみられなかった。

次に、A・B・C各条件における対人距離の平均値と、YG性格検査によって検出された、各性格特性値との間の相関がもとめられた(表-1)

その結果、G：一般的活動性の特性値と対人距離との間には正の相関がみられた。すなわち、一般的活動性の高い者は、他者との間に広い対人距離を置く事がうかがわれる。

[考察]

本実験の仮説の一つである身長と対人距離との相関は、この実験の結果を見る限りでは有意ではなかった。

そこで、ここでは本研究において観察された、もう一方の結果である、YG性格検査によって検出された一般的活動性の高い者の方が、一般的活動性の低い者よりも広い対人距離をとる傾向があるという結果についての考察を中心にして述べてみる。

本研究において観察された、結果は、これまでに成されてきた personal space における、内向者・外向者の空間行動の相違などを指摘する研究結果(田中政子1973など)とは一見矛盾した結果のように思われる、この点についての考察を行なってみると、このような結果が出てきた理由としては、

1. 実験場面において被験者に与えられた指示の問題。
2. 実験手続きの問題。を予想する事ができる。

表-1 各条件における距離と性格特性との相関

条件 \ 特性	A	B	C
D	-.0310131	-.0178559	.0526096
C	.0548272	.0555581	.6630312
I	.0271502	-.0246851	.0746517
N	.0194966	.0328143	.0983451
O	.0213622	.0217805	.0254777
Co	-.0311556	-.0523262	-.0332734
Ag	.0396712	.0676852	-.0138809
G	.179535*	.224665**	.204105**
R	.121028	.122229	.0795689
T	-.0460603	-.0457804	.0142903
A	.0178722	.0539537	-1.13558E-03
S	-.0793751	-.0728848	-.106663

* P < .10
** P < .05

人間の空間行動に関する研究(1 2)

相互交渉における最適空間配置について

○小西 啓史 正田 亘

(立教大学文学部)

問 題

われわれが他者と相互交渉をもつ場合、ある一定の物理的距離をとることと、向かい合い方をすることが知られている。小西と正田(1984)は、自由に着席位置を決めることの出来る状況を作り、その際とられる2者間の対人距離と身体角度を測定したが、概ね一定の傾向があることが明らかにされた。すなわち、対人距離は120cm~140cm、身体角度は45°位になる配置が好んでとられた。これは、高橋と西出(1977,1978)が「集合の型」と呼んだものと形態的に類似していた。彼等によれば、集合を意図して集まった集団には人間同士の結びつきがあるため、その型を維持しようとする傾向があるという。

このように、相互交渉の際には最も適切な空間配置の型があるものと思われる。そこで本研究では、幾つかの空間配置を用意することによって、最も会話に適したものを明らかにしようと思う。なお、データ収集及び分析は現在も進行中であるので、今回は中間報告とする。

方 法

<被験者>男女大学生72名(男子32名、女子40名)が実験に参加した。同性かつ初対面同士を2人1組として36組を作り、4組ずつを9条件に振り分けた。

<実験セッティング及びデザイン>実験空間としては4×2.5mの部屋を用いた。ここには窓はない。ドアの外からビデオカメラで実験中の被験者の行動を録画した。対人距離は、(1)100cm (2)130cm (3)160cmの3水準、また身体角度も、(a)0° (b)45° (c)90°の3条件である。これら各水準を組み合わせると都合9条件を作り、これを9つの空間配置パターンとした。

<課題>いずれの組に対しても同一の問題解決課題を与えた。内容は、女性の喫煙に関するケースを読み、それについて各々の意見を述べるというものである。これを2人に話し合わせて何らかの結論を出させるようにする。

<手続き>被験者に対して課題を与えた後、実験空間に入室させた。部屋には条件に応じて椅子が2脚配置しており、被験者はそれに着席した。椅子にはヒジ掛けがついており、これによって被験者の身体動作を極

力制限した。課題は5分間行なわれ(途中打ち切りの形をとった)、終了後 lwata(1974)の density scale と crowding scale の2つの質問紙に回答を求めた。また、相手との位置関係による「話しやすさ」についても5段階で評定させた。

結 果 と 考 察

(1) 密度感と混雑感: density scale に対する回答結果はTab.に示した。得点が高いほど強い密度感をあらわしている。表から明らかなように、対人距離100cm、身体角度0°の配置において高い密度感が現れた。それ以外の配置においては、比較的低い密度感しか現れなかった。crowding scaleにおいては条件間の違いはほとんどみとめられなかった。

(2) 話しやすさ: 相手との話しやすさについては、Fig.に示した。得点が高いほど話しやすいことをあらわしている。対人距離100cmにおいては対面のときに話しにくく、身体角度が大きくなるにつれ話しやすくなっている($F=3.27$ $p<.05$)。130cmでは身体角度にかわりなく話しやすいと報告されている。

Tab. 密度感(density scale)

	0°	45°	90°
100	21.13 (4.05)	15.5 (3.63)	16.75 (3.24)
130	13.25 (2.96)	13.38 (2.62)	14.75 (3.81)
160	13.13 (3.27)	14.38 (2.88)	14.25 (2.10)
cm			

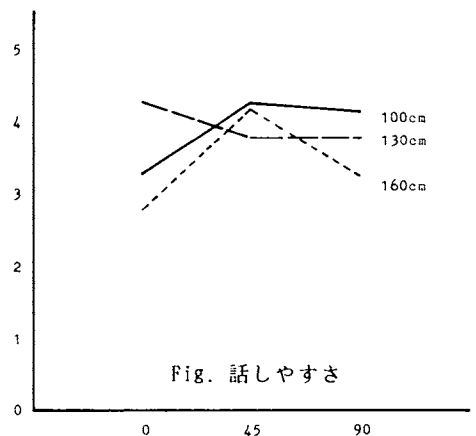


Fig. 話しやすさ

バーバル・サンプリング法の研究 (1)

家本 修

(大阪大学)

1. はじめに 空間から受ける刺激を評価する方法については、SD法やME法などが中心に展開されているが、いずれも決定的な方法になっていない。

そこで、本研究ではより安定した簡易な測定、評価する方法を求める試みを行うものである。

2. 目的 本稿においては、バーバル・サンプリング法の提案を行うものである。

3. 提案 従来のサンプリング法は、パーソナリティ・サイドの測定に一部で研究されてきた。しかしその簡易性に比べやや不安定な欠点が存在したことも事実であろう。この不安定な欠点は、要素である語の持つイメージの作用ではないかと考えられる。

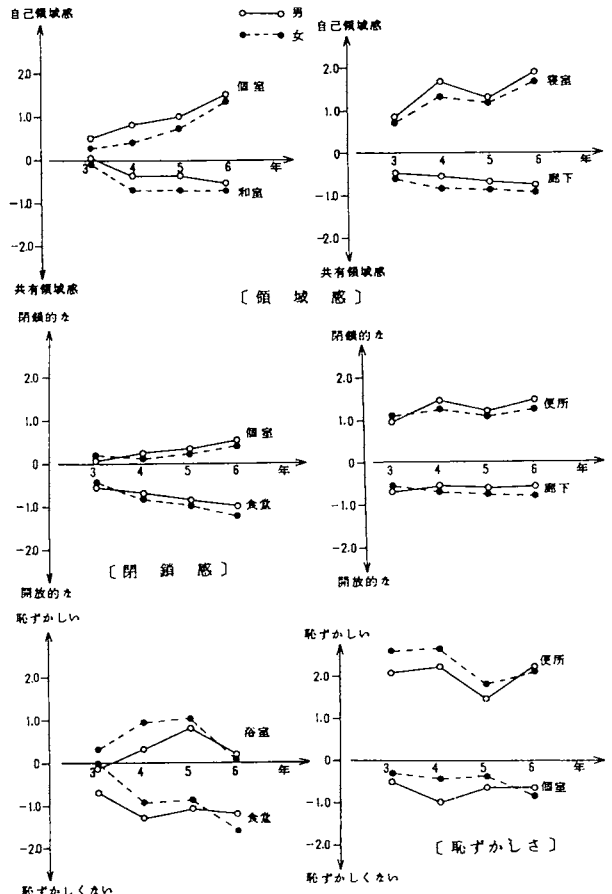
そこで、このイメージの作用をフラットな反応として評価方法に用いるものである。但し、従来のサンプリング法と異なり、フラットな反応である以上構造化された刺激群である。よって、構造的差異性によっては、特定の反応が得られるものと考ええる。

4. 具体化と手順 被験者の共通経験としてイメージの比較的安定していると考えられる住宅の部屋空間を本稿では、対象として捕らえる。期待すべき特定の反応として、3指標を設定した。空間の場の感覚指標として、対人的関係と考えられる”場における恥ずかしさ”、”場の意味に関係すると考えられる自己・共有領域感”、”前者より物理的関係があると考えられる閉鎖感”を検討仮指標とする。

- ① 住宅の思い付く部屋名を上げさせる。
- ② 部屋名の分類集計、スケッチ・プレートを作成
- ③ 一般動詞の収集と部屋名とスケッチ・プレートから連想語(動詞)の収集を行う。
- ④ 部屋名とスケッチ・プレートをもとに各動詞の指標ごとの3段階評定を行い、分類する。
- ⑤ 上記を元に20個の動詞群を選定し、プレート提示ごとに動詞群から適性動詞を選択させる。
- ⑥ 選択させた動詞に3段階評定平均値を掛け、その部屋名の指標評定値とする。

5. 基準と方向 イメージは、必ずしも各自の自宅の学習に限定されず、様々な媒体によって形成されてきた総体的なイメージであろうと考えられる。評価はフラットである以上、平均的な反応を求めるので結果として被験者群全体の評価平均である。

6. 実験 ①：目的 スケッチ・プレートと部屋名の対応性検討 ②：方法 被験者：大学生16名(男8名、女8名、年齢19才~22才、平均21.5才、21.3才) プレートを提示し部屋名を上げさせる。③：結果 プレートと部屋名には高い対応関係が見られた。 $(r=.9125, P<0.01)$ 実験2 ①：目的 部屋名の各設定指標評定 ②：方法 被験者：東大阪市立K小学校3~6年生 158名、年齢8~12才、平均IQ 111、：プレートを提示しその都度動詞群から選択させる。③：結果 領域感では、個室、寝室の値が高く、閉鎖感では、便所などが高い値を示している。恥ずかしさでも、便所が高く、浴室で5年生でピークが見られる。閉鎖感では、3~6年生で安定した傾向を示している。領域感では、変動する部屋名が多い。



目撃者証言の基礎的研究 Ⅱ - 1

—再認における付加情報の挿入時期の効果について—

○斉藤洋典（関西学院大学文学研究科）

三宅洋一（兵庫県警察本部科学捜査研究所）

1 目的

三宅・斉藤(1983)において、目撃者に与える情報の種類を操作し、直後再認の効果を検討した。又、斉藤・三宅・中川(1983)において、再認テストの遅延による目撃時の記憶内容の減衰率を検討した。そこで今回の目的は、目撃内容に対する付加情報の挿入時期による再認率の差を調べることである。つまり、目撃時に付加情報を与える条件と再認時に付加情報を与える条件（斉藤ほか,1983）との再認率を比較検討することである。

2 方法

(1) 日時・場所及び被験者：昭和59年5月4日～5月18日の間、兵庫県警察学校視聴覚教室で、初任科生105名（平均年齢19.8歳）を用いた。

(2) 刺激：刺激として、安全指導用16mmカラーフィルム・テレビ朝日映像製作「あなたへの警告」（約3分）を用いた。

(3) 手続き：フィルム観察の約15分後に17項目から成る情報紙（誤情報：Misleading；一致情報：Constant；中立情報：Neutral）を与える条件と情報紙を与えない条件（Film only）さらにフィルムを見せず一致情報紙のみを与え、情報紙に対する評定（Reading）もしくは現場見取図（Picture）を作成させる条件を構成した。つまり、F群を除く各条件群には、フィルム内容に対する情報紙の明確度・客観性を5点尺度で評価させた。その後に、各情報紙の効果を検討するため、強制4肢選択方式で20項目から成る再認テストを実施した。さらに、被験者の解答に対する各自の確信度を3点尺度で評価させた。実験要因は情報のタイプ（M、C、N（3））×再認テスト時期（1週間又は2週間後（2））であった。

各群における具体的な実験手順は以下のとおりであった。M1（再認テスト1週間後、17名）、M2（再認テスト2週間後、18名）群では、まずフィルム観察後にフィルム内容と異なる情報紙（17項目中4項目に誤情報を含む）を与え、次にフィルム内容に対する情報紙の明確度・客観性の評定を行なった。その後、20項目からなる再認テストと各再認項目についての確信度評定を行なった。C1（19名）、C2（16名）群では、フィルム観察後にフィルム内容に一致した情報紙を与え、N1（19名）、N2（16名）群ではフィルム観察後にフィルム内容に中立的な情報紙（17項目中4項目について色情報を取り除かれている）を与え、その後の手続きはM群と同一であった。

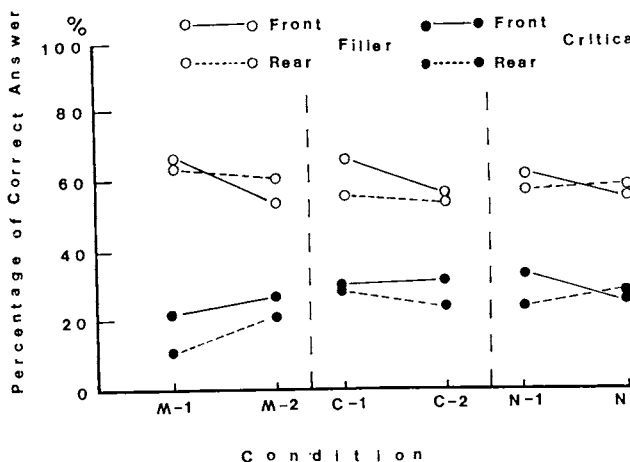
表1はフィルム内容に対する付加情報（情報紙）の挿入時期の違いを図式化したものである。斉藤ほか(1983)の実験ではフィルム観察後、1週間又は2週間経過後に情報紙を与え、同時に再認テストを実施した（Rear Information Condition）。これに対して今回の実験ではフィルム観察後に情報紙を与え、その後1週間又は2週間経過後に再認テストを実施した（Front Information Condition）。

Table 1

F I C
1) Film → 時間評価 → 情報紙 → 明確度・客観性判断
2) 1週間又は2週間後に再認テスト → 確信度評定
R I C
1) Film → 時間評価
2) 1週間又は2週間後に情報紙 → 明確度・客観性判断 → 再認テスト → 確信度評定

3 結果及び考察

図1はM、C、N群の再認テスト時期別の正答率（%）を示す。情報を操作しなかった Filler 項目の再認率は、M、C、N群を通じて60%の正答を示し、群間に差は認められなかった。これに対して情報を操作した Critical 項目では、誤情報を与えたM群がC、N群よりも再認率が低下した。全体としては、付加情報の挿入時期による再認率の顕著な差は認められなかった。ただし Misleading 条件の Critical 項目においてはRICがFICよりも低い再認率を示した。これは、フィルム観察時に誤情報を随伴させるよりも、再認テスト直前に誤情報を与えられた方が、その影響を受けやすい事を示唆する。また Filler 項目ではFICは時間経過に伴う再認率の低下を示したがRICは時間経過の影響を受けなかった。



目撃者証言の基礎的研究 Ⅱ-2

— 視覚情報・文章情報が再認率に及ぼす影響について —

○三宅洋一（兵庫県警察本部科学捜査研究所） 斎藤洋典（関西学院大学文学研究科）

1 目的

今回の目的は次の2点である。

(1) 事故フィルムの観察による視覚情報とフィルム内容の文章情報との違いが、時間経過によって再認率に及ぼす影響を検討すること。

(2) 再認テスト時の正答解答選択様式の差異によって、再認率に及ぼす効果を検討すること。

2 方法

(1) 日時・場所及び被験者

昭和59年5月4日～5月18日の間、兵庫県警察学校視聴覚教室で、初任科生131名（平均年齢20.8才）を用いた。

(2) 情報の種類

視覚情報として、安全指導用16mmカラーフィルム・テレビ朝日映像製作「あなたへの警告」（約3分）を用い、文章情報として、フィルム内容に一致した17項目から成る情報文を用いた。

(3) 手続き

フィルム観察の約15分後に17項目から成る一致情報紙(Consistent)を与える条件と与えない条件(Film only)さらに、フィルムを見せず一致情報紙のみを与え、情報に対する評定(Reading)もしくは情報文に基づいて現場見取図を作成させる条件(Picture)を構成した。C群・R群には、フィルム内容に対する情報文の明確度・客観性を5点尺度で評価させた。その1週間後または2週間後に、視覚情報と文章情報との再認の差異を検討するため、強制4肢選択方式で20項目から成る再認テストを実施した。

各群における具体的な実験手順は次のとおりである。C群では、フィルム観察後にフィルム内容に一致した情報紙を与え、その1週間後(C-1群, 19名)または2週間後(C-2群, 16名)に20項目から成る再認テストを行なった。F群ではフィルム観察後に情報紙を与えず、1週間後(F-1群, 22名)または2週間後(F-2群, 29名)に再認テストを実施した。R群では、フィルム観察せず一致情報紙を与え、各情報項目に対する明確度・客観性の評定を行なった1週間後(R-1群, 13名)または2週間後(R-2群, 10名)に再認テストを行なった。P群では、フィルム観察をせず一致情報紙を与え情報文に従って現場見取図を作成させ、1週間後(P-1群, 12名)または2週間後(P-2群, 10名)に再認テストを実施した。

3 結果及び考察

図1, 2は各実験条件群のCritical項目及びFiller項目の平均正答率を示したものである。

(1) Filler項目では、F群は時間経過に伴う再認率の減少を示した。又、R, P群では、直後と1週間・2週間の再認率に差は認められたが、1週間と2週間との間に有意な差は認められなかった。さらに、視覚情報に文章情報が付加されたC群では、その再認傾向はF群に準ずるが、1週間後と2週間後に統

計的な有意な差は認められなかった。従って、これは視覚情報と文章情報とで時間経過に伴った再認率の減少のタイプが異なることを示す。

(2) Critical項目のF・C・R・P群の再認傾向についてもFiller項目と類似のパターンを示したが統計的に有意な差は認められなかった。これはFiller項目では該当する個別正答項目が存在するのに対して、Critical項目では該当する正答項目が存在しないために、Critical項目での反応選択性が困難となり再認率が低下したと思われる。つまり、両項目の正答率の差はFiller項目が純粋な再認事態であるのに対し、Critical項目が再生事態に近い反応様式を求められたために生じたものと見なされよう。

(3) 単に文章情報に対する評価のみを行なったR群よりも文章情報に基づいて現場見取図の作成をしたP群の再認率の方がよかった。RとP群の差は、同一文章情報を受けても、情報に対する受け手の働きかけの違いによって再認率が異なる事を示す。

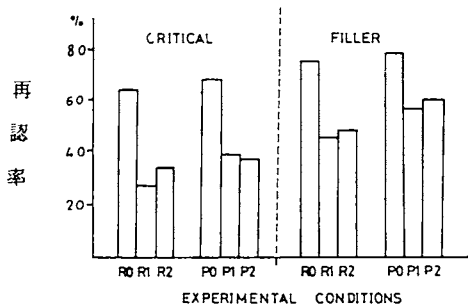


Fig1 Percentage of correct answers to critical and filler items for each group

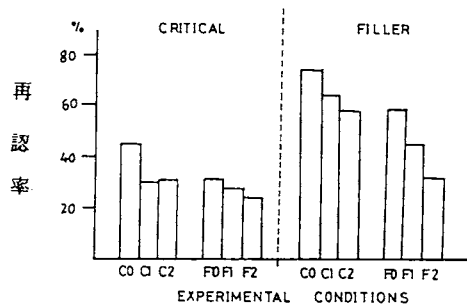


Fig2 Percentage of correct answers to critical and filler items for each group

商船における乗組員組織の変化について

大 橋 信 夫

(海 上 労 働 科 学 研 究 所)

表 1 商船乗組員組織の変遷

目 的： 技術の変化
の導入の影響を考察しつ
つ、商船の乗組員組織の
変遷を概観する。

材 料： 乗組員組織
といっても船の種類、各
船会社によって若干異な
るので、ここでは某大手
船会社であるZ社の貨物
船とコンテナ船にしば
り、同社の社史などの社
内記録及び我々がこれま
でに実施した乗船調査の
際に入手した資料を用い
た。また、同社で貨客船
ではない純粋の貨物船の
第一船であるA丸が竣工
した1914年以降に建造さ
れた船舶をとりあげた。

結果と考察： 1914年以降、今日に至るまでのZ社の船
舶建造史上で何らかの特別の意味のあったもののうちの
一部について、その乗組員組織を記したのが表1である。

A丸からO丸までの結果を要約すると（戦争中を除く）
次のとおりである。1.航海士は常に3人で、これは一日24
時間の航海当直を三交替でやってきたためである。2.機関
士は搭載されている機器、特に主機関によって人数が異な
り、レシプロ、タービンなど蒸気機関の場合は少なく、デ
ィーゼルの導入時期は多かった。3.甲板部員は大洋航海中
の自動操舵が導入されて減少し、コンテナ船となって荷
役の機械化が導入されてさらに減少した。4.機関部員は蒸
気機関、特に石炭焚きのボイラーを搭載している場合に多
く、ディーゼル船に少ないという点で機関士と対称的であ
る。さらに、自動化、機械化を進めて夜間の機関室当直を
廃止した、いわゆるMゼロ船で一層減少した。5.司厨部員
は他の乗組員の人数が減少すれば減少し、さらに船内生活
に対する考え方の変化によって一層減少した。

P丸以降については次のとおりである。コンテナ船に
おいて26名の乗組員による運航が出現したが、それ以上の
“合理化”をばんでいたのは、伝統的な航海士、機関士
及び甲板部員、機関部員という区分の存在であった。そこ
で、二つの流れが生じた。一つは、1977年にスタートした
船員制度近代化とよばれるものであった。様々な過程を経

てP丸に見るように、航・機・通あるいは甲・機の区分を
なくして、運航士、運航部員とよばれる職種を誕生させる
ことによって、漸次乗組員数を減少し、ついに1984年には
17名によって運航されることになった。もう一つはQ丸
のように自動化、機械化のレベルをむしろ下げて人間の仕
事を多くし、パナマ、リベリヤなどに便宜置籍した上で、
コストの安い発展途上国の船員と日本船員とで運航させる
混乗船であった。

結 語： 貨物船のA丸からコンテナ船のO丸に至る
乗組員組織の変化は、主として機械化、自動化など新しい
技術の導入によってもたらされたものであった。それは基
本的な組織を維持しながら、よりコンパクトな組織すなわ
ち乗組員の少人数化を実現するというやりかたであった。

しかしそれ以上の“合理化”を進めるためには、組織を
ドラスティックに変化させなければならなかった。その場
合大きくわけて2つの方法がとられた。第一は、P丸にそ
の例を見るように、新しい“職務の再編成”によって少人
数化をはかるものであった。第二は、Q丸のように 外国
人労働力に依存するやり方であった。その結果、前者にお
いては新しい組織になじみにくい職場不適應の問題を、後
者では異文化接触による文化摩擦の問題を生じている。

A丸からO丸に至る過程とP丸以降の組織の変化は、異
なる次元の要因によってもたらされたものである。

船名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q
竣工 船種 総屯数 主機関・台数 馬力 速力	1916 貨物 6987 R・2 5225 12	1924 貨物 7523 D・2 4000 11	1935 貨物 4471 T・1 3600 14	1936 貨物 7389 D・1 8000 16	1940 貨物 9264 D・2 9600 17	1940 貨物 6667 T・1 4500 14	1943 貨物 542 D・1 550 10	1944 貨物 4667 T・1 2000 12	1944 貨物 6832 R・1 2025 10	1945 貨物 7224 T・1 4500 12	1945 貨物 870 R・1 380 7	1958 貨物 9365 D・1 12000 18	1962 貨物 8425 D・1 22000 22	1968 コン 16240 D・1 27800 22	1972 コン 37845 D・2 69600 26	1979 コン 36723 D・1 27200 22	1976 貨物 13268 D・1 12800 17
船長	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
航海士	3	3	3	3	3	3	1	3	3	3	2	4	3	3	3	3	3
機関長・士	5	7	4	7	8	4	2	4	4	3	3	5	4	4	4	4	3
通信長・士	2	2	3	2	2	2	1	3	3	3	1	3	3	2	2	2	1
事務長・員	3	3	1	3	2	2	1	2	3	2		2	1				
船医						1						1					
運航士																	
職合計	14	16	12	16	16	13	6	13	14	12	7	16	12	10	10	10	9
甲板部員	23	22	17	20	24	17	6	17	21	15	6	12	11	6	6		2
機関部員	31	15	25	17	20	28	5	19	25	39	5	10	7	6	6		3
運航部員																	
小計	54	37	42	37	44	45	11	36	46	54	11	22	18	12	12	9	9
司厨部員	18	12	11	10	25	11	3	11	17	9	3	7	5	4	4	3	3
部員合計	72	49	53	47	69	56	14	47	63	63	14	29	23	16	16	12	12
乗組員総計	86	65	65	63	85	69	20	60	77	75	21	45	35	26	26	22	21
調査年	1942	1944	1944	1963	1942	1943	1944	1944	1944	1947	1956	1963	1963	1969	1973	1979	1979
																1982	1984
																	1984

注1. G～Kは戦時標準型船。注2. 主機関のRはレシプロ、Bは兼玉
Dはディーゼル、Tはタービン。注3. 船種のコンはコンテナの略
注4. Q丸は混乗船で（）内はフィリピン人の数、他は日本人

職業評価の方法に関する研究

MICRO-TOWERワークサンプルについて(3)

吉 光 清
(国立職業リハビリテーションセンター)

目的： 我が国での利用を図るためにMICRO-TOWERワークサンプルシステムの実用試案を作成し、これを実施して得られた結果について基礎的な分析を行ってきたが、ここでは各課題作業成績間の相関マトリックスを因子分析した結果から見たシステムの構造、および各課題作業成績と労働省編一般職業適性検査(GATB)の各性能点との関連から見た妥当性について検討する。

方法： 1課題 システムに含まれる13種の課題作業の構成と内容を第1表に示した。

2被験者 国立職業リハビリテーションセンター入所希望者105名(肢体障害者)。

3手続き マニュアルに従い、3～6名のグループ単位で、1日に数種目ずつ、数日にわたって実施した。種々の事情から全被験者にすべての種目を実施することはできなかった。GATBの結果は主として外部資料によった。

結果と考察： 各作業成績から13×13の相関マトリックスを求め、主成分分析を行い、得られた因子

をバリマックス回転させ因子構造を求めた結果を第2表に示した。因子数4での回転では第4因子の寄与率が低くなるので因子数3で回転させたものである。これらの因子は職業能力を構成する、個人の基礎的能力のまとまりを意味すると思われる。第1因子は事務的能力課題、数的能力課題、言語能力課題に高い負荷を示しており、総合、判断の源となる知的能力の因子と考えられる。第2因子は運動神経能力課題や事務的能力課題の一部に高い負荷を示し、手腕の運動能力を意味すると考えられる。第3因子は空間知覚能力課題や事務的能力課題に負荷し知覚の速さ、正確さを意味すると解されよう。これらの結果から、本システムは5つの職業能力領域に課題を設定しているが、測定される適性は主として3つの基礎的能力の組合わせによって成り立っていると考えることができよう。

次に、各課題の成績とGATBの各性能点との相関を調べたものが第3表である。主な関連はG、V性能と事務的課題6、7、数的課題11、言語課題13の間、N性能と数的課題11の間、Q性能と事務的課題6、7、数的課題11の間、P性能と事務的課題7、数的課題11の間、K、F、M性能と運動神経的課題1、2、3の間に見られる。従って、S性能を除く各性能では設定された課題との間に十分な関連が認められると言えよう。S性能における問題は空間知覚能力課題が個人差を十分に反映しないことが原因と考えられる。

今後は更に検討を進め、これらの関連を整理し尺度を整備することにより、GATBが測定しようとする適性を本システムによって行うことも可能になるとと思われる。

そうなれば、GATBの実施が適切でない障害者への適用、を始めとする様々な利用に道を開くことになると思われる。

第1表 課題作業の構成と内容

課題作業	領域	作業内容
No1 蓋しめと箱づめ	運神	ポリビンに蓋をし箱づめ。
No2 コネクタ組立て		電子接続端子のピン部分の組立て。
No3 電線の接続	動経	ドライバ、ワイヤストリッパーでの作業。
No4 図面の理解	空知	三角法の図面を読み物体の寸法を記入。
No5 グラフ・イラスト	間覚	T定規、三角定規、コンパスを使って作図。
No6 郵便番号調べ	事	郵便番号簿で郵便番号を調べ記入。
No7 在庫記録の照合	務知	在庫記録の誤りを照合して訂正。
No8 ファイリング	的	アルファベット混じりのコードによる分類。
No9 郵便物仕分	覚	宛先による郵便物の仕分。
No10 釣銭計算	数知	売上票から暗算で釣銭を出す。
No11 賃金計算	的覚	勤務記録から給料等の計算。
No12 求人広告の理解	言	広告文を見て求人条件の質問に回答。
No13 伝言の受取	語	電話テープを聞き伝言メモを作成。

第2表 因子構造

課題	因子1	因子2	因子3
No1		892	
No2		898	
No3		828	
No4			818
No5			503
No6	740	364	380
No7	699	473	
No8	458		586
No9			817
No10	677		
No11	642		508
No12	612		340
No13	512	366	537
寄与率	3.063	3.029	2.894

小数点省略 . 3未満省略

第3表 GATB性能点との相関

適性	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
G	307	375	500	520	397	710	684	651	617	551	785	473	763
V	324	411	456	462	329	719	676	650	662	475	759	522	714
N	387	308	415	539	333	694	668	615	521	642	852	431	657
Q	401	398	419	454	348	740	736	590	654	480	742	531	579
S	395	420	456	584	498	579	596	559	484	548	639		636
P	444	502	423	490	430	583	647	515	477	421	627	359	426
K	694	703	634	393		619	728	421	551		660		510
F	789	776	690		307	494	501	311	434		461		349
M	826	864	689			453	581		373		427		412

小数点省略 . 3未満省略

速度見越反応検査の動揺度

吉田 信 彌
(東北学院大学 教養部)

速度見越反応検査では、本試行5～10回の見越反応時間(ART)の平均値とその動揺度をもとに判定がなされるが、主たる指標は平均値の方で、動揺度は副次的な扱いしかされない傾向があった。しかし、動揺度は初期の調査によればARTとともに事故者・無事故者群を弁別する指標であった。動揺度の指標には、変動係数C.V.(標準偏差/平均)が用いられる場合と計算を簡略化するために範囲R(最大値-最小値)が用いられる場合とがあるが、事故者群のC.V.は大きく、20以上に傾いていた。ARTの短い尚早反応については、これまでに相当の研究蓄積があるが、動揺度に関しては余り深い考察がされてこなかった。ここでは、この動揺度の生じる原因を考察し、その意味を検討してみることとする。動揺の原因を環境に求めることも可能だが、事故者・無事故者群を分けるような動揺要因は被検者の側に求められてしめるべきである。今回は被検者要因についてやや立ち入って考察していく。

(1)構文の要因——被検者の姿勢や光点等をみる角度が試行毎に必ずしも一定しているとは限らない。光点や黒壁部を追従する目や頭部の動きが試行によって異なるのが肉眼でも容易に観察されるケースがある。このような構文の要因は動揺の一因となりうる。

(2)知覚の要因——移動する光点の速度知覚はARTの規定因のひとつだが、その速度ははたして一様に知覚されるのだろうか。試行によって光点の速度が違ったと報告する被検者は少数であるが、報告はあくまで自発的なもので、数の少なさは検査者の方から直接に問いかけることを決してしないことにもよる。

検査パネルを使って速度を継時的に比較させる弁別関の判定実験では、同じ速度が提示されることがある。その場合等しいと判断されたのは58.9%。他はどちらかを速いとするわけだが、後発刺激の方を速いとするのが25.6%、逆は15.6%。

試行間で大凡は等速と知覚されるようだが、速度が一様に知覚されない場合があるのは事実である。

(3)反応の要因——単純反応でも動揺は存在するので見越知覚が一定していてもARTに多少の変動が出るのは当然といえる。

反応の形態を変えるとき、例えばキイ押しと口答では両者のARTの相関は、.917だが、動揺度Rは.223

と低い。同じキイ押しで追視条件と凝視条件ではARTの相関は.736、Rは.542。動揺度はARTほど個人内一貫性はなく、反応の形態を変えればその関連性は薄くなるといえる。

以上の3種は極部的ではあるが、見越反応に必ず付随する要因といえる。見越反応全体としてはどの程度の動揺が生じるのだろうか。9種の速度でARTを求めたときの条件でもC.V.の平均は12前後であった。この程度までの動揺はARTにとって最低限許容される必然的なものと考えてよいであろう。

(4)方略の要因——特殊例だが、反応の仕方(方略)を途中で変える被検者がある。目で追っていたのを数で数える等である。初期の研究ではカンニング系列を用いてもARTに余り差はないとされていた。方略の途中変更でARTがどの程度変動するかは、なお検討中ではあるが、極端な変動は現れないようである。

上述の諸要因が拡大し動揺度が大きくなったとき、事故に結びつき易い何かが生じるのだろうか。動揺度の大きさは見越反応に関わるある系の働きや安定性の欠如を意味するのだろうか。動揺のし易さというような特性を想定するのは、動揺度間の相関の低さからみても難しいようだ。そこで、事故に結びつくような動揺度は上述の要因の拡大延長上に求めるより、同じ様に事故を予見する尚早反応と近似の機構を求めることが有効と思われた。

(5)尚早要因——尚早反応は認知に先立って動作が優先する、すなわち本人の認知基準より早くキイを押すという認知-動作の均衡のくずれを意味すると解釈される。その現れが平均ARTの短さである。しかしその均衡のくずれ、尚早化の例えは全試行にではなく、1・2回しか現れないときは、ARTの平均は尚早反応の域に入らないで、ただ尚早化の分だけ動揺度が増すことが考えられる。このような動揺度大のケースは、尚早反応に近似する準尚早反応といえる。ただART平均で尚早反応とされるケースより尚早化の顕現の頻度が稀少なのである。従って、動揺度という指標が安定性を欠くこともある程度首肯できる。また、尚早反応者ではC.V.の分母が小さいため、(1)～(3)に由来するような小さな変動でもC.V.は大きくなりからになる点も考慮に入れるべきであろう。

単調作業における覚醒水準の変動—実験室およびフィールドにおける実験の結果

長 塚 康 弘
(新潟大学人文学部)

目的：単調作業およびその作業の遂行に随伴する単調感の問題は古典的な問題であるが、近年においては作業・生産工程の自動化や細分化に伴う作業能率の低下や災害・事故の誘因として研究課題となっている。

本研究の目的は、単調作業遂行時に生じることが予想される覚醒水準の変化を次の2場面において検討することである。

1. 長時間にわたる多様選択反応実験(実験1)
2. 長時間にわたる自動車運転作業(実験2)

これらの単調作業の継続につれて中枢の覚醒水準は低下するものと考えられるが、その結果としての「刺激の知覚・識別・判断・処理・反応の遂行」という情報の収集・処理・反応の遅れを1. においては選択反応時間の遅れとして、また2. においては運転操作の遅れあるいは誤りの発生としてとらえることができると規定した。2. ではさらに、眠気の発生も予想されるほか、付随的に実施される視覚系心理機能検査の成績にも変化が現れるものと規定した。

実験1 方法：単調度を選択反応刺激の提示時間間隔の長さによって操作する実験である。時間間隔(ISI)は3, 6, 9, 12, 15および18 Sec. の6条件である。「ISIが長いほど単調度は高まるので被験者(S)の単調感も増し、覚醒水準の低下により反応時間は遅延するであろう」という作業仮説による。実験はISI 6条件を前・後半の2回に分けて実施した。いずれの場合も他の被験者同数を含む2要因計画の一部として行われたものである。SSは前半で15名、後半で12名であった。実験場面はSの前方1.1mの刺激提示板(82×84cm)中央の円孔に青、黄、赤3刺激(同回数30回を周期としてランダムに提示し、右手、左手または右足キの一つを押して反応させるもの。ISI 3条件を全SSが試行したが、試行順序は相殺された。前半では各条件を15分ずつ、後半では20分ずつ試行。従って試行回数は3S条件では301回、6Sで151回、9Sで101回、12Sで101回、15Sで81回、18Sで68回となった。ISIおよび提示順序はタイムプログラマーにより、反応時間の測定・記録はマルチユニットシステム(竹井製)により制御した。約1時間の試行中には1分ずつの休憩が2回とらした。「できるだけすばやく、且つ正確に反応せよ」と教示。最初だけ「用意」と合図をした。

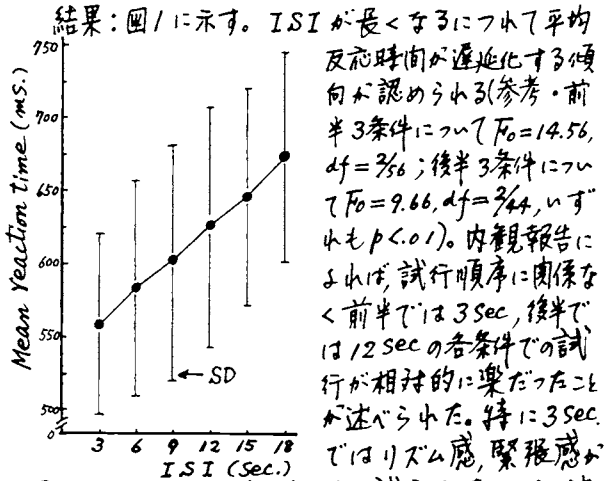


図1. ISI 6条件下の反応時間

実験2 方法：長時間運転を単調作業例としてとりあげ、次の3走行実験を行った。被験者は報告者/1. 新潟⇔水戸間(R49-4-118km 約346Km, 約10時間) 2. 新潟⇔山形間(R7-113-13km 約170Km, 約7時間) 3. 山形⇔仙台間(R286km 約70Km, 往復約6時間) 名で単独運転である(上記のうち、2,3は積雪時走行)。何れの場合にも自己観察記録とCFRおよび仮現運動可視値の測定を行った(後者については44回(1997)論表参照)。

結果：3実験結果のうち、紙面の都合により、2,3の結果

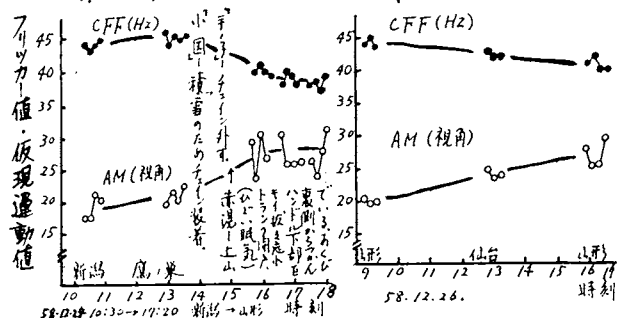


図2. 走行実験2の結果 図3. 走行実験3の結果

結果を図2, 図3に示す。時間経過に伴う眠気の発生と覚醒水準の低下を示すものと思われる運転随伴動作の変化と視覚系心理機能検査結果の変動がみられる。

限定波長域下作業と視覚系負担

三戸秀樹

(近畿大学・医学部)

種々の労働現場の中へ、普遍的に導入されつつあるコンピュータ関連作業の1つにVDT(Visual Display Terminal)作業がある。本作業は、CRT(Cathode Ray Tube)ディスプレイを見ながらの打鍵作業を主体とし、作業効率をあげるため、鍵盤を見ないで打鍵するタッチ・システムと称する打鍵方法を採用する場合が多い。このためCRTディスプレイを見る凝視時間が一層長くなる傾向がある。また、現在、使用されているCRTディスプレイの多くは、緑色のものが多い。いうなれば、単色光を見続ける要素を多く含む作業となっている。

一方、このCRTディスプレイの表示方法として、これまで暗い背景に明るい文字の陰画表示が多用されてきた。しかしながら、CRTディスプレイに置きかえられる以前の多くの紙資料を主体とした表示は、明るい背景に暗い文字の陽画表示であった。陽画表示と陰画表示中のCRTディスプレイを交互に見ながらのVDT作業は、表示面の輝度の変化幅が大きく、視線移動ごとに、目の明るさに対する順応は、明順応から暗順応、あるいは暗順応から明順応へと変化しなければならず、負担が大きくなるといわれている。本研究では、このVDT作業における、陽画、陰画表示方式の生体に対する負担から、その適否の検討を試みた。

【方法】 スタンド・アローン型パーソナルコンピュータ(シャープKK製、MZ-80B)を用いた。CRTディスプレイは縦127mm×横178mmで緑色の表示であった。陽画表示課題と陰画表示課題を、日を改めて同一被験者に各1時間課題実行させた。課題は、1行にランダムな文字30文字からなる行が、24列ならび、最上行左より、点滅カーソルの右隣りの表示文字を、キイ・ボードより打鍵することにより抹消してゆく課題であった。なお、このアルファベット1文字の大きさは、縦3.5mm×横3mmであり、陽画、陰画表示の実施順序はランダムであった。また、CRTディスプレイの輝度は、各被験者の実行しやすい主観的最適輝度であり、キイ・ボード上照度は400lxとした。測定項目は(1)色彩桿深径覚測定、(2)焦点調節時間測定、(3)近点

距離測定、(4)視力検査であった。被験者は、平均年齢30.0歳の男子2名、女子2名、計4名、延べ人数8名であった。

【結果および考察】 色彩桿深径覚に関しては、陽画表示において、課題遂行直後に緑色の一層の進出効果が見られた。陰画表示においては、逆に前値からの後退効果が見られた。赤色に関しては、陽画表示の前値、直後値間の有意差はみられなかったが、陰画表示では前値における進出効果が、直後測定において逆に後退効果となって現われた。他の白色、黒色桿については、前値、直後値間に差は見られなかった。焦点調節時間においては、陰画表示の直後値における遠点調節時間の顕著な遅延が認められた。なお、近点距離、ならびに視力検査測定において、特記すべき差は認められなかった。

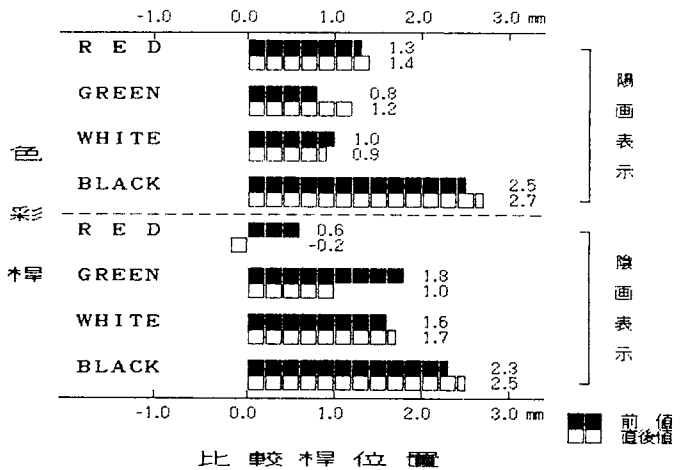


図1. 色彩桿深径覚測定

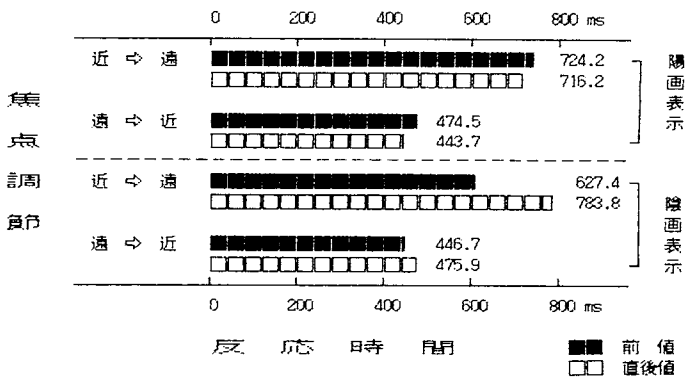


図2. 焦点調節時間測定

情報システム化における人間関係

—— 情報化による人間への影響問題、そのプラス及びマイナスイメージの考察 ——
北見工業大学 重本 直利

(一) 目的及び方法

ここで取りあげるプラス及びマイナスイメージは、情報化が人間におよぼす影響問題を表わす。私はこの点を手がかりとして情報システム（以下D.S.）化がもたらす人間関係の新たな今日的性格を本稿において考察する。今日の情報化は、人間への影響問題をこの相反する両イメージをも、て構成するところにその構造的特徴がある。従、てここで問題としたいのは、この両イメージが互いにどのように関連しあ、て人間関係及び個人を把握するかという点である。勿論、主に技術上の変化がもたらす人間への影響は、これまでにおいても相反するイメージでも、て捉えられてきたと言える。しかし情報化はかつての変化にくらべて、より人間の精神性、意識性に関わ、ているが故に、相反するイメージそれ自身が人間への影響問題を論ずる時、重要な論点を具備していると言える。

(二) 対象

本稿で対象を人間関係とおいたのは、人間への影響問題が表われるのは、技術上の性格にそれが直接規定されるのではなく、その性格に適合的に機能する人間関係に媒介せられることを特徴とするからである。従、てこの人間関係を技術変化によ、てもたらされるシステムの側面から捉えることとし、本稿考察の対象とした。その際、問題の性格を明らかにするため、比較の対象としてフォードシステム（以下F.S.）と補充した。

(三) 考察

(1)、マイナスイメージを一般的にあげると次のようになる。「受動」、「拘束」、「一面性」、「硬直性」そして「同質の集団性」（「非個性性」）である。これに対してプラスイメージは、「能動」、「自由」、「多様性」、「柔軟性」そして「個性性」（「異質な集団性」）である。今日、F.S.は前者のマイナスイメージのものとして捉えうるに對し、D.S.は後者のプラスイメージとして捉えうる。このことの背景は次のような一般的認識があることによ、ている。つまりF.S.はシステムが人間を「道具」として扱ひ、他方D.S.は個人がシステムを「道具」として扱うという認識であり、この場合前者はF.S.に規定された人間関係における個人、後者は個人の集合としての人間の関係に規定され

たD.S.として捉えられる。この原因はF.S.のシステムが直接個々人の人間の同質性を要求しているのに対して、D.S.のシステムが直接要求するのは人間の同質的關係である、て個人においてではないということにある。ここでは關係の同質性と個人の異質性の調和をプラスイメージの内容と考えることができる。(2)、D.S.化においては「システム中心から人間中心へ」移行するという主張がよくなされるが、この時システムが要求する人間關係の同質の内容が問題とならざるをえない。この人間關係の同質がはたして「人間中心へ」移行しうるかどうかが、つまり人間がこのシステムを利用しうるには、人間關係の同質性と「人間中心」の内容とが適合的なものであるか否かににかか、ている。つまり人間がD.S.を利用するということは、そこにおいて構成されている人間關係を利用することになる。この時間問題となるのは、人間の個性性と人間關係の同質性は矛盾しないか否かという点である。(3)、この同質的人間關係とは、D.S.の内容を表わすから、個人が後者を利用するが、前者は利用しないということは基本的にありえない。個人とD.S.において前者が後者を利用するということは現実的に可能であり、それを「人間中心の思考」としてプラスイメージをいおくことになる。更に同質的な人間關係を（自らもその一部分である）異質な個性的な人間が利用するためには、人間關係の同質性と、その下での人間の異質性とを区別しなければならぬと同時に関連づけねばならない。

(四) 結論

両イメージは、それぞれD.S.化における人間關係の一面のみを捉えたものにすぎない。そのいずれもが個人とD.S.の論理の区別を前提とした上でのその關係性のイメージである。それ故この相反するイメージを同時に現実的に我々がもつということそれ自体の内に、人間關係形成の新しい課題が表われている。つまり今日提起されている課題は、人間の異質性、個性性をみとめる人間關係の同質性、集団性が、現在進行しているD.S.化において可能なかどうかである。従、て今日のD.S.化における人間への影響問題の課題は、同質的異質性、異質的同質性の人間關係を築くことである。またプラス及びマイナスイメージの対立もこうした現役態に規定されている。

中小製造業における中高年齢者 女子労働者 高学歴者の採用実態に関する一考察

高石 光一

(中小企業事業団中小企業研究所)

1. 目的 高齢化・高学歴化及び女子労働者の増加の進みつつある中小企業において 中高年齢者、女子労働者、高学歴者についての採用状況、採用・不採用理由を考察する。本調査では、従業員数及び事業所数において占める割合の比較的大きい製造業を対象とし、中小企業と大企業との雇用情勢の相違も併せて検討する。

2. 方法

i) 調査方法 金属製品、電気機械器具、食料品等の製造業を対象に調査票を郵送するナイル・サーベイを行った。返送された調査票のうち、有効回答数は2930(中小企業 2539, 大企業 391)であった。

ii) 調査内容 中高年齢者、女子労働者、高学歴者のそれぞれを過去3年間に採用したかどうか、及びその採用・不採用理由を質問した。採用・不採用理由は以下のように積極的・消極的な意図のあるものに類別される。

a. 積極的採用理由; 能力・態度・感性やその他の属性と職務との適合性を認め、対象とする人材を活用する意図のあるもの(e.g. 仕事に慎重で責任感がある等)。

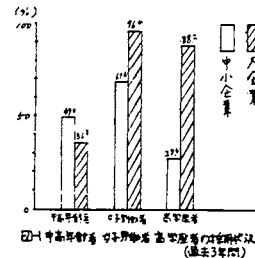
b. 消極的採用理由; 職務と属性との適合性を考慮した人材の活用を意図しない。または特に理由がなく対象とする人材を採用するもの(e.g. 親企業から頼まれた等)。

c. 積極的不採用理由; 能力・態度・感性やその他の属性と職務との不適合性を認め、対象とする人材を不採用とするもの(e.g. 欠勤が多い等)。

d. 消極的不採用理由; 職務と属性との不適合性を考慮せず、または特に理由がなく対象とする人材を不採用とするもの(e.g. 質の良い中高年齢者がいなかった等)。

3. 結果 過去3年間に製造業において 中高年齢者、女子労働者、高学歴者を採用した企業の割合は図-1に示すとおりである。中小企業の場合、女子労働者、中高年齢者、高学歴者の順に採用される割合が大きくなっていったが、大企業では、女子労働者、高学歴者、中高年齢者の順であった。また、女子労働者、高学歴者を採用した割合は大企業が中小企業を上まわっていたが、中高年齢者については、この関係は逆で

全体の約半数の中小企業が中高年齢者を採用したのに対し、大企業では3分の1強であった。採用・不採用



理由の割合は図-2に示される。中小企業・大企業のいずれにおいても高学歴者の採用には、ほとんどの企業が積極的な理由を示し、採用しなかった企業においても積極的不採用理由をもつもの

は5%以内であった。このことは高学歴者の職務遂行に関する高い信頼として理解される。反面、中高年齢者、女子労働者を積極的な理由から採用した企業は50%にも満たず、積極的理由から採用しなかったとする企業の割合も、高学歴者の場合よりも大きい。よって中高年齢者、女子労働者の採用に対して、その能力・態度等を十分意図していない、または理由がなく曖昧な考えの基に行なわれていると思われる。図-1、図-2から、中小企業と大企業の採用・不採用理由の割合が中高年齢者、女子労働者、高学歴者の各々において似た傾向を示すのにも

中高年齢者 (割合 %)		女子労働者の採用 (割合 %)	
中小企業	積極的採用 45.8	積極的採用 47.5	
大企業	積極的採用 59.2	積極的採用 42.5	
	消極的採用 54.2	消極的採用 57.5	
女子労働者 (割合 %)		消極的採用 52.5	消極的採用 57.5
中小企業	積極的採用 44.3	積極的採用 55.7	
大企業	積極的採用 55.7	積極的採用 44.3	
高学歴者 (割合 %)		積極的採用 37.7	積極的採用 55.7
中小企業	積極的採用 37.7	積極的採用 55.7	
大企業	積極的採用 55.7	積極的採用 37.7	

図-2 中高年齢者、女子労働者、高学歴者の採用・不採用理由

がかわらず、実際の採用パターンは異なっていることがわかる。これは、中高年齢化が進む中で若年高学歴者の有効活用を図りつつも、その採用が困難であり中高年齢者の採用に依存している中小企業の実状であると考えられる。

4. 結論 中小企業の企業活動においては人的資源の果たす役割が大きく、人材の確保と養成は重要な課題である。しかし、以上に述べたように中小企業が人材資源の有効活用を図るには、解決されるべき問題が残っている。労働条件・労働環境の改善による高学歴者受入れ体制の向上、中高年齢者・女子労働者などの労働力に対する特質を適切に評価した上での個人の能力や仕事の内容に応じた有効活用方法を講ずる等の必要性がある。

高年齢求職者の職業経歴と職業観

長縄久生
(雇用職業総合研究所)

高年齢者の職業適応をはかるために、その職業観を把握するとともに、彼等が長い職業生活を通じて身につけた職業的適応行動特性を職業経歴との対応の上で明らかにすることを目的とする。

方法

東京都内の公共職業安定所に来所した満55歳以上の男子求職者に個別面接し、以下の項目について回答を求めた。

- 1) 一般的個人属性(生年月日、学歴、家庭状況、経済状況等)
- 2) 職業経歴(入退職動機、職務内容、職務遂行上の特徴等)
- 3) 人生の評価(これまでの人生でよかったこと、悪かったこと、やりほおしたいこと等)
- 4) 職業観(働く目的、これから働きたいか否か、その理由と希望職種等)

対象者は50代(1924年以降生れ)22名、60代(1914年～1923年生れ)18名、70代(1913年以前生れ)10名の計50名で、最高齢は1905年生れの77歳であった。

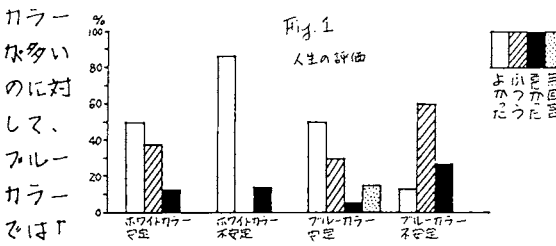
結果

最も長く在職した職種をもとに、経歴全体も参考にして対象者を主としてホワイトカラー職種を経験してきた者とブルーカラー職種を経験してきた者とに分ける。さらに、初職から最終職までの全在職年数で最長職在職年数を除して安定度の指標とし、50%以上を安定群、以下を不安定群とする。以下、回答結果はこの分類にしたがって分析される。

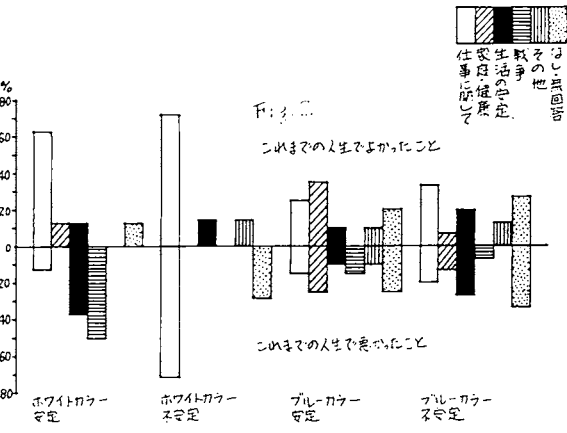
Tab. 対象者の属性別うちわけ

	安定	不安定	合計
ホワイトカラー	8	7	15
ブルーカラー	20	15	35
合計	28	22	50

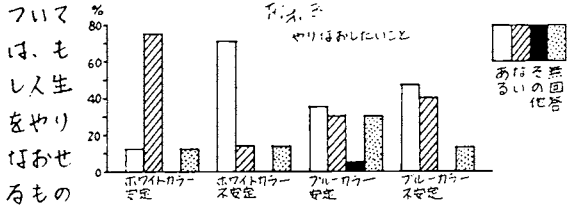
これまでの人生は「よかった」と評価するホワイト



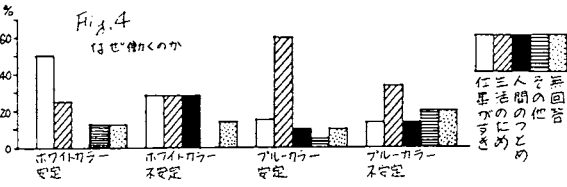
なつう」と考えている者が多い(Fig. 1)。それは、ホワイトカラーでは仕事に対する満足感が強いのに対し



て、ブルーカラーでは家庭生活や経済的安定が世間並だという認識が評価のもとになっているからだと考えられる(Fig. 2)。しかし、ホワイトカラー不安定群につ



いては、もし人生をやりほおせるものならば、という気持ちがあることから(Fig. 3)、「よかった」と答えながらも、必ずしも自己の人生に満足しているわけではないことがうかがわれる。職種の違いは学歴に対応しており、ブルーカラーには学歴さえあればという気持ちとこんなものだというあきらめに似



感情が相半ばしている。いかにしても、ホワイトカラーは仕事に対する自我関与が強く、「仕事があきだから働く」「仕事は生きない」という回答が多い(Fig. 4)。ほとんどの者がこれからも働きたいと考えており、それは生活のためでもあるが、健康のためでもある。その際、これまで安定した職業生活を送ってきた者は経験のある職業にこだわる傾向が強い。

中高年者のモラル

○ 今井 保次
(日本生産性本部)

内藤 哲雄
(立正大学)

1. 目的

企業内における中高年層の増大が問題視されている。ポスト不足、定年延長、賃金コストの増大、健康管理、専門職制度など中高年者を取り巻く問題は様々である。そこである企業を取り上げ、そこでの彼等がどのような意識であるかを調査したものである。

2. 方法

表1. に示す質問項目の他、計151項目に4件法で回答を求め、1から4点を与え、男女別・年齢別に集計を行った。

被調査者：ある大手流通業の35歳から54歳までの男性480名（40歳以下209名、41-45歳157名、46-50歳71名、51歳以上43名）女性159名（40歳以下57名、41-45歳60名、46-50歳36名、51歳以上6名）。ただし女性51歳以上は少数のため分析より省略。

3. 結果および考察

151項目中、一般性があり興味深くかつ有意差の見られるもののうちから5項目を表1. に挙げ、検定結果を示した。

定年については男性の方が関心が高く、その関心の

深まりも年齢とともに急激である。しかし40代後半からはそれほどの変化は見られない。

年齢とともに活力の低下が心配されるところだが、男女とも年齢による有意な差は見られない。しかし男女においては男性の方が活力は上である。

専門職としてやっていく自信は、年齢とともに増していることが男女ともにいえる。自信がないという点では40歳以下の女性が著しい。

男性がプライドより実質的な賃金の方を重要視するというのは意外である。しかも高年齢になるほどこの傾向は顕著になっている。男性の方が生活のために働いているといえよう。

定年延長による人事の停滞を心配するのは、男性の場合は40歳以下である。そして高年齢になるにしたがってより女性の方が停滞を心配ようになる。

また定年延長が高齢者の勤労意欲に寄与するかどうかという問には、男女、年齢に差は無いが、ひとつだけ男性の46-50歳が勤労意欲の向上になることを強く主張している。これは彼等が定年延長の恩恵を最もうける年齢だからではないか。つまり、まるまる5年の延長は彼等から始まると考えられるからである。

表1. 男女別・年齢別分析 平均値と標準偏差 () 内: 標準偏差

質問項目	男					女			
		40以下	41-45	46-50	51-55		40以下	41-45	46-50
自分自身の定年について真剣に考えたことがありますか。 1よく 2ときどき 3あまりない 4ない		2.51 (.78)	2.29 (.74)	1.97 (.69)	1.86 (.77)		2.93 (.72)	2.35 (.88)	2.22 (.89)
高齢になっても仕事はバリバリできると思いますか。 1できる 2ある程度できる 3あまりできない 4できない		1.70 (.59)	1.70 (.59)	1.67 (.55)	1.58 (.69)		1.93 (.53)	1.88 (.52)	1.94 (.58)
あなたは現在専門職としての能力があると思いますか。 1十分ある 2かなりある 3やや不足 4不足している		2.04 (.70)	1.82 (.69)	1.83 (.69)	1.76 (.84)		2.40 (.75)	2.00 (.90)	1.94 (.98)
高齢者の賃金と仕事についてどう思いますか。 1賃金よりプライドのもてる仕事 2どちらかといえばプライド 3どちらかといえば賃金 4プライドのもてる仕事より賃金		2.63 (.87)	2.51 (.93)	2.78 (.77)	2.86 (.86)		2.29 (.84)	2.23 (.74)	2.13 (.83)
定年延長が実施された場合人事の停滞が起こると思いますか。 1必ず起こる 2ある程度起こる 3あまり起こらない 4起こらない		2.34 (.78)	2.51 (.77)	2.62 (.74)	2.62 (.78)		2.40 (.70)	2.35 (.79)	2.16 (.65)
定年延長は高齢者の勤労意欲にどう影響すると思いますか。 1意欲向上に役立つ 2やや役立つ 3あまり役立たない 4役立たない		1.65 (.69)	1.61 (.71)	1.40 (.64)	1.51 (.73)		1.66 (.60)	1.58 (.67)	1.63 (.96)

有意差有り (P<.05)

男41-45 と女40以下を除く

新商品造出にかかわる要因の分析

森下 高 治
(相愛大学人文学部)

目的：新商品の造出は、企業発展・成長にとって不可欠であるが、今日の低成長期のなかでは、特に研究開発の効果をあげることが強く要請される。本研究は、いかなる要因が商品開発の成功・不成功(達成レベル)と関係があるのか、A社総合研究所での試みを紹介する。

方法：質問紙による方法として、商品開発において考えられる内的・外的な事柄—開発テーマそのもの、部内・関係部署との意志疎通、仕事の流れ、担当者などの人的資質等—を51項目用意した。回答は、当該テーマについての判断を7件法にて求めた。また、個々のテーマの達成レベルは、①中断から⑥ヒット商品までの6つの選択肢から達成の程度を尋ねた。

調査期日は1983年11月。調査件数は78年から82年までの1,501件、分析対象件数1,091件。なお、調査票の記入は当該テーマのテーマ責任者を対象とした。

結果と考察：1. 因子分析による要因の抽出およびテーマ達成レベルと各因子の相関分析について

51項目の変数を用いて、商品化にかかわる要因を主因子法—バリマックス回転による因子分析にて求めた。その結果、Ⅰ因子リーダーの指導性と担当者の因子、Ⅱ市場調査の因子、Ⅲ関係部署との連携の因子、Ⅳテーマにかかわる因子、Ⅴスキルアップの因子、Ⅵ技術蓄積の因子、Ⅶ商品化の困難さの因子、Ⅷ開発戦略の因子の計8因子が抽出できた。

次に、テーマの達成レベルと各因子が果して関係があるかをみるため両者間の相関係数を算出した。テーマにより多少の違いはあるが、表から研究所とテーマに関連する関係部署との連携の因子、技術蓄積に関する因子、開発にかかわる戦略の因子が比較的相関が高く認められた。

Tab.1 因子得点とテーマ達成レベルの相関係数 ** $p < .01$ * $p < .05$

全テーマ N=109	リーダーと担当者	市場調査	関係部署	Ⅳテーマ
	.126	.154	-.525**	-.026
	Ⅴスキルアップ	Ⅵ技術蓄積	Ⅶ商品化の困難さ	Ⅷ開発戦略
	-.087	-.282**	.074	.189*

2. テーマ達成レベルと各因子の重回帰分析について
そこで、今度は各因子のテーマ達成レベルに対する寄与率を求めるため重回帰分析を行った。これら8因子のなかには因子が小さいものがあるために変数増減

法により変数選択を行うとⅢ、Ⅳ、Ⅴ因子が選択された。

$$Y = 4.06 + .086 \cdot F_1 + .246 \cdot F_2 - .676 \cdot F_3 - .076 \cdot F_4 \\ (-.077) \quad (.218) \quad (-.610) \quad (-.063) \\ - .107 \cdot F_5 - .580 \cdot F_6 + .043 \cdot F_7 + .148 \cdot F_8 \\ (-.087) \quad (-.474) \quad (.035) \quad (.121)$$

$$R = .852$$

() : 標準偏回帰係数
 $F_1 \sim F_8$: 因子得点
R : 重相関係数

従って、これら3因子だけの重相関係数を求めると、 $R = .834$ となり、3因子で十分説明できることが明らかになった。

$$Y = 4.05 + .241 \cdot F_2 - .701 \cdot F_3 - .584 \cdot F_6 \\ (.213) \quad (-.632) \quad (-.478)$$

3. 判別分析によるテーマ進捗度評価式の検討
商品化未達成テーマと達成テーマがどれだけ識別できるかについて、3因子を用いた判別関数を求めたところ、

$$\text{評価値} ; U \\ U = -.0213 \cdot F_2 + .0377 \cdot F_3 + .0340 \cdot F_6$$

$$J = 6.81 \quad D: \text{マハラノビス汎距離}$$

テーマ数	平均	標準偏差
未達成テーマ 30	.0506	.0411
達成テーマ 48	-.0389	.0294

これを既存テーマについて確認してみると、図の通りになった。この結果、両群の重なり部分は小さく識別が可能であることが確認できた。

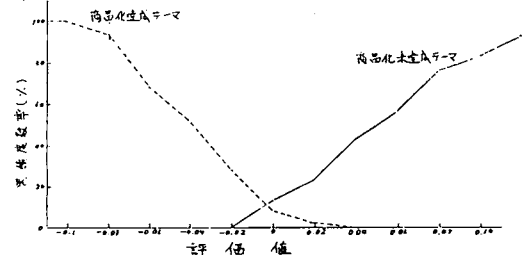


Fig.1 既存テーマの評価値分布

以上から、求められた進捗度評価式は、テーマの位置づけの明確化、中間での商品化の程度を測定するのに有効であり、それは、また未達成テーマの改善の方向性を知ることにもなる。

産業心理学に関する二三の問題

清 宮 栄 一

(国際商科大学教養学部)

1. すべての学問は、人類の幸世のために存在している。心理学もその例外ではない。とくに、応用心理学においては、そうである。産業心理学に関する限り、その過去の業績は、すべてそうであったであろうか。

人類は、価値の設定、追求、実現に生きる存在である。人間を研究対象とする心理学は、これを忘れてはならない。哲学から離れ、自然科学的方法論を選択して以来、心理学は、実存在としての人間を忘れたのではなからうか。

多くの現代人は、経済的成長に価値を設定し、効率や利潤追求、便利さを求めている。これを全面的に否定することは誤りであろうか、現代のひずみがここに根ざしていることは、事実であろう。人間は、ある程度、物質的基盤が築かれれば、自主、自律的に精神的価値を求めていく存在である。教育哲学、法哲学、教理哲学などがあるのは、当然といえる。然るに、最も人間的であるはずの心理学に、心理哲学がないのは、なぜなのだろうか。

2. 従来、産業心理学は、主として、第二次、第三次産業、しかも大企業に関するものを対象としてきたように思われる。就労者の過半数を占めている中小企業は、ほとんど対象外にあった。この事実から、産業心理学が志向していた目標と内容が推定されよう。

近未来、第二次産業がどうなるかは、資源、エネルギーの有限性、産業廃棄物の蓄積や公害を考えれば、エントロピーやエコロジーの概念を導入しなくても、容易に推定できよう。

現代文明の大量生産、大量消費は、人類の未来に幸世をもたらすであろうか。

産業心理学が、意識的にしろ、無意識的にしろ、大企業に眼を向けていたことに対して、謙虚に反省すべきときに至ったのではなからうか。

3. 人類存在の基本要因は、必要食糧の自給と清純な環境とである。産業心理学は、第一次産業に対して何をしてきたろうか。第一次産業就労者に対しては、疲労その他の実態を調査しただけではなかつたろうか。

食糧自給率を低くしてしまった日本民族の生存は、危殆にひんしている、といつても過言ではあるまい。

産業心理学というからには、何も第二次、第三次産業のみに対象をしぼる必要は、あるまい。それらを含

め、第一次産業を基盤とした人類にとって望ましい全産業システムの確立に努力することも、産業心理学の役割りではなからうか。広い視野からの産業環境心理学の必要性が痛感される。これには、もちろん学際的接近が不可欠である。

4. 産業心理学の一領域である労働心理学は、就労者が働く喜びをもって、生産活動に従事し得るような要因を解明し、実践していくことを目標としている。しかし、最近、この種の研究は、乏しいように思われる。産業心理学は、当面、次の問題と取り組む必要があると思われる。

(1) 労働組合の問題 企業成長のためには、労使の協調は、必須条件である。しかし、それが極端に走った場合、就労者自身は、どのようになるだろうか。

(2) 熟年者の問題 家庭を犠牲にした單身赴任は、短期的にみれば、本人にとって望ましいこともあるだろうが、長期的にみれば、いや短期的にみても幸せではなからう。企業にとっても必ずしもプラスとのみいえないのではなからうか。

熟年者の自殺、うつ病、ノイローゼ等の問題をどう解決していったらよりのだろうか。

(3) 女子の問題 雇用均等法案をめぐる動向をみると、女子労働に関しては、男女平等論を踏まえて諸々の問題がある。それ以前に、曾ての女工哀史的な状況が現存していることに眼を向けなければならない。女子労働に関しては、各方面からの研究がなされているが、未だしの感がある。

(4) M E 化の問題

(5) 老齡化の問題

5. 産業心理学の原典 Münsterberg, H. は、1913 に、『経済心理学(産業心理学)は、労働と精神とを適合せしめて、もって労働における不満と憂うつと失望とを払拭して、吾々の社会に溢れるばかりの悦びと完全な心の協和とをもたらそうとする。これ以上にすばらしい考えはなりのだ。』(Psychology and Industrial Efficiency, p. 308) といっている。—— 桐原保見監修：最近の産業心理学(1953より引用)

彼の言葉にこそ、産業心理学の原典が存在しているのではなからうか。

W. A. ウィスコップの経済心理学

安 藤 瑞 夫

(国際商科大学 教養学部)

問題意識

古典経済学の体系は、19世紀の前半に構築されたが、その直後から激しい反論が広範囲にわたって展開した。これらの反論に共通な視点は、接近方法が余りにも思弁的で(S. Sismondi)、臨床的、実践的な適合性を欠き(E. Mayo)、社会的、政治的な現実の諸特質を考察の外に放置(E. R. Walker)した点である。正統派の論客(F. H. Knithra)さえも、諸前提に立脚するその理論が抽象的で、内容を欠くものであることを容認している。経済法則は、極めて厳密な論理によって構築されたが、基底に据えられた諸前提は、哲学的、心理学的であり、これに形而上学的、規範的な概念(『Omniscience』、『経済合理性』など)を用いての靜態的な論理構成が加えられたのである。批判を浴びたこれらの前提や概念や方法は、その後の経済学の展開の中でどのような修正を加えられたであろうか。

社会科学の認識にあっては、とりわけ倫理的規範による価値選択がすべりこむ余地は多いとみられるが、こうした価値判断と『価値自由(Wertfrei)』の科学的信条との間ではどのように調和がはかれるのであろうか。

方法論のハ・ラダイム

(1) 心理-文化的接近(Psychocultural Approach):

個人は環境に依存して生計をたて、自尊心の支えとして社会的承認を必要とする。社会の価値態度に反する衝動には、社会から拒絶されることへの不安が伴う。社会-経済思想は、こうした不安を生み出す心理的葛藤(新旧の世界観や倫理システム間の葛藤など。)を沈静させ、相対的に調和のとれた生き方を人びとにもたらす。心理-文化的接近とは、こうした社会-経済思想ともろもろの文化的葛藤状況との相互関係の解明に迫る方法といってよい。

(2) 心理-力動的接近(Psychodynamic Approach):

思想は、無意識のマトリックス(E. Fromm)に組込まれているので、論者自身の自覚を伴わない動機をも考慮にいれなくては、その全体の意味と機能を理解することができない。この隠された潜在的なく

hidden, latent)意味は、前述の調和を生み、不安を除き、葛藤を沈静させる機能につながるものである。

力動的心理学は、人が^{*}意識的に受容している規範によってのみ導かれるものではないことを明らかにしている。規範の体系は内面化され、行為者の自覚を伴うことがなくとも行動を導く。こうした内面化された体系は、今日では多くの学者の認めるところで、ある。

M. Weber:『資本主義の精神』, S. Freud:『上位自我』, A. Kardiner:『基本的人格構造』, R. Linton:『価値態度体系』, E. Fromm:『社会的性格』, R. K. Merton:『価値コンプレックス』, T. Parsons:『経済的価値コンプレックス』。

Weisskopfは、Parsonsと同じく『Economic Value Complex』の概念を用いている。Complex(観念複合体)は本来は対象論の概念であるが、無意識的、規範的な体系として内面化している点を特に強調するために、敢てこの語を用いたとする主張は、彼がneofreudianのひとりであることを物語っている。

労働価値説への接近

労働価値説は、古典経済学にあっては、D. Ricardoにおいて初めて理論的に一貫したが、これに生産関係の歴史的性質の視点を加え、一世紀以上にわたってこの学説を支配的な経済学的ドクトリンの座に乘せたのはK. Marxであった。

肉体労働が理想視された男性中心の社会にあっては、多くの伝統的な象徴言語に即し、労働には男性原理を、土地(生産手段)には女性原理を適用し、労働こそが経済的価値の源泉であり、その測度であるとみることは合理的であった。マルクス自身もヘーゲル研究で磨いた強じんな論理を用い、価値創出要因が労働に限られることを力説している。このように、リカードとマルクスは、ともに男性要因としてとらえている労働をめぐる、『労働価値説』を共有しながら、両極的ともいえる政治的結論に到達した心理-力動的機制はなにか。Weisskopfは、これにエディプスコンプレックスの両面価値の解釈で応えている。

— 略 —

日米管理職行動比較研究【その1】

○花岡 正夫 原 秀安 馬場 昌雄 岡村 一成
(大東文化大学) (日本生産性本部) (日本大学) (富士短期大学)

1. 目的

- ①経営管理制度の元で、日米の管理職がとる行動が、どう分散しているか、また収斂しているかを明確化し、日米管理職の行動特質を明確化する。
- ②管理職行動特質を通して、日本の経営特質の研究に資する。
- ③今後の日米経営の比較研究の方向を探る。

2. 方法

①質問紙法の採用

表・質問の構成
Table Composition of Items

制 度 Management Systems Behavior	経営計画目標 Planning Goal-setting	評 価 Performance Appraisal	能力開発 Training	賃 金 Wages	組織役割 Organizational Roles	そ の 他 Others
リーダーシップ Leadership	Q6, Q11, Q32, Q33	Q1, Q3, Q30		Q25	Q14, Q15, Q28, Q31, Q36	
人 間 関 係 Human Relations			Q21		Q12, Q22	Q24
モチベーション Motivation	Q2		Q29		Q13, Q41	Q19
意思決定 Decision-making	Q5, Q7, Q38, Q39	Q40	Q35, Q37	Q23, Q26	Q10	Q18
コミュニケーション Communication	Q34				Q8, Q9, Q15	
そ の 他 Others		Q17, Q20	Q4			Q27

②調査の実施

米国 31社に対し '83年5月から7月

日本 51社に対し '83年8月から9月

③回収

米国 482件

日本 917件

④集計分析方法

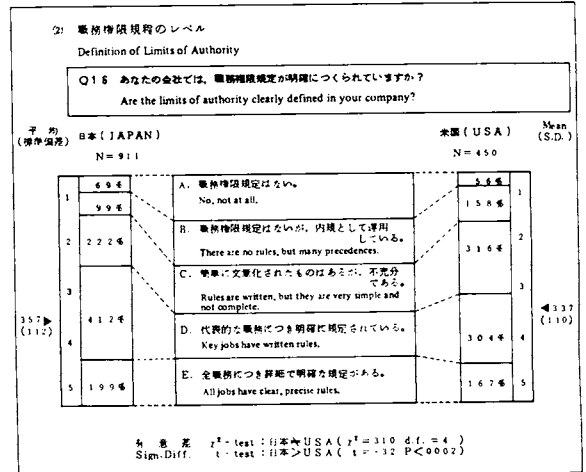
t-検定, χ^2 -検定, 因子分析(主因子法, SMC, バリマックス回転), クラスター分析, 判別分析

⑤結果の分析

米国の大学教授, 企業のスペシャリストとの集計結果の
の討議を加え, 結果分析を行なった。

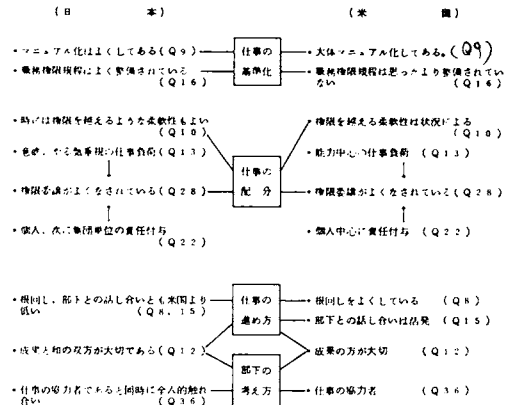
3. 結果

結果について詳細を記述する余裕がないため, 一例として組織役割について掲げ, 以下全体のまとめを記載しておく。



①制度からの分析の一例

5. 組織役割



(注) 日米管理職行動比較研究【その2】へつづく

日米管理職行動比較研究【その2】

○原 秀安 花岡 正夫 馬場 昌雄 岡村 一成
(日本生産性本部) (大東文化大学) (日本大学) (富士短期大学)

②当初に予測した結果と異なる結果となった項目 (注) 日米管理職行動比較研究【1】からのつづき

- ① 日本の方が部下に対する配慮は強いという認識であったが、米国の方が強い。(Q 6 , 11)
- ② 部下の意見の参考度は日本より米国の方が高い。(Q 7)
- ③ 米国の方が昇進、賃金決定に動続要素を加味すべきであるの意見が日本より強い。
(Q 20 , Q 23)
- ④ 米国の方が、部下の将来を考えて異動・昇進させるが日本より多い。(Q 35)
- ⑤ 教育訓練体系は、米国より日本の方が整備されている。(Q 4)
- ⑥ 日本は人間関係を重視すると云われているが、仕事重視の方が強い。(Q 31)
- ⑦ 職務権限規程などルールの記事化は米国より日本の方が高い。(Q 16)
- ⑧ 米国の根回しは日本より高い。(Q 8)
- ⑨ 会社外での交際の必要性を認めているのは日米同じである。(Q 24)
- ⑩ 米国での永年動続希望が日本と同じように高い。(Q 19)
- ⑪ 会社の方針を人生観より優先させたいが日米間に差がない。(Q 27)

③ 日米管理職の特徴比較

制 度	日 本	米 国
経営計画・目標	・上位目標の受容(自己犠牲) ・部下へは押しつけ	・上位目標の受容 ・部下への強い配慮で、結果的には部下に了承させる。
評 価	・動続を評価に結びつける。 ・評価基準は実績中心で努力度加味であるが、日本の方が努力度のウェイトが高い。	・左に同じ ・評価の必要性は米国の方が日本より高い。
能 力 開 発	・長期的内部能力開発 ・教育システムは日本の方が米国より充実 ・異動昇進は組織の必要性により行なう。	・短期業績達成に結びつく教育 ・異動昇進は部下の将来を考えて行なう。
賃 金	・賃金決定権は人事部にある。	・賃金決定に動続要素を加味したい意向が強い。 ・賃金決定権は上長にある。
組 織 役 割	・日本の規程、マニュアルは米国より文庫化されている。	・根回しは、日本よりよく行なわれる。

行 動	日 本	米 国
リーダーシップ モチベーション	・両国とも目標達成のための指導性は共通して高い ・部下への配慮は長期見地からの全人的触れ合い	・話し合い重視による充分な部下への配慮
人 間 関 係	・両国とも和を大切にす ・両国とも社内だけでなく社外での人間関係形成の必要性を認めている	
意 思 決 定	・タイミングをみて臨機応変な意思決定	・利益追求第1、成果第1主義であるので、意思決定でのリスクのウェイトは高い ・責任をできるだけ回避する
コミュニケーション	・上長との話し合いの方が部下との話し合いより強い	・部下との話し合いが強い

QCサークル活動の組織効率／ モラルの改善に及ぼす影響

メアリー・ルウ・ウ・オンラトコ 〇松井資夫
立教大学社会学研究科

【研究目的】

QCサークル活動は経営の効率化および従業員のモラルを高めることに役立つとして世界各国の注目を受けているが、系統的な研究は殆ど行われていない。この研究では、金融機関を対象に以下の3点を明らかにした。

1. QCサークル活動は事務の効率化に役立つか
2. QCサークル活動活性化にはどのような管理条件が必要か
3. QCサークル活動は従業員の仕事へのモチベーションを高めることに役立つか

【対象と方法】

ある大手の都市銀行の60支店、149サークル（係単位でつくられている）の男子202名、女子168名。質問紙調査。

【測 度】

〔支店QC活性総合指数〕品質管理部が半年ごとに算出している上記60支店の最近（昭和57下期と58年上期）の指数を用いた。

〔サークル別QC活性指数〕該当支店の次長にその指導下にある係のサークル活動を3項目（「メンバーの活動への熱意」など）を用いて評価をもとめた。

〔支店成績指数〕事務指導部が半年ごとに出している上記60支店の最近（57年下期と58年上期）の「事務効率指数」を用いた。

〔係管理指数〕係長および係員の評定にもとづき、それぞれの係について、目標の明確度、目標の達成度、集団的賞罰傾向、監督者による業績強調度、係員の自由裁量度、係員間の協調度、係員間の競争度の7指数を構成した。

〔仕事への内的モチベーション、職務満足、成長欲求の強度、成長欲求満足指数〕HackmanとOldham（1974）の職務診断調査（Job Diagnostic Survey）を係員に実施し、係員別に上記の各測度をえた。

【結 果】

1. 支店QC活性総合指数と支店成績指数との関係

57年下期と58年上期の支店QC活性総合指数および成績指数の相互相関（cross-lagged correlations）は図1のとおりであり、また両QC活性総合指数の差と両成績指数の差の相関（dynamic correlation）は.34（ $p<.05$ ）であった。したがって、これら60支店の57年下期におけるQCサークル活動は58年の成績に直接的な影響をあたえていたと考えることができる。

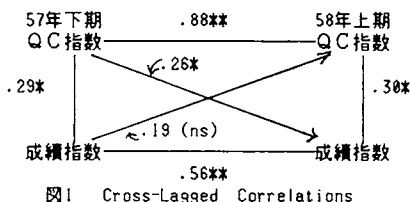


図1 Cross-Lagged Correlations

2. 係管理指数と係QC活性指数との関連性

日常の係管理のどのような側面がQCサークル活動の活性化を促すかをみるために、係のQC活性指数を従属変数として、7つの係管理指数を2つずつ組合せたものを独立変数とする2元配置の分散分析をおこなった。このように2つずつの組合せを用いたのは、管理指数相互の相関の影響を最大限に排除した上で各管理指数の従属変数への影響をみるためである。表1の上部はセールス係（すべて男子）の結果を、下部はその他の係（ほとんどが女子）の結果を要約したものである。

セールス係においては、7つの管理指数のうち、「監督者の集団的賞罰傾向」は他のすべての指数との組合せにおいて常に主効果が有意であった。また「監督者の業績強調度」は集団的賞罰傾向以外の組合せにおいて常に主効果は有意で、「係員間の協調度」との交互作用も有意であった。したがって、係が個人の集まりとしてよりも集団として管理され（集団的賞罰傾向）かつ監督者がつねつね業績の改善を強調している場合セールス係のサークル活動は活発になるといえる。また、その他の係の場合は、係員間の協調度が高く、かつ係が目標達成に成功している場合その係のサークル活動は活発だといえる。

表1 分散分析結果の要約

独立変数	有意な主効果の頻度	交互作用
〔セールス係〕		
監督者の集団的賞罰傾向	6	
監督者の業績強調度	5	係員間の協調
〔その他の係〕		
係員間の協調度	6	集団的賞罰傾向
係の目標達成度	6	

3. 係のサークル活性度と係員の仕事に対するモチベーションとの関連性

まず係のQC活性度指数とその係のメンバーの内的モチベーション、職務満足、成長満足との相関を検討したが、いずれについても有意な相関は見出せなかった。そこで、各人の成長欲求の強さの「QC活性度とメンバーのモチベーションとの関係」に対する調節効果（moderating effect）をみるために2つの方程式による重回帰係数を計算した。第1方程式では各人の内的モチベーション・スコアをその所属する係のQC活性指数とその人の成長欲求強度指数に回帰させ第2方程式では内的モチベーション・スコアを係のQC活性指数、個人の成長欲求指数および両者の積（交互作用項）に回帰させた。同様の計算を職務満足、成長欲求満足指数についても行った（表2参照）。

表2 二つの方程式による重回帰計算結果の要約

独立変数	第1方程式 の決定係数	第2方程式 の決定係数	決定係数の 増加の F値
〔セールス係〕			
内的モチベーション	.19	.24	7.14*
職務満足	.20	.27	9.26**
成長欲求満足	.20	.26	8.52**
〔その他の係〕			
内的モチベーション	.12	.14	4.23*
職務満足	.11	.15	5.17*

セールス係の場合、内的モチベーション、職務満足、成長欲求満足を独立変数とした場合、QC指数と成長欲求強度の交互作用項を加えた第2方程式のRの二乗値は第1方程式のそれより有意に増加しており成長欲求のQC活性指数と内的モチベーションなどとの関係に対する調節効果がみられる。このことは係のサークル活動は、成長欲求が強いメンバーに限って、内的モチベーションなどを高めていることを意味している。その他の係についても、内的モチベーション、職務満足に関して同様なことがいえる。

【結論と考察】

1. 図1のcross-lagged correlations は、支店QC指数と成績指数の因果関係を示したものである。すなわち、57年QCと58年成績の相関が有意で、57年成績と58年QCの相関は有意ではなく、かつdynamic correlationが有意であるということは、57年QCが因であり、58年成績が果であること、またその関係は未知の第3の要因によって生じた可能性がきわめて小さいことを示唆している。したがって、サークル活動は銀行のような事務職場についても組織効率の改善に役立つといえる。

2. QCサークル活動は、日常業務において、業績の改善が強調され、かつ集団としてよくまとまって仕事をしている場合に活性化される。その意味でサークル活動は日常業務の延長といえる。

3. QCサークル活動は、無条件に従業員の仕事へのモチベーションを高めるわけではない。それは高次の欲求（成長欲求）が強いものに限ってその仕事へのモチベーションや職務満足を高める。

Q C サークル活動が個人的欲求の充足 に与える効果：補償モデルの提唱

メアリー・ルゥ・ウ・オンラタコ
立教大学社会学研究科

【研究目的】

この研究の目的は、「Q C サークル活動は、単純な仕事で十分に充足できなかった個人的欲求を補償的に充足する」という仮説を検証することである。

銀行におけるQ C サークル活動についての先行研究では、セールス係のQ C サークル活動が他の係のそれよりも有意に低く、また預金および定期預金係のQ C サークル活動が比較的活発であることが見出された。そこでセールスと定期預金係の職務内容について詳細な検討が加えられた結果、セールス係の仕事は複雑かつ困難であり、仕事の中で自己実現などの個人的欲求が十分に満たせるのに対して、預金や定期預金の仕事は、本質的には繰り返しの単純であり、仕事の中では自己実現などの個人的欲求を十分に満たすことができず、Q C サークル活動の中でそれを満たそうとすることがその一因であろうという推測に達し、この研究が行われた。

【対象と方法】

ある大手都市銀行の東日本地区所在の郊外店44店のセールス係および定期預金係のサークルが対象に選ばれた（いずれも1係で1サークルが構成されており、全員がそのサークルに所属している）。これらの支店の支店長、次長およびセールスサークルメンバー211名（すべて男子）と定期預金サークルのメンバー123名（2支店2サークルはデータ不備のため分析対象から除外。88%は女子）に質問紙調査を行った。

【測 度】

【Q C サークル活性度指数】

支店次長にその指導下のセールス、定期預金サークルの日常の活動態様を6項目（「メンバーの活動への熱意」「係目標からみた活動テーマの適切性」など；5点法）によって評価をもとめ、その平均値をそのサークルの活性度指数とした。

【日常業務における成績指数】

支店長に両サークルの日常の業務成績をそれぞれ5項目（たとえば、セールスの場合「預金金額の増加」「訪問活動の効率」、定期預金係の場合「仕事の正確度」「客の待ち時間の縮小」；いずれも5点法）によって評価をもとめ、それぞれの平均値をそのサークルの成績指数とした。

【個人的欲求の充足度】

サークルメンバーに4つの自己実現の欲求（たとえば「自分の得意な能力を発揮する」）および5つの社会的欲求（たとえば「仲間から重くみられる」）を呈示して、それぞれの欲求が（イ）日常の仕事の中でどの程度満たされているか（ロ）サークル活動の中でどの程度満たされているかをそれぞれ7点尺度で評価をもとめ、4つの自己実現欲求の平均値を「自己実現欲求の充足度」、5つの社会的欲求の平均値を「社会的欲求の充足度」とした。

【仕事の複雑さ尺度】

HackmanとOldham(1976)のJob Diagnostic Surveyをサークルメンバーに実施し、それぞれが5つの「中心的職務次元」（必要能力の多様性、課業の一貫性、課業の有意義性、自律性フィードバック）に関して、自分の仕事をどの程度複雑とみているかを測定し、かつHackmanとOldhamの公式によって、「仕事のモチベーション喚起力」（MPS）を計算した（MPS = [必要能力の多様性 + 課業の一貫性 + 課業の有意義性] / 3 × 自律性 × フィードバック）。

【結果と考察】

【サークル活性指数と成績指数の関連性】

仮説の検証に先立って、サークル活動と実際の成績の改善との関連性を検討した。というのは、もしサークル活動が成績の改善と全く関連性がないとすれば、組織にとってのサークル活動の意義は、きわめて限られたものとならざるを得ないからである。そこでサークル活動の活性度指数と成績指数との相関をもとめたが、この相関は、セールスの場合.49(p<.01)、定期預金の場合.36(p<.05)であった。したがって、セールス、定期預金のサークル活動は、日常業務の改善に一定程度寄与しているものと考えられることができる。

【仮説の検証】

この研究の目的は、「定期預金の仕事はセールスのそれよりも単純であり、したがって個人的欲求の充足度も低い」ことを前提に、定期預金のQ C サークル活動が、仕事で十分に充足できなかった個人的欲求を補償的に充足するかどうかを明らかにすることであるが、サークル活動の個人的欲求への補償効果は、本来、サークル活動が十分に活性化されている場合にはじめて期待される。というのは、サークルが単なる名目的なものであったり、その活性度が低い場合には、サークル活動による個人的欲求の充足そのものが期待できないから、補償効果もまた当然期待できないからである。そこで以下の分析では、定期預金についてはQ C サークル活性度指数が平均以上の25サークルのみが使われた。表1は仕事の複雑さおよび個人的欲求の充足度をセールスおよび定期預金について比較したものである。

表1 セールスと定期預金の「仕事の複雑さ」および
個人的欲求の充足度の平均の差異

変 数	セールス (n=211)	定期預金 (n=82)	t(291)
【仕事の複雑さ】			
必要能力の多様性	5.39(1.03)	4.96(.94)	3.31**
課業の一貫性	4.85(1.05)	4.93(.99)	ns
仕事の有意義性	4.97(1.17)	4.57(1.00)	2.71**
自律性	4.70(1.18)	4.40(.93)	2.02*
フィードバック	4.82(1.07)	4.30(.71)	4.12**
MPS	143.94(69.37)	94.42(38.85)	6.08**
【個人的欲求の充足】			
<仕事において>			
自己実現	5.03(1.11)	4.55(1.01)	3.42**
社会的	5.01(1.02)	4.80(.92)	ns
<Q C サークル活動において>			
自己実現	4.64(1.23)	4.78(1.06)	ns
社会的	4.86(1.11)	5.13(.93)	1.98*

【注】 カッコ内は標準偏差を示す。

* p<.05.

** p<.01.

上の表からつぎのことがいえる。

1. 定期預金のサークルメンバーは、自分達の仕事の複雑さを「課業の一貫性」を除くすべての次元においてセールスよりも有意に低く評価している。
2. 定期預金のサークルメンバーの「仕事における自己実現欲求の充足度」は、セールスのサークルメンバーよりも有意に低い。このことは、1とともに、この研究の前提が正しいことを示唆している。

そこで、仕事において十分には充足されなかった定期預金サークルメンバーの自己実現の欲求が、Q C サークル活動によって補償されているかどうかをみるために、定期預金の<Q C サークル>における自己実現欲求の充足度（平均4.78）とセールスの<仕事>における自己実現欲求の充足度（平均5.03）の差異の有意性を検定した。もしQ C サークル活動が、定期預金メンバーの仕事において十分に充足できなかった自己実現欲求に対して補償効果をもつとすれば、両平均の間には差異は見られないはずである。検定の結果は、予想通り、両平均間には有意な差は見出されず（t(291)=1.76）定期預金におけるQ C サークル活動の自己実現欲求への補償効果が確認された。

以上の結果から、Q C サークル活動は単純な仕事においては、仕事で充足されなかった自己実現欲求の充足に関して補償効果があるといえるが、被験者の約90%は女子であった。したがってこの結果を一般化するには、男子についても同じ効果がみられるかどうかをさらに検討しなければならない。

目標設定に及ぼすSelf-Efficacyの効果

○角山 剛 ・ 松井養夫
(国際商科大学) (立教大学)

Self-efficacy とは、予測される状況に対処するために必要とされる一連の行為を、いかにうまく為しうるかについての、本人の判断であると定義される (Bandura, 1982)。最近、目標理論の枠組においても、目標設定と課業動機づけとの関係を仲介する重要な変数としてself-efficacy が注目されている (Bandura & Cervone, 1983; Locke, et al., 1983)。本研究では、課題解決のための方略を学習することがself-efficacy を高めること、さらに、高いself-efficacy は高い個人目標を導き、その結果performance も高まることが検証された。

方 法

男女大学生に対して以下の課題を課し、2 分間の練習結果をもとに、成績に差のない2 群 (各群60名、計120名)をつくり、20分間の実験試行を課した。

課題は、曜日を用いた加算問題が使用された。各曜日には1 から7 までの数値が対応しており、被験者は曜日をその数値に置換えて計算し、答を再び曜日に置換えて記入するよう求められた。

実験試行開始に先立ち、一方の群(strategy 群)には、5 種類の計算方略を教え、さらに例題を10題練習させた。もう一方の群(no-strategy群)には、計算方略は一切教えずにさらに10題の練習を課した。この後、両群の被験者は、各自1 分間あたりの作業目標を立てるよう告げられ、さらに目標への関与度(goal commitment)を7 点尺度で評定するよう求められた。次いで、作業に対するself-efficacy の強さが、100%、80%、60% (例: 100%達成が可能な目標の個数)の3 水準で測定された。

Performance の測定としては、20分間の作業における正答数が用いられた。

Tab.1 Relevant Means, SDs, and Results of t-tests for the two groups.

	Strategy (n=60)	No-strategy (n=60)	t
Practice(1 min.)			
M	11.75	11.75	n. s.
SD	2.64	2.64	
Goal commitment			*
M	4.93	4.20	2.48
SD	1.38	1.79	
Self-efficacy			**
M	13.28	10.97	4.53
SD	2.64	2.89	
Personal goal			**
M	15.17	12.60	4.34
SD	3.07	3.35	
Performance(1 min.)			**
M	21.56	19.34	3.17
SD	3.51	4.07	

Notes. * $p < .05$ ** $p < .01$

結 果

各変数についての両群の平均値、標準偏差、および t 検定の結果をTab.1 に示した。self-efficacy、個人目標、performance とともにstrategy群がno-strategy 群よりも有意に高い値を示している。また、self-efficacy と個人目標との相関係数は全サンプルで.85 ($p < .001$)、個人目標と performance との相関係数は全サンプルで.59 ($p < .001$)であった。すなわち、課題方略を学習することがself-efficacyを高め、高い個人目標を導くこと、さらに、高い個人目標が高いperformance を導くことが検証された。

次に、Locke ら(Locke, et al., 1983) は目標を自己設定する条件下で、goal commitment とself-efficacy、およびgoal commitment とperformance との間に有意な相関関係を見出している。本研究ではgoal commitment の平均値はstrategy群の方が有意に高い値を示したが、self-efficacy との相関、および個人目標との相関は、no-strategy 群でのみ有意($r = .35, p < .01$; $r = .44, p < .01$)であった。また、performance との間には両群とも有意な相関関係は見出せなかった。この結果は、strategy群ではself-efficacy のみが個人目標に影響を及ぼしているのに対して、no-strategy 群ではself-efficacy とgoal commitment の両変数が個人目標に影響を及ぼしていることを推測させたが、パス分析の結果はこの推測を支持するものであった (Tab.2)。

結 論

Self-efficacy が目標設定に対しても効果をもつことが明らかにされたが、この事実は、Locke らの目標理論とBandura の社会的学習説の、2つの動機づけ理論を、self-efficacy の概念を通して統合できる可能性を示唆するものと考えられる。

Tab.2 Decomposition for Variables in the Path Analysis

Zero-order * correlations	Causal components of zero-order correlations			Non- causal
	Direct	Indirect	Total	
Strategy group				
T01 = .56	.10	.46	.56	None
T02 = .65	.57	.08	.65	None
T12 = .81	.81	.00	.81	None
No-strategy group				
T01 = .54	.22	.32	.54	None
T02 = .57	.39	.18	.57	None
T03 = .22	.00	.24	.24	-.02
T12 = .83	.77	.06	.83	None
T13 = .44	.17	.27	.44	None

Note. * Performance=0, Personal goal=1, Self-efficacy=2, Goal commitment=3.

経営内教育の問題点と課題—特に行政体を中心にして—

三宅章介
(社団法人 日本人事管理協会)

1. はじめに 一問題の所在

今日、企業や行政体とはいのとする様々な組織で教育訓練が熱心に行われている。(しかし、反面、教育訓練(特にリーダーシップなどの管理能力を高める教育訓練)は、どこまで効果があるのかという、素朴な疑問も持つよう多く、研修担当者間で常に問題となるところである。技術技能を学ぶような訓練は別としても、多くの教育訓練は、いったいどのような形で効果が現れるかわからないし、効果と評価の測定、教育訓練のフィードバック等どれも極めて難しく、結果的に教育訓練を曖昧なものにしてしまうからである。

こういったことから、筆者は昭和54年より特に行政体(地方自治体等)における研修担当者か、教育訓練活動についてどのような意識を持っているのか、あるいは行政体における教育訓練はどのような課題を持っているのかについて実態調査を重ねて来た。

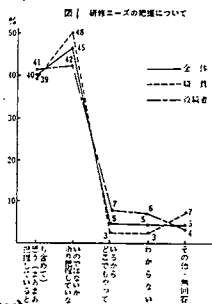
本報告は、それらの調査のうちで最も問題となったものの概略を示すものである。最後に、教育訓練を担当する管理者の役割というべきものと考えてみたい。

2. 今までの調査のうちの主な概要

教育訓練と効果的なものにするためには、先述したように、研修ニーズの把握、計画、実施、効果(評価)測定、研修のフィードバック等の一連のプロセスが教育目的に対して十分機能しなければならぬ。これらについての研修担当者の意識は、概ね次のようになっている。なお、図1～4は昭和55年に行ったもので、対象者は地方自治体を主とする研修担当者200名で、役職者とは研修所長、人事・職員課長などである。

(1) ニーズの把握(図1)

これは、教育活動や研修となぜ行うかについての理由をなすものである。「把握していると思う」というのは、全体の40%程度しかない。役職者の方が、一般職員よりもよく把握していると思っているようである。



(2) 研修効果の測定について(図2)

効果の測定は決まらずに、非常に難しい。それを反映してか、「それほど定を置いたくてもよいのではないか」とするのが役職者で60%、一般職員で46%と

図2 研修効果の測定について

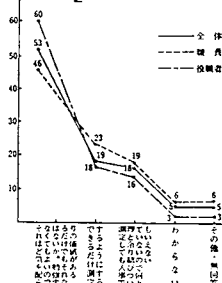
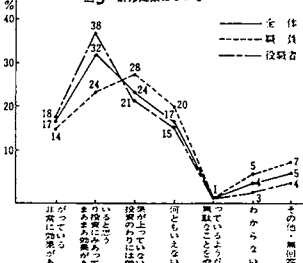


図3 研修効果について



なっており、役職者が比較的甘く見ている。

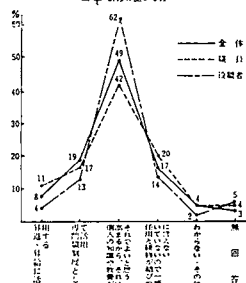
(3) 研修効果について(図3)

にもかかわらず、効果が上がっていると思えるのは、役職者で56%(18%+38%)、一般職員で38%(14%+24%)となっている。これは(1)と(2)に対しやや矛盾する結果といえる。ニーズが十分把握され、効果測定も適切に行われないと効果がわからないからである。

(4) 研修の生かし方(図4)

従って、研修の生かし方も人事制度と結びつけるというものでなく、個人的に知識が高まればそれでよしとするのが、役職者で62%、一般職員で42%となっている。

図4 研修の生かし方



(5) その他について

ニーズの把握、効果測定はどれも非常に困難なものであり、そのため研修担当者はこれらに力を注ぐより、むしろ研修の立案、実施面に努力を傾注し、それによって研修の効果を高めようとしているようである。(昭和56年調査結果より。図は概略の関係上割愛)

3. まとめ 一管理者の研修に対する役割とは

以上の概略より、教育訓練は表面的には重要だといわれながら、実際はそれほど重視されていないのではないかと考えられる。民間企業でも、概ねこういった傾向があるようである。いざれにしても管理者は、立場に拘泥せず真に必要なとする教育訓練を組織的に進めさせていく必要がある。また、能力主義と教育訓練は密接に結びついているはずである。その面からも管理者は、人事制度と教育訓練の連携を考えていくべきであろう。それが、能力主義実現の一端ともなる。

価値態度と職業観に関する研究（その2）

浅井 邦 二
（早稲田大学）

目 的

この研究は、先に発表したもの（応心第49回大会、1982）の継続であり、個人が持っている価値態度の違いが、就職に対する態度や職業の目的に対する考え方（すなわち職業観）に、どのような差をもたらすかについて就職を目前にしている学生（4年生以上）で検討することを目的とした。

方 法

対象は、早稲田大学学生で来春就職予定であった4年生またはそれ以上の者、124名、所属学部は政治経済学部11(2)、法学部10(5)、商学部5(0)、文学部67(34)、教育学部23(13)、理工学部8(0)〔1は女子で内数〕で、男子70名、女子54名である。

実施した検査と調査は、SG式価値態度検査、就職に対する態度の調査、職業目的の調査、である。

価値態度検査は、真理的、実利的、美的、博愛的、権力的、身体的、の6つの価値領域のいずれをより重視するかを測定するための検査であり、就職に対する態度の調査は、進路選択に際しての学生の自主性、計画性、社会性を問う質問紙であり、職業目的の調査は目的を収入（収入が多く豊かな生活ができるようにお金を得るため）、個性（自分の個性や能力を発揮し、かつ自分の才能を伸ばすため）、社会（世の中の人のためにつくし、社会に貢献するため）の3つの相互で比較させ、相対的にみてどの目的に重きをおくかをたずねるものである。

結 果

価値態度検査の結果は、各領域ごとの素点をスタンイン得点に換算し、就職に対する態度は、応答を点数化したものをC得点化し、職業目的は相互比較を7段階に評定したもので相対的な重要性を点数化している。

価値態度検査得点と就職に対する態度、職業目的との相関（r）を求めたが、実利は職業目的の収入と正の相関を示し、社会と負の相関を示し、就職態度の社会性と負の相関を示した。美は、就職態度の自主性と負の相関を示し、女子は計画性と負の相関を示した。博愛は職業目的の社会と正の相関を示し、収入および個性と負の相関を示し、就職態度の社会性と正の相関を示し自主性とも全体では正の相関を示した。（表1）

相関の性差については、女子において美と就職態度

価値領域	就職に対する態度			職 業 目 的		
	自主性	計画性	社会性	収 入	個 性	社 会
真 理	-.123	-.069	.122	-.193	.121	.112
	-.149	-.047	-.148	-.045	.178	-.085
	-.130	-.058	.020	-.130	.144	.023
実 利	.052	.059	-.447	.301	.098	-.416
	.077	.033	-.277	.337	.189	-.465
	.038	.018	-.401	.309	.134	-.427
美	-.262	-.045	.154	-.046	.145	-.078
	-.308	-.310	-.177	.208	-.083	-.142
	-.245	-.093	.055	.054	.044	-.092
博 愛	.215	.087	.494	-.326	-.206	.521
	.038	.116	.543	-.429	-.278	.618
	.187	.170	.525	-.356	-.238	.552
権 力	.135	.000	-.050	.154	-.038	-.143
	.139	.089	-.193	.207	-.064	-.155
	.083	-.040	-.141	.174	-.031	.161
身 体	.000	-.110	-.114	.094	-.136	.042
	-.119	-.057	.085	-.100	.055	.057
	-.068	-.119	-.051	.000	-.041	.037

表1 価値態度と就職に対する態度、職業目的との相関（上、中、下段は男子、女子、全体）ゴジは有意（ $P<.05$ ）な相関を示す。

の計画性が負の相関を有意に示し、男子との違いを見せ、また博愛と職業目的の個性が負の相関を有意に示し、男子のそれが有意でないのとの違いを見せた。

考 察

先の研究では、就職がまだ現実的な問題となっていない主として1年生が対象であったので、今回、就職を目前にした学生で、ほぼ同様な検討を試みたが、実利、博愛、美の価値領域に対する態度が、就職態度や職業目的に関連を持つということについては類似の傾向を認めた。しかし細かく見ると、美的価値が職業目的と、権力的価値が就職態度と、それぞれあまり関連を示さず、美的価値が就職態度の自主性と負の相関を示すなど、上級学年の学生の特徴を若干示唆するものとして今後の検討課題を残した。

この研究は小野千夏（早稲田大学第一文学部心理学専攻1984年卒業）との共同研究であることを付記する。

職業興味に関する研究(1)

— 興味 の 構造 と 学部 差 —

浅井 邦二 〇内 蔵 哲 雄 高 野 隆 一
(早稲田大学文学部) (立正大学教養部) (早稲田大学文学部)

<目 的> これまでの職業興味に関する研究は、各領域得点の高低に関心が集中しがちであった。ところが、興味のダイナミックな全体像をおきらかにするためには、領域相互の関連を分析し、そこから興味の構造そのものを検討していく必要がある。そこで本報告では、領域間の相関を求め構造について検討するとともに、興味領域の学部差についても吟味しようとするものである。

<方 法> 被験者：W大学の学生、政経学部126名、法学部71名、第1文学部77名、第2文学部26名、教育学部74名、商学部62名、理工学部48名、社会科学部44名の合計530名(うち女子は97名)。手続き：JCEに作成の「職業興味検査」(10尺度、150項目)を実施し、各尺度間の相関を求めた。ついで、学部間の差を尺度得点によって検討した。

<結果と考察> 10尺度相互の積率相関係数を求め、そのうち0.4000以上のものを実線で結んだのが図1である。図に示されるように、「科学」、「管理・経営」、「専門(文系)」、「書記」の4尺度が緊密な関係にあり、「技能」は「科学」の枝葉としてこの群に入っている。これらの各興味は、理科系に属するか文科系に属するかの違いはあるけれども、いずれも高度の専門知識を必要とする営利を主目的とした職業に対するものである。従って、実業界や産業界における専門職への興味であると解釈することができよう。

これに対し、「芸術」、「対人」、「教育」、「社会奉仕」の4尺度は、互いに隣接した場合にのみ高い相関がみられ、直線型ともいふべき関係となっている。

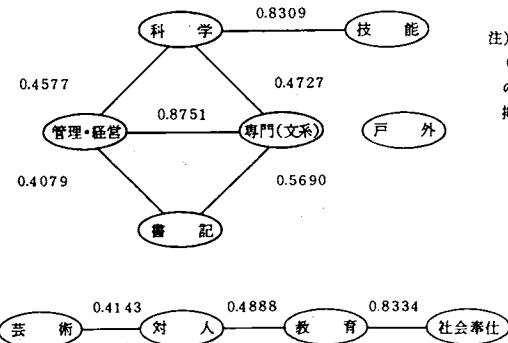


図1. 尺度間の相関図

そしてこれらは、他人への説明・折衝・販売などへの興味を示す「対人」を除けば、公共的、奉仕的な職業への興味であるといえよう。

最後に、屋外での仕事に従事することへの興味をあらわす「戸外」は、いずれの群にも属さず孤立していることから、全く異質な興味領域であることを示唆するものである。

次に学部間の差をF検定により検討すると、10尺度のうち「戸外」を除く9尺度で有意差がみられ、とくに「科学」、「技能」、「経営」、「専門(文系)」、「書記」で著しい差がみられた(いずれも $P < 0.005$)。そこで、自然科学系、社会科学系、人文科学系の代表として、それぞれ理工学部、法学部、第1文学部の3学部をとりあげ、各得点による平均値のプロフィールを示したものが図2である。3学部のうち、領域ごとの変化が最も少ないのが法学部であって、「専門(文系)」でいくぶん高い程度である。これに対し理工学部は、「科学」と「技能」がかなり高く、逆に「管理・経営」と「専門(文系)」ではかなり低い。残る第1文学部は高いものはなく、低いのが「科学」、「技能」、「管理・経営」と「専門(文系)」である。これらの結果は、理工学部と法学部がそれぞれ理系と文系の営利的・実利的な領域の専門で高い興味を示すのに対し、第1文学部は営利面にはほとんど興味を示さず、「教育」と「芸術」で全学部平均の50点をやや上回る程度である。以上のように平均値のプロフィールは、各学部の特徴を反映したものとといえよう。

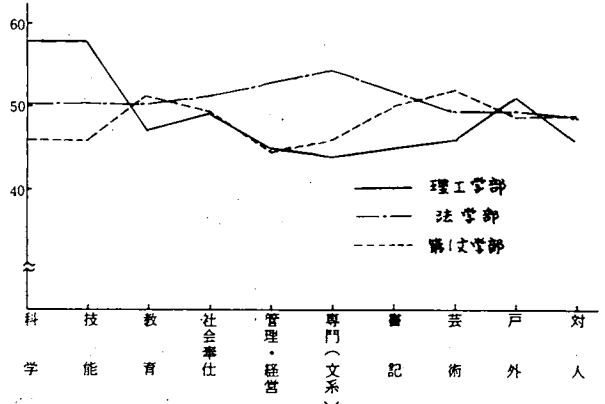


図2. 3学部の平均値のプロフィール(Σ得点)

職業興味に関する研究(2)

性 差 に つ い て

浅井 邦二 ○高野 隆一 内藤 竜雄

(早稲田大学文学部) (立正大学教養部)

〈目的〉 報告(1)では、職業興味の構造について男女を含めた全体的な検討を行った。しかし、男女間では職業観、例えば職業に対する意識や興味領域などに差異があることがよく知られている。そこで本報告では男女間の職業興味の構造の相違について検討することを目的とした。

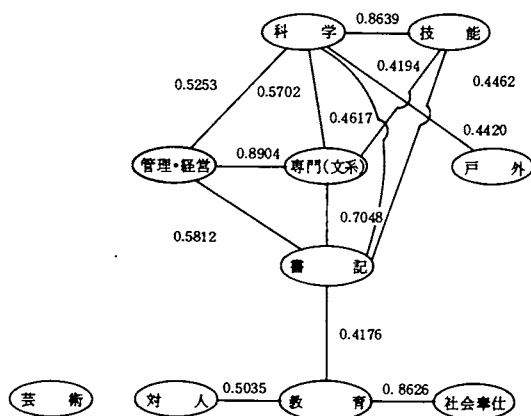
〈方法〉 被検者: W大学第1文学部、第2文学部及び教育学部の男子110名、女子69名。

使用検査: 報告(1)と同様。

手続き: 職業興味検査の各尺度得点間の相関を男女別に算出して職業興味の構造を比較し、さらに男女間の各尺度の得点の差についても検討した。

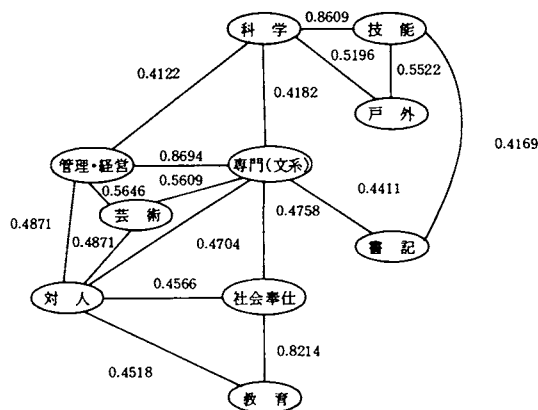
〈結果と考察〉 図1は男子の10尺度間の相関係数を求め、0.4000以上のものを実線で結が図示したものである。図に示されるように「科学」、「管理・経営」、「専門(文系)」及び「書記」の4領域は相互に関連し合い1つの群を形成している。この群に対して「技能」が「専門(文系)」そして「書記」に関連している点、又「科学」が「戸外」そして「書記」に関連している点を除けば、報告(1)と類似した結果となっている。被検者は報告(1)と相違してほとんどが文科系であるが、やはり上記の4領域が専門的で営利を主目的とした職業領域であるという共通した認識を持っていると言えよう。一方、「教育」と「社会奉仕」及び「教育」と「対人」が各々関連しており、「教育」を真中に挟んだ直線型ともいうべき関係になっている。「教

育」と「書記」が関連していること及び「芸術」が「対人」と関連していない点を除けば報告(1)の結果と似ている。つまり「教育」、「社会奉仕」そして「対人」が営利を目的としない職業領域であるという点で先の群と区別されたものと考えられよう。以上のように男子の場合は職業興味の構造に多少の相違はあるものの全学部の傾向とはほぼ同様な結果となった。図2は女子の各尺度間の相関関係を示したものである。男子の場合と大きく相違し、各尺度が複雑に関連し合っている。すなわち、女子の場合は興味領域が男子ほど分化していないということが出来る。そしてこれは、女子が各職業領域に対して男子ほど明確な興味や意識を持っていないということを示しているものとも考えられる。職業観の問題にもなってくるが、この点については更に検討が必要となろう。最後に、男女間の各尺度の得点の差について検討する。有意差のみられた領域は、「管理・経営」($t=3.921, P<0.01$)、「専門(文系)」($t=2.423, P<0.05$)そして「書記」($t=-2.294, P<0.05$)の3領域で「管理・経営」そして「専門(文系)」は男子が、又「書記」は女子が有意にすぐれる結果となった。しかし男子の「管理・経営」及び「専門(文系)」の平均点は全学部の各々よりも低いのであり、これは男子が高いというより、女子が低すぎるということである。従って女子がこれらの領域に興味がないと解釈できる。一方、女子の「書記」は全学部の平均点よりも高く、女子の興味がこの方面にあるということはいえよう。



注) 相関係数 0.4000 以上のもののみ掲載

図-1 男子の尺度間の相関図



注) 相関係数 0.4000 以上のもののみ掲載

図-2 女子の尺度間の相関図

経歴データのDB化

1. 経歴情報の分析要求とコーディング体系

○松本純平 松本真作 中島史明 堀田千秋
(雇用職業総合研究所)

＜「追跡研究」の経歴情報＞ 「追跡研究」は、中学校を卒業したばかりの調査対象者を10余年にわたって継続的に調査し、青年期を通して展開される職業適応の過程とその機制を解明しようとするものである。具体的には、昭和44～46年に中学校を卒業した2650名（全国7都県）について、3年毎に質問紙調査票による面接調査を実施した。収集された資料は、基礎情報、経歴情報、意識情報に大別できる。

〔基礎情報〕 中学、高校在学時の記録や家庭調査の資料など。主に出身学校から得られたもの。

〔経歴情報〕 中学校卒業後の就業、就学経歴を中心とした情報。情報源としては、4回の面接調査（17.20.23.26歳時）及び対象者の所属する事業所調査の他に、対象者の所在を追跡する過程で調査員の得た情報（連絡票）など。

〔意識情報〕 在学時及び各面接調査時点での対象者の意識や態度に関するもの。

＜経歴情報のデータ化＞

1. 経歴展開図の作成 経歴情報は、「追跡研究」の核となるものである。経歴の展開過程を解明するための様々な分析要求に応じられるように、多種多様な情報の統合化は、次のようになされた。（その際調査実施上生じた現実的な制約も大きな問題であった。）
まず、多様な情報を時間経過の軸に添って切れ目のない流れとして整理するために、図のような経歴展開図を全対象者について作成した。この図は、経歴分析の原点になるものである。結局、経歴情報のデータ化の課題は、作成したDBから各々の経歴展開図を再構成できるようなコード化に換言される。

2. 経歴分析のタイプ 経歴分析のタイプは、大別すると、時間軸に添った順序性及び継続期間の長さという側面と、質的な変動性（継続性）という側面が考えられる。更に、「追跡研究」の目的から見ると、経歴情報は単独ではなく、その他の情報との相互関連性を含めて分析されることが期待されている。そこで、経歴情報のデータ化においては、時間経過の正確な把握、情報内容の質的な変化の把握、他の情報との関連性の把握などが的確かつ容易に行なうことができる体系が要請される。

3. 経歴情報のデータ化 多様な分析要求を配慮した結果、経歴情報のデータ化にあたって、次のような概念が導入された。

〔ステイタス〕 これは、経歴情報の基本的構成単位であり、各時点で対象者が占めている「社会的状態」を示すものである。

ステイタスのレベルとしては、次の3種11カテゴリーが設定された。

就業ステイタス

①常用雇用 ②非常用雇用 ③家業従事 ④自営

⑤不明（就業中）

非就業ステイタス

⑥在学 ⑦進学準備中 ⑧求職中 ⑨不明（非就業中）

補充ステイタス

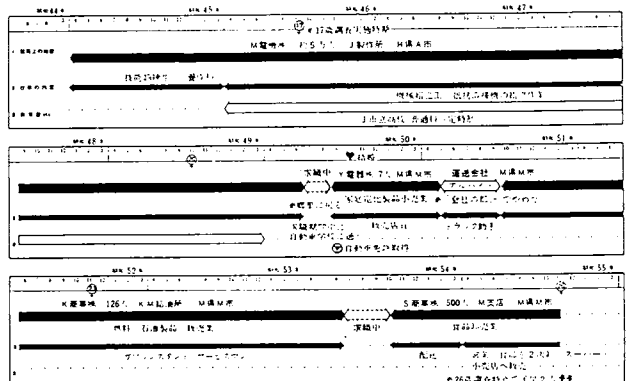
⑩死亡 ⑪不明、情報欠落

経歴情報は、各ステイタスに分類された上に、各ステイタスの内容を示す項毎にコード化された（例：開始年月、終了年月、就業地、就業内容）。経歴の展開は、ステイタスの連鎖としてデータ化された。

〔主経歴－副経歴〕 対象者が中学校卒業後に歩む道は多様である。主要なものは進学及び就職であるが、その他の形態も生起している。これらの特色を損なわないようにデータ化するために、基本的には就業ステイタスを中心に切れ目のないステイタス連鎖を主経歴とし、同時に複数ステイタスを有する対象者に関しては、副経歴（就學歷）を付加した。

〔移動形態／連結形態〕 あるステイタスから次のステイタスに移動する場合、あるいは、あるステイタス継続中に新たなステイタスが生じた場合に各ステイタス間の関連性をデータ化するため、移動（終了）形態コード及び連結形態コードを設けた。これにより、主経歴と副経歴との関連性、企業間／企業内移動、中途退学等を任意の時点で表現することが可能になった。

図 経歴展開図（例）



経歴データのDB化

2. 経歴情報解析のためのシステム

○松本真作 松本純平 中島史明 堀田千秋
(雇用職業総合研究所)

<システムの目的> 「追跡研究」で集められた資料をコンピュータに入力し、研究員各人が随意に分析できることを目的とした。本システムでは、横断的データに比べると処理方法が未発達である縦断的なカテゴリーカル・データを扱い、また所内の不特定多数の研究員が分析を行なう。そこで、システムの設計においては処理要求を限定せず、現在考えていないような処理要求にも対処できるオープンで、フレキシブルなシステムを目指した。

<システムのハードウェア> システムは当研究所の各種研究に共同利用している富士通の汎用コンピュータM130Fを使っている。主記憶は2メガバイトであるが、仮想記憶により16メガバイトまで使用領域を広げられる。磁気ディスク装置は固定式のものが3台、6ボリュームあり、全体で405メガバイトになる。また、67.5メガバイトのディスク・カートリッジ装置が1台あり、本システムのソース・データ、それを処理に具合が良く加工したデータ、さらにSTAFF/X、FORTRAN77等で作成した基本的なプログラム、ユーティリティ等、またデータベース管理のための情報はすべて1本のディスク・カートリッジに入れてある。プログラムの作成、ジョブの投入等はAIF(TSS)端末から行なう。出力は主にラインプリンタに行なうが、XYプロッタも接続されているので、得られた数値を図表化して出力することも可能である。コーディングし、パンチを外注したソース・データの入力、システムのバックアップ(退避)等にはMT装置を用いる。日本語処理はまだ行っていないので、扱えるデータはアルファベット、数字、カナ文字に限定される。

<システムのソフトウェア> システムでは、複雑で膨大な縦断的・横断的データを管理するため、データベース・マネイジメント・システム(DBMS)としてSTAFF/Xを用い、統計処理は主にANALYSTで行なっている。図に基本的な解析処理の流れを示した。

STAFF/Xでデータを管理するメリットとしては次の点が挙げられる。まず第一にSTAFF/Xではファイルの形式、項目の属性等を一度定義してしまうと、それ以降ファイルの入力に関する記述が要らなくなる。項目

の定義においてはCOBOLのような、階層構造を持った形で各項目を定義できる。また、STAFF/Xでは処理をリクエストと呼び、単純な処理であれば手続きとしてのプログラムを書く必要がない体系になっている。さらにRDBのJOINにあたる機能は、STAFF/Xではリファレンス機能と呼ばれており、複数のファイルをキー項目によってマッチングして入力することができる。データの持ち方も、STAFF/XとRDBは似ており、表形式で、汎用性も高い。以前に集計用に作成してあったファイルをSTAFF/Xの入力ファイルとすることもでき、STAFF/Xの出力ファイル(サブファイル)を他の統計パッケージで読み込むこともできる。システムではコーディングしたデータに種々の加工を施し、DB管理のための情報を入力し、STAFF/Xで管理できるようにしている。

ANALYSTは富士通が開発してきたMULVA、CLUSTER、SDA等のプログラムを統合した統計処理パッケージであり、使いやすく、統計表作成から多変量解析まで広範な処理が可能である。

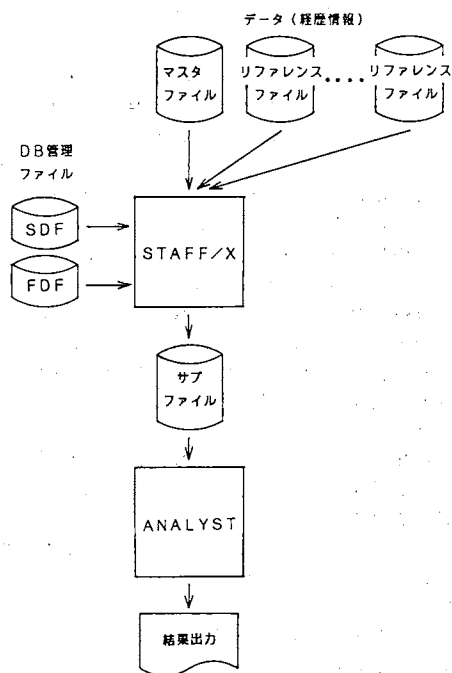


図 8 STAFF/X, ANALYSTと各ファイルの関係

ヒューマンアセスメントの演習評価結果の統合に関する一試案 (その1)

○ 桑 原 衛 , 伊 藤 格 夫
(マナソート・サービスセンター) (松下 電 器)

ヒューマンアセスメント法とは、1950年代の半ばにATT社（アメリカ電話電信会社）でBray, D.W.らによって開発された、潜在的な管理資質測定のための技法で、特に、そこで用いられる演習課題に特徴がある。これは、たとえば、リーダーレス・グループ討議、ビジネス・シミュレーション・ゲーム、インバスケットテストなど、特にクリティカルな状況下において、被験者の潜在的資質がその行動に現れやすいように周到に準備された設定場面で、特別に訓練を受けた観察者（アセッサ）が評価する技法である。

当社では、1976年以來、アセッサ養成訓練の簡易版（2泊3日）を開発し、これを管理者訓練の目的で広く管理者層に実施することにより、管理レベルの全般的な啓蒙向上に役立てようとしている。この管理者訓練では、受講者どうしが評価し合う、いわば相互評価方式をとっている。

当研究の目的

この技法における観察評価は、各演習課題ごとに独立しておこなわれ、最終的に各演習結果を統合して、各被験者ごとに各評価項目ごとの総合評価（Global Ratings）が作成されるのであるが、この総合評価は、普通の場合、各演習ごとの結果の単なる平均値ではなく、各演習の結果を勘案しながら、あらためて総合的に観照から評価値が決められる。

当研究では、この総合評価値が、各演習ごとにおこなわれた評価結果とどのような関係にあるのかを解明し、より客観的な総合評価を得る可能性を探ろうとするものである。

方 法

昭和54年2月に実施した相互評価訓練の結果から、データの整っている64名について解析を試みた。

この訓練で用いられた演習課題は次の3種類である。

1) リーダーレス・グループ討議

リーダーを設けずに、6名程度の人数で所定時間（普通60分間）内に、与えられた課題について自由討議をおこなわせ、その間の行動の一部始終を観察者（他の受講者）が所定の項目（後記）に添って評価する。

2) インバスケット演習

管理者の決裁箱中にあると想定される未決書類

をモデル化したものを、一定時間内に決裁処理をさせるテストで、それに引き続き、小グループで相互に各人の出来栄を検討しながら、所定の項目に添って相互評価させる。

3) 分析・発表演習

多岐に亘る情報データをもとに、各人が分析整理して問題形成をおこない、その結果を短時間（普通は7～10分間）で要約発表させる。

以上3種類の演習課題は、それぞれ管理者の日常的にみられる基本行動のうち、1)話し合いながら検討する、2)読み書きしながら決裁をする、3)情報データを分析整理して、報告発表する、といった事項をモデル化し、テストとしての形態に整えられたものである。

なお、この3種の各演習において用いられた評価項目は次の14項目で、それぞれ5段階評価がなされた。

①活力②ストレス耐性③積極性④主導性⑤表現力⑥柔軟性・感受性⑦協調性⑧組織感覚（全体意識）⑨計画性⑩進行調整力⑪論理性⑫創造性⑬決断力⑭遂行意欲

さて、3種類の演習による評価をそれぞれ終えた被験者は、3演習の結果を勘案して、14個の各項目ごとに、あらためて総合評価をおこなった。

結 果 (1) — 各評価値素データの状況

各演習とその総合評価結果の平均値および（標準偏差）は表1の通りである。（N=64）

(表 1)	リーダーレス・グループ討議	インバスケット	分析発表	総合
活 力	3.38(.78)	3.38(.60)	3.38(.60)	3.44(.61)
ストレス耐性	3.38(.70)	3.31(.68)	3.38(.74)	3.28(.67)
積極性	3.38(.82)	3.56(.83)	3.50(.71)	3.63(.70)
主導性	3.72(.76)	3.56(.79)	3.22(.78)	3.72(.84)
表現力	3.47(.75)	3.28(.76)	3.31(.58)	3.47(.50)
柔軟性・感受性	3.22(.78)	3.81(.77)	3.56(.56)	3.47(.71)
協調性	3.66(.73)	3.91(.58)	3.81(.73)	3.91(.63)
組織感覚	3.19(.85)	3.34(.85)	3.78(.86)	3.38(.86)
計画性	3.53(.56)	3.66(.69)	3.56(.70)	3.53(.66)
進行調整力	3.31(.73)	3.22(.74)	3.50(.83)	3.47(.71)
論理性	3.59(.66)	3.72(.72)	3.41(.70)	3.53(.56)
創造性	3.44(.70)	3.63(.86)	3.50(.79)	3.66(.69)
決断力	3.47(.79)	3.19(.73)	3.56(.75)	3.50(.79)
遂行意欲	3.44(.70)	3.19(.68)	3.44(.61)	3.31(.63)

ヒューマンアセスメントの演習評価結果の統合に関する一試案 (その2)

○伊藤 格夫, 桑原 衛
(松下 電 器) (マサチューセッツ・センター)

結 果 (2)——各評定値の内的整合性

表1 から、総合評定は3演習の単純平均ではないことがわかる。因みに、3演習の平均値を求めてみた結果、総合評定との相関は、最高が柔軟性の.84、最低は計画性で.51、14項目の平均は.75であった。一方、総合評定に対する3演習の重回帰係数は表2の通り。

(表 2)	リーダーレス・グループ討議	インバスケ	分析・発表
活 力	.32	.49	.49
ストレス耐性	.52	.16	.45
積極性	.25	.29	.50
主導性	.49	.28	.50
表現力	.22	.40	.16
柔軟性・感受性	.53	.34	.64
協調性	.48	.43	.18
組織感覚	.55	.25	.27
計画性	.12	.25	.38
進行調整力	.41	.60	.28
論理性	.16	.39	.34
創造性	.41	.18	.42
決断力	.52	.05	.35
遂行意欲	.41	.40	.28

総合評定と3演習との重回帰係数は.81であるが、表2にみるとおり、各項目ごとに演習間のウェイトにはかなりのバラツキがみられる。

そこで、これら3演習のデータの間の内的整合性をたしかめる必要がある。そのために、各項目ごとの妥当性係数(同特性—異方法相関)、およびその弁別妥当性(異特性—異方法相関)を求めた。結果は、リーダーレス・グループ討議と分析・発表演習との妥当性係数は概ね高く(最高は協調性の.66、最低は調整力で.16、全項目の平均値.36)、これらの弁別妥当性も概ね満足できる。しかし、インバスケ演習は、他の2演習との妥当性係数が概ね低い(最高は、計画性で.39、最低は表現力で-.19、平均値.12)。表現力の異方法相関がマイナスになるのは、インバスケが文章表現であるのに対して他の2方法はいずれも口頭表現の演習であることによるものと思われる。このように、インバスケの妥当性係数は概ね低い、異特性相関は更に低く、したがって相対的に弁別妥当性は概ね認め得る結果となっている。

結 果 (3)——主成分分析による演習の合成

前項の結果は、3演習の因子構造に共通の基盤が存在する可能性を示している。各演習ごとに因子分析をおこなった結果、いずれも6因子から成り、その因子構造は演習によって差があるものの、基本的には似た特性構造となっている。

そこで、あらためて原データにたちかえり、各項目ごとに3演習の相互相関を求め、それに主成分分析を適用してその第1主成分の因子得点(Factor Score)を算出した。すなわち、3演習を各項目ごとにその第1主成分のウェイトによって合成したわけである。なお、ウェイトづけをせずに均等合成をした場合が平均である。これらの合成変量の総合評定に対する適合性をみるため、各合成変量と総合評定との相関を表3に示す。

(表 3)	主成分による合成変量	平均による合成変量	主成分による合成変量との相関が高い項目
活 力	.72	.72	
ストレス耐性	.79	.77	○
積極性	.79	.78	○
主導性	.79	.77	○
表現力	.59	.71	
柔軟性・感受性	.45	.84	
協調性	.83	.82	○
組織感覚	.84	.82	○
計画性	.44	.51	
進行調整力	.33	.78	
論理性	.75	.77	
創造性	.72	.75	
決断力	.70	.68	○
遂行意欲	.81	.80	○

なお、重回帰係数の平方を共通性の推定値として因子分析による合成を試みたが、結果は主成分分析の場合とほとんど変わらないため、表示は省略した。

考 察

表3から、主成分による合成が平均による合成よりも適合度の高い項目が7項目(○印)あるが、反面、表現力、柔軟性、計画性、調整力などは適合性が極端に低下する。その点、平均による方法は各項目に亘って安定して比較的高い適合性を示している。しかし、半数の項目で主成分分析による適合度の向上がみられるため、今後、交差妥当性の追試の意義があろう。

人 名 索 引

太数字：口頭発表者論文掲載頁

細数字：連名発表者論文掲載頁

(A)

阿 部 明 子 59, 60
安 倍 淳 吉 104
浅 井 邦 二 130, 131, 132
安 藤 瑞 夫 123
青 柳 肇 2, 14

(B)

馬 場 房 子 26
馬 場 昌 雄 26, 124, 125

(C)

茅 原 正 43

(F)

藤 木 伸 顕 48
藤 岡 秀 樹 82
藤 田 政 義 101
藤 田 主 一 51
藤 田 勉 45, 46
古 川 久 敬 6

(H)

萩生田 忠 昭 70
花 岡 正 夫 124, 125
原 秀 安 124, 125
長谷川 孫一郎 103
橋 本 泰 子 27, 102
林 昭 博 39

林 潔 56, 57
星 野 美智子 15
堀 田 千 秋 133, 134

(I)

家 本 修 109
伊 賀 憲 子 16
飯 島 澄 子 79, 81
今 井 省 吾 41
今 井 保 次 120
稲 富 正 治 88
稲 松 信 雄 61, 62
井 上 澄 子 84, 85
伊 勢 民 人 45, 46
石 田 喜代子 73
井 下 理 31
石 渡 博 幸 13
石 渡 倫 子 51
石 坂 和 36
板 倉 善 高 44
板 津 裕 己 92
伊 藤 格 夫 135, 136
伊 藤 典 幸 38
糸日谷 秀 幸 105

(K)

門 田 寿 秋 52, 53
加 古 明 子 59, 60
角 山 剛 128
鎌 形 みや子 25
金 田 文 37
神 藏 幸 子 71
樫 葉 和 英 77

柏 女 靈 峰 86, 87, 101
 片 岡 靖 博 40
 加 藤 基 子 91
 川 本 利 恵子 69
 川 村 玲 子 84, 85
 岸 本 英 男 42
 岸 本 陽 一 12
 北 瀬 扶美代 52, 53
 清 宮 栄 一 122
 小 松 絃 32
 児 玉 省 59, 60, 72, 73, 74, 77,
 78, 79, 80, 81
 駒 崎 勉 51, 67
 小 西 啓 史 108
 小 関 賢 14
 黒 田 淑 子 95,
 久 米 稔 14, 15, 16
 黒 岩 誠 15, 61, 62
 桑 原 衛 135, 136

(M)

前 田 茂 則 86, 87, 93
 牧 野 勝 98
 牧 野 晋 64
 丸 井 澄 子 52, 53
 正 田 亘 5, 22, 108
 味 酒 理 恵 89
 松 田 浩 平 47
 松 村 康 平 96, 97
 松 為 信 雄 21
 松 井 資 夫 126, 128
 松 本 真 作 133, 134
 松 本 純 平 133, 134
 松 浦 い ね 106
 松 浦 常 夫 34
 三 島 正 英 15
 三 田 英 二 54
 三 戸 秀 樹 116
 三 宅 章 介 129
 三 宅 洋 一 110, 111
 宮 崎 和 子 68
 森 下 高 治 121
 両 角 智 29, 90
 本 明 寛 61, 62

(N)

長 縄 久 生 119
 永 沢 幸 七 83
 長 塚 康 弘 115
 内 藤 哲 雄 120, 131, 132
 中 島 史 明 133, 134
 中 丸 茂 64
 中 村 昭 之 56, 57
 中 村 博 志 47
 中 田 カヨ子 59, 60
 七 尾 和 之 19
 中 里 弘 100
 成 田 猛 28, 29, 90
 西 川 博 文 67
 西 村 純 一 20
 仁 科 義 数 101
 西 野 泰 広 47
 新 田 茂 13

(O)

織 田 圭 子 22
 織 田 正 美 61, 62
 小 田 智 子 86, 87, 101
 岡 部 健 88
 岡 村 一 成 124, 125
 岡 上 己弥子 50
 奥 沢 良 雄 76
 小 野 浩 一 45, 46
 小 野 公 一 24
 大 濶 憲 一 36
 大 江 淳 良 3
 大 橋 信 夫 112
 大河内 信 司 7
 大久保 康 彦 18
 大 村 政 男 23, 66
 大 村 孝 子 73
 大 野 敦 子 66
 太 田 博 雄 32
 大 塚 博 保 35
 大 塚 一 郎 65
 オンラタコ、メアリー・ルウ・ウ 126, 127

(S)

齊 藤 洋 典 110, 111
齊 藤 幸一郎 63
齊 藤 璋 子 72
佐 藤 誠 47
佐 藤 方 哉 45, 46
関 本 昌 秀 8
千 田 茂 博 63
洪 谷 伊津子 72
重 本 直 利 117
清 水 とも子 74
白 岩 紘 子 84, 85
相 馬 朝 江 68
墨 岡 孝 28, 29, 90
管 美登子 47
鈴 木 光 子 78, 79, 80, 81
鈴 木 省 司 86, 87, 101

(T)

田 端 純一郎 58
高 橋 宣 昭 86, 87, 101
高 橋 泰 子 99
高 橋 良 博 107
高 橋 豊 77, 78, 80, 81
高 石 光 一 118
高 野 隆 一 14, 131, 132
高 嶋 正 士 51
武 田 徹 55
谷 口 泰 富 64
谷 村 富 男 33
田 中 千鶴子 68
手 島 茂 樹 66
寺 沢 美 彦 16
戸 田 勝 也 17
土 屋 明 美 96, 97

(U)

上 垣 博 和 13
上 野 轟 94
内 海 滉 68, 69, 89, 91

(W)

若 林 明 雄 11

(Y)

八 木 孝 彦 90
谷 口 幸 一 61, 62
山 田 泰 子 68
山 本 都 久 75
柳 田 ふ さ 78, 79, 80
矢 内 文 30
横 田 愛 子 74
吉 田 信 彌 114
吉 川 茂 49
吉 光 清 16, 113
吉 沢 勇 27, 102

日本応用心理学会第51回大会発表論文集

(非 売 品)

昭和59年9月15日 印刷

昭和59年9月20日 発行

編 者 日本応用心理学会第51回大会準備委員会
〒161 東京都新宿区下落合1-7-7
富士短期大学内 電話 03-368-0351

発行者 村中兼松

印刷所 清水印刷所
〒160 東京都新宿区高田馬場4-9-16
電話03-363-5121